The 29th Rotary Youth Leadership Awards Seminar

For
Life
Family
Community
World
Future
Peace
Dream
Responsibility
Respect
Justice

RYLA Seminar

第29回青少年指導者育成セミナー報告書

率先しよう

2007年3月22日～25日

主催
国際ロータリー第2670·2680地区
RYLA運営委員会

目 次

ＲＹＬＡセミナーの方針・ねらい …… 3

スケジュール …… 3

■ 1日目 ■

● **開講式**

オリエンテーション

副ディーン　別役 重具 …… 4

ガバナーあいさつ

第2670地区ガバナー　飯　忠悟 …… 5

第2680地区ガバナー　加藤 隆久 …… 6

ごあいさつ

顧　問　三宅 洋三 …… 8

元国際ロータリー理事　今井 鎮雄 …… 10

注意事項の説明 …… 13

● **オリエンテーション「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」**

顧　問　深川 純一 …… 16

● **ロータリアンの夕べ**

元国際ロータリー理事　今井 鎮雄 …… 20

■ 2日目 ■

● **講義「21世紀の夫婦関係と親子関係」**

甲南大学 文学部 教授　野々山 久也 先生 …… 24

● **ロータリアンの夕べ**

顧　問　深川 純一 …… 55

■ 3日目 ■

● **講義「日本人の貧しい選択」**

神戸大学 名誉教授　保田　茂 先生 …… 72

● **フォーラム「非人間化時代における人間化」－人々とどのように手をつなぐか－**

フォーラムリーダー　深川 純一

バズセッション報告 …… 122

フォーラムディスカッション …… 134

■ 4日目 ■

● 講義「21世紀の課題」

元国際ロータリー理事　今井 鎮雄 先生 ……152

● 閉講式

閉講のあいさつ

第2680地区ガバナーエレクト　三木　明 ……162

第2670地区ガバナー　飯　忠悟 ……165

ディーン　山口　徹 ……166

参加者感想文 ……171

受講生名簿 ……194

第29回ＲＹＬＡセミナー運営委員会 ……196

RYLAセミナーの方針・ねらい

RYLAセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような5つの特色を味わってもらうことにあります。

① 高いレベルの講義と討論
② キャビンタイム（親睦の熟成）
③ 自由と自律
④ 余島の自然
⑤ カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“絆”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

3月22日(木)					集合 (14:00)	開講式 オリエンテーション (15:00)	オープニングパーティー	キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月23日(金)		朝食 (7:30)	講義 講師 野々山 久也氏 (9:30)	昼食	レクリエーション ヨット、テニス、ソフトボール、アーチェリー、陶芸など		夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月24日(土)		朝食 (7:30)	講義 講師 保田 茂氏 (9:30)	昼食	思索の時間	バズセッション	夕食	フォーラム キャビンタイム
3月25日(日)		朝食 (7:30)	講義 講師 今井 鎮雄氏 (9:30)	閉講式 (11:30) 昼食 離島				
	7	8	9 10 11	12	13	14 15 16	17 18 19	20 21 22 23 24

オリエンテーション

別役 重具

副ディーン （高知東RC）

皆さんこんにちは。

四国のＲＹＬＡ小委員会の委員長、別役と申します。別れるという字に役人の役と書いて、別役（べっちゃく）と申します。皆さん、よろしくお願いいたします。

ディーンとは校長先生というような意味でして、私は副ディーンです。ディーンの山口さんは講師の先生をお迎えする関係で到着が遅れております。

皆さん方は、この余島の地にて、これから３泊４日の日程で研修を受けていただくわけでございますが、もろもろの注意事項をよく守っていただいて、楽しい生活をしていただきたいと思います。

このあと施設の方からの注意事項等がありますので、お互いに気をつけ合って、それぞれのお務めを果たしていただきたいと思っております。

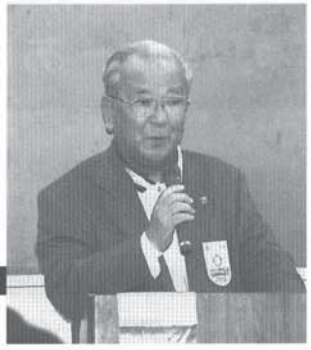
これから後のスケジュール等は、皆さん方に先ほどお渡しをいたしましたＲＹＬＡのスケジュール表に載っております。特殊なＲＹＬＡ用語、ロータリー用語の解説も載っております。

それから、当地区のＲＹＬＡセミナーは全部二十歳以上の成人の方ということに限らさせていただいておりますので、それぞれ自覚のある行動をとって活動をしていただきたいと思います。もちろん、夜のキャビンタイムには、それぞれのキャビンで多少のビールとかお酒を自費であがなっていただいて、飲みながらの討論もあると思いますが、少なくとも次の日には、それぞれの自覚を持って、講義等に遅れることのないように必ず参加していただきたいと思います。食事をとる、とらないは、皆さん方にお任せをしておりますので、そういうつもりで過して下さい。

わからないことがありましたら、黄色の名札つけている方々がスタッフ、つまり、お世話係でございますので、気軽に声をかけて下さい。こちらからも皆さん方に気軽に声をかけていきたいと思いますので、４日間よろしくお願いいたします。

以上で、オリエンテーションとさせていただきます。ありがとうございました。

ガバナーあいさつ



飯　忠悟

国際ロータリー第2670地区ガバナー　（今治RC）

皆さんこんにちは。どうも。

先ほどごあいさつをしていただいた方は、別役と書いて別役（べっちゃく）さんとお読みする。私は名前どおりのいい男、飯（いい）といいます。覚えといてください。字を読んでいただいたらわかりますが、飯と書いてますね。時々メッシー君にもならないわけではありませんが、飯といいます。よくもないのにいい（飯）ガバナーと言われながら、今、四国地区2670のガバナーを務めています。

ガバナーって何やいなと。ガバナーというのは総督であったり、日本で言えば知事なんですね。今、2680地区はこちらにお座りの加藤さんがガバナー。そちらにお座りの今井先生や深川先生はずっと前にガバナーをお務めいただいた立派なパスト・ガバナーですし、三宅先生もしかりです。隣に座ってるのは、来年のガバナー。そこに座っているハンサムな方が豊田さんといいまして、再来年のガバナー。皆さん、それぞれに１年単位で役目を務めます。

青少年のためにリーダーシップを提供する機会をつくる会であるというのがＲＹＬＡのもともとの意味なんですね。また、簡単な討論会のことをバズセッションというんですが、皆さん方、お互いに討論等をしながらお互いに磨き合って、切磋琢磨といいますけれども、鍛え合って、そしてここから帰ったときには一段と成長していただくことをお願い申し上げます。ぜひ、できれば来年もお会いしたいものだなと念願をいたしまして、私のごあいさつにかえさせていただきます。

ガバナーあいさつ

加藤 隆久

国際ロータリー第2680地区ガバナー　(神戸RC)

皆さんこんにちは。

先ほどの飯さんが2670地区のガバナーでございまして、私は2680地区のガバナーです。2670地区のエリアは四国の全県で、2680地区のエリアは兵庫県でございます。私の職業は神職でございまして、神戸の生田神社の宮司をしております。

先日、藤原紀香さんと陣内智則君の結婚式を私が奉祀をいたしました。あんなきれいなお嫁さんはあんまり今まで見たことなかったわけで、陣内君は３センチほど低いわけですけど、紀香さんは顔が小さい上に171cmありましてね、そして、十二ひとえというのを着て、陣内君は束帯という古式にのっとった式をやったんですね。まあ、それはきれいなお嫁さんでありました。そういうとこで御奉祀をしているわけであります。

それからこの間、地区大会も済みまして、やれやれですね。ガバナーとしては、このＲＹＬＡセミナーが地区大会後の重要事業というわけであります。私もここへやってきて、皆さんとすばらしい先生方の講義を拝聴できると期待しております。2680地区の地区テーマは「ふれあい、学び、ロータリーのこころ育み行動を！」としたんですが、ＲＹＬＡもそのとおりだと思います。ふれあうということが、私は大切だと思うんですね。そして、立派な先生方の話を聞かれて、何か学ぶ。学んでるうちに、一体ロータリーというのは、ロータリーの精神とかロータリーの心って何だろうといったようなものを見つけ出していただいて、そして地元へ帰られて、学んだことを行動に移していただく。これがＲＹＬＡセミナーの目的だと思います。

私はここへ来て実に感心しましたのは、夜、外へ出て天を見上げた時でした。すばらしい、私も知らなかった星空ですね。私は去年ここへ来て、こういう歌を詠んでるんです。「余島の夜　今忘れよる幾千の　星の光の瞬きを知る」と。ほんと星がきれいです。それから朝には、早く海へ行きました。ここの海は本当に穏やかなんですね。それで、そのときに、「朝まだき　余島の海辺散歩する　波の音にぞ母の声聞く」と詠みました。ここの海の音は、怒濤のような荒々しい波でなくって、ほんとに優しい、何かお母さんのような音がするんですよ。これもひとつ皆さん、聞いていただきたいと思うんですね。

ＲＹＬＡのテーマはおととしは「命」、去年は「生きる」、今年は「絆」となっています。絆というと、へその緒からお母さんのことを思い出します。そこで私は、今日ここに皆さんに、「感恩の歌」をお渡しいたします。この感恩の歌というのは、父母恩重経という、中国でできた教典の一つなんであります。それが日本にも入ってきまして、この父母恩重経という教典を、竹内浦次という95歳まで生きた方が、訳したんですね。ちょっと皆さんにとっては難しいかもしれませんが、今ならさしずめ、私の友人の芥川賞をもらった、「千の風になって」の訳詞者の新井満君なんかにこれを訳させたらもっとい

いんじゃないかと思います。この機会ですから、これを読んでみます。

感恩の歌。
あわれはらから心せよ　山より高き父の恩　海よりふかき母の恩　知るこそ道の始めなれ　子を守る母のまめやかに　わがふところを寝床とし　かよわき腕を枕とし　骨身をけずるあわれさよ　美しかりしわか妻も　おさな子一人育つれば　花のかんばせいつしかに　衰え行くこそ悲しけれ　身を切る如き雪の夜も　骨さす霜のあかつきも　乾けるところに子を廻し　ぬれたる処に己れ伏す　幼きもののがんぜなく　ふところ汚し背をぬらす　不浄をいとう色もなく
洗うも日日に幾度ぞや　己れは寒さに凍えつつ
着たるを脱ぎて子を包み　甘きは吐きて子に与え　苦きは自ら食うなり　幼な子乳をふくむこと　百八十石を越すとかや　まことに父母の恵みこそ　天のきわまりなきが如し　父母はわが子のためならば　悪業つくり罪かさね　よしや悪趣に落つるとも　少しの悔いもなきぞかし
もし子遠く行くあらば　帰りてその面見るまでは　出でても入りても子を思い　寝てもさめても子を思う　髪くしけずり顔ぬぐい　衣をもとめおびを買い　美しきは皆子に与え　父母は古きをえらぶなり　己れ生あるそのうちは　子の身に代わらんことを思い　己れ死に行くその後は　子の身を守らんことを願う　よる年波のかさなりて　いつしかこうべのしも白く　衰えませる父母を　仰げば落つる涙かな　あああありがたき父の恩　子はいかにして酬ゆべき　あああありがたき母の恩　子はいかにして報ずべき

今、世の中、子を親が殺し、子が親を殺しといったような非常に絆を断たれたような世の中になってるわけでありますけども、どうかこのテーマであります「絆」を、一つじっくりとここで学んでいただけたら、すばらしいセミナーになるんじゃないかと、思っております。

どうぞひとつ頑張って、この３泊４日をお過ごしくださいますようお願い申し上げまして、私のごあいさつといたします。ありがとうございました。

ごあいさつ

三宅 洋三

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(高松RC)

2670地区の三宅と申します。

今の絆という言葉と一緒に考えますと、いわゆる人は身を修めるという言葉をよく使います。今は男女同権の世の中ですけど、今から少なくとも60年前、戦前までは、女性は母・妻という一つの目標があったんですね。女性が女性らしいとよく言われることの中に、五つ守るべきことがありました。

まず、その一番は裁縫です。女性は、そのころは着物を手で縫ってましたから、裁縫ができなければならない。２番目がしつけです。しつけをよく受けてると、よくしつけができてるといわれます。次に炊事ですね。食事をつくるということ。それから、洗濯です。最後に掃除。

結局、女性の行動哲学といいますか、女性が一人前として世の中に通るためには、この五つの要素が要ったわけです。

裁縫、しつけ、炊事、洗濯、掃除。この中で、いわゆる戦後、今お金で解決できないのはしつけだけですね。あとは全部、お金を出せばできるようになりました。

しつけというのは、絆を大切にするという言葉と同じなんです。最近、よく新聞・テレビに出ますように、親が子を殺したり、子が親を殺したり、それからいじめをしたり、全部、これしつけができてないからですね。しつけ（躾）という漢字は身を美しくすると書きます。人に嫌がられない、また人のことを大切に考える、そういう人間として最低必要なことがしつけだというふうに言われます。自分で身を美しくすることを常に習慣にして身につけるためにはどうすればいいでしょう。

第一に、感性を磨くということです。人に感謝をする、ものに感謝をする。それから、例えば野原で花が１本咲いておったら、きれいだなと思う。そういう物を美しく見る。例えば、１日終わって、夕焼けを見ながら、ああ、今日も済んだなと、きつかったなと、ため息をつく人もいます。人によっては、夕焼けを見ながら、ああきれいだな、きょうも自分で頑張れるだけ頑張れたと、明日も頑張るぞという考え方を抱く人、全然反対ですね。

次に教養をつけるということです。よく教養というと、いい大学を出たとか、あの人は私より物をよく知ってるというようなことを言いますけど、そうじゃなくて、教養というのは自分を知るということですね。いわゆる自制のできる人。自分でこれから後はだめだ、ここまでが自分の範囲だという範囲を知ってる人。日本で昔からよく言う、矩（のり）をこえず、という言葉。いわゆる背伸びをするなと、流行に惑わされるなと。いわゆる自分は自分としての道を歩こうということですね。これが教養です。

第３番目に自分の空白を埋めるということです。自分の周囲を眺めますと、あれも知らない、これも知らない、いわゆる知らないことが非常に多いですね。その空白を埋める努力をすることによって、人間としての常識がふえてきます。常識がふえると、いいか悪いか、そういう判断ができるようになります。だから常に自分の常

識をふやすための努力をする。

それから、その次は経済観念をつけるということです。お金をもうけるとか、お金を持ってるということじゃなくて、自立できる人になるということですね。人に迷惑をかけない習慣もつけること。

最後には、好奇心を持つことです。新しいことに挑戦するという好奇心があれば、世の中はだんだん開けていきます。この好奇心が積み重なって、いわゆる文明が進み、現在の世の中ができてきたわけです。だから、これを踏み台にして、ますますそういうふうな努力をしていただきたい。

いわゆるロータリーの特徴で、昔からよく言われるのは、一業一任。一つの職業から一人を選ぶということが原則だったんです。ということは、職業が違うと常識が違うわけですね。こんなことはだれでも知っとることやと思うことが、職業の違う人から見たら、全然目新しいことが多いわけです。みなさんは自分の職業や自分のことに関してはよく知ってると思うんです。しかし、常識と思って話したことが、相手の人には、そんなことが世の中にあるんかということが多いと思うんです。3泊4日ですけど、なるべく友達とのつき合いをよくしていただいて、少しでも自分の常識をふやしていただきたいと思います。

どうぞ頑張ってください。

ごあいさつ

今井 鎮雄

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(神戸西RC)

こんにちは。

このキャンプは1958年に生まれました。1958年といいますと、生まれてないね、あなた方。残念でした。

私、ちょうどアメリカに、その前の年に参りました。アメリカという国はおもしろい国で、片一方には理想主義者がたくさんいます。片一方には現実主義の連中がたくさんいます。現実主義の連中の中で今率いてるブッシュさんは、今、評判が悪い。もっと理想主義の方向に行ったらいいじゃないかと、アメリカでもいろいろ反省があるようです。

1958年、戦争が終わってすぐアメリカという国は大変理想主義に燃えてました。日本という国が戦争をして、その後で新しい国をつくるというんだったら、いろんな会のリーダーたちにアメリカを見てもらって、いいものを習って、それを持って帰って自分の国をつくってほしいという計画をつくり、経済界の方々とか、あるいは学校の先生方であるとか、いろんなグループを御招待しました。その中で若いリーダーも少し勉強してもらって、アメリカではどんなふうにして青少年が自分たちを成長させていくかということを学ぶためにいらしてくださいと言うわけです。私もそのころは若い一人でありましたから、一緒に行かせてもらいました。約10カ月、あちこちを周りながら勉強させてもらいました。

そのころアメリカの教育界ではジョン・デューイという人に導かれて、そしてどちらかというと新しい経験を通した学びということを考えていこうじゃないかということでやり出したプログレス・エデュケーションというものが大変盛んになりました。ジョン・デューイという学者は大変古い人なんですけども、そのジョン・デューイが1920年に日本に来て、日本をいろいろ見ました。それから中国に行って、中国を見ました。日本の国はある意味で進んでるけども、長く持たないのではないか。中国は実に惨めな姿をしてるけれども、この中国には将来、力を持ってる人たちがたくさん出るんじゃないかという予想を立てたことがあります。

このジョン・デューイは、自分で自分を確立していく努力をさせることが、新しい教育には大事なんだということを言いました。そして、何が大事かということは、教わるのではなく、自分でそのことを触れ合って感じていく。そして、その感じたものを自分で育てていくと言いました。

そんなわけで、私はまだ若かったんですけども、あちこちの子供たちのキャンプを見に行きまして、子供たちがどんなふうにして成長していくのかということについて、いろいろ勉強させてもらって帰ってきました。その帰ってきた次の日に、キャンプを開きました。主に子供たちに自分で何かを感じてもらおうということで、一生懸命やりました。

ところが、30年ほど前は、兵庫県と四国四県とは一つの地区でした。私たちはみんな、そのころからお友達でしたので、一緒になって考え

たんです。1978年に四国でガバナーをされました梶浦さんというお医者さんがおられまして、この梶浦先生がＲＹＬＡをやりたい。青年たちに自分で感じてもらう、そして青年たちが自分たちでディスカッションして、そのことを試してもらう、そのことに確信を持ったら、そこからそれを実行してもらう、そういう若者をつくるために、ぜひＲＹＬＡをやりたいなと。そしてどこがいいんだろうか、どんな指導者を集めたらいいだろうかというときに、私がちょうどここでキャンプをしてたもんですから、来られまして、「今井先生、ＲＹＬＡやりたいんですけども、私たちＲＹＬＡやったことないので、どうしてやったらいいのかわからない。」、「実は私たちもＲＹＬＡをやりたいと思って考えてるんです。」お互いそういう話をする機会がありました。神戸でも、ＲＹＬＡをやろうという話が出ました。ここにおられる深川先生も思わず、いいですな、やりましょうといって。それで、ＲＹＬＡって何ですか、いや、これから考えるんだといって、みんなで集まって一生懸命考えました。

その結果、幾つかのことを決めました。みんな仲間になる。大人を集めよう。大人を集めるというのは年の問題だけではないんです。年の問題ではなくて、自分がこれが正しいということを考えて、そのことにちゃんと責任が負える人たちを集めよう、これが一つです。だから、寝るのも起きるのも自由でよろしい。御飯を食べても食べなくてもよろしい。旗揚げ、それからみんな集まれということはやめよう。そんなんせんでよろしいと。みんな自由にしよう。ただし責任を持ってもらうためには、これだけは聞いてほしいという講義にはみんな出てちょうだいね。みんなと一緒に話し合ってやってくんです。夜中までやろうと、徹夜だろうと、そんなことは知ったこっちゃないと。９時になったら消灯なんてしません。みんなが自由にやってください。自分がみずから何かをきっかけに、そしてそのことをしっかり考えながら、自分の人生にむだでなかったなという４日間にしてもらおう、そしてところどころに指導者やリーダーの人たちがおって、そのことを伝えたり、それを考える人たちに集まってもらおうと決めました。

ロータリーという組織が何をしてきたのか。今から100年前にロータリーがなぜできて、そしてそれは何を目的にしながら、今、何をしようとしてるのか。それは決して、大人だけの遊びのお昼の御飯を食べる会ではない。実はロータリーというのはそれぞれの夢と希望を持って、世界の人たちと一緒につき合い、仲良くできるような、そういう輪をつくっていこうという運動なんだと。その運動を理解してもらいながら、将来あなた方にもそういうグループに機会があれば入ってもらいたいし、将来あなた方に、仲間になってもらって、世界をもしもお互い同士が支え合って生きようとするならば、こんなことを私はすることができますよ、こんなことを皆さんやっていただけないかというお願いをし合いながら、そういう世界をつくることの一員になってもらおう。そのためにはロータリアンの方々と一緒になって、皆さんも一人の人格として一緒に話し合ってもらいたい。そう決めたんです。

皆さんごらんください。受講生のほかに後ろにあんなにたくさんロータリアンの方々が並んでおります。忙しいお仕事を休んで、中にはこれ幸いと抜け出した人もいるかもしれませんけども、とにかく若者と話し合おうと。そして、お互いの今の状況を静かに考えながら、私たちの社会が、そして世界が今、何を必要としてるか。加藤先生のお話から言えば、私たちはそのような意味で一つの絆で結ばれている。その絆を強めて、そして私たちが皆さんの手で新しい未来をつくる時の役に立つようにとつくったのがＲＹＬＡというプログラムであります。

自由なようでありますけれども、実はそれ以

上に皆さん方の自覚と責任と、考えをまとめていっていただきたい。だからここでは、話をするのは私を除いて２人は立派な先生方であります。いつでも新しい情報を皆さんに伝える役をしていただきます。私は、その伝える役をしてくださった２人の先生の話の後に、ロータリーが夢見てるもの、絆というのが今の時代にどんな意味を持つのかということを結びつけながら、皆さん方が得たものを一つに整理する役割をさせていただきたいと思いますが、その間、一緒に暮らす。そして、みんなと一緒にディスカッションをする、話し合う、仲間になる、そういう出会いの場所にしていきたいと思っております。

それから、できるだけ皆さん方に声をかけたいけども、みんなの顔を全部名前と一緒に覚えるのはなかなか難しい。昔は私は商売でしたから、顔と名前を覚えるのは得意で、大体１時間あったらみんなの顔と名前を覚えました。88も過ぎると、記憶力というよりも認知力がなくなって、顔と名前がなかなか覚えられません。もっとも秋山さんのお嬢さんのように10何年も会わないと、大きくなって顔がわからなくなるという人もいます。みんな仲間ですから、自由に話す機会があったら話し合って、ほんとに来てよかったなと思う会にしてください。私たちは何にもしません。ただ提供するのは、これだけたくさん先輩がいますよということ。ロータリアンの人、ちょっと皆さん立ってくださいませんか。どうですか。受講生の皆さんよりロータリアンが多いぐらいです。この方々が皆さんと一緒に４日間過ごそうというんです。しかも、新しい時代をつくるために、苦労したり悩んだりしながら考えておられた方々は、若いあなた方とこれからやろうということを一緒になって考えようとしているのです。仲間と話し合う。そして確信を持って、次の時代をあなた方が育てていけるような経験をしてください。

ありがとうございました。どうぞお座りください。

私は、約30年近くこのプログラムが続いてることに感謝しております。決してむだにしない。あなた方は、長い人生ですから、３日、４日はどうでもいいということもあります。しかし同時に、その３日、４日が人生のある大事な方向を決めたということにもなるかもしれません。それを決めるのはあなた方です。その決意で参加してくださいというお願いをしたいと思います。ありがとうございました。

注意事項の説明

○司会　受講生の皆さん方、気になることなどがあれば、気兼ねなくロータリアンに声をかけて下さい。親切に答えてくれる人たちばかりだと思います。

では、前に座っておられる方々の御紹介をさせていただきます。

では、まず2680地区の深川パストガバナーです。

それから、私たちＲＹＬＡの委員でもある安平パストガバナーです。この方も2680地区の方です。

それから、2670地区の稲山ガバナーエレクトと、2680地区の三木ガバナーエレクトです。

このお二方はこの2007年７月から2008年６月まで、今のガバナーからタッチされて、１年間御活躍いただくことになっております。

それから、その次の年度にまた御活躍いただくのが、2670地区の豊田ガバナーノミニーと、2680地区の宮本ガバナーノミニーです。

今、御紹介しました方々が、2670地区・2680地区を引っ張っていただいている方々です。

では、注意事項を申し上げます。

まず、ロータリーからのお願いと、それから余島野外活動センターからのお願いをしていただきます。

まず名札ですが、ブルーが受講生で、レッドがカウンセラーの方。いわゆるお父さん、お母さん方になられる方ですよね。それから、グリーンが見学ロータリアンの方。それから、イエローが、私たちＲＹＬＡのスタッフです。もしＲＹＬＡについてのいろんな問題でしたら黄色い名札のスタッフに相談下さい。また名札は上着の一番上につけていただいて、それぞれの方が必ず、私はだれですよというのがわかるようにしていただきたいと思います。

それから、この講義中には携帯は切るか、マナーにするかにして下さい。それから、メールの交換もしないようにお願いします。

それから、時間ですよね。今日は少し手違いがあって、ちょっと遅れてこられた方があり、申し訳なかったですが、これからタイムスケジュールをこなしていくときには、時間をしっかりと守っていただくように。時間というものは過ぎてしまえば取り返すことができませんので、その辺心得ていただければありがたいと思います。時間はすべての人の共有物であって、自分だけの時間じゃないんだということだけ心していただいて、この３泊４日を過ごしていただきたいと思います。

では、続きまして、ＹＭＣＡ余島の方より、地理とか注意点等を説明いただきます。

○山根　泉　皆さんこんにちは、余島野外活動センター所長の山根です。実はこの島は、今井先生が50数年前にどこかＹＭＣＡのキャンプをするところはないかなと探し歩かれて発見された島です。発見といっても島はあったんですが、いいところがあるじゃないかということで、見つけてくだり、今では神戸ＹＭＣＡの大切な宝物、宝の島になっています。

この３泊４日はＲＹＬＡセミナーの参加者以外は、この島には私どもスタッフとタヌキが数匹住んでますが、それ以外で見かけた人はどこかからやってきた不法侵入者ですので、気をつけることはありませんが、皆さんの島だと思って自由に遊んでいただきたいなと思っています。

神戸のＹＭＣＡは2011年に125歳、125周年を迎えることになっています。この余島はちょうどことしが57～58年目ですので、ＹＭＣＡの歴史の半分ぐらいは、この余島がともにあるということなんです。ＹＭＣＡでは、若者と子供の命が光り輝くような未来になってほしいなという願いを持って活動しています。この余島でも皆さん、いっぱい楽しんで、輝いて帰っていただきたいなと思っています。

それでは、若いスタッフを紹介をしまして、簡単なオリエンテーションを続いてさせていただきます。それでは自己紹介をさせていただきます。

○原田　こんにちは。私は、ここの余島のスタッフで、皆さんの前に出てくるスタッフは恐らく山根所長を含め３名になると思います。私はそのうちの１人の原田といいます。

毎年、ＲＹＬＡセミナーは、ここ余島で行われるんですが、日程が迫ってくると、ああ、もう１年たったんだな、早いもんやなと思います。実はインフォメーションセンター前に桜の木がありまして、ちょうどこのセミナーが終わったあたりからちらほら咲き出します。ことしはものすごく暖かいので、今、もうその桜の木のつぼみがかなり膨らんでいます。もしかしたら、このセミナー中に一つや二つはぽろっと咲くかもしれません。

この参加者の中には、私もよく知っている人が何人かいらっしゃいますが、この期間中、私を含め、ほかのスタッフともいろいろ話をしていただけたらなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

もう１人、スタッフ紹介します。

○坂田　皆さん、こんにちは。

僕は坂田です。

僕からは余島の使い方等の説明をさせていただきます。

今、皆さんがいるところは大研修室といって、余島の南側になります。南の浜の近くです。講義等はここを中心に行われると思います。次に、食堂。近いところから説明していきます。ちょうど、ここからすぐ見えますが、あっちの建物が食堂と共同浴場になりますので覚えておいてください。

スタッフがどこにいるかと申しますと、インフォメーションセンター。皆さん、来るときに上がってこられたと思うんですけれども、白い建物の中にだれかしらスタッフがいます。朝は９時から夜は10時半まで、あけていますので遊びに来てください。もし緊急事態が起こったら、そこに人がいますので、助けを求めに来てください。

おふろの時間は一応４時から24時、12時までになっています。それ以降になると、温水は出るんですけども湯が冷めるので、この時間内に入ってください。

あと、注意事項といたしまして、ドライヤーを使われる方がいるかもしれませんが、お部屋で二つ以上ドライヤーを使うとブレーカーが落ちてしまいます。余島でブレーカーが落ちると真っ暗になります。ただでさえ暗いので気をつけてください。

あとお水は出ますが、大事に使ってください。

あと火の扱い、これ一番大事かもしれません。たばこを吸われる方いるかもしれませんが、決められた場所、喫煙場所、灰皿があるところで吸ってください。余島で火事が起きますと消防車が来れませんので、皆さんでバケツリレーで消していただかないといけません。火の扱いだ

けはくれぐれも注意してください。

お酒の好きな方いらっしゃいますか。皆さん好きだと思いますけれども、インフォメーションセンターではお酒以外にも自動販売機があります。飲み物やお菓子等も売っています。ぜひ、じゃんじゃん買ってください。ビールはケース売りも可能です。

あとは、茶器セットを各グループに1セット、用意してます。コーヒーとお茶を用意してますので、インフォメーションセンターに取りに来てください。

最後に渡船、島から出るときは、余島から船を出さなきゃいけないので、センターまで来てスタッフに聞いてください。タクシーとかバスの時間、そういうのもインフォメーションセンターに掲示してありますので見てください。

また質問等あったら、センタースタッフもさみしがり屋なので遊びに来てください。僕からは以上です。

○司会　どうもありがとうございました。

じゃんじゃんインフォメーションのところの売店等を利用いただきたいということでしたので、よろしくお願いしたいと思います。

ここのお水は飲めます。ただし無駄な使い方はしないようにという意味です。

それから、お風呂は4時から12時ですが、これは各班がそれぞれまた決めて入るわけですから、みんなが4時から入れるわけじゃないです。皆さんで班ごとに時間割りなんかを決めて入るようになると思います。

○今井鎮雄　水飲めますとか飲めませんとかいうのがありましたね。水道なんです、本当は。水道ですけども、その水は小豆島の本島から来ています。夏の間だとしょっちゅう使ってるけども、今ごろだとあんまりここにたくさんキャンパーがいるわけじゃありませんから、なるべく生水は飲まない方が身のためです。

○司会　ということだそうでございます。

それからもう1点、重要なお願いですが、3泊4日間はこの島から出ないようにお願いいたします。ここでの密なる時間を過ごしていただきたいと思いますので、よろしくご理解いただきたいと思います。

それから、この講義期間中受講した方に修了証の発行をさせていただきます。だから途中、もし仮に緊急事態がおこって退島というのか退所された場合には、申しわけないけども修了書の発行はございません。

また、セミナーが終わったあと推薦クラブに修了証書を交付しまして、そのクラブから皆さん方に案内があると思います。そのときには各クラブへ訪問して、30分程度のよい話をしていただければ私たちは幸いかなと、このように思います。ＲＹＬＡよかったですよと言うて話ししていただければ本当にうれしいです。

これからはちょっとかた苦しい話となります。開講式の最後、皆さん方は4班に分かれていただくんですけども、それにつきましては、それぞれの受け持ちいただくカウンセラーの方々からお名前を呼んでいただきまして、一グループずつ発表していただきたいと思っております。

ロータリーって何じゃいなというような感覚の方もいらっしゃると思いますので、ロータリーがＲＹＬＡに期待するものというテーマで、2680地区のパストガバナーの深川先生よりお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ロータリーがライラに期待するもの

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(伊丹RC)

深川でございます。

青天のへきれきという言葉があるんですが、ロータリーではよくこういうことがありまして、先ほどからもいきなり指名してくるんです。しかし、それは恐らくこの人ならきっちりしゃべってくれるだろうということを期待して言ってくるんですから、皆さん方も頼まれたら必ずそれを引き受けていただきたい。これはロータリーの一つの不文律になっておりますので。

それでは、ロータリーがＲＹＬＡに期待することについてですが、皆さん方にも五、六枚、私が書いたものをお配りしてると思いますので、それをお読み取りいただきたいと思います。ただ、その文章だけではとても足りませんので、若干の補足をしておきたいと思います。

このＲＹＬＡというのは、先ほど今井先生もおっしゃいましたように若い人たちを育てるプログラムでありますが、日本中どこへ行っても、ここのＲＹＬＡのようなＲＹＬＡをやってるところはないんです。非常にたぐい稀なるすぐれたＲＹＬＡであります。実は今井先生が今から29年前に、おい、ＲＹＬＡやろうじゃないかということで、今井先生の独自の構想に基づいてつくられました。基本的なパターンは29年間、全然変わっておりません。それほどすばらしいものだというので守り続けてきたのが、このＲＹＬＡなんであります。

若干のことを補足しておきたいと思います。

一つはロータリーのことであります。もう一つはＲＹＬＡのことについてです。

まず、ロータリーのことでありますが、皆さん、ロータリーとかロータリークラブという名前をお聞きになった方もおられるかもしれませんし、初めてここでお聞きになる方もおられるかと思います。恐らくロータリークラブなんていうのは金持ちの昼飯会だから、地域社会に寄附をしたり何かしてるんだろう、それぐらいに思っておられる方もたくさんおられると思うんでありますが、実はロータリーというところは寄附団体ではございません。しかし、寄附はたくさんします。それから福祉社会の慈善団体でもないんであります。ボランティアの団体でもございません。もちろん福祉社会に対して慈善行為もしますし、ボランティア活動もどんどんします。しかし、そこにロータリーの本来のあり方はないんです。

じゃあ、ロータリーというのは一体どんな団体なのか。一つの例を申し上げておきます。例えば、たばこの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンは、町を美しくするために必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかし、たばこの吸い殻を拾うところにロータリーの本願はない。一体どこにロータリーの本願があるのといいますと、たばこの吸い殻を捨てない人を育てるところにあるのです。だから寄附団体でもなく、慈善団体でもなく、ボランティアの団体でもない。要するに、そういう人を育てる、道徳を守る人間を育てる、倫理的な人間を育てる、そこにロータリーの本願がある。人を育てるところがロータリーのロータリーたる由縁なんであります。じゃあ、一体どんな人を育

てるのかということであります。

今、ロータリークラブというのは全世界に3万2,000ほどありますが、その3万2,000あるロータリークラブを管轄してる、統括しておる団体を国際ロータリーといいます。7月からその国際ロータリーの会長さんになるウィルキンソンさんが、ロータリーで大切なことは、一つは愛、愛の心、それからもう一つは人に親切にすること、愛と親切心がロータリーの一番大事なことだと言っております。それじゃあ、一体愛って何なのということになります。愛というのは、自己愛が根本であると私は思うんであります。人間が本音で考えておること、これは「自分自身が一番かわいい」なんであります。母親でさえ、自分以上に自分の子供を愛してはいませんと言われております。

昔、インドに相思相愛の王様がおられました。すばらしい奥さんがおられたんでありますが、あるとき、その王様が奥様に対して、「自分はよく考えてみたらおまえよりも私自身の方が一番いとしいように思う。」と言われた。そうすると、その最愛の奥様が、「私も実はよく考えてみたら、あなたよりも私自身の方が一番かわいいと思います。」そこで王様が、「みんなが自分が一番かわいいと思っておったら、この世の中は成り立っていかないね。お釈迦様のところへ聞きに行こう。」お釈迦様はお2人の話をお聞きになって、「それでいいんですよ。みんな自分自身が一番かわいいんです。しかし、ただ一つ忘れてはならないのは、自分自身が一番かわいいのと同じように相手も自分自身が一番かわいいんだということを忘れないように。」このようにお諭しになったのです。ここから相手に対する思いやりの心、自分以外の人に対する愛が始まるわけであります。そして、世の中の人たちがみんな人に対する愛や思いやりを持って初めて、この世の中がうまく成り立っていくわけであります。自分自身を愛することができて初めて人を愛することができ、この世の中のことを考えることができるわけです。このようにして、初めて人は育つんであります。自分自身を愛することができない人は他人を愛することもできません。そして、人から愛されない人は人を愛することもできないわけであります。ここが大事なところであります。

最近、時として自分の子を殺す母親がいます。この母親はかわいそうに。恐らく生まれ落ちてからこの方、一度も自分の親から愛されたことがなかったんでしょう。したがって、自分の子を愛することもできなかったんであります。よって、自分の子を殺してしまったのです。それからまた、子供が親を殺す事件もふえています。親から愛されない子は人を愛することはできません。したがって、少年犯罪が激増しておるわけであります。

先ほど加藤ガバナーが父母恩重経、そのわかりやすい歌として感恩の歌を紹介されました。人はいかにして生きるべきか、これ大切なところなんであります。皆さん御存じのゲーテという人がいます。この人が美しい言葉を残しております。天に星ありて愛といい、地に花ありて愛というんであります。人を愛することも人から愛されることも大変大事なことだと思います。人から愛されて初めて人を愛することができるようになると思うんであります。

レイモンド・チャンドラーという人がいます。その人は、人間はたくましくなければならない、そうでなければ生きていけない。同時に人間は優しくなければ生きる資格はないと言っております。たくましくなければいけない、それと同時に優しさも大切なんであります。人への思いやり、自分への優しさ、自分をいじめないこと、他人をいじめないこと、一人一人を大切にすることが大切なんであります。

自分自身を愛すること、これは利己主義ではありません。利己主義というのは、自分がほれぼれとした姿でなければ愛せない。自分が光り輝いている限りにおいて愛することのできる人でありま

す。したがって、自分が光り輝いていないといけないわけでありますから、いつも人を押しのけ、押し分けて、よい場所にいようとします。自分がほれぼれとした自分でなければいけないから、ほれぼれとする自分でいようとするわけであります。だから、縁の下の力持ちなんて惨めで仕方がないわけであります。そんな仕事は人に押しつけといて、自分だけは脚光を浴びたい、こういうふうに思うのが自己主義者のとる態度なんであります。なぜかというと、そういう自分でなければ愛せないからであります。

ところが、本当に自分を愛することができる人というのは、どのような自分でも縁の下の力持ちのような仕事であっても、自分を大切に思える人であり、自分を愛することができる人なんであります。自分を宝だと思う人こそ本当の愛の心を持った人だろうと思うんであります。このような人を育てるところがロータリーであり、このＲＹＬＡなんであります。

今は、人間はいかに生きるべきかというところの視点だけから話をしました。このＲＹＬＡで皆さん方を育てます。地域社会で人を育てます。ロータリアンの職場でも人を育てます。そして、国際社会でも世界社会でも人を育てていきます。いつも自分の心に愛を持って、他人に対する思いやりの心を持つ、皆さん方どうか、そういう人に育っていただきたい。またロータリーというのは、そういう人を育てるところだと、覚えていただきたい。そのために、このＲＹＬＡをロータリーが計画したということを心にとめていただきたいと思います。

ロータリーの世界はみんな平等・対等であります。今井先生と私とも平等・対等、一般のロータリアンとも平等・対等。皆さん方と今井先生とも平等・対等。人間に上下はありません。みんな友達なんでありますから、ごく気楽に、本当に友達のような気持ちでおつき合いをいただきたい。それが一番大事なことであります。

それから次は、このＲＹＬＡについて申し上げたいと思います。

プログラムにはバズセッションという言葉があります。今回のＲＹＬＡのテーマは絆なんでありますが、このプログラムの３日目に行うバズセッション及びフォーラムでは、このテーマとは直接関係はございません。バズセッションとかフォーラムというのは、皆さん方は青少年のリーダーとしていかに生きるべきかという心構えなどについてのディスカッションしていただきます。そのことだけちょっと誤解のないように申し上げておきたいと思います。

それから、バズセッションついて説明いたします。

いろんな議論をするディスカッションというのは、大勢の人でやる場合もあります。例えば、ここにおられる50人以上の人が一堂に会してディスカッションをしますと、カラオケを持ってマイクを放さない人がおるように、しゃべる人は１人で幾らでもしゃべるんであります。しかし、全然しゃべらない人も出てきます、時間に限りがありますから。だから、すべての人に平等に何らかの意見を出していただくために、この50人を４、５人ずつの小グループに分けまして、そこで、ディスカッションしてもらいます。この大きい部屋で、みんなが４、５人ずつに分かれて、それぞれわいわいがやがやディスカッションすると、「クマンバチがぶんぶんいってる」ような感じになります。これを英語でバズといいます。そこからバズセッションという言葉ができました。このＲＹＬＡでは３日目の２時から６時まで、そのバズセッション、をやっていただきます。そしてそのあと、夕御飯を食べた後で、ここへ全員集まってもらいます。そこで、今度は、その小グループで分けた意見を持ちよって、全体のディスカッションをします。これがフォーラムなんであります。フォーラムは３時間あります。

つまり、このＲＹＬＡではバズセッションを４時間、フォーラムが３時間、合計７時間ディスカ

ッションをするわけであります。これほど長い時間かけてディスカッションするのは、実はロータリーの世界でもないんです。ロータリーの世界では、ディスカッションするいうと、一番長くたって1時間半か2時間ぐらいのもんですね。ですから、そういう面では、このＲＹＬＡのプログラムというのは非常に特色のあるものでありまして、今井先生が29年前に最初にこういう発想を出されて、その伝統を29年間守ってきておるわけであります。どんなことでも結構であります。憲法が保障しております言論の自由というのがありますから、バズセッションのときには全員必ず何らかの意見をその中に出してください。みんなの意見を聞きたいために、バズセッションをやるわけでありますから、そのことを一つ心にとめておいていただきたいと思います。

それから、午前中は3日間とも約2時間半講義がございます。それは、皆さん方聞き手と、話し手との共同作業なんであります。聞き手が一生懸命聞くと話し手も一生懸命話に乗ってくるんです。聞き手がよそ見したり、ひそひそ話だとかメールを打ったり、ということは、講師の先生に対して大変失礼なことになります。先ほど申し上げました愛と親切心、思いやりの心がロータリーの基本でありますから、どうか講師の先生に対して失礼になるようなことはおやめいただきたいと思います。皆さんは良心を持った一人前のリーダーなんでありますから、自分のことは自分で厳正に規律していただく。そういう心を育てるのも、このＲＹＬＡだということを覚えておいていただきたいと思います。

要するに人の話をよく聞く。私は弁護士であります。私の父も弁護士でした。私は若いころから父によく言われました。「弁護士というのはぺらぺらしゃべるんじゃないよ。まず人の話をよく聞くこと。」弁護士というのは聞き上手であれ、と教えられてきました。人の話をよく聞くことによって、人は成長するんであります。

今から29年前に、今井先生が第1回ＲＹＬＡで「青少年と地域社会のあり方」というテーマで、人間とはいかに生きるべきかについて講義されました。「人間とは何かという真実」に招き入れる教育、これをInductive Educationというんでありますが、その講義のことをいまだに鮮明に覚えておりますし、ロータリーのあちこちの講演会でも引用させていただいております。要するに、このＲＹＬＡではすばらしい先生方が講義をなさいます。その話をよく聞いて、心の糧にしていただきたい。また今井先生が、最終日に総括の講義をなさいますが、そのときに必ず3冊か4冊の本を紹介してくださいます。私たちはそれを買って、一生懸命勉強するんであります。これは、私は弁護士でありますが、法律とは全く関係のない本なんであります。しかしこうして人は育っていくだろうと思います。

私の父が言ってました。法律家というのは法律の本だけ読んでおったらだめだよ。法律以外のあらゆる人の本を読んで、あらゆる人の話をよく聞いて、それが弁護士として大成する一つの要素なんだと。3泊4日、ロータリアンや大学の先生に教えられるわけでありますから、できるだけ人の話をよく聞くということを心にとめておいていただきたいと思います。

これからの3泊4日は、皆さん方の人生に二度と戻ってこない3泊4日です。皆さん方の何らかの心の糧になりますように、皆さん方の心に何らか愛の灯がともればなと思っております。帰ってからともってもいいです。10年後にともっても構いません。一生ともらなくてもいいです。私たちはともるための種だけはまこう、これがロータリーのやるべきことと思っています。

先ほど今井先生は、ロータリーは理想主義者だとおっしゃった。まさに我々ロータリアンは理想主義者の集団なんであります。そして、皆さん方も理想主義者になっていただきたい。そのために、このＲＹＬＡを開いているということを心にとめておいていただきたいと思います。御清聴ありがとうございます。

ロータリアンの夕べ

今井 鎮雄

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー
（神戸西RC）

私がガバナーになったのは1980年、ＲＩの理事を務めたのは1995年から97年の２年で、その前の１年間は、エレクトとして理事会などに参加させてもらいました。

エバンストンの国際ロータリーの事務局は18階のビルが事務所、とにかく大勢の人が働いている。国際ロータリーとはいえ、事務局の大半がアメリカ人、役職者もアメリカの人が多い。あとはアメリカにいるイギリス人とかフランス人とか、そういう人がぽつぽつと入っていました。事務局には、国際組織のマネジメントに関する専門家がたくさんいて、その人たちが計画をつくり、それが事務総長から理事会に出されるわけです。専門家がつくるので、みな立派なものです。ことにＩＴ化が進むとグローバリゼーションも進み、それを成立させるための考え方はいわゆるアメリカン・スタンダードといわれるものに近づいていきます。そういう時代の流れの中で、また新しい問題も生まれるようですね。

ロータリーはもともと女性の入会を認めていませんでした。ところが、アメリカ・カリフォルニア州のあるクラブが女性の入会を認め、これが問題になって国際ロータリーはこのクラブの認証を取り消したんです。それに対してクラブが提訴して、裁判になりました。私はこのときのアメリカの裁判所の判断は面白いなと思いました。他の団体なら女性会員を入れなくてもよいかもしれないが、ロータリーは地域の中で責任を負い、社会的な働きをする団体だ。各職種から１人だけ入れることになっていて、自分が入りたいからといって入れる団体ではない。ロータリーはコミュニティーにとって大切な組織だ。それが男性と女性を区別したり、女性を入れないというのは、おかしいではないか。男女共同参画の社会になろうというときに、それは通用しない。ＲＩは裁判に負け、アメリカでは女性の入会を認めることになりました。

ロータリー規定審議会で女性会員の入会について議案が出たとき反対意見も多く、その理由を聞いてロータリーは民族、宗教、文化など実に多様だなと思いました。最初に、私の国の法律では女性と同席して会合を持つことはできない、たとえロータリーの会であっても例外は許されない、という意見が出ました。これは主にイスラム圏の人たち。次に、フランスの方だったと思いますが、１週間に一度、特定の女性と食事をするなんて、家庭で問題が起きるかもしれない。家庭問題になりそうなことを認めるべきではない。ＲＩがそうしたいなら、一旦解散し、男性も女性も入会していいというルールをつくり、改めてそれを問えばいいではないかというもの。

これに対してＲＩ理事会は苦労しながら、一般的には女性の入会を認めてもいいが、法律や規則などそれなりの理由があるところは認めなくてもいい、入会を認めるかどうかはその国、その文化の中で決めてくれればいい、けれど男性に限るという項目は外してもらいたい。そういって、女性の入会を認める案が通りました。ところが、このように決まった後、どうなった

かといえば、会員数がだんだん減少する中で、初めは地域にあった判断をして女性の入会を認めてもいいと言っていたＲＩが、やがて、女性を入れることは会員を増やすことになるから大いに入ってもらいましょうと奨励する方向に変わってきました。ロータリーがなぜ男性の団体であって、それがどのような意味があって変更されたかについては、あまり深く掘り下げて語られることはなかったようです。

私が理事になった最初の頃です。当時、理事会は、事務総長が専門家を集めていろんなことを決め、理事会に相談がないのはおかしい、これでは国際ロータリーと言いながらアメリカン・スタンダードになると危惧していました。それを変えるにはどうしたらいいか。理事だけで集まって話し合い、交代してもらおうということになりました。これは理事として苦しかった思い出の一つです。

ところで、私が理事の任期を終えた何年後かに、その彼が国際協議会に来ていたんです。やめたはずの人ですので、どうしたのと聞くと、ガバナーになるということでした。どこのガバナーかと聞くと、アメリカ。彼はイギリス人ですよ。その人がアメリカのある州のクラブに入って、そこで活躍した。事務総長の経験があるし、よくやるので皆がガバナーにしようと。それでガバナーになるんだと言ってました。なにごともなかったように会場に座っている彼を見て、面白いなと思いましたね。

それがきっかけとなったのかどうか、アメリカの事務局スタッフが専門家を置いて次々につくったものがある。深川パストガバナーは、ロータリーはクラブだ、クラブが集まって地区ができる、ＲＩは地区から成るので、ロータリーはクラブが中心じゃないかとよくいわれます。それが今のような経験を通してか、ＲＩの本部が変わってきました。

本部とは、ヘッドクォーターの訳です。国際ロータリーは事務局であってヘッドクォーターではない、なぜヘッドクォーターというのかと言うと、向こうは、いや、便宜的につけているんだと言いながら、少しずつヘッドクォーターの役割を果たすようになった。流れを変えようとしても、その傾向はますます強まっている。グローバリゼーションに伴って、国際ロータリーもアメリカン・スタンダードを導入しているというのが、私の印象です。ディストリクト・リーダーシッププラン、地区のリーダーシップをどうするか。その次はクラブ・リーダーシッププラン。一連の流れを見ていると、ＲＩ事務局はヘッドクォーターの役割を強めつつあるようです。アメリカン・スタンダードのよしあしは別として、そういう点からも、ＲＩの理事会や委員会にもっといろいろな国の人が出て意見を出すようにしないと、この国際的な組織がある意味で偏った形になる可能性もあることを考えておかなきゃいけない。

それからＩＴ化。今はパソコンが普及していますが、私が理事の頃、コンピューターを使いこなせる人はまだ多くはなかった。事務局は、集まった理事にコンピューターが使えるかと尋ね、使えないと言った人は、５時に会議が終わったあと、事務所のコンピューター室で居残りトレーニングですよ。若い女性インストラクターが説明する。それを見ながら、手許のパソコンのキーを押す。また説明があって、キーを押す。インストラクターが私を見て、肩をポンと叩いて、グッドボーイとか言ってる。トレーニングが終わると、パソコンを貸してあげるから、持って帰って練習するようにというんです。２年の任期の終わりにＲＩへ返しましたが、それは東芝のパソコンでした。ＲＩではそういうトレーニングを行って、これから連絡はメールでやろうということになりました。今ではそれが当たり前で、皆さんのところへも連絡はメールで来ますよね。

2004年に開催されたＲＩ大阪大会の招致ですが、当初、ＲＩ理事会で話し合われていたのは

規定審議会の開催地でした。京都から電話があり、京都は規定審議会の会場に立候補するので、ＲＩへ手紙を出した。ついては理事として頑張ってくれ、要するに京都に決めてほしいということでした。理事会で、京都が手を挙げている、京都はすばらしい都市で、皆さんもそれをよくご存知でしょうから、ぜひ京都でやってほしい。そう発言したら、インドの理事が、規定審議会はぜひニューデリーでやりたい。けりがつかない。

最後に私は、皆さんは日本から金は集めるけれど、国際的な会議をぜひ日本でと言うといつもノーじゃないか。国際大会をやりたいと言ったらソウルになった。大阪が立候補したときはシンガポール。今度は規定審議会を京都でと言うと、ニューデリー。日本はお金を出すだけなのか。すると、そんなことはない、京都ならいいじゃないかという人も出てきて、投票にかけると９対６でした。京都がいいと言ってくれた人もいましたが、結局負けたんですね。

私がそんな発言をしたからでしょうか、イマイが日本に来いと言ってるということで、皆から、イマイ、それなら2004 年の国際大会を日本でやってはどうかと提案されました。まだ2004年の開催地が決まってなかったんです。そういう話は、じゃあ、そうしますと即断するわけにはいきません。次の理事会までに日本で皆と相談してくると言って、帰ってきました。

帰国後、日本のガバナーの皆さんに、どうしますと聞いたら、日本でやろう。京都から話が出たけれど、京都は３万人を収容できる会場がない。大阪でないと無理だ。ところが大阪は、何度も提案を蹴られたから引き受けないと言う。話しが宙に浮いてしまうので、大阪と京都と神戸と和歌山で一緒にしたらどうですかと、案を出したんです。「関西」で準備をしようと言って、ようやく大阪でやってもよろしいということになりました。その結果をＲＩの理事会に持って行って、日本のガバナーがそろって関西でやろうと準備することを約束した、そういってやっと関西が候補地としてノミネートされたんです。

その後も、金がかかり過ぎる、アメリカン・スタンダードに合わない、ＲＹＬＡはやらないなど、いろいろありました。サン・アントニオ国際大会でＲＹＬＡの国際大会を開くので、大阪でもやろうとしたんですが、ＲＩ事務局に聞き入れてもらえませんでしたね。理事会がやらないと決定したわけではないようなので、大阪大会でもやってもらおうと理事に言ってもらったんですが、だめだったということで、残念ながら大阪ではＲＹＬＡ国際大会は開けませんでした。

次年度の会長、ウィルキンソンさんはカナダの立派な方で、長い間ＲＩで理事をはじめいろんな役職を務めた人です。このウィルキンソンさんは会長に指名されていたのに、あるところからクレームがつき、そのため一旦白紙に戻して、一昨年の12 月、再度ＲＩ会長指名委員会が急遽開かれることになり、委員が召集されました。委員会会場には15人の委員だけで、事務局職員は１人も入れません。初めの説明もなく、名前がこれだけ挙がっている、投票しよう。投票しても票が割れて決まらないんです。徐々に候補者を絞り、最終的にアメリカの人とウィルキンソンさんの２人になりました。

その投票のたびに、なぜこの人を推薦するのか理由を言えというのです。たとえば、ウィルキンソンさんは公認会計士で財政について詳しい、ＲＩの会計処理の点からベテランの人になってもらうのがいいという意見。一方、アメリカの人に入れた方は、運動体として若い人になってもらう方がいいとか、それぞれ意見を出しながら投票するんです。

委員は全員で15人です。10 人の票が得られたら「全員賛成」ということにしよう、９人と６人だったらやり直す、というルールで投票すると、８対７でした。まず、８の方の人の意見

を聞こう、次に7の方の意見を聞こう。そして投票です。今度は9対6。まだだめですね。もう一度意見を聞いて投票すると、7対8。ひっくり返るわけです。また皆の意見を聞いて投票。全部で15 回、投票しました。投票用紙がなくなって持ってきてもらい、また名前を書いて投票する。それを皆で何票、何票と数える。全部で15票ですから結果はすぐ出ますが、7対8とか、8対7、何回やってもその繰り返し。理由の説明がよければ9対6、別の意見が出るとひっくり返って、合計15回。

これは形式的なもので、普通は1回か2回、多分1時間もかからないで済むのに、だんだん時間が経ち、午後4時頃になると明日へ持ち越しかと、皆思うわけです。ヨーロッパから来た委員が、今日飛行機に乗れなかったらパスポートが無効になると言い始め、全員がいないと投票が成り立ちませんから、大使館に電話をかけたりしながら、投票を繰り返しました。とうとう委員長が、これでは明日になる、皆でもう一度考えてほしいとしんみり言ったら、次は10対5。ようやく全員賛成ということになり、ウィルキンソンさんが会長に指名されました。

前に一度決まった方が選ばれたのですから、問題はないように見えます。しかし、大切なのはそこにいたるまでの経過で、15回におよぶ投票、そのたびに名前を書き、意見を述べる。だが、話し合いのネゴはやらなかった。しかも、意見によってそれぞれの段階で委員自らが決めたことを大切にする。そういうことに形式的というのは、これはいいですよね。日本だったら、そこまでやらないかもしれませんね。

雑談になってしまったので、これくらいにしておきます。

21世紀の夫婦関係と親子関係

野々山 久也 先生

甲南大学 文学部 教授
（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 少子・家庭政策研究所 所長

プロフィール

■ 主な役職

甲南大学 文学部 教授
（財）ひょうご震災記念２１世紀研究機構
　少子・家庭政策研究所 所長
兵庫県青少年愛護審議会 審議委員
兵庫県男女共同参画審議会 審議委員

■ 主な著書

1977『現代家族の論理』　日本評論社
1985『離婚の社会学』　日本評論社
1992『家族福祉の視点』（編著）　ミネルヴァ書房
1996『いま家族に何が起こっているのか』（編著）　ミネルヴァ書房
1999『家族社会学入門』（編著）　文化書房博文社
2001『家族社会学の分析視角』（編著）　ミネルヴァ書房
2003『家族の「遊び力」』　ミネルヴァ書房
2007『現代家族のパラダイム革新』　東京大学出版会（近刊）
その他、翻訳書など多数

○山口　徹　今朝は、21世紀の夫婦関係と親子関係ということで、甲南大学文学部教授の野々山久也先生にお話をいただきます。

先生のプロフィールは、プログラムに書いてございますので、時間の関係で割愛させていただきますが、先生のご専門は「家族社会学」と申しまして、昨日ご一緒して、いろんなお話をしておりましたけど、なかなか家族社会学専門の学者さんは、そんなにいらっしゃらないんです。

先生は、一昨年の夏から去年の秋まで、イギリスのキール大学に留学をされておりまして、去年の秋、帰ってこられたところでございます。それでは、野々山先生、よろしくお願いいたします。

※講義中に説明のある図表については本文後にまとめて掲載しています。

○野々山先生　おはようございます。

「21世紀の夫婦関係と親子関係」ですが、若い人が多いので、親子関係は外しまして、夫婦関係だけでお話をしようというふうに、夕べ寝ているときに考え直しました。

近い将来、皆さんは結婚して夫婦生活を始めるだろうと思いますが、そのときに何を考えるかということの話を中心にします。もちろん、家族といっても夫婦だけで家族をやっているわけじゃないから、親子関係の話も出てこざるを得ません。でも、少し外して話していきたいと思っています。

私の専門は、社会学なのですが、社会学という言葉を聞いても、何をやっているのか分からない人が多いかもしれません。大学で社会学の授業を聴いたことのある人なら分かるとは思いますが、しかし経済学や法律学ですと、それが何かは聞いただけでもすぐ分かるんですね。法

律を専門にしているんだと言えば、法律の研究をしている人、経済を専門にやっていると言っても同じく分かるんですよ。でも社会学を研究しているって言っても、何をやっているの、という感じですよね。

というのは、高等学校までで学ぶ社会科の授業は、例えば、タマネギの値段が幾らだとか、時計がどこで生産されるかとか、三権分立がどうだとか、そういう話が多いんですよね。そうすると、三権分立は政治学や法律学の専門の方に入っていっちゃうんですよ。タマネギの値段は経済学などの分野に入っていってしまう。つまり社会科では、社会学などまったく学んではいないんですね。民俗学で有名な柳田國男が戦後、小・中学校に社会科という科目を設置することになったときに、反対したんだそうです。そんなことを教えるよりも世間学というのを教えろというふうに、言われたそうです。社会学というのは、そういった意味では、その世間学に近いかなという感じもするんです。世間学というのは小・中・高にはありません。世間学というと、また違ったイメージになってしまうんですけど、とにかく人間と人間の関係ですね。人間は１人で生きているわけではない。人間と人間は、２人だけでもないんですけど、３人も４人もいるんですが、そこに間がありますよね、人と人の間です。その人と人の関係ですね。ジンカン関係、つまりニンゲン関係ですね。この関係が、いま２人だけですと関係と言っていますけれど、３人いる場合、例えば、お父さん、お母さん、子どもというふうにいますと、関係が三つできますよね。全体を見ますと、それはもはや関係ではなくて、集団というふうになりますよね。

一つの集団になってくると、今度は、そこに構造が見えてくるんですよ。家族の構造という言葉が出てくるんですよね。そんなふうに見ていくと、自動車の運転のときに理論と構造とが試験にあるんですが、そういう構造という形で見てくるんですね。ちょっとずつ学問的になってくるんです。人間と人間の関係を構造あるいはメカニズムという言葉で見るのが社会学の見方なんですね。それも時代によってすごく変わってきます。

今、言いました関係のつぎは、集団、集団のつぎは、さらにそれが大きくなってくると組織になります。皆さんは、ここではまだ集団かもしれませんね。まだ、完璧に全員が一緒になっているとは思えないかもしれない。でも、組織の中にある集団ですよね。会社なんかでも、大きな会社は、組織になっていて社長からピラミッド型に部下たちがずっといますが、ある職場では集団ができています。その中でも、新入社員が入ってきて、社員同士で急に恋愛しはじめたら、恋愛関係という人間関係が始まります。関係、集団、そして組織って、こんな感じなんですよ。だけど、その集団もほかの集団と、例えば、会社同士が何かやっているとか、組織が何かやっているとなると、ネットワークとかいう概念になります。

いま、概念という言葉を使ったんですが、学問というのは、基本的には概念構築の作業なんです。そして、概念と概念とを結びつけていくんですね。概念と概念の結びつきが結局、理論なんです。こんな話をしているというのは、家族の話に直接に、すぱっと入っていきたいんですけど、最初にちょっと学問論的な話をしておいた方がいいかなと思ったからです。

こう触ってみますと、温かいです、私のほっぺた。こういうふうに触っていくと、温かいとか冷たいとか感じますが、これを何と言いますか。概念としてです。小学校３年生ぐらいに学ぶ概念です。現象を押さえて、それの共通性で言葉をつくっていく、これを概念化と言います。リーダーになる人は、部下よりも概念化ができる人ということです。人間関係をうまくやれる人だけでは、リーダーにはなれません。リーダーになれる人は、概念化ができる人です。

「婦長さん、婦長さん、大変なんです。ウチの病棟で○○さんがこんな状態なんです」、「ああそう、そんな状態なの。ちょっとメモしとくから」と。今度はこっちの看護師さんが「婦長さん、婦長さん」。婦長さんはリーダーですから、その現象を見て、全体的にまず概念化できるかどうかです。これをこれとくっつけて、こういう現象がいま起こっているといって、概念化するんですね。概念が1個だけでは理論にはならないんですね。

いま言ったように、温かさ、冷たさを集めて、小学校3年生が概念化しています。何という概念ですか。そう「温度」です。温度というのは、非常にレベルの高い概念です。でも、小学校3年生で、もう習うんです。あることの共通性の中に温度という名前、すなわち概念をつけたわけです。分かりますか。そうやって概念化をしていくわけです。これは学問の出発点です。私が今、説明している温度は、物理学の分野であって、社会学の分野ではないですね。

でも、この温度だけでは法則理論にはなりません。もちろん説明はできます、高いとか低いとかという温度については、ね。けれど、理論、学問となると、概念が最低2つ以上要るんです。もっと3つ、4つで、でき上がってきた理論は、すごい理論になっていくんですよね。

2つ目の概念。例えば、このテーブルの大きさ、この部屋の大きさ、私の体の大きさ。概念では「体積」と言います。これも、小学校3年生か4年生ぐらいに学ぶんですね。算数で出てくるんです。体積と温度とは、まったく関係のない概念ですよね。専門的言葉、専門的用語、それを概念と言うんですね。温度も体積もまったく互いに関係のない概念と思っているけれども、「温度が上がれば上がるほど体積は増す」。つまり2つの概念が結びついてくるわけです。英語で言うと、the more ～, the better ～. 習ったことあるでしょう。何々すればするほど何々となるという。それは、理論なんです。理論は、2つ以上の概念の相関関係を説明していくわけです。だから世の中は、こうなって頑張るほどこうなるぞとか、そうなるんだったら、それを幾つか合わせて、じゃあロケット飛ばしたら月に行けるなというようになるわけです。あんな大きなジェット機が何百人の人をさっと乗せて飛べるのは、その概念の構築の中で結びつけていった相関関係の図の中で起こるわけですよ。

これを、社会とか人間関係とか家族などの分野に持ってくるわけです。この研究の仕方が社会学なんですよ。そこに法則性を求めていくわけです。やってみたいと思いませんか。家族なんて、非常に身近なことですからね。だけど、今日は私の話を短い時間、聞いて終わるだけで、家族の理論がある程度「ええ、そうだったんだ」というのが学べると思うんです。

家族といっても、ある人が家族を定義づけるでしょう。定義づけたとしても、本当にそんなん違うやろ、こういうのがあるだろう、ああいうのがあるだろうと、そう簡単に合意がなされないんですね。家族ってみんな体験していますから、私が、授業で「家族は」というと、「先生、うちは違いますから」と、自分の家の例を挙げて意見をいわれたら、もうそれでその授業はつぶれてしまったりするんですね。なかなか難しいですよ。

一つは、時代の要請によって家族が変化していることです。家族が独立変数である場合もあります。家族がもう決められてしまっているという場合もありますけども、何かいろんなほかの影響で変わっていくということがあるんです。日本の家族って、室町時代からあったと思います。アメリカの学者で、家族って普遍的ですと言っている人がいます。時代をとおして普遍的だとか、どこの国にも、どこの社会にも家族があるとかとも言っています。そうかと思うと、家族のない社会があるというふうに論じている人もいますね、存在しない時代もあったと

かね。

プラトンという人が国家論という本を書いていますが、家族を否定して社会をつくる方が愚衆政治にならない、賢人政治になる、哲人政治になるということを言っています。家族を否定している論理です。マルクスなんかも、それにちょっと近いことを言っているんですね。でも資本主義社会では、家族というのは絶対に必要だというふうに言っています。家族が社会の基礎だとかと思っていますね。

鎌倉時代で言いますと、源頼朝ですよね。頼朝の奥さんはだれですか。

○参加者……　北条政子です。

○野々山先生　そうですよね。北条政子ですね。不思議だと思いませんか。私なんか、中学生のとき、手を挙げて、すぐに質問しました。「ウソでしょう」と言って。何で私が疑問に思ったかというと、源頼朝の奥さんだったら源政子ではないのか、という考え方が頭にあったから、何で北条政子や、と。足利義政だって同じですよ。奥さんは日野富子です。室町時代でも、まず今のような家族ではなかったということが分かるんですね。庶民と、それから上層の武士階級の人とは違っていたということもあるでしょうが、しかし上層でも、結婚して子どももつくっていても、名字は変わりませんでした。ただ庶民の多くには、もともと名字がありませんでしたね。

そうすると、今の私たちが思っている家族とは全然、違いますね。別姓性であり別産制でした。絶対、財産を一緒にしません。妻の財産は妻の財産ですよ。死ぬまで北条政子の財産だし、北条政子として生き続けるんですよ。でも息子たちは、源氏を継ぐという格好にはなっていたんですね。

一般に、庶民が家族をつくり出したなというふうに、何となく思えてくるのは、日本で最初に国勢調査らしきものを行なった豊臣秀吉の時代なんですね。豊臣秀吉は、検地・刀狩を大体、京都、大阪、神戸、兵庫、岡山とか、このあたりでやっています。東京と東北地方では、やってないですね。

そこで、年貢を取る取り方が問題になってきます。庄園とか、そういうところに所属している人が、鎌とか鍬を地主から借りて、その地主の土地を耕して、年貢は地主である親方に納めるわけです。親方とは地主のことです。さらにその地主が、将軍というか当時の関白とかに年貢を納めたりしているわけですね。ところが検地・刀狩は、庶民に刀を持たせないというだけじゃなくて、この田んぼは誰が耕しているかということを決めていきました。要するに、税金がどれぐらい取れるかということです。当時は、税金と言わずに、年貢ですよね。年貢は上が地主から取っていたわけです。しかしそうじゃなくて、直接に耕している、土地を借りている人から取った方がいいということになってくるわけです。それが検地・刀狩の目的でした。

そうすると、何石お米が取れるかというんで、税金を取って個別に計算させていくんです。そのうちに地主は、家の名子たちに「もううちへ帰ってこなくていいから、そこで仕事をせえ」ということになるんです。そうすると、耕している田畑の近くで、そこで仕事をして年貢を納めるようになるんですが、場合によっては、ちょっと熱心な人ですと、この畑だけじゃなくて、もう少し開墾したら倍くらい取れるなとかいって、熱心に耕していくわけです。

そのうちに、余裕ができ蓄えができるようになれば、そのお金で町に行って、クワとかカマを自分で買ってきたりするんですよ。そうしてそこに住んで、自分たちで生活するようになると、何か庄屋さんに紹介してもらった女の人と結婚してとかいって、父ちゃん、母ちゃん、息子、娘が一緒に住んで、今のような家族みたいな格好になってくるんですね。

そういう意味では、室町が終わったあたりぐらいから、庶民がちょっと家族っぽくなってくるんですよ。そして江戸時代に入ってくると、今度は、宗門改めみたいなことをやるでしょう。つまり、キリスト教を信じているかどうかということの確認をやるわけですよ。それだけじゃなくて、税金のこともあるんですね。人別帳とか、そういうのをつくろうとするんですね。江戸時代は、寺に登録させます。市役所みたいなものはないから、一応、戸籍謄本みたいに寺に登録させるんですね。そうすると、何々宗教であり、どこのお寺に所属して、どういう人だということが分かるわけですね。

お寺に残っている宗門改め帳とかを調べてみると、時代とともに書き方が徐々に変わっていくんですね。最初のうちは、中心の家長におじいちゃん、おばあちゃんの名前が書いてあって、あとごちゃごちゃ書いてあって、だれが順番かわからなくなっているような書き方をしているのが、そのうちに夫婦が最初になって、長男、次男、長女がこう名前が書かれてきて、じいさん、ばあさんが後ろになってくるんですよ。つまり徐々に徐々に、夫婦中心の家族みたいに書くようになってくるんですね。地域によっても違いますけども、そんなふうに非常に多様なんですね。

私は、明治政府を開いた人たちは賢い人が多かったなと思うんですね。日本をつくって、今日の私たちのような国にしてくれたのは、明治の人たちが非常によくやってくれたと思っているんですね。もちろん、そのあと第２次世界大戦とか、いろんなことを起こしましたけど、それは大いに反省して、子孫として私たちの背中に背負う必要があると思うんです。けれど頑張って、ここまで来られた。世界でも、もうトップクラスの国になっていますよね。

明治政府は、日本の家族をどうするかという議論をやるわけです。江戸時代の武士階級は、大体全人口の10％ぐらいしかいなかったんですが、その10％の人たちがやっていたやり方を国民にさせることにしました。それが長子単独相続制なんです。つまり子どもが何人いても、長男に後を継がせるというやり方です。そして、明治４年以降になりますと、全員に名字を与え、名字を継がせることにしました。これは武士の世界ですよね。

そういう形を「家」制度と言うんですけれど、それは普通、直系制、直系制の家族という言葉で呼ばれているものです。社会学では、こんなふうに、直系制家族を「家」制度と言います。

第２次世界大戦終了まで、直系制家族の制度では、親の財産の後を継げるのは長男だけだったんです。女の子は全然、財産なんか継げませんでした。今は、均等分割相続制になっていますから、みんなに財産相続権があるんです。だけど女の子の場合は、お嫁に行っちゃってそこの家に財産があるから、「お父さんの財産は兄ちゃんが継いだらいいよ、その代り自分は書類に判こを押して、財産相続権を放棄する」というようなことをやっている人が多いですね。放棄できるというのは、もらう権利があるということですよね。だから、おじいさん（老いた父親）が死にそうになったら、急に世話しに行って、もらう顔をしとった方がいいということにもなっているんですね。

ところが、昔は娘とか、それから次男や三男は、最初から権限がなかったんです。それを長子単独相続制と言います。当時は、国民の70％以上が農業ですから、農業をやっていた次男や三男は土地がもらえないから小作になるんです。もちろん、もう次男にもちょっとぐらい田んぼを分けてやるわとか言う人もいてもいいんですよ。法律では、もらえないんだけれども、そのおじいさん（老親）が心優しくて、「兄貴だけじゃなくておまえにもやる」とか言ってくれたら、もらうことはできましたね。でも一般的に、おじいさん（老親）が死んでしまったら、だれに財産権があるかというと、長男しかなか

ったわけですよ。遺言も残さずに死ねば、自動的にそうなるわけです。次男は、くれと言ったって、もらえない。兄貴がいい人だったら、ちょっとくらい弟にも分けてやりました。

そういうのを直系制家族といいます。特に後半の部分でお話ししたいことをちょっと先取りして言いますと、家族というと、実は家族という言葉を使っているだけでも、いろんな側面があるんですね。私の学生のころは、大学の先生が、「野々山君、家族を研究するんだったら、二つの側面からアプローチしなさい」とか言われて、「どういうことですか」と聞くと、まず「家族というのは制度なんだよ」と。

家族について書いている日本の最初の法律は、明治民法です。明治民法は、すったもんだともめて、明治31年にできました。長子単独相続制、家を守るということですね。家というのは、家業、農業ですよね。それから、家産、財産です。そして家名、名字です。そういうものなどを長男が継ぐということです。

では、江戸時代の終わりごろから明治の初めは、どうだったのかというと、バラバラなんですよ。武士は長子単独制、直系制だったんですが、武士以外の人たちは、例えば、東北地方は姉家督制で、長女が財産を継いでいたんです。九州では末子相続といって、最後の末子が相続するとか、日本全体でバラバラだったんですね、一般庶民は決まっていなかったんです。それを武士のやり方で全国を一つに統一したんです。それが明治31年にできた明治民法という法律で、ずっと第２次世界大戦まで続いて、その後いまの私たちが使っている新しい現民法に変わったんです。これは均等分割相続制です。均等分割制というのは、田んぼがあったら分けるということです。

日本の場合、直系制という武士のやり方を明治から始めたんですけど、これがそれなりによかったと、私は思っているんです。よかったか悪かったかは別にして、それがいろんなことを起こしたんです。つまり次男や三男の存在にすごく意味があると思うんです。長男は財産をもらえるけれども、次男や三男はどうだったか。立身出世とか、そういう言葉もほとんど次男や三男に使っている言葉なんです。

ところが、中国とかインドを見てみると、今になってようやく近代化をやっています。日本は1800年代の中ごろから、急速に近代化したんです。中国やインドは2000年ごろからやっと近代化をやり出しているわけですよ。100年とか遅れているわけですね。なぜかというと、向こうはもっとずっと昔から均分相続制なんですよ。つまり、日本のような次男や三男の存在はないんです。みんな長男と同じように財産を分割します。これ田分けと言ってます。田んぼを分けちゃうわけですからね。

イギリスとかドイツでも、かなり産業化が発達したところは、案外、直系制の家族があったところなんです。これは言ったもん勝ちで、もう少し調べなきゃいかんことですけどね（つまりイギリスでは、産業化以前から核家族だったと言っている学者もいます）。日本は案外、明治政府が早いこと直系制を位置づけたということが近代化に関係するなという感じはするんです。どうして1800年代の中ごろに、日本だけが資本主義社会になれて近代化できたのかというのは、ものすごく大きな、場合によってはノーベル賞ものぐらいの研究のテーマなんです。というのは、ドイツの有名な社会学者マックス・ウェーバーは、あの時代どうしてヨーロッパに近代資本主義が起こったのかという研究をやっているんです。それで彼は、キリスト教があったからだと言っているんです。キリスト教でも、カトリックがある間は発展しなかったけれども、プロテスタントが発達したおかげで、プロテスタントが資本主義社会をつくり出したという説を出しているんです。

そうすると、ライシャワーさんとかいろんな人が日本に来て研究するんですが、結局、日本

はキリスト教がないのにどうして近代化できちゃったのか、という研究になるんです。黒船は日本だけじゃないですよ。中国にも行っているし、インドにも行っている。インドなんか、もっと早くから黒船は行っているんですよ。日本は黒船が四艘来ただけで変わっていっちゃうんです。「たった4杯で、夜も眠れず」です。一方、中国はアヘン戦争を起こして、ガタガタになっていっちゃうんです。でも日本は、一気にそこで近代化してくるんですよ。

それは何か。ヨーロッパの人は、キリスト教みたいなものが日本にあったんじゃないのか、と探しにくるわけです、第2のマックス・ウェーバーになりたいから。だけど、キリスト教なんかないですよ。宗教って、仏教や儒教があったが、仏教や儒教だったら中国だってあるでしょう。じゃあ何なのかということなんです。そこに日本の「家」制度がすごく大きく貢献したというのが私の説ですけどね。

話を元に戻しまして、私の先生は、家族を見る場合は、二つの側面があるよ、と。その一つは制度です。それは、法律に書いてある制度じゃありません。例えば、今まではその辺にごみを捨てていたのが、火曜日と金曜日に市役所からごみを集めに来るようになった。ちゃんと制度になったということです。だから、家族も一つの制度としてあるという意味です。

もう一つは何か。父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、姉ちゃんが一緒に住んでいる。これは、制度というよりも、Aさんとこの家族、Bさんとこの家族のことであって、これは制度というよりも集団です。家族というのは「制度という側面」と「集団という側面」があるんです。私の先生は、この2つの側面を調べろといっていたのです。私は、戦前の家族は、制度という側面をしっかり見れば、大体、分析できるなと思って見ています。ところが、戦後、現行民法に変わった。これは憲法第24条に、結婚のことについて書いていますね。夫婦両性、平等。第25条は、最低生活の権利のことを書いていますね。その第24条なんですが、両性の合意に基づく結婚となっている。制度はそうなんだけど、それを実践しているのが家族です。だから戦後の家族は、集団という側面が非常に重要になってきているということになります。

日本は、1985年くらいにヨーロッパに追いついて、今はもうヨーロッパの国々を越すぐらいになっているんです。GNPだって、GDPとも言っていますが、もうトップクラスですし、離婚率なんかでも、もうフランスを越えています。何でもかんでもトップクラスになっちゃって、恥ずかしい話もあるんですけど、いい話もあります。

その1985年ぐらいから、お年寄りの私の先生がおっしゃっていたような、どうも家族が、制度と集団という2つの側面だけでは見えなくなってきています。これが、実は今日、後半に話をしようとしていることなんです。じゃあ3番目の側面は、何なのか。先日、山田昌弘さんが本を送ってくれました。彼が東大の大学院生のころから知っているんですけど、パラサイト・シングルという言葉をつくった社会学者です。パラサイト・シングルってよく言うでしょう、その言葉をつくって、軽井沢にパラサイト御殿を建てたんです。あんな本を出したぐらいで家が建つのかと思って、びっくりしました。今度、その贈ってくれた本のタイトルは『迷走する家族』です。読んでみたら、家族が迷走しているんじゃなくて、著者の本人が迷走しているんですね。つまり3番目の側面が見えないものだから、制度じゃない、集団じゃない、いや制度でもあり、集団でもある。もう一つが見えないものだから、迷走している家族に見えちゃうんですよ。はっきり言って、その学者が迷走しているだけなんですね。

では、3番目は何なのか。いやそれはネットワークだとか言う人もおったりして、ネットワークがはやっているんですね。それから最近、

急に外国の本で、ダイバーシティという言葉がはやっていますよ。ダイバーシティって「多様性」という意味です。

私は、多様性という言葉を、20年ぐらい前に最初に使って、学会で発表して「こてんぱん」にやられたんです。今、新聞を見ても、日本の家族は多様化してきていると言わない人はいないですね。当時は、核家族化と言っていたんです。それは家族がどんどん画一化していくということです。ところが、私は「多様化してきた。核家族化時代は終わった。多様化が始まっている」と、そのころから言い出しているわけです。それで、「画一化し始めているのに、多様化しているとは何事や」と言われていたんですよ。だけど、私は「多様化」と、ずっと突っ張ってきました。今は逆です。多様化していると、新聞にもみんなが書き始めていますよ。私が言っているとおりじゃないですか。

制度とか集団というのは、どっちかというと、社会など、自分たちよりちょっと力のあるもの、上のものですよね。それがむしろ、ぐっと自分の方に家族が来ているというか。それは、個人の側というか、個人という視点です。個人という視点から家族をどのように見るかということです。制度というと、国の側面ですよ。集団というと、子どもを学校に行かせたり、病院に行かせたり、お父さんが会社に行くとか、家族が集団として何かやっている、そういうイメージですよね。ところが、家族がもっと個人だというふうになってくると、個人が生きていく、これライフコースと言うんですけど、その生きていくのと、別のこっちの人がまた生きていくのとが、一緒になってシンクロナイズド・スイミングのように同調しているんです。シンクロナイゼーションって、同調という意味ですよ。つまり、家族というのは、制度としてでもなく集団として見るんでもない、個人と個人のライフコースの同調の場、そこで子どもを産み育てるという視点で見ることがすごく重要になってきているということです。

家族には、基本的には二つの側面があるんですけども、制度としての家族という側面と、集団としての家族という側面と、さらにもう一つ、その人が生きていこうとする「ライフスタイルとしての家族」という側面が出てきていると、私は思います。そこで3つ目の側面としての私の言葉、すなわち概念は「家族ライフスタイル」という側面です。

ここまで話して、ちょっと考えてみて見てください。戦前の家族は直系制家族です。例えば、お父さん、お母さんがいて、子どもが3人いて、お兄ちゃん、弟、娘が1人ずついます。そして、年とってくると、このお兄ちゃんがお嫁さんをもらうわけですね。このお嫁さんは外から入ってくるわけです。そうすると、ここに子どもがまた2人以上できます。そうすると、そのうちの長男がこのお父さんの「家」を継いでいくわけです。次男は、結局は家を出るんですね、お父さん、お母さんがいて長男は跡を取っているから、次男は分家しちゃうわけですね。分家して、お嫁さんもらって、1軒の家を構えて、息子ができて娘もできたとして。娘はお嫁さんに行ってしまう。長男はお嫁さんをもらって、また跡を継ぎます。子どもが2人以上できます。そうすると、長男がまたお嫁さんをもらって、次男は分家します。そして、この家の次男は結婚して、子どもをつくっていきます。娘はどこかに嫁いで、名字は代わります。次男は、分家しても名字は変わりません。

普通、名字の同じ家を、これを本家と分家と言います。分家がさらに分家を出せば、それを孫分家と言います。この家と家の連合、家連合。家連合体のことを「同族」と言います。日本は、ほんのこの間まで同族があったんです。岡山の方では何と言っていますか。年配の方はご存じかもしれません。カブ、カブウチという言葉をご存じの方。手を挙げてください。ありがとうございます。カブという言葉は日本語から、も

うほとんど消えていますよね。死語になります。渡辺淳一という北海道か青森の出身の作家、お医者さんですけど、あの人の小説なんか読んでいると、マキ、マケってしょっちゅう出てきますよ。どうして、あんたあそこの隣の病室の患者さんと仲よくしているのと言ったら、あそこの人はうちのマケだから、と。マケと言ったり、マキとか言っているんですね。

渡辺淳一さんはマキ、マケに「巻」という字を書いているんですよ。これ当て字だと思うんですね。カブだったら、多分、「株」ではないかと思うんですけど、これかどうか分かりませんから、カタカナで書いています。大体、カブ、カブウチは関西方面の同族です。講組結合と言うんですね。東北地方では同族結合と言いますが、講組結合はユイ的なつながりです。つまり、本家と分家の間に上下の余り差がないんですよ。ところが、マキ、マケは、かなり地主、小作みたいな関係なんですね。

神戸の人で、うちはマキという言葉を使っているという人がいました。県庁の職員の人です。だから、マキ、マケから徐々に徐々にカブ、カブウチの形に変わっていったんではないかというのが、1つの仮説です。それは明治、大正の時代ですね。戦後は、憲法や民法が改正されて、夫婦制家族になりますので、「家」制度はなくなり、徐々に同族も見られなくなっていきました。

そういうふうにカブ、カブウチなど、もう言葉自体も分からなくなっているんですね。昨日も、山口さんが、風呂を「くべる」とか言っていましたけど、若い皆さんにはもう分からないでしょうね、「くべる」という言葉は。何かを「比べる」のかと思ってしまうんではないでしょうか。このあいだ大学院の学生を兵庫県の母と子の島(改称して「いえしま自然体験センター」に)へ連れていったんですけど、「バーベキューをやった後の火の始末を十能で片づけなさい」と書いてあったんです。皆が「十能って何ですか」と。知らないんですね。「そこに置いてあるだろう。」「このスコップですか。」「スコップじゃないだろう、これを十能と言うんだ。」十の能力があったという意味なんでしょうかね。国語事典を引いてください。そういうふうに、どんどん昔の使わない言葉は消えていってしまうんです。カブ、カブウチも、もう消えていく言葉なんですね。それは悲しいですね。

最近、エコマネーなんて言っていますけど、かつては「手間替え」と言って、例えば、子育てとかを交代交代でやる組織が地域の中でできていました。本家、分家じゃなく隣り近所でそういう組織をつくって、カブ、カブウチみたいな組織をつくって、お互いに助け合うというようなこともやっていたんです。

最近、エコマネーってことをやり出したんですね。つまり、地域通貨をつくるんです。この地域だけに使える通貨をつくるんです。もともとは北海道の栗山町というところでクリンというのができて、今は三田はやってないかな、宝塚はやっていますよね。それで、ちょっと何か若い人に、家の掃除とか、天井の手が届かない電気が消えているから直してもらうというときには、その地域だけで通用する通貨を渡すんですよ。そうすると、若いうちはいっぱい貯まります。そして自分が結婚して子どもが生まれたら、おばあちゃんに見てもらうときに、その通貨を渡す。だから、使えば使うほど価値があるんですよ。貯金すれば貯金するほど価値が高くなるようなお金はナンセンスだという考え方です。お金は使えば使うほど価値があるんだけども、今、日本人はどっちかというと貯金しといた方がいいみたいに思ってるでしょう。でも、エコマネーは貯金なんかしていたら死んでしまう通貨で、どんどん使えば価値がどんどん出てくるという、地域だけで通用する通貨なんです。法律違反かどうかと言われていますけど、法律違反じゃないみたいですから、やればいいんですよね。子育てに関しても地域で、かつてはそ

ういうことをやっていたりしていたんです。

話を元に戻しまして、そういうのはなぜ出来たのかと言うと、第１次産業中心、低生産性、土地所有の格差、「家」制度というようなことなんです、その理由はね。いま言ったように、結局、日本の家族が大きく本家、分家の家連合的な家族から、新しい家族に変わっていったからなんです。

なぜ日本が近代化したのかというときに、一番大きな要素は、次男や三男たちが量的に産出されたというよりも、その労働力として重要な質的なものを内面化させた構造というかメカニズムというものがそこにあったんですね。質的に内面化させたもので、「家」制度とか同族というか、本家、分家のこういうつき合いで、非常に重要なのは、その組織化の要素、組織化変数といいますが、その下に法事などの「宗教儀礼」とか、盆暮れなどに実行される「系譜認知」とか、「協働慣行」などがありました。

協働慣行についてですが、つまり皆で一緒に協力して働くということですが、これは田んぼをするときは一時的に力が要るんですよ。日本は稲作をやってきたので、水をどういうふうにして使うかというと、自分とこだけ田んぼに引いてしまって、下の田んぼの人の方に水が行かないといけないから、上手の田んぼでいっぱいにしては下手に流していました。水って一つのものですから、一つのものをみんなで使うという考え方です。これは、日本人が米をつくる中で学んだと、私は思うんです。

これは家族の話じゃないんだけど、非常に重要だと思う言葉が、「もやい」という言葉です。「もやい文化」とよく言っているんです、平仮名でいいですよ。もやいって、漢字が日本に入る前の言葉だと思うんですよ。大和民族が使っていた言葉、もやい文化と言うんです。

私の母親は、そんなに豊かじゃなかったこともあって、あのころはみんな貧しかったですけど、例えば、おもちゃを一つ買ってきて、私と弟に「もやいこで」と言って渡すんですね。それは、一つしかないものを２人で共同で使いなさいという意味です。

もやいの文化というのは、水だってそうだと思うんです。水を入れ物に分けて入れて、ちょん切れば幾つにも見えるけど、実は一つですよ。さらに言えば、地球だって一つですよね。地域の中に一つしかないものは、いっぱいあるんですよ。そういうものは、並んでとか、順番でとか、みんなでとか、そうして使い合うんですね。それは、子育てなんかもそういうことだと思うんですね。抽象的な概念も一つのものに持っていくことができると思うんですが、そういう文化をどういうふうにつくり上げていくか、と。日本はかつてあったんですね、そういうものが田植えなんかで。

こっちの田んぼに田植えをした。だけど、あっち側はしてないということは起きないんです。なぜかというと、お米は、花が咲いて花粉が散ってお米が実るんです。ほうっておいて実るわけじゃないんです。そうすると、同じ時期に田植えが行われていないと花が一緒に咲かないわけで、それはいかんわけです。ここの１行はぱっと花が咲いてるけど、２行目はまだこんなに育ってないとか。サボりのおっちゃんだったら、田植えして、疲れた、もう明日、明後日２行目の田植えをしよう。それはいけないわけです。

ということは、みんな何反とか何町歩とか持っていると、自分とこの力だけで田んぼできないので、助けてもらわなきゃいかんわけです。みんなでわっと一緒になってやってしまうんです。一時的に力が要るわけです。そうすると、こういう協働組織がどうしても要るわけですよ。協働組織でやるから、みんなでできるわけですね。それが、大体、日本の農業のやり方だったと思うんです。お互いがみんな栄えなければ、自分も栄えないわけです。あいつは蹴落としとけ、おれだけ上がりゃいいというような

考え方は、本当に最近の考え方だと思うんですよ。あらゆるところで個人主義というか競争主義が発達したからね。個人主義が発達したから、利己主義の社会になったんだと、私の知っている某生活協同組合の組合長さんは言うんですけど、それは違うんです。個人主義がまだ未発達なんですよ。もう一つ言えば、競争主義が利己主義を生み出すんですよ。

話しは戻りますが、財産がもらえないから、次男や三男の人たちは、結局、企業に同族組織みたいなものを求めていったんです。企業というのは、生産性を上げるためには、土地、資本、労働、組織化が要素として要るんですね。土地というのは、材料も入れて、農業だったら土地ですけど、それを入れてやるんです。土地を出した人、つまり材料を出した人は地代が手に入ります。労働力を出した人は賃金が入ります。そして、資本を出した人は利子が入ります。それを上手に組織化して生産性を上げていく。4番目ですね。これが何かというと、組織化を提供した対価は「利潤」なんですね。この利潤が再投資されていくわけです。

そうすると、日本の場合、経営者に組織力のある人もいますけれども、次男や三男がすごい組織化力に貢献しているんです。その組織化力に、同族組織という組織化変数みたいなものを中に入れている、つまり身につけている、あるいは内面化している人たちは、そういうことが何も言わなくてもできるんですよ。

次男や三男の人たちは「欲しがりません、勝つまでは」、それは戦中のレトリックですけど、どんどん投資します。それでどんどん近代化していくんです。その投資のプロセスは、やっぱり直系制家族のメカニズムが貢献したと言わざるを得ないと、私は思っているんですね。

戦後になりますと、家族の中心になっているのは、権力とか権威とかという言葉で言っているんですが、それは核家族であり、個人という次元に行っています。戦後になった今の家族のことを「夫婦制家族」というんですが、本当は、夫婦中心制ということになります。直系家族制に基づいてやっているのは直系制家族です。直系制家族は名字がつながっていきますから、直系制家族は、父系制ですね。だから、結婚してもみんな北条政子ではなく源政子になるんです。

いま結婚して夫の側の姓を取る人は約98%ですね。今の日本の婚姻届の用紙は、結婚したらどちらの名字にするか、絶対に選んで決めなければいかんのです。選ぶというイメージじゃないですね。やっぱり、そこに制度がある。この「制」という意味は、規範という意味があるんですね。それをしなかったら、後ろ指を指されるとか、白い目で見られる。それが、夫婦制家族になると、今度は夫婦制家族の規範になってくるんですね。ここのところは、先ほども言いましたように、基本的には制度が重視されていた、と。

ところが、こちらへ来ると夫婦家族制です。具体的には直系家族制が直系制家族、つまり「家」制度でした。家を守っていたということなんです。これが戦後は、夫婦制家族という家族をやることになります。今日の民法は夫婦家族制です。これは、どちらかというと、私は集団を重視しているというふうに言っているんですね。英語では、これはコンジュガル・ファミリーと言うんですが、コンジュガル・ファミリーは夫婦中心制という意味だといってもいいですね。

『新しい家族社会学』という教科書があるんですが、その先生は紫綬褒章をもらって、この間、また新しい本を書いて、私のところに「家族社会学のパラダイム転換なんて、野々山は言っているが、早くパラダイム転換を明らかにせよ」とか言って挑戦してきているんです。本も送ってきました。『発展する家族社会学』という本なんですけど、その本では、社会規範がまずあるんですよ。そしてその規範に基づいて夫

婦関係の役割結晶化が起こるんですね。社会規範というのは何かというと、男は何をするか、女は何をするかということです。社会的規範というのは、役割の規範なんですけども、結婚したら夫が働きに行って、奥さんが家で飯つくって、子育てやるというパターンです。もちろん状況によって、お母ちゃんが右手をけがして包丁を持てないというときは、夫がやるという状況も影響しますけど、だけど基本的には社会規範が非常に重要です。そして家族の集団が、夫婦関係が、役割の関係が、それぞれ結晶化するというのが、この図表1ですね。

つまり、集団を重視してこの集団が生きていこうとすると、戦後の民法はそうなっているんですよ。集団が夫婦中心で生きていこうとすると、結婚は自由恋愛でできます。恋愛結婚は、いますべての結婚の80%ですよ。そして名前は、まだ98%は夫の名字にしている。結婚して名字が変わるって、うれしいですか。変身願望がある人がいるんですね。

こうして同族の組織の中で埋没していた集団が荒波に出ていくわけです。荒波に集団で生きていこうと思うと、まとまらざるを得ないんですよ。そうすると最も集団がうまく適応するためには、分業化することなんですね。そのときに男と女で分業化する方がいい、「あんた働きに行って」ということになるんですよ。「私は、家事、育児をやるから」と。だけど、本当はそう簡単にはいかなくて、高度経済成長期に、やっと専業主婦になれたわといって、マイホーム主義の家族になっていくんです。日本で男が外で働き、女は家事・育児という考え方が完全に一般の家族に定着したのは、高度経済成長期なのです。もっと大昔からあったみたいに思っている人がいますけど、そうじゃないんですね。その時代は、制度じゃなくて、集団というメカニズムの中で夫婦制家族ができていったということです。

その夫婦制家族を教科書にして書いている本は、図表1のようになるわけです。私の出している図は、図表2なんですけど、私は、規範ではなくて「生活選好」というのを、まず最初に持っていっています。そして、一番右側に、でき上がるのは「家族ライフスタイル」というふうにしているんです。

この家族ライフスタイルというのは、しょっちゅう変化していくものです。そして生活選好というのは、個人が持っています。例えば、家事・育児・子育てをやりたいなら、男の人がやったっていいわけですよ。そこは、自分たちの生活目標、それから実際に、その人たちにある生活機会のバランスが問題になります。だから、社会規範なんて、真ん中のちょっと小さい字になっちゃっています。そして駆け引きしたり交渉しながら、「21世紀の家族」は、自分たちで「合意形成していく家族」になっていきます。これからの家族は、そうなっていくという図を、私は書いているんです。だから、このつぎは、集団じゃなくてライフスタイルというのが非常に重視されるということなんです。家族集団というのは、家族という文字がつくんです。だから、これも単にライフスタイルではなくて「家族ライフスタイル」ということになるんですね。

ちょっと分かりにくいかもしれませんが、個人の次元で、自分はこんな家族をやりたいという家族ライフスタイルと言ってもいいですね。その家族ライフスタイルと、家族がつくる家族ライフスタイルがあるということになりますね。個人の次元と集団の次元ということになりますね。そういうのは、もうしょっちゅう変わっていくということです。子どもが大きくなるから変わるし、ライフステージによって変わっていくということもあります。新しい電化製品の登場で変化していくかもしれません。けれども、それだけじゃなくて、結婚しても一生結婚したと思ってしまっては大間違いですと、私は、思っているんです。もちろん婚姻届を出したら、その日から夫と妻になります。離婚も、日本の

場合は、世界一離婚天国で、紙切れ１枚出せばその日から離婚できるんです。よその国ではこんなに簡単ではないですよ。出してから、猶予期間３か月とかいう国が多いです。それはいいとして、婚姻届を出したら夫婦ですけど、一生、夫婦だと思っているのは大間違いで、私は３年で契約更新しなきゃだめだと思っているんですよ。つまり、３年時効説ですよね。３年たったら、夫婦であることが消えちゃって、もう１回再契約をしなきゃいけないという考え方です。家族のライフスタイルも、１回つくったらもう「おまえ、ご飯つくれよ」とか言っていてはいけない。契約し直しましょうで、行かなければいけない。それもしょっちゅうです。

「おまえ百まで、わしゃ九十九まで、ともに白髪の生えるまで」と、なっているような人たちを調べてみたんです。何人かインタビューしたんですけど、２人は夫婦関係を何回もやり直しているんですよ。やり直している方だけがそのように言ってます。もしやり直したことが一度もなくて、俺はもう80歳だ、90歳だと言っている人もいますね。でも、もう完全に家庭内離婚している夫婦ではないでしょうか。いや、そうならずに、こんなにうまくいっていると言うんだったら、よく考えてみると、あそこで再契約したな、あそこでもやったなというのが思い浮かぶと思うんです。やっぱり、再契約を互いにおやりになっているんですよ。

特に定年後なんかは、再契約は絶対にし直すべきです。そのままうまくいくなんて思ったら大間違いですよ。今までは主婦して、奥さんやってご飯もつくってきたけど、あんた60歳定年になって、私だって、もう定年よとなったとき、もう１回、話し合わなきゃ。「よろしく頼む。」「あなたとでなければ、私はやっていかないわ」と、再契約をやってほしいです。「そういえば、もうすぐ３年目だな。おれ、やっぱりおまえにもう１回、もう３年やってもらいたいと思うんだけど。」「あら、あなた残念ね。私、隣の御主人ともう契約しちゃったのよ」。

つまり、家族ライフスタイルの時代というのは、それで当たり前だというこの規範論みたいなものでは、女はそれやれとか、男はこうだとか、そんな時代じゃないということを言っているんです。

では、どのような家族か、ということですよね。まず最初に、図表３に示してあるんですが、これまでは核家族のイデオロギーであったと言っているんですよ。核家族というのは、もう時代おくれな家族です。もちろん核家族だって選択の一つですから、そういう家族でもいいですよ。おじいちゃん、おばあちゃん同居の３世代同居の家族もいいんですよ。どんな家族でもいいんです。

図表３の性別役割分業のところは、この図ですと、「固定的性別役割分業」ですよ。男は外で働き、女は家事・育児ね。これが図表４のところにいくと、これからの21世紀の家族は、話し合って「共同参画的なパターン」になっていくんですね。

３月７日の朝日新聞の記事で見たんですけど、富士通に勤めている男性が育児休業を取ったんですね。そしたらバレンタインのチョコレートが机の上に山と積まれたというんですね。富士通の会社の女の人たちには、その人が素敵な彼になっちゃたわけです。この人は富士通では取得第１号ですが、どんどん取りましょうという考え方です。私は、県庁なんかでも、何人取っているのとか言っているんですけどね。だけど育児休業をとると、そのあいだは給料が40％しかもらえなくなっちゃうんです。今年の４月から一応５０％にアップの予定になっていますね。女性は給料がもともと低いから、高い夫が４０％になるよりも「私が育児休業を取るわ」と言って奥さんが取ることが多いですが、ご主人が取ったっていいわけですよね。それは男性と女性が同じ給料でないから、そうなっているのであって、同じ仕事をしているんだったら同

じ給料にしなさいよということになりますよね。私はイギリスに行っていたんですけど、夫がひとりでスーパー・マーケットにベビーカー押してやって来るんですね。日本のスーパーでは見たことないですね。まだ日本は、そういう社会じゃないです。今、ヨーロッパでは、ノルウェーが一番トップですね。それからスウェーデンが真似していますけども、パパ・クォータ制になっていますね。育児休業って分かるでしょう。出産休暇じゃないんです。出産休暇の後に育児休業。勤めていたら1年間もらえるわけですね。場合によっては、会社によっては2年、3年というとこも、日本でも出てきていますよ。

ところが、ノルウェーやスウェーデンの例でいきますと、1年間で90何%の保険があるんです。日本は、介護保険があるけど、育児保険はないんです。今、日本で40%出るというのは、これは雇用保険で出ているんですね。雇用保険というのは失業保険です。それで出てるんです。昔はゼロだったのに、騒いで今、給料の40%出るようになった。それが、外国だと、90%以上、出るわけです。もうほとんど100%近いぐらい出るわけです。休んだって、金がもらえるわけです。もちろん、休んでしまえば、ちょっと出世にマイナスになるかもしれませんけれども、そんなことさせないという考え方でやっているんです。

元に戻しまして、ノルウェーの場合は、4か月、男性が取れとなっているんです。これ、法律で決まっているんですよ。女性はその残りの8か月しか取れないわけです。男性分で、クォータというのは4分の1という意味じゃなくて、「割り当て」という意味です。パパ・クォータ、父親クォータ、それを4か月と決めているんですよ。取らなければ、取らないだけじゃなくて、さらに罰金も払わにゃいかんということになっています。だから、男性は父親になったら、みんな絶対取ります。日本は1年間取れるようになっただけで、しかも給付金は40%だって。男も女も一緒になって、自分の子どもだけじゃなくて隣の子どもも育てよう、と。そうでないと国がどうなるかという、もう徹底的な考え方しているんですね。それをパパ・クォータ制と言うんですよ。そういうことをやり出していますね。

私は、厚生労働大臣の柳澤さんって、おかしいと思うんですよ。柳澤さんはアホじゃないですよ。柳澤さんに対して批判している人はアホかと言っているんですよ。

何で柳澤さんのことについて、いま言ったかというと、柳澤さんがどんなことを言ったかというと、ある学生なんかに聞くと、あの人は誤解されているわねとかいって、優しい女子学生もいます。何で誤解されているのと聞くと、本当はあんなこと言いたくはなかったのに、ついぽろっと言っちゃったんですよ。「女性は産む機械だった、本当は子どもをたくさん生んでください、機械の数は決まっているんだから、1台が何個生み出すかによって数がふえるんだから、よろしくお願いします」と言ったんであって、日本のことを考えた人で、厚生労働大臣だって、そのぐらい言うでしょう、と。それを誤解して、わあわあ叫んでいるんです、と。

私の言っているのは、違うんです。批判している人たち、民主党、社民党も、そのほかマスコミもそうですけど、「産む機械という発言は、許せない」というふうに批判しているんですよ。確かに戦前は、女の人は、嫁にいって子どもを生んでくれたらいいという考えでした。戦前には、産まない女は石女（うまずめ）と言って、「嫁して3年、石女は去れ」などと、離縁させちゃうぐらい平気でやっていた時代があったわけです。民法でもそういうことを認めて、ほかの女をつくって、そこで子どもを産ませて、それを後継ぎにさせたっていいと考えていたわけですからね。東北地方では、役牛、乳牛という意味で、「嫁は役乳両用で、角なし牛」などといって、何とでも操作できるものなんて言われていた時

代もありました。機械と思われていた時代があったわけです。だけど、今はそんなこという人はいません。じゃあ、何て言ったらいいの。機械と言ったらいかんのやったら、産む動物と言った方がいいのでしょうか。動物の数は決まってますので、産む動物ですのでよろしくお願いします、と。動物でなかったとしたら、どうするんでしょうか。やっぱり人間でしょう、と。産む人間という、産む人間だから、もう２人か３人ずつ産んでください、と。それで解決ですか。人間じゃなくて、女神とか。産む女神だから、５、６人産んでください、というのですか。

そんなことを議論しているんですよ。民主党や社民党も。共産党はどうか知りませんが、同じようなことを言っているんですね。きっと。「柳澤さんもちょっと言い過ぎだ」と、自民党内だって言っているんだからね。じゃ女性は産む女神だと言えば解決なのでしょうか。違うでしょう。機械と言おうが女神と言おうが、同じく批判している人たちも批判されるべきですよ。

先ほどからパパ・クォータ制を言ってきたんだから、答えはわかりますよね。「女性は」というところで、もう間違いです。「産む機械」までいくまでに、もう間違いです。ある著名な女性作家は、「男は産ませる機械だ」と書いているんですけどね。女は産む機械、男は産ませる機械。もっとしっかり産ませろ、と書いてます。この作家、私は前からちょっと疑問に思っているんですが、何かちょっとおかしいことを時どき言いはるな、と。立派な人ですけど、時どき間違っている。男は産ませる機械だから、もっと産ませろ、と。

違うんですね。私が言っているのは、子どもは女だけで産むんじゃないんです。男も産むんです。男と女で産むんです。男と女で産んで、男と女で育てるんです。女の人たちの数は決まってる。女の人が産む機械という考え方自体が、根本的に日本の少子化問題を解決できない考え方です。男性が一緒になって子どもを産み、一緒になって子どもを育てるという社会こそ、少子化問題が解決していく社会ではないでしょうか。

よその国を見てごらんなさいよ。少子化問題に悩まないというか、解決し始めている国々は、男性がいかに産むかということをやっているかということです。育てるということ、私は、それを産育と言っています。産育能力ですね。産育ということに対して、どれぐらい関わっているかですよ。日本は関わっていません。「家事・育児は、嫁はんだろう。わしは会社で働いているんだ。子どもが生まれたら、ますます残業じゃ」と言って働いているんですよ。子どもが産まれたんだったら、もっと家庭に帰ってくるかと思ったら、ますます残業です。収入が多くならないといかんからね。もう完全にこの集団中心の中での分業構造のメカニズムにはまり込んじゃっているんですよ。この考え方をどう変えていくかです。

私は小学校、中学校で性教育をやった方がいいと、一応は思ってはいます。最近、高校生を対象に調査をやりました。兵庫県の県立高校で調査をやったら、高２女子の38％にセックス経験ありですよ。男の子は28％。バランスとれてないな。とにかくそういう時代です。もっとセックスの問題をしっかり教育してほしいということです。私は、それよりももっと、性教育だけじゃなくて、子どもを産み育てる教育をするべきだと思っています。それは小学校からやるべきです。そこに人権教育とか、男性と女性とは何かとか、お互いに子どもを育てていくこととは、どういうことなのかということを学び合わなきゃだめです。そういう教育は点数だけで教育できるものではないんですよ。実際に自分たちが経験していく産育学習ですね。そういうものが要ると思っています。

そして、お年寄りの人たちも、戦争の話、あそこで焼夷弾が落ちたとか、爆弾が落ちたとか

いう話も大事ですけども、もっと子どもたちに産育について、そういう話もしてごらんなさい。目を輝かして聞きにきますよ。赤ちゃんはどこから生まれるとか、そんな話には、関心が物すごくあるんですから。それを、お年寄りの人がしっかり教えてあげるんですよ。そこでは、確かにその教え方が問題ですね。

それで性別分業ですけど、図表3と図表4を見てください。勢力構造、家父長制の勢力構造。これは名字ですよね。まず、名字は結婚すると、98%が夫の名字にしているでしょう。変わったらうれしいという人もおられますね。でも、産んだ子どもはどっちに行くかというと、現在の規則では全部、夫の名字になっちゃうんですよ。やはり家父長制であって、夫婦対等じゃないんですね。結合構造というところは、さっき言った、生涯、1回結婚したら、もうずっとそのまま行ってしまうものです。選択というのは、離婚したらいいという意味ではなくて、3年ごとに確認し合うということですね。4番目は一心同体。

一心同体について、ちょっと言いますと、「おまえ、さっきからテレビ見て、げらげら笑っているけれども、僕の顔を見ろ。」「どうしたのよ」と。「会社から帰ってきて、僕が静かでこんな顔をしていたら、課長に怒られたとか、すぐ分かるじゃないか。げらげらテレビを見て笑っている場合じゃないだろう。どうしたの、って一言というのが妻じゃないのか。僕らは夫婦だろう。一心同体だろう。こんな顔しているんだぞ」と言ったら、「あら、そうなの。私、今日、会社の課長に褒められて、もう楽しくてしようがないから笑っているのに、私の顔を見て喜んでくれるのは、一心同体じゃないの。どっちのことを言っているの、あんた」と。図表4のように、じつは夫婦は「独立的情緒パターン」ですよ。これで、もういいでしょう、今のとこね。

順番に行きますと、戦後の夫婦制家族というのは、結局、こういう家族ですよ、ということです。つぎは、そういう話ではないんです。私は、甲南大学文学部社会学科で、テーマが家族社会学とか、福祉ですので、ゼミ生も7対3で女子学生が多いんです。それで、女子学生たちに「結婚することになったら、その夫のお父さん、お母さんと一緒に住むということになったとして、君、どう思う」と、ゼミ生に順番に聞いていったんです。

そしたら「絶対、嫌」と、物すごく感情的に「嫌」と言う人がいます。多分、自分の親とか、いろいろ見ていて嫌なんでしょうね。「ああそう。そんなに嫌なの。一応仮定で話しているんだから、感情的に言わずに、嫌ぐらいでいいじゃない」と言ったら、「でも嫌です」と。「君は」とつぎの学生に聞くと、「私も嫌です」。「君は。」「別にいいですけど。」「本当に君は、同居でもいいわけ。」「別にお父さん、お母さんがどんな人かによるけど、まあいいですよ」と、こう順番に聞いていったんですね。そしたら、私のゼミに番長の女子の学生がいるんです。この学生が何か言うと、みんながそちらに「私も賛成」とか言うような感じの学生さんがいるんですよ。ちょっと声の低い和田アキ子みたいな学生です。彼女は「私も賛成ですけど、でも条件があります。」「条件って何なの。」「それは夫が全面的に私の味方であること。結婚したら、夫のお父さんお母さんと一緒に住むんですけど、夫が全面的に私の味方であること。」というと、ほかの学生たちも「私も」「私も」と、さっき賛成した学生たちが、みんなその条件が大事だと言うんですね。

そこで、つぎに男子学生に、「君たち、どう思う。君が結婚することになって、お父さん、お母さんと妻が一緒に住むことになった。会社から帰ってきた。常日ごろ、自分の妻と姑である母親は、いさかっていたことはあったんだけど、でも、今日帰ってみたら、ちょっとびっくりなくらい、もう殺し合っちゃうんじゃないかと思うぐらい、ぐっとにらみ合っている。その

場に出くわした。そのとき、君はどうする。どっちの立場に立つの」と、尋ねてみたんですよ。そしたら「はぁ」と、みんな深刻に考え込んでしまうんですね。「考え込むことはないだろう。君は、どうなの。」「はい。僕は、週刊誌を買いに出かけてしまいます。」「君は。」「僕は、やはり中立の立場を保つように努力します。」

ここでは、答えは簡単ですよね。悩むことなど、ないですよね。私だったら、ここのところは格好いいですよ。「何や、２人ともけんかして。おふくろ、おれはミチコの味方やからな」と。一言、言うべきです。「あんたは、事情も聞かずに何言っているのよ。イチロウ、あんた勝手に来て、すぐミチコの味方って何なのよ。」「うるさい。おれはミチコの味方じゃ。」彼女たち（女子学生たち）の条件は一つだけで、全面的に夫が私の味方であることです。答えは深刻に考えることもないし、ミチコの味方だということを、ここで明確に一言いうだけですよ。「ここの事情も聞かずに、勝手に」と、母親は怒るでしょうが、ここでは聞く必要はありません。

場面を変えます。布団に入ったら、ミチコさんが「あなたがあそこであんなことを言うと思わなかったわ。私、うれしかった。あれ言ってくれるだけで、私、あなたと一生やっていきたいわ。でも後で、お母さんに謝る。実は、私も悪いところあるのよ。あんなとこで突っ張らなくてよかったの。でも、あなたはそれを言ってくれて、私は謝れる。」

「何なのよ、これ。」こっちはおふくろの方ね。「何なのよ、本当にあのイチロウは。本当にもう、事情も聞かずに、帰ってきてすぐ。おれはミチコの味方だ。鼻の下、でれでれ長くしちゃって、何……。大体、あの子、前からああいうふうだからね。」「それにつけても、ミチコがそんなに好きなのか。あんな女、どこにでもいるような女やないか。」そしてゴー、いびきをかいて寝ている人がいます。「そういえば、あんたね、イチロウみたいなこと１回ぐらいでも言ったことあるの、本当にこの亭主はもう。イチロウたちは、あれで夫婦仲よくやっていけるな。私は、この夫だったんだわ。」

答えは、簡単でしょう。新しい時代に入ってきたら、何が大事かということを捉まえていかなければ、いけないんですよ。これは、つまり一緒に住んでいても、世代ごとに夫と妻の団結のあることが、まず家族がうまくいくコツだということです。じいさん、ばあさんは、ますますダメになっちゃうか。それは大丈夫です。イチロウとの間の縁は切れません。親子関係は、夫婦関係のように解消しません。

つぎに、結婚したばかりの子どものいない人たちに、結婚時に悩んだことについて聞いたんですよ。1993年、新婚夫婦の調査です。お金がなくて結婚式挙げられなかったとか、親に反対されたとか、お金がなくてアパートを借りられなかったとか、悩んだことはいろいろありました。その中に、男性の回答にはほとんどなかったんですけど、女性の回答に、名字を変えることというのがあったんですよ。22.3％ほどあったんですね。現在は、名字をかえることが新婚で悩むことになっているんですね。先ほど言ったように、現在でも98％の女性が男性の名字に変えています。ここで大事なのは、個人化という問題もありますけども、主体化というのがあるんですね。主体的選択です。主体性を尊重するという意味です。名字については、親世代だって「私は、もともと田中という名字じゃないのよ」と、お母さんが言っているんですね。お母さんは、結婚して、お父さんが田中だから、田中になったんだ、と。「田中なんか、どっちでもいいの、もともと」と言っている。ひどいもんだな、今は、もうそうなっているんですよ。

それから、1970年くらいの国の調査で、子どもが１人しか生まれない場合、次のうちのどちらがいいですか。１、男の子、２、女の子。どちらか選びなさいです。二つとも選ぶ人が時どきいるんですよね。データとる時、処理に困る

んです。結果は29%が女の子で70%ぐらいが男の子でした。

ところが1993年に、私たちが兵庫県で調査をしましたら、回答者のうち農村部が多かったのとお年寄りが多かったという面もあって、女の子が53.2%ほどで、男の子が41.2%でした。男の子を選んだ人は、年寄り、男性、農村に住んでいる人、こういう感じですね。ところが、同じ年に国がやった同じような調査を見ると、70%ぐらいが女の子で、29%ぐらいが男の子と逆転しているんです。最近のデータもほとんどそうです。つまり、子どもが1人しか生まれなかった場合には、女の子がいいのが70%、男の子がいいのが30%以下です。私たちがその途中でやった兵庫県のデータは、ちょっと女の子の方が多かったんですけど、政府がやっているのを見ると、もう完全に差がありますね。

どうして女の子の方がいいのか。あなた方はどうですか。子どもが1人しか生まれない場合はどっちがいい、と思いますか。いまは現実味がないですかね、まだね。確かに考えてみると、特に女性の人たち、若い人たち、都市に住んでいる人たちは、「女の子」と答えているんだけど、老後になって下の世話をしてもらうとなったら、息子よりも自分の娘の方がいいわけなんですね。

それよりも女性が結婚したら、98%が男の側の名字にしているという事実があるとしたら、女児ばかりであれば、そこの家の名字がなくなるということですよね。名字がなくなるということに対して、「家」制度の維持という考え方が、1990年ごろから今日、21世紀に入って、ほとんど消えてきたなというふうに思うんです。

実は戦後、農業基本法という、農業の継続という意味で跡取りが財産を1人だけで単独相続する場合は、税金を軽くするという法律ができているんです。つまり、農業では「家」制度を守るような法律を作っているんです。農業では、持続していかせるようにしているんです。民法では全然、均等分割相続制だけれど、農業基本法では、単独相続を守る場合は税を安くするとか、いろいろやっているんです。裏側で操作しているんですね。でも今では、それもほとんど消えたなという感じですね。

それから、祖父母と孫についての調査というのがあるんですが、大体、孫の存在が心の安らぎだと言っているのは、男性89.5%、女性91.3%であって、そこでは50歳の後半がおばあちゃんで、60歳の前半がおじいちゃんということですね。そんなに若くておばあちゃんなのと言うけど、昔は40歳台で、もうおばあちゃんだったんですよ。戦前は40歳台で自分の末っ子が左のひざに乗っていて、右のひざに孫が乗るぐらいでやっていたのが、今日では50代になったのです。

そのデータですが、孫育てに関わりたいと思うかどうかというと、「思わない」というおじいちゃん68.3%、おばあちゃん73%ですよ。おばあちゃんの方が関わりたくないんです。自分の生活を楽しみたい、重視する、おじいちゃん46.6%、おばあちゃん56.6%です。これ、今日のデータですよ。そのときにいろいろ調べて議論したんですけど、お婆さんというイメージが嫌なんですね。孫を見るというのは、背中におんぶしているとか、孫を面倒見ているというのがイメージとしてある。つまり、こういうのが全部、役割規範なんですね、そういう役割規範を最近のおばあちゃんは物すごく否定しているんですね。おばあちゃんと呼ばれたくないという人もいるぐらいで、今のおばあちゃんたちの考え方はすごく変わってきているんです。それなのに子育てに何とか参加せよとかいって、政府がいろいろ言っているけど、もっと新しい考え方に切りかえないと、とてもおばあちゃんたちを地域社会での子育て資源として何とかというのは無理ですよ。そりゃ自分の娘の孫とかになったらやりますけども。古い考え方を押しつけていたって、絶対だめです。

つぎの調査事例は、成人期の親子関係の調査であって、おととしやって去年出版したんですけど、老後、夫婦だけで暮らすのをどう思いますか、というものです。賛成、反対でやってみますと、これは結婚している子ども世代ですけど、54.6％賛成。おじいちゃん、おばあちゃんの親世代の方の人たちが62.5％賛成となっています。老後は夫婦だけで住みたいという回答の方がずっと高いですよ。

橋本龍太郎という総理大臣がいたんですけど、あの人が自民党の幹事長をやっていた1970年代、まだ高度経済成長期の段階ですけれども、「３世代同居を希望している人が非常に高い。だから、そういうのは特別な福祉をやらんでもいい。日本の家族はそういう家族だから、３世代家族は福祉の含み資産だ」と言って、それを日本型福祉社会と呼んだんですよ。

でも図表５のデータを見てください。65歳以上の世帯構成のデータですけれども、1970年代では、65歳以上の人は75％くらいの人が３世代で同居していました。そのころは確かに橋本龍太郎自民党幹事長のいうとおり、３世代同居は福祉の含み資産だったかもしれません。老人福祉政策をやらなくても、家族が高齢者の面倒を見てくれているということだったと思うんですね。ところが、その10年後、1980年のデータ。これは国が出しているデータで、３世代同居は、65歳以上50.1％。このときも半分を超えていますから、突出していますよね。その20年後、2000年には26.5％に減りました。細かい数字は飛ばしますが、2005年のデータでは、21.3％。ここでは３世代同居は、もはや突出していません。それ以外の方が22％とか29％とかです。つまり、65歳以上の人では同居している人の方が少ないんです。でもヨーロッパの国では５％から２％とかという同居率で、日本は20％も同居しているんですから、まだ、すごい国ですよ。

それから成人期の親子関係について。先ほども述べたように、老後は夫婦だけで住みたいという人が、親世代の方が数値が高くなって、62.5％となっています。ただ、同居はしないけども、今日では近居というのが増えているんです。同居という言葉を調査票なんかに平気で使っている研究者がいます。例えば、長男夫婦が別居している、と。このあたりの時代はそういう言葉が使えると思うんですよ。今の時代になっても、長男夫婦が一緒に住んでないのを別居と言うのはおかしいでしょう。だから、「別居していますか」という質問をアンケートに入れると、若い人にしてみたら、どう答えていいか分からなくなっちゃうんです。「別居なんかしているわけじゃないですよ」と。「普通に別べつに住んでいるだけですよ」と。

これをもし使うんであれば、社会調査の場合だと「定居」という言葉を新しくつくらなきゃだめです。同居というよりも、話し合って、何らかの理由で一緒に住んでいるんであれば、「合居」という言葉がいいです。別居という言葉は、例えば、単身赴任の夫と別居している。これは使えるんです。でも長男夫婦が別居しているとか、娘夫婦が別居しているとかといっては、おかしいですよ。次男夫婦も別居している。だけど、これは分家なんです。次男夫婦が跡をとって、長男夫婦が別居したというのも、かつては使えたわけです、以前はね。今は違う時代に入っているでしょう。現代をどう見るかということを言っているんですよ。私の話しているのは、この分野では最先端の話ですよ。

それで、つぎに「家族の絆にとっては何が重要か」というデータをとってみると、それは夫であり、妻であるという、自分の役割があるからだというふうに、その役割が重要だと言うことでした。確かに日本の場合は、昔は農業とかやっていたから、作業があるんですね。それで、家にいる息子に、「おじいちゃん、おばあちゃん、お母さん、お父さん、みんな畑で仕事しているけど、ムシロで豆を干しているから、日が暮れたら豆をちゃんと取り入れてくれよ、お風呂も

沸かしとけよ」とか、役割を与えていたわけです。その仕事を通して、自分は家族の中の一員だなとかと思っていたんです。そういうのが家族だった、家族の絆だったんです。いま時分、そういうのはないでしょう。小学生の子どもに、「親の手伝いって、君は何やっているの」と聞くと、「カーテンを閉めること。」お母さんは、「もうこんな時間になったけど、あの子、カーテン閉めてくれたかな」と、「やっぱり閉めてないわ」とか、そんなんです。カーテンを閉めるのが仕事なんですね。それから、「脱いだ服を洗濯機の横のかごに入れてくれたかな。」そんなん、お手伝いでも何でもないです。自分のことだろう。だけどお手伝いの中に入っているんです。そんな時代になっちゃっているんですよ。

それから、家族の絆がものすごくうまくいっている人に、「あなたの家族にとって何が絆になっていますか」というアンケートをとったんです。すると、一番大事なのは、コミュニケーション。コミュニケーションが家族の絆になっているんです。コミュニケーションをとってない家族は絆がない。昔は規範とか役割で絆があったんですけど、今はそれが絆にならない時代になっているんですよ。あなた方の作る家族は、これからの家族なんです。そういう意味で本当に妻と夫で話し合わなきゃいかんということです。

かかあ天下とか亭主関白とかという言葉がありますが、亡くなられた甲南大学の増田光吉先生は、日本の夫婦の力関係についての研究で、学会にデビューされました。そのときに、アメリカの学者がデトロイトで行なった調査の仕方を翻訳して、日本向けに調査表をつくって、神戸でその調査を実施して学会で発表し、一躍有名になって、権威者になられたんです。

図表6 に1963年というところがありますでしょう。そこのところに、464人を調査したと書いてます。夫が優位というのは亭主関白のパターンのことです。妻が優位というのは、かかあ天下のパターンのことです。

ところが、日本の家族は、70%ぐらい夫婦自律型の家族だったんです。この4つの分類は、デトロイトの分類の仕方をそのまま持ってきているんですよ。一致型というのは、夫婦が何もかも話し合って決めるという意味です。コミュニケーションをとりながら決める。ところが、自律型はいちいちお互いに相談しないんですよ。自分の分野がもう決まっていて、自律してて、そこで自分でさっさっと決めていく。相談するというのは、余程のことがあるときで、ほとんど自律してやってしまっている。こういうふうに、日本の夫婦の勢力構造は自律型だということを発表したんです。

ちょっと増田先生にはデータ処理に怪しいと思うところがあり、やや自律型がたくさん出るように、自分が有名になるためかどうか分かりませんが、ちょっと操作されています。まあ、それはそれでいいとして、変えてはいけないと思って、そのやり方でやってみたんですよ。これが1995年、それから2005年です。ただ例えば、いま時分、5,000円の靴を買うときに夫に相談する妻はいませんから、今は2万円にして。2万円だったら勝手に買えるなとか、それは微妙ですね。調査票のつくり方によって違ってくる面もあるんで、そんなにすっきり言えないんですけれども、1995年では、増田先生のやり方で逆に74.0%の自律型が出ちゃったんですよ。自律型というのは、まさに夫婦の性別役割分業型です。

でも、もう一度、2005年に同じ方法で調査しました。1995年から2005年の間に男女共同参画基本法という法律ができているんですよ。そして、この間にはフェミニズム運動の影響もあるんでしょうが、農村部に行っても「パパ・クォータ制って知ってますよ」とか「スウェーデンはこうでしょう」とか言う人が出てくるようになっていますね、現在では。

この間、うちの研究員と一緒に兵庫県北部の

但馬に行って、そこでグループ討論会をやったんです。但馬は農村部です。その時いろんな人に質問をしたんです。「ご飯を食べた後の茶わんなどは、どうしていますか。」うちの男性研究員が、「食べた後は、時にやらないこともありますが、大体、食べた後の茶わんは、流しに持っていくということはやっています」というと、但馬の女性が、「本当ですか。うちの主人なんかは、もう言わなくても、さっさと洗ってくれますよ」と。もう、農村部でも、どんどんそういう意識が当たり前になっていっているんですね。私は、そこにいて「流しに持っていっているだけで自慢しなさんな、持っていっているのは当たり前でしょう。ついでに洗いなさい」に加えて、「洗っているだけですか。」「洗った後の下の流しのゴミも取っていますか」と言っています。私は「これ趣味なんですよ。流しのゴミを手で取ることに快感を覚えます。大好きなんです」と。

意識が高くなっていって、それはやっぱり男女共同参画基本法とか、ＤＶ防止法ができたとか、いろんなことが影響していると思うんですが、自律型が45.5％に減っちゃって、逆にコミュニケーションをとっている一致型が38.3％で、これがどんと増えました。同じ調査ですけども、**図表７**を見てください。「会話している夫婦と夫婦関係の満足度」です。コミュニケーションをよくとっている夫婦がいかに満足しているかが分かります。さらに、一致型と自律型と妻優位型とを調べて、どの型の人が一番満足しているかというと、ばっちりこれも、もうこんなにきれいに出るかというぐらいに数値が出ています。一致型が満足、自律型でもまだ満足している人もいるんですが、でも妻が優位型は、満足度はずっと低いですね。

前に見た**図表５**の「65歳以上の世帯構成」を見てください。３世代同居がすごく減っていっています。2005年には21.3％になっているでしょう。この21.3％が、昔の「家」制度の長男夫婦との同居になるのかなと、みんな思うでしょう。違いますよ。この同居している21.3％は、どちらかというと、娘夫婦とか次男や三男とか、そういう人たちです。必ずしも跡取りの長男夫婦ではないんです。

さらに、全国調査をしたんですが、案外、未婚の人がそのまま同居していることがあります。「親と未婚子のみ」の16.2％は、こういう同居です。これは、パラサイト・シングルのパターンですよね。もう娘さんが50歳を過ぎているような感じです。未婚の娘に同居率がすごく多い。結局、最後に親と一緒に住まわされちゃっているのかもしれませんね。

何か話があっちこっちに飛んでいるんですけれども、婚姻届を出さずに子どもをつくっている人がいるというのは、なかなか面白いなと思って。どんな人かと思って、全国調査をやろうって、文部科学省に申請したら、科研費という助成がもらえたんですよ。３年間で調査をせよ、と。多分、国ではできない調査だと思うんですね。「ごめんください。おたく、婚姻届出さずに夫婦生活して子どもがいるそうですね。アンケートをとらせて」。国じゃできないですよ。大学の教員が大学で研究しているので、というんだったら答えてくれるんです。

それで、調査結果を学会に発表したら、新聞社が注目してくれて、各新聞社が来てくれて、記者会見をしました。朝日新聞など大手の新聞に載ったんですよ。その時、いろんなことを調査したんですけど、「あなた方は何で婚姻届を出さずに夫婦生活をしているんですか」と聞いたら、「婚姻届を出している人が本当に夫婦か。私たちの方が本当に夫婦だ」とか「私たちはパートナー関係で、夫婦じゃない」とか、いろいろ答えがありました。対象は、とにかく週に３日は床をともにしている男女で、安定している男女関係、婚姻届は出していないが、本当に夫婦という感じですね。

でも、消極的な人もいましたね。「妻がいる

んだ」と。「何じゃ、そりゃ、浮気じゃないか。」「本当は妻がいるんだけど、妻との離婚を進めております」なんて、どこかの大学教授もこの前言っていましたけど。真面目に進めておりますって。それで、新しい生活に入っていて、まだ離婚が成立していないから、婚姻届はまだ出せないとか。それから国籍が違って、すぐ出せないんだとか。そういう消極的な人もいたけれども、それはちょっと置いておいて、積極的にやっている人ですね。

積極的にやっている人に聞くと、女性の場合、89.3%が「夫婦別姓を通すため」ということなんですよ。夫婦別姓を通すためというのは、婚姻届を出したら、どっちかの名字にせざるを得ないんですね。だから、夫婦別姓を通すため、と言っているんですね。夫婦別姓を通そうと思うと、今は婚姻届を出さないことしかないんですよ。ＯＬなんかをやっていると、結婚していちいち名字変えて、名刺も変えて自分のプライバシーをばらしてまでも仕事をやらなあかんし、そんなんもう面倒くさいし、じゃあ通称でいいじゃないかという説もあるけど、今の法律では、パスポートも免許証も通称ではだめなんですよ。そうすると、やっぱり届け出るなら、夫の名字にするしかないということになっちゃう。じゃあ、届けないでおこうって、ことなんでしょうね。

しかし、夫婦別姓制度ができて別べつに名字を登録できるようになれば、こういう人たちはいなくなるのかというと、そうでもない。ある夫婦がいて、そこには子どもがいなかった。夫は外に子どもをつくって、ずっと内縁の妻との生活を続けているというケースがあるとします。正妻側は子供がいない、そして夫婦生活は１、２年で終わっちゃっているんですよ。ところが、内縁側はもう何十年も続いていて、子どもが38歳になっている。この夫は、内縁との幸せな家庭を一生懸命で守っている。一応、生活費も元の妻にやっていたんですね。妻は夫の土地を売って、それで裁判当時は兄の家に住んでいました。そういう状態になって、この夫婦は、有責主義、もうどちらに責任があるかを調べて、罰を与えるとか慰謝料を払えとかと、やりあっていたのです。

これをやめて、今日では、この夫婦は、もう破綻しているというふうに見るんです。浮気した方が勝ちという面もありますよね。だけど、破綻しているという基準に現在では変えちゃっているんですよ。今は、破綻主義の離婚裁判ですよ。そうなると、破綻して何年というのが問題になってくるわけです。

破綻といっても、何年別居したらいいのか。別居５年で離婚という法律を認めるというんで、夫婦別姓の法律案とともに、1994年に法制審議会が答申を出し、それに基づいて国会にも出たんですが、その年に大震災があって流れちゃったんです。だけど、法制審議会の答申は、この考え方です。最近の離婚は、離婚裁判でも、最高裁まで行くと、たいてい新聞に載ります。

これが、1990年、平成２年に問題になったんですね。平成２年は、別居８年で、有責の夫。つまり、浮気した夫が、離婚を請求したんだけれども、「離婚は認めぬ」と高等裁判所が言ったんですね。ところがその後、離婚は認めぬというこの２審の判決を最高裁が破棄して、認めるように高等裁判所に差し戻したのです。つまり、８年目で認められたわけです。だから浮気して、別居して８年間じっとしとれば、大体、今、裁判所へ持っていけば、私、嫌よといって反対されても認めちゃうんですよ。なぜ認めるかというと、破綻していると認めるからです。夫婦のあり方の見方が全然違ってきているでしょう。もう責任を負い合う考え方じゃないんですよ。だから、相手についてのデータを持っていくよりも、何年別居とかそういうことばっかりが重要になってきているんですよ。

ヨーロッパを見ると、大体、西ドイツで３年ですね。そして、イギリスは５年ですけども、

アメリカは州によって違うんですが、２年から１年です。カリフォルニアは１年ですよ。別居したら、それでもう離婚を認めちゃうんです。今は、夫婦ってそういう見方になっているんです。

ちょっと面白いケースがあります。奥さんが50歳ぐらいで、ご主人が20幾つで結婚。ところが、結婚して10数年、奥さんがアルツハイマーになっちゃったんですよ。ご主人は７年間ぐらい看病するんですけど、くたくたになって、離婚といったって奥さんはもうアルツハイマーでわけが分からなくなっている。それで裁判所に行ったんですが、裁判所では即離婚を認めています。

それで、その話をゼミでしたら、ゼミの学生が、「逆に奥さんが40歳ぐらいで、もしご主人がアルツハイマーになって、もう嫌だから離婚したくなったとしても、きっと日本の裁判所は、愛し合ってきて結婚したんだから、そんなもん死ぬまで面倒を見るのが妻だろうと、言うんじゃないですか」と言うんです。それで、「ああそうかもな。ちょっと差別的だな」と思って、裁判所に聞きに行きました。「何を言っているんですか」と。この事件は、普通だったら、もっとぱっぱと決まっちゃうのに、もめていたんですよ。」何でもめてたのと、聞いたら「面倒を見ているのが男性だったから。もし面倒を見ているのが妻だったら、もっと早くぱっと決まっちゃう」って言うのです。

何を話しているのか、私が言っているか、若い人には分からないかもしれませんね。お年寄りの人は、すぐ分かりますよね。もう切実ですから。今、そういう状態です。だから、差別的でも何でもないですよ。今の時代では、そうなってきているということですよ。

つぎに「離婚による年金分割制度の開始」ですが、もう2007年４月からと、2008年４月からです。今、会社に勤めている人で、結婚している人がいますよね。その人の厚生年金の掛け金は給料から天引きされています。その天引き分には奥さんの国民年金分、これ基礎年金というんですけど、それも含まれていることになっているんです。そうすると、会社は60で定年になって、65歳から年金がもらえるんですけれども、奥さんが年間79万円ですね、ご主人の方は勤めていたから、例えば、月20何万円とかもらえるわけです。２人分を足せば30万円になるかもしれません。人によって違います。年数によりますし、幾ら給料があったかにもよりますからね。

ところが、この４月から、年金制度が分割制度に変わったんです。どういうふうに変わったかというと、離婚しますと、もともと奥さんは自分の７万円ぐらいの年金はもらえるんですね。国民年金に入っている人と同じです。ところが、ご主人は20何万円もらっているわけです。家族だったら、２人で30万円とかということになればいいんですけど、離婚したら、奥さんは７万円、ご主人は毎月20何万円。

ところが、いい女ができて、そのご主人がまた結婚したとしますね。この女の人は、自分で働いていたかもしれないし、年金が幾らあるのかもわかりません。その後、こてっと男性が死にます。そうすると、この女性は、この再婚した男性の年金の60％の遺族年金がもらえるんです。結婚してまだ２年しか経ってないのに。前の奥さんは基礎年金の６、７万円しかもらえないわけです。元夫が死んでも、関係ない人ですから何ももらえないわけです。新しい奥さんは夫婦関係だから、それだけでもらえちゃうということになるわけです。

これが、今年の４月から、元奥さんは今まで努力して頑張ってやってきたんだから、今の制度は壊さないけど、離婚のとき年金受給権をあげよう、と。この４月から、もし離婚した場合は、今まであなたと一緒に生活をしてきた分の、あなたの分の50％は、私の分もあるんだけど、足して50％でもいいですから、私に下さいと言って、分けるシステムができたんです。この４月

からスタートです。ご主人が嫌だと言ったら、これを家庭裁判所に持っていって、もめることになっているんですよ。合意が必要です。

ということは、どういうことかというと、この４月からは、任意分割ということなんです。「おまえもよくやってくれた。じゃあ別れるとした以上は、半分は渡すわ」ということになれば、その合意が要るわけです。お願いしますと言っても、だめな時、家庭裁判所に訴えて、半分にしなさいと認められると、半分になることがあるんですね。

ところが、来年2008年の４月からは強制分割になるんです。たった１年だから、今年からやったら、いいじゃないかとか思うかもしれませんけど、そういう意味じゃないんです。どういうことかというと、来年の４月以降は強制です。たとえば来年から20年後に離婚すると、来年以前のものは任意ですから、話し合わないといけないんですが、この後の20年後は、堂々と半分は私のものです、という制度です。これが、もうスタートします。

相手と合意しなきゃいかんというと、交渉や合意テクニックのうまい人は有利ですね。そうすると、世間学というのは、余程、学んでおかないと、コミュニケーション能力とか、そのためには先ほどちょっと言いましたけど、個人化と主体性ですね。こういうものが非常に大事だと思うんですよ。

それで、こういうものは、先ほど言ったように、利己主義じゃないということです。基本的に、私は民主主義だと思うんです。日本に民主主義がどこまで、いま進んでいるかということです。特に一番大事なのは、家族の中です。家族の中に民主主義をどう確立するか。これが、1994年の震災の前の年に国連が国際家族年として、「家族から始まる小さなデモクラシー」というタイトル、スローガンで始めたんですね。Building the smallest democracy at the heart of society というスローガンだったんですね。

日本でも、家族の中に民主主義をという考え方は、私の主張している「合意制家族」が家族ライフスタイルをつくるという考え方なんですよ。この合意制家族という言葉、すなわち21世紀の家族の概念は、まったく私のオリジナルな概念です。何か勝手な家族をつくるという意味で、私を批判する人がいますけれども、そうではありません。既にＤＶ防止法ができ、2000年に児童虐待防止法ができ、さらに高齢者虐待防止法も制定されました。もう新しい方向に、制度的にも準備が始まってきています。日本の社会は、全体的にそうなっていってきていますよ、完全に。以上で、話を終わりにします。何か、質問がおありでしょうか。どうぞ、ご遠慮なく、よろしくお願いします。

○前田彬宏　今日は、大変勉強になる話をありがとうございました。

前半の部分についての質問なんですけども、日本が近代化ができた理由として、直系制家族があったからだというのをおっしゃっていたんですけども、その理由が自分の中に飲み込めてなかったので、もう一度、ノーベル賞に匹敵するお話をしていただきたいんですけども。

○野々山先生　そうですよね。近代化にもいろいろな段階があります。ローマ時代なんかですと、家父長制といったら、家族メンバーを殺すこともできたんですね。ファミリーという言葉は、もともとラテン語のファミリエという言葉で、財産という意味だったんですよ。だから、奴隷も豚も、みんなファミリエなんです。フランスでは、ファミーユといいますが、日本語で家族という言葉は、まだそこへ届かなくてごまかしているみたいに見えるんですけど、翻訳語なんですよね。もともと家族という言葉は日本にはなかったんですよ。中国だって、家族という言葉は日本から行っているんですね。唐の文献に出てくるのですが、そのときは全然意味が

違うんですね。どういう意味かというと、そのときの家族は、「家という字は、うかんむりの下に豚がいる、そんな族」ですね。つまりお金持ちの豪族とかいう意味です。この字が文献に出てきます。家族という漢字をこの言葉として日本人が使うようになるのは明治以降なんですね。もとは、ファミリーの翻訳語なんですよ。

「ふるさとは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの、よしや、うらぶれて」。これは室生犀星ですが、本当はふるさとに帰らないほうがいいという歌なんですが、ふるさとに帰ってお墓に入りたいというような気持ちをみんな持って、会社に勤めにいくんですね。当時、会社に勤めていると、でっち奉公みたいな形ですけれども、社長とか課長とか、上役の人が同族と同じことをやってくれたわけです。「何、結婚したいのか、と。よっしゃ、おれが探したるわ」というんで、1升瓶を持って、嫁やってくれとかいって、仲人をやってくれていたんですよ。つまり、会社そのものが同族組織みたいな格好になっていたんですね。

そこで、次男や三男の人たちは、自分の持っているレベルの高い組織力をどんどん投入したんです。組織力として投入したものの対価は利潤ですけども、利潤は返ってこずに、つまり安い賃金のままで我慢させられ、ますますその同族組織へ投資として入れられていくわけですから、近代化については、日本人の持っている組織力みたいなものがすごく早い勢いでプラスに貢献したということです。

もう一つ、ロバート・ベラーという学者は、日本に近代化がどうして起こったのかというのを、彼なりの独特な説明を行なっています。この人はマックス・ウェーバーと同じようなことを言っているんですけれども、近江出身の石田梅岩の石門心学を問題にしているんですよ。つまり、江戸時代に既に日本には、頑張るぞとか、立身出世だとか、金もうけとか、そういう考え方が非常に広がっていたというんですね。儒教というのは、武士というところで朱子学的ですけれども、ベラーは、儒教については陽明学に注目しているんですね。陽明学は、庶民の儒教なんです。今でもビルの屋上に鳥居が置いてある会社が時どきあるでしょう。あれ、石門心学である場合がものすごく多いんですよ。今日でも石門心学的なお祈りをしている社長がかなり多いんです。

石田梅岩は、その石門心学を武士ではなく一般庶民に持っていって、絵本とか歌とかお手玉とか、遊ぶ歌に石門心学の考え方、陽明学の考え方を入れました。それを二宮尊徳や新井白石たちが広めていくんですよ。日本中にお金を大事にするとか、節約するとか、そして商売するとかという考え方を導いていき、広げていったのが徳川の宗教で、それが明治になって花を開いたんだという説を唱えているんです。私は、そういう宗教的なものを持ってきて説明できるだろうかという感じがするんですね。

実際は、その人に賃金も上げてない、利潤も返していない、全部そんなもんを吸い上げちゃっているんだけども、嫁さんを世話するとか、一旦、Aという同族に入ったら、ずっと同族員ですよ。つまり終身雇用。そして、当然、上下の序列はつくっているわけですよね。終身雇用制、年功序列制のおかげで、日本の産業が発達したと普通言われているんだけど、あれはどこから来たかというと、同族の考え方なんですよ。そのおかげで、日本は、もちろん渋沢栄一とか、そういうリーダーシップの立派な人もいるけれども、下側にいる人たちが日本をすごく支えていったというふうに思っているんですね。

しかし結局、それは破綻します。なぜかというと、生産物は上がっていくけども、それをどこかの国に売ろうとして買ってくれ、買ってくれと言ったって、よその国も売りに来ている。何言っているんだということで、もうたたかれたりして大騒ぎするわけですが、それが第2次世界大戦になっていくわけです。高度経済成長

期になったときも、まだ次男や三男は大きな貢献力を持っているんですね。高度成長期も、子どもの数は4人ぐらいいたので、次男や三男も同じような形でプラスするんですけど、当時は「家」制度の家を守るんじゃなくて、むしろ核家族化していくというパターンですから、全然違うパターンで影響していきます。この最初のところだけ、あなたは質問しているんですよね。順番に経済的な説明からすると、生産性の問題としては、資本、労働、土地、組織力、それに対する対価、それに従ってくる変数としては、地理的移動、そして職業的移動、地位的移動、そういう移動が起こってくる。移動とは、労働者が農村から都市部に移ってくるということです。配偶者選択とか、職業選択とか、それから住居選択みたいなのが自由になってくると、さらにその次男や三男たちが力を出すようになってくる。

ここの段階では、次男や三男の人たちは、業績主義と、所属主義。普通、業績主義と所属主義というのは矛盾しあっていると言われていますけれども、実は所属することを通して、そこで業績を上げようという形になったということだと、私は思うんですね。次男や三男という人で、そんなに力を持った人がおるのかといったら、挙げ出すと切りがないんです。みんなは余りご存知ないかもしれないけども、佐藤栄作、吉田茂、みんな次男で養子に行っている人なんですね、柳田國男も、湯川秀樹もそうです。日本人の次男や三男がどれだけ活躍しているか。いや、長男でいっぱい活躍している社長とかもいますよ、挙げればいるけれども、次男や三男がものすごく活躍していることは、明治期以降、明らかなんですね。そういう人たちが、案外、養子になっているんですね。

そういう人たちの活躍ぶりというのを、それが目的ではないもんだから拾い上げてないけど、そういう研究もあっていいと思うんです。そういう人たちがどういうふうに日本の経済とか、近代化に活躍したかというのも見ていきたいと、本当は思っているんです。経済界にもいっぱいいると思うんですね、そういう人がね。

そういう、結局は、「家」制度と同族組織というものが持っている組織性、序列性を次男や三男がそのまま企業に持ち込んだ。だから、日本の企業では同族組織とか、同族企業とかいう言葉が当たり前ですね。病院とかの組織でも、もう本当に同族で、ひとりお医者さんをやっているけれども、あとはずっと事務長から皆、親戚。看護師さんなんか、自分の出身の村からいっぱい女の子を連れてきて、病院ができ上がっちゃった。もう同族みたいな感じですよ。そういうのがいっぱいある。いま言ったように恩情主義ですよね。

細かく言うと、近代産業社会ですね。資本主義が発達していくんですけど、工業化社会と同族組織の価値観との違いですね。例えば、対人関係を見ていくと、工業化社会では非人格的ですが、同族組織ですと人格的ですよね。そして集団主義的で、個人主義ではないですよ。地位取得も、こういうふうに業績主義、生得主義とか、それぞれこういうふうに対置できるんですね。

そうすると、この工業化社会というのは、戦後の工業化社会で当てはまるんですけど、戦前の工業化社会もそうなんですけれども、実質的には同族組織の考え方、価値体系みたいなものにどっぷりつかって、どっぷり取り込んで組織化されていたということです。こちらが価値観ですね。だから人格主義とか。それが懐かしいし、それがよかったんだという人も、今でもいるんですね。

実際に、会社に赤ちゃん連れていって、金よこせとか、組合がやっていたわけですよ。会社にしてみたら、何で赤ちゃんまで連れてくるんですか。あんたが働いたものに対して給料を払うのは当たり前でしょう。だけど、うちにはじいちゃんがいてるというのは、日本だけやった

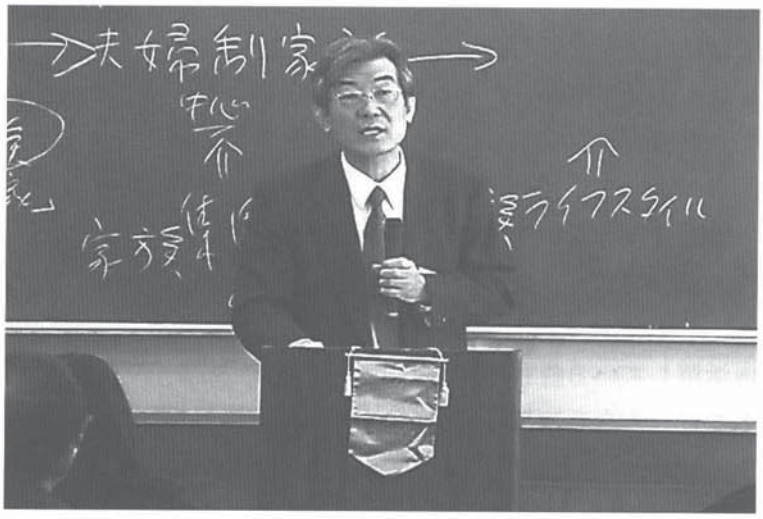
んですね。自分とこの家に、じいちゃんがおり、おばあちゃんがおり、そして子どもたちがいて、妻もおる。家族手当として見合う給料を幾らぐらいよこせ。こっちの人は、同じ仕事をしているのに、じいちゃんがいない。妻子がいて、その家族手当を出すというのは、大体どこの国もやっていますよ。だけど、じいちゃん、ばあちゃんの手当まで出していたのは、日本なんですよね。

こういうふうに組織としては、いま時分やらないでしょう、そんなこと。じいちゃん、ばあちゃん、一緒に住んでいますと言ったって、やらないですよね。ちょっと話が余分なところへ行っちゃうんですけど、そんな感じですよ。これらについては、4月5日に、本の宣伝が出ます。『現代家族のパラダイム革新』という本です。4月5日出版です。高いので、無理に買ってくださいとは申しません。実は4,300円です。東京大学出版会から出ることになっています。「直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ」という副題がついています。

○山口　徹　4,300円分、これで「今日の家族の大きな変容」とか、「21世紀の家族のあり方」等を勉強させていただいたことになります。

○司会　そういうことでございますので、ぜひまた勉強を続けていただくためにも、どうぞお買い求めください。

本当に、先生、今日はありがとうございました。



「合意制家族」の生成をめぐって

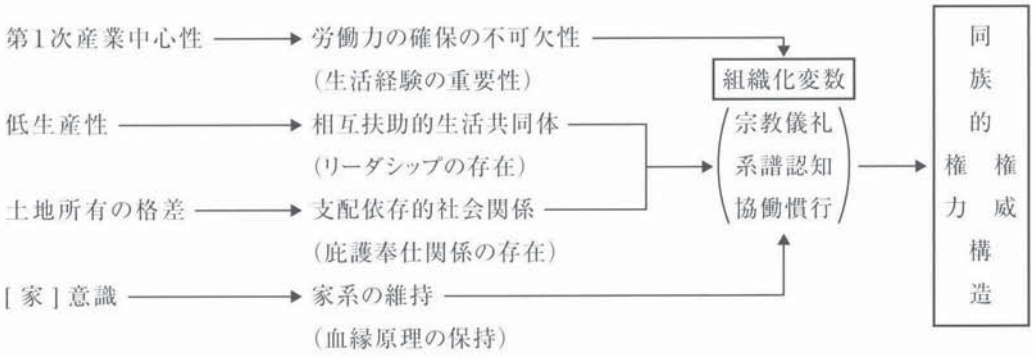
親族組織および親族関係のあり方の類型化

	福　武	塚　本	蒲　生	光　吉	野々山
親族組織	東北型	第一の型 第二の型	マキ型	A　型	A・Ⅰ型 A・Ⅱ型
親族組織	西南型	第三の型	ジルイ型 イットウ型	B・Ⅰ型 B・Ⅱ型	B・Ⅰ型 B・Ⅱ型
親族関係			(ハロウジ型)	C　型	C・Ⅰ型 C・Ⅱ型

親族関係内における権力および権威の所在とその変遷

	A−Ⅰ型	A−Ⅱ型	B−Ⅰ型	B−Ⅱ型	C−Ⅰ型	C−Ⅱ型
親族組織	○	○	×	×	×	×
拡大家族	○	○	○	○	×	×
核家族	×	×	○	○	○	○
個　人	×	×	×	×	○	○

同族的権力（権威）構造確立の連関図式



兵庫県家庭問題研究所・調査事例・[C−Ⅱ型]

1993　『新婚夫婦の調査』
1993　『少子化の調査』
1994　『祖父母と孫の調査』
2002　『家族の絆の調査』
2005　『成人期親子関係の調査』
2006　『家族生活の調査』

同族組織および家族集団の境界関係

	同族組織	制度的直系同居家族	合意的直系同居家族	自立的核家族 一時的核家族
上位境界	同　族		多世代同居家族	
主位境界	直系制家族	直系制家族	夫婦制家族	夫婦制家族
下位境界	核家族	核家族		

工業化社会と同族組織の価値体系における相違

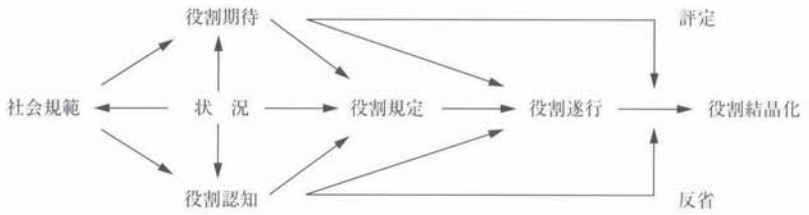
	工業化社会	同族組織
対人関係—動機的志向	非人格的—個人主義的	人格的—集団主義的
地位取得—社会関係	業績主義的—競争的	生得主義的—協同的
評価基準—人的交流	普遍主義的—一面的	個別主義的—全面的
集団目標—内集団関係	能率主義的—情愛中立的	調和主義的—情愛的
個人的機会—責任性	平等主義的—自己責任的	権威主義的—温情主義的

工業化の段階に対応させた現代家族の諸特徴

	初期工業化の段階	高度工業化の段階	後期工業化の段階 新文明への移行期
家族制度（規範）	直系家族制	夫婦家族制	合意家族制
家族特性の位置づけ	家族制度の重視	家族集団の重視	家族ライフスタイルの重視
家族構造の型	直系制家族	夫婦制家族	合意制家族
家族形態の志向	拡大家族の規範（父方居住制）	核家族志向と拡大家族志向の並存	形態選択制の規範（多様な家族形態）
自己組織化の機制	即自的自己言及	即自的自己言及	対自的自己言及
生活目標の動機づけ	生活維持動機	生活向上動機	生活選好動機
生活志向の特性	規範志向性	集団志向性	ライフスタイル志向性
親族関係の型	A型・B型	C—Ⅰ型	C—Ⅱ型

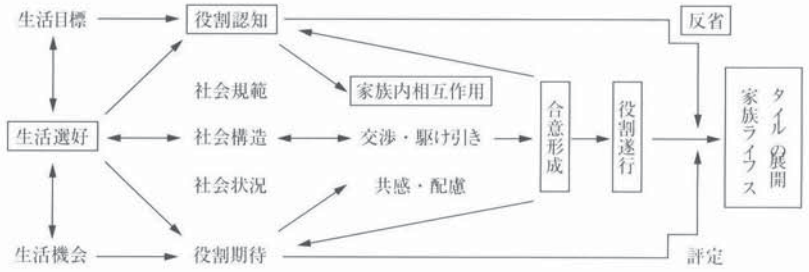
図表1

役割結晶化の過程



図表2

家族ライフスタイルの共同選択の過程



図表3

核家族イデオロギーの夫婦関係

1　分業構造 固定的性別役割分業のパターン	2　勢力構造 家父長制的勢力関係のパターン
3　結合構造 生涯拘束的結合関係のパターン	4　情緒構造 一心同体的情緒関係のパターン

図表4

家族新時代における夫婦関係

1　分業構造 夫婦参画的協働パターン	2　勢力構造 夫婦対等的勢力パターン
3　結合構造 夫婦選択的結合パターン	4　情緒構造 夫婦独立的情緒パターン

結婚生活年数別にみる年次別の離婚比率　(%)

	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
5年未満	51.8	49.3	37.3	34.0	38.1	39.5	37.9	36.5
5−10年未満	24.4	24.2	27.7	21.3	21.2	21.2	23.0	23.1
10−15年未満	12.4	13.7	17.3	19.4	14.1	13.0	13.0	14.1
15−20年未満	6.1	6.9	10.0	13.0	12.7	9.9	9.6	10.0
20年以上	5.3	5.8	7.7	12.3	13.9	16.4	16.5	16.3

［調査事例］

［1］非婚カップルの調査（89.3%　夫婦別姓を通すため）

［2］破綻主義の離婚判決（1987年←1952年・民法770条）

［3］離婚による年金分割制度の開始（2007年4月　任意分割
2008年4月　強制分割）

［4］少子化の調査（女児選好 53.2%　＝　男児選好 41.2%
1992：♂24.3%＝♀75.7%　←1972：♂52.1%＝♀19.2%）

［5］新婚夫婦の調査（悩んだ割合：♂2.5%、♀21.4%）

［6］祖父母と孫の調査（心の安らぎ＝孫：♂89.5%＝♀91.3%
孫育てへの関わり：思わない：♂68.3%＝♀73.1%
自分の生活重視：♂46.6%＝♀56.6%）

［7］成人期親子関係の調査（老後夫婦だけの意見：賛成
子世代：54.6%、親世代：62.5%）

［8］家族の絆の調査（役割＜コミュニケーション重視）⇒No.4

図表5［65歳以上の世帯構成］（厚生労働省『平成17年度版国民生活基礎調査』）

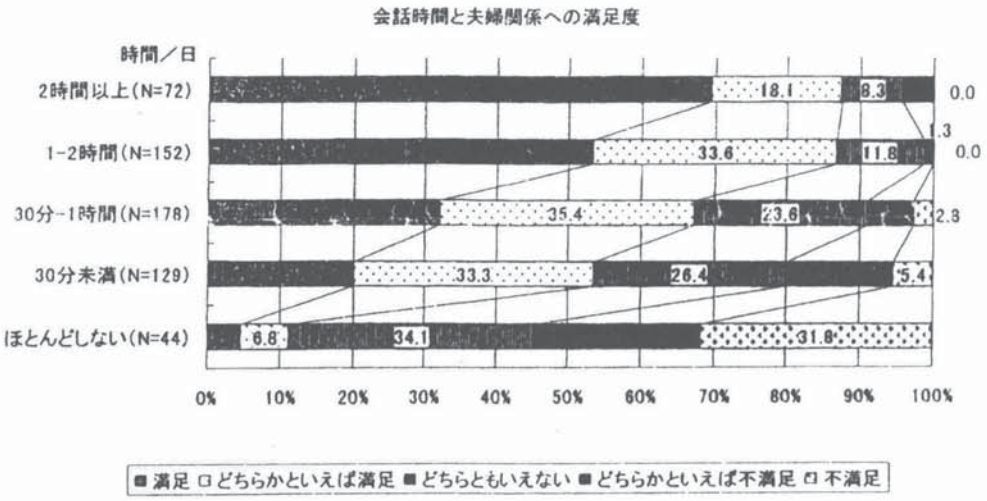
	三世代同居	単身世帯	夫婦のみ	親と未婚子のみ	その他
1980	50.1%	10.7%	16.2%	10.5%	12.5%
2000	26.5%				
2005	21.3%	22.0%	29.2%	16.2%	11.3%

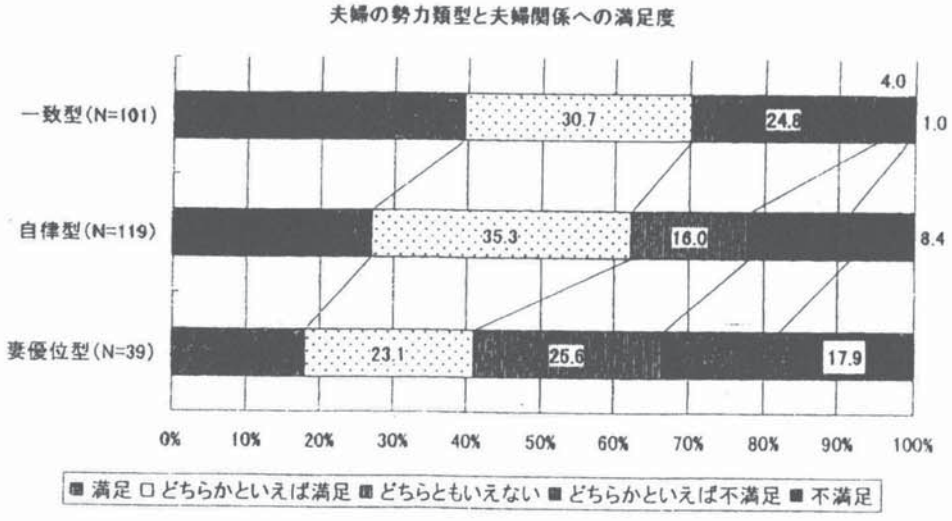
図表6

勢力類型の分布（増田方式）

		夫優位型	自律型	妻優位型	一致型	合計
男女共同参画法	2005年（264人）	1.1	45.5	15.2	38.3	100.0
ＤＶ防止法	1995年（601人）	3.8	74.0	10.6	11.5	100.0
	1963年（464人）	3.7	69.6	7.6	19.0	100.0

図表7





ロータリアンの夕べ

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(伊丹RC)

○山口　徹　お待たせしました。

先ほどは、厳かなキャンプファイヤー、心に何かしみたんじゃないかなと、感動しております。

では、今日は２日目のロータリアンの夕べ、今回は深川先生に全面お任せということで、ロータリーのためになる話をよろしくお願いいたします。

○深川純一　いつもかわりばえのせん話ばかりで、飯ガバナーなんかもう聞き飽きたとおっしゃるかもしれないんでありますが、しばらく御辛抱いただきたいと思います。

今、ロータリーというのは、随分、激変をしております。そこで、ロータリーの核にあるものは一体何か。こういう視点から若干のお話をしてみたいと思うんであります。

まず、イントロダクション的な話から入っていきたいと思うんでありますが、今から約30年ぐらい前に、アルビン・トフラーという人が「第三の波」という本を書きました。ちょうど第１回のＲＹＬＡが、今から29年前に始まったときに、今井先生がその本を御紹介してくださいました。有名な著書でありますが、これは、人間社会の進歩の流れを分析をいたしまして、最初は原始的な農業社会、そしてその次に産業社会、産業革命による工業化社会、そして現在の脱工業化社会、すなわち情報化社会というように、人類社会は進歩してきたわけであります。そういうことを、アルビン・トフラーは、そのとき説いておったんであります。

ただ、この分析は、人類社会を歴史的に見て、それを一つの現象として分析した、いわば現象論なんであります。人間は本来いかにあるべきかという人類社会の本質論、すなわち人類社会の核心を論じたもんではございません。

それから、また「種の起源」を書きましたチャールズ・ダーウィン。彼は、地球上の生き物というのは、すべて生きるチャンスを求めて進化していくんだ。最も強いものや、あるいは最も賢いものが生き残るのではなくて、最も変化に適応してものだけが生き残っていくんだという言い方をしております。これをアルビン・トフラーの「第三の波」に即して言いますと、農業社会、工業社会、脱工業化社会すなわち現在の情報化社会、その変化についていけなかった者は、不適格者として脱落するんだ。したがって、新時代に適所生存をしていくためには、今までの仕事に対する考え方とか、仕事のやり方というものを全く新しいやり方に変えていかなければならないということになるんでありましょうか。

しかし問題は、一体何を変えるのかという点であります。私たちの、今、生きておる社会というものは、科学技術の発達によりまして、あるいはその他さまざまな原因によって、時代の変遷とともに時々刻々に変化をしていきます。しかし、この変化していくのは、あくまでも現象の世界であります。私たちロータリアンは、目に見えるものの現象にとらわれずに、物事の

本質を見抜く力を持たなければならないと思うんであります。

したがって、今、私たちが生きてる世界には、時代の変遷に従って変わらなければならないものと、どのような時代になっても絶対に変わってはならない、いわゆる核になるもの、核にあるもの、そういうものがあるわけであります。また、時代の変遷に従って、現象としてのロータリー、すなわちロータリーの現状がどのように変化しようとも、いつもロータリーの本来あるべき姿は何かという本質論を見失ってはならないと思うんであります。すなわち、ロータリーの本質に根差した万古不易なもの、すなわちロータリーの核にあるもの、これは絶対に変わってはならない。この核というものが一体何かということをしっかりと見つめなければならないと思うんであります。

ダーウィンの進化論は、人類を生物学的に現象として見たものであります。しかし、人類は、本来いかにあるべきかという本質論から言いますと、果たして人間は進歩しておるんでしょうか。疑問なしといたしません。

もし、時計の針が進むにつれて人間が次第に進歩するということであれば、先に生まれた人間よりも後で生まれた人間は、すべて賢くなければなりません。また、先に生まれた人間は、必ず不幸であり、後で生まれた人間ほど幸福でなければならない。こんなばかな話は、私はないと思うんであります。

確かに、進歩は、退歩よりはいいのは明らかであります。しかし、現実の世界を見てみますと、人間というものは必ずしも進歩しているとは思えません。むしろ本質の世界、思想の世界では、人間は退歩しておる面すら見受けられるわけであります。だからこそ、中世に帰れと説いた思想家もいたわけであります。今なお、釈尊に帰れとか、キリストに帰れという人たちもいるわけであります。

あの道元禅師が書いた正法眼蔵の提唱、これは650年の歳月を閲しまして、今なお私たちの心の糧になっております。この視点からロータリーの世界を顧みますと、どういうことになりますか。私は、20世紀初頭のロータリーに帰れと言いたいんであります。ここわずか100年のロータリーの歴史を顧みますと、ロータリーは退化の一途をたどっておると思います。

あの20世紀初頭のすばらしい原理を確立したロータリー、そしてその原理を実践したあの熱きロータリーは一体どこへ行ったんでしょうか。今、影も形もありません。1905年、一業一会員制と規則的例会出席の原則を確立したロータリー、そして1915年、サンフランシスコの国際大会におきまして、全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、別名、ロータリー道徳律と言われております。あの個人倫理を確立したロータリー、そして５年たって1920年、ロサンゼルスの国際大会におきまして、国際ロータリーの定款細則、及び私たちがいつも身につけておる標準ロータリー・クラブ定款、こういうものを採択して、ロータリーにおける組織原理を確立したロータリー。そしてその３年後、1923年に、セントルイスの国際大会におきまして、この決議23の34号を採択して、ロータリーの実践原理を確立したロータリー。そして、さらに1927年、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕という４大奉仕部門を確立して、原理探究のロータリーから実践のロータリーへ邁進していった、あの20世紀初頭のすばらしいロータリー、これは一体どこへ行ったんでしょうか。今、その原理崩壊の軌跡を振り返ってみたいと思うんであります。

まず、1910年に国際ロータリー、今のＲＩの前進であります全米ロータリークラブ連合会が創立されたときに、当時アメリカにあった16のロータリークラブからこの連合会に対して委託された事項は、三つだけであります。一つは、奉仕理念の追求。全地域社会にこのロータリーの奉仕の理念を追求し、それを提唱し、それを

蔓延させていこうという奉仕理念の追求。そして、その奉仕理念というものを全アメリカの地域社会に蔓延させる。そのヘッドクォーターとなるロータリークラブをつくっていく。いわゆるロータリーの拡大、そして会員の増強、これが第２であります。そして、その翌年の1911年、これらのたくさんのロータリークラブ間の情報を媒介する、こういう情報媒介の機能、この三つだけであります。これが、当時の16のロータリークラブからＲＩの前身である全米ロータリークラブ連合会に委託された事項です。

したがって、それ以外の事項は、この連合会は実践してはならないわけであります。クラブの方も、それも残された事項だけを実践すべきだという形で、全米ロータリークラブ連合会がその後、1920年に国際ロータリーに名前を変えます。それがＲＩでありますね。そのＲＩと各ロータリークラブ間との権限をこういう形で割り振ったわけであります。これは、アメリカ合衆国の州と合衆国連邦との関係をパラレルに考えればいいわけであります。

ニューヨーク州というのがありますね。あれは州とは言いますけども、完全な主権を持った独立国家なんであります。したがって、アメリカには53州あるということは、53の独立国家があるわけであります。それが集まって、アメリカ合衆国連邦というふうな形をつくっておる。だから、アメリカ合衆国なんであります。そして、この合衆国も、完全な主権を持った独立国家。そして、州も、ニューヨーク州、カリフォルニア州というように、全部、独立国家であります。州も、完全な主権を持った独立国家。完全な主権が53と、もう一つ別にあるんです。その関係をどのように調整するか。これは、アメリカ合衆国の憲法の修正。アメリカ合衆国連邦憲法の修正第７条に、その権限が列記されております。

というのは、合衆国が行使した方がいい権限、例えば連邦検察局、ＦＢＩというのがあります。あれは、合衆国の連邦が行使した方がいい。そういう警察権を各州、各独立国家が持っておっても、例えば一つ例を出します。交通違反をして、どんどん犯人が逃げていきます。パトカーが追跡していきます。隣の州へ移った途端に、そのパトカーはバイバイともう帰っていきます。なぜか。隣の州も、完全な主権を持った独立国家なんで、その警察が州を越えて隣の州へ行くということは、隣の州の主権を侵害することになります。ですから、交通違反なんかの警察権は、隣の州へ行けない。

しかし、そんなことをやっておると、アメリカ全体から見ると困るじゃないか。だから、麻薬犯罪とか、重大犯罪については、アル・カポネがやっとるようなああいう犯罪については、州を越えてどこまででも、アメリカ全土にわたって警察権を行使することができる。これが連邦検察局、検察権、いわゆるＦＢＩ。だから、そういう権限だけは連邦に渡そうと。そして、それ以外の州が行使した方がいい権限は州に持たせましょう。こういう形で、州の権限と連邦の権限をちゃんと分けて、そしてそれを憲法に規定をしておるわけであります。連邦の権限と州の権限がナイスバランスがとれるように、アメリカの連邦最高裁判所が判決を下していく。これが、アメリカ合衆国という国家の組織原理なんであります。ロータリーの各クラブとＲＩ、それとの権限の割合はどうなってるか。これは、アメリカ合衆国の原理とパラレルに考えていただければよろしかろうと思います。

先ほど申し上げましたように、州は独立国家でありますから、クラブも独立の主権を持った国みたいなものです。そして、ＲＩも独立の主権を持っております。両方とも、最高の絶対のものがあると衝突しますから、例えば最初に申し上げましたように、ＲＩの権限はクラブから委託された、アメリカの国家組織原理からいけば、州から連邦に委託された権限、クラブから連合体に委託された権限、それ以外のことは、

ロータリークラブの権限として保留する。そういう形で権限を分け合っておるのが、ロータリーという、ＲＩという全体の組織原理なんであります。

じゃあ、先ほどの国家と同じように、それが衝突したときはどうするだと。アメリカ合衆国の場合は、連邦最高裁判所というのがナイスバランスがとれるように、各権限を見まして判決を下していく。じゃあ、国際ロータリーに連邦最高裁判所みたいな権限があるのかと。実は、裁判権はありません。それをどうするのか。要するに、全世界の良心の代表である規定審議会におきまして、その議員たちがそれぞれの判断を下していくということになろうかと思うんであります。

このようにいたしまして、この権限が、それぞれ分け合ってやっておる。ですから、アメリカ合衆国の憲法修正第７条で列記されたその事項、それをロータリーで言えば、先ほど申し上げました連合体がクラブから委託された事項、奉仕理念の追求、ロータリーの拡大、そして情報の媒介、この三つの権限を渡しましたよと、バランスをとっておるわけであります。

そういうふうに分けておったんでありますが、1922年に国際ロータリーが成立しました。先ほど、標準ロータリークラブ定款が採択された年が1922年。そのときに、16のロータリークラブが連合体に三つの権限を委託しました。この委託事項のうち、中核部分についてだけは、国際ロータリーが直接監督権を取得することになった。

そして、その核になる部分とはポール・ハリスが1905年の２月23日に、４人で集まった、あの最初の会合で取り決めた、一つの職種から１人だけ会員を選ぼうという一業一会員制の原則でございます。それから、その１カ月後の３月23日に、シカゴのロータリークラブが創立総会を開催しました。その創立総会で取り決めた規則的例会出席の原則。毎週１回の例会に必ず出席しましょうよという原則であります。この二つの原則を原理的に管理していこうというのが、ＲＩの直接監督権、各クラブを監督する権限の重要な内容なんであります。

実は、この二つの原則、一つの職種から１人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則と、毎週１回例会に出席する規則的例会出席の原則、この二つは、ロータリーの核にあるものなんであります。したがって、このいずれかでもなくなってまいりますと、それはもはやロータリーとは言えなくなるわけであります。

実は、このことを既に1959－1960年度のＲＩ会長ハロルド・トーマス、この人はニュージーランドのオークランドロータリークラブから出ました偉大な思想家でありますが、この人が「ロータリー・モザイク」という本を書きました。この本は、ハロルド・トーマスが1905年から1970年にかけて、その時代に生きたロータリーの指導者から直に話を聞いて、書き綴った偉大なドキュメントなんでありますが、ここで彼は、1970年代において、既にロータリーについて慨嘆をしておるわけです。

どういうことかといいますと、我々多くの者が非常に憂慮にたえないことがある。それは何かというと、ロータリーがその上に樹立されて、今日の力と安定にまで築き上げられた基本的特質の二つが、次第に希薄にされていく傾向にある。この二つとは会員制度における一業一会員制の原則と、もう一つは例会への規則的出席の原則のことです。

ところが、このハロルド・トーマスが1970年代に予測したとおり、一業一会員制の原則は2001年の規定審議会でＲＩレベルでは廃止になりました。それから、規則的例会出席の原則は、既に1968年以降、規定審議会のたび重なる規制緩和によって、全く有名無実になってしまったんであります。結局、この視点から見る限り、ロータリーの核がなくなっております。これは、ロータリーの組織の核が崩壊したことを意味す

るわけであります。

さらに、先ほど御紹介しました個人倫理の核、1915年のサンフランシスコの国際大会におきまして採択されました、全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、これは今井先生がガバナーになられた1980年に、ＲＩレベルで廃止されました。今は、この道徳律というものは、クラブレベル、あるいは個々のロータリアンレベルにおいて機能しておるにすぎません。

さらに昨今、個人奉仕の中核となっておりますロータリーの実践原理の核がロータリー財団への寄附、その他もろもろの寄附の強い要請によって揺らいできております。そのために、ロータリーの実践の中核にあった職業奉仕というものが、宙に浮いてしまっておる状態であります。要するに、世界平和のためには、佐藤栄作元首相の非核三原則によって、核があってはならないんであります。しかし、ロータリーには核がなければならないんであります。

以上、申し上げましたように、ロータリーの核がなくなってしまった。では、核がなくなったロータリーは一体どこへ行くのか。文豪のバーナード・ショーは、「ロータリーよどこへ行くの、おれは知ってるよ。あいつら、昼飯食いにいくんだ」と皮肉ったそうです。しかし、昼飯でも食えればまだいいんであります。もし、このままに推移いたしますと、ロータリーは壊滅して、黄泉の国へ行ってしまうだろうと思うんであります。

昔、どこかのパストガバナーが言いました、「Rotary wasting peace」。平和の中に眠るロータリー、すなわち死せるロータリー。こういう表現をしたことがあります。

では、もしロータリーが壊滅すればどうなるのか。ロータリーという形骸は残るかもしれません。しかし、それはもはや魂の抜け殻でありまして、ロータリーの亡霊にすぎません。では、そこでロータリーは終わるのか。いや、終わってはならないと思います。キリストが復活したように、そこから本当のロータリーを築き上げていくべきだと、私は思うのであります。

一体そんなことができるのか。この人類社会に生まれた良質な思想とか、良質な原理というものは、決して滅び去るものではございません。あらゆる組織とか制度、これは一つの現象であります。したがって、いつかは生命を失って消滅してしまいます。しかし、良質な思想とか原理というものは、人間の本質にあるものでありますから、時代を超越して生き続けるんであります。そんなことがあるのか。一つの例え話をいたします。２人のお坊さんが刀を持ってけんかをしました。１人のお坊さんが、他の坊さんの首を刀でぱんとはねました。その首が中空に飛び上がりました。そこで、飛びとどまる。そして、2000年後の他の坊さんの首にすぽっとおさまった。禅の公案なんかであるんでありますが、この公案をいかに解くか。中空に飛び上がった坊さんの首を思想と考えてください。そして、首を切られて倒れた胴体を組織と考えてください。倒れた胴体イコール組織というものは、そこで死んでしまいます。しかし、中空に飛び上がった首、すなわち思想というものは、時代を超越して中空に飛びとどまって、やがてその思想を受け入れるお坊さんがあらわれたときに、その首にすぽっとおさまって、そこからまたその思想は社会に蔓延していくと、こういうことを意味するわけであります。

そんなこと、現実にあるのか。立証する事実があります。いろいろあるんですが、一つだけ例を言っておきます。

皆さん御存じの古代ローマ帝国、あれは紀元前３世紀から紀元後３世紀にわたって隆々と栄えたんでありますが、紀元後３世紀に滅亡します。しかし、ローマ帝国は、その滅亡の直前に、ローマ法というすばらしい法典をつくり上げておったんであります。このローマ法という法律の中に、所有権の思想というものが残っております。この所有権の思想、所有権の原理と

いうものは、実は現在の私たちの民法第206条に、そのままの形で復活しておるわけであります。国家とか組織、これは目に見えるものでありますが、それは現象的には消滅します。しかし、良質な思想とか原理は目に見えません。こういう本質的なものは決して消滅することはありません。いつかは必ず復活するわけであります。

ロータリーも一つの組織でありますから、時代の変遷につれて消滅することがあります。例えば今の一業一会員制の原則、こういう制度は規定審議会の決定によって消滅してしまいました。しかし、これは一つの現象にすぎないんであります。したがって、その制度に内包された、その制度の内にある良質な思想、良質な原理は、決して消滅することはないと私は思うんであります。私は、今でも、この一業一会員制の原理の優秀性を信じております。したがって、いつかはこの一業一会員制の原則は、制度として現象の世界に復活してくるということを考えるわけであります。

じゃあ、それは一体いつのことか。一業一会員制というのは、ロータリーが創立してから95年の歳月を閲(けみ)して消滅をいたしました。じゃあ、95年のスパンでまた復活するのか。それはわからないです。それは、10年後に復活するか、あるいは100年後に復活するかもしれません。しかし、私は、いつかそのときが来るのを信じて疑わないんであります。私は、ロータリーというものは、未来を夢見る思想だと思います。そして、ロータリアンというものは、すべからく理想主義者であるべきだと思っておるわけであります。

2001年に一業一会員制の原則が廃止されたときに、ロータリーをこよなく愛したロータリアンたちが、ロータリーに幻滅の悲哀を感じ、愛想を尽かして去っていったことは、まだ記憶に新しいところであります。私も、何人かの友人がロータリーを去っていったことを知っております。まことに寂しいことでありました。しかし、私は、ロータリーをやめませんでした。なぜか。私はロータリーが好きだからであります。

世の中には、御主人が倒産をすると離婚をしてしまう奥様がいます。しかし、私は言いたいんであります。いやしくも、偕老の契りを結んで夫婦になったんであれば、主人が立派になったら、一緒に立派になっておやりと言いたい。そして、もし主人がだめになったら、一緒にだめになっておやりなさい。そして、夫婦力を合わせて再生の努力をする。これが夫婦というもんだと思うんであります。

この理は、ロータリーでも同じであります。いやしくも、一旦ほれ込んだロータリーであります。そのロータリーがだめになったからといって、去るべきじゃない。もし、ロータリーが本当にだめになったんだったら、一緒にロータリーとともにだめになっておやりなさいと、私は言いたいんであります。そして、だめになったロータリーと一緒に、その泥をかぶるべきだと思います。そして、ロータリーの死に水をとるべきだ。そして、そこから本当のロータリーを築き上げていく、そういう努力をすべきだと思うんであります。これが、お世話になったロータリーへの務めであろうかと、私は思うんであります。

今、悲観的なことを申し上げました。しかし、私たちロータリアンは、ロータリーというものをこよなく愛するがゆえに、このロータリーを魅力あるものにしていかなければならない。魅力がないために、今、ロータリーの会員が減少する、ロータリー財団への寄附も減少していく。いかにすればロータリーは魅力のあるものになるのか。その前提として、ロータリーの核にあるものは一体何かということを考え直す必要があるだろうと思っています。

そのためには、いろいろな視点がございます。まず、第1の視点は何か。ロータリーは、一つの思想であります。ロータリーと呼ばれる一定

の質の思想なんであります。このことは、決議23の34号の第１項の冒頭に、ロータリーとはという定義があります。そして、ロータリーとは利己、自分を利すること、利他、他人を利すること。利己と利他との調和を目的とする人生の哲学であると規定しております。ロータリーというのは哲学なんです。一つの哲学思想になっております。そういうことを言っておるわけであります。これが、ロータリーの思想の核にあるものだと言えると思います。それは、具体的には何か。ロータリアンの個人倫理の視点から、この思想の核は分析しなければなりません。

そして、第２の視点は何か。ロータリーというものは、巨大な組織であります。今、３万2,000以上のクラブが全世界に存在します。このロータリーの組織、この組織の核は一体何か。こういう視点から分析をしなければならない。これは、定款細則論の視点から分析をしなければならないわけであります。そして、このロータリーの組織の核は何か。先ほど申し上げましたように、それは一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則であります。

そして、第３の視点は何か。これは、実践であります。ロータリーは実践をしなければなりません。いかに高邁な理論を説いても、それが実践されなければ絵にかいたもちであります。こんなものはロータリーとは言えない。この実践のロータリーということを説いたのが、先ほどの決議23の34号の第４項に、ロータリーとは一体何か、ロータリーの奉仕とは一体何を意味するのかという規定があります。ロータリーの奉仕というのは、単なる精神状態、心の問題ではなくて、それが行動によって客観化されたときに初めてロータリーの実践と言えるんだということを説いております。これは、1914年の国際ロータリークラブ連合会の会長でありましたフランク・マルフォランドが説いた議論なんであります。これを1923年に至って、これが決議23の34号の第４項に明文化されておるわけであります。これが実践の核であります。こういう視点から分析をしていかなければならない。

したがって、第１の視点は、ロータリーは思想、思想の核は一体何か。第２の視点は、ロータリーは組織だ。組織の核は一体何か。そして第３の視点は実践だと。実践の核は一体何か。

このようにいたしまして、ロータリーの核というテーマはいろいろな側面を持っておりますが、これらのすべての視点について、今日のこのお話をすることは、時間の関係でとてもできません。そこで、今日は、そのごく一部についてお話をしておきたいと思います。

先ほど、冒頭に申し上げました、アルビン・トフラーの話と、それからチャールズ・ダーウィン説を待つまでもなく、最近は、例えばどんどん時代が変遷しますね。そうすると、昔あった、ラオ屋さん、きせるのラオをつくるね、ああいうラオ屋さんのような職業がなくなってしまいました。そして、そのかわりにＩＴ関連の職業、その他新しい職業がたくさん出てまいりました。したがって、新しい職種をロータリーに入れて、職業分類表というものを整備する必要があろうかと思うんであります。これは、変わっていくべきロータリーの第１になすべき仕事であります。

ロータリーは、地域社会に存在するあらゆる職種の横断面をとらえまして、一つの職種から１人だけ良質の職業人をとってクラブをつくっている。これは、ロータリーの一つの原理でありますね。この一業一会員制の原則については、去る、先ほど申し上げました2001年の規定審議会で廃止になってしまいましたが、これは先ほど申し上げましたロータリーの世界における一つの現象にすぎません。本質の問題としては、まだ消滅していないということであります。すなわち、この制度に内包された良質の原理は、決して消滅することはないということは、先ほど申し述べたとおりであります。

したがって、一業一会員制の原則というのは、

制度としては廃止になりました。しかし、原理としては、いまだ私たちの心の中に生きておるということを忘れてはならないと思うのであります。したがって、一業一会員制の原則を採用するのかどうかということは、今でもこれはクラブ自身が決めること、クラブ自治権の問題なんであります。

一業一会員制の原則が廃止されたからといって、一つの職種から５人入会させなければならないということにはならないわけであります。一つの職種から何人とるかということは、クラブ自身が決める、クラブ自治権であります。おれたちのクラブはおれたちがつくっていくんだ。その権限を絶対的に保証されておるのが、標準クラブ定款の第９条、このクラブの管理主体はこれを理事会とするという、大黒柱の規定がありまして、実はこの規定は国際大会によって決議された定款上の大原則なんであります。このことは、国際ロータリーといえども、その権限を侵すことはできません。しかし、国際ロータリーも絶対的な主権を持っておりますから、クラブの方も国際ロータリー、ＲＩの主権は尊重しなければならない。お互いに権限を分け合ってるということは、もう先ほど申し上げました。

そういうことでありますから、この一業一会員制、廃止になったからといって、５人とらなければならない問題ではありません。現実に、そのクラブが一つの職種から何人とるかということは、クラブ自身が決めたらよろしい。だから、うちのクラブは人数が少ない、もっとふやそうと思ったら、２人とったって結構であります。それは、クラブ理事会で決定すれば、それでよろしいんであります。しかし、一業一会員制というのは、ポール・ハリスが1905年の２月23日に、４人の仲間で集まったときに採択した、すばらしい原則なんです。

なぜ一業一会員制がいいのかと言いますと、我々、この資本主義経済社会は自由競争社会であります。自由競争というのは、同業者の間では、食うか食われるかの関係とします。同業者というのは、同じ業界にいます。だから、お互いに同業者というのはいいところも知っています。しかし、悪いところも醜いところも汚いところも、お互いに同業者であるがゆえに知り尽くしています。だから、彼はおれの欠点を知っておるなということがあるから、容易に心を開いて仲よくなることができない。

ある、国際ロータリーの元会長が述懐をしております。「おれは、あの男を人格高潔なすばらしい人間だと思う。しかし、彼と一緒におると、どうしても気持ちが落ちつかない。なぜかなと思ってよく考えたら、彼とおれとは同業者であった。」こういうエピソードが残っておる。だから、ポール・ハリスは、同業者がおってはクラブの親睦が保てないから、同業者を排除して、一つの職種から１人だけ会員をとろうよということを、1905年の２月23日、最初、ポール・ハリスたちが４人で集まったときに、ポール・ハリスみずからが提案をして承諾を得た。まさに、ロータリーの核にある大原則なんであります。

したがって、この一業一会員制をとるかどうか、それはクラブ自治権の問題だと申し上げました。しかし、そういうことを知っておるクラブは、今でも一業一会員制を守っております。

兵庫のあれは神戸クラブですか、神戸クラブの人に聞きました。あそこは150人以上ですか、おられる。だけど、うちは一業一会員制を守ってますよとおっしゃってました。現実に私が調査したわけでありませんけども、神戸クラブの人が言ってるだから間違いないだろうと思います。

それから、先月、坂出のＩＭに行きました。飯ガバナーも来ておられたんでありますが、そのとき、香川県のガバナー補佐に聞きました。皆、一業一会員制を守ってますよと。そして、さらにその１カ月前に、松山のＩＭに行きまし

た。そのときにも飯ガバナーがおられたんでありますが、そのガバナー補佐、佐々木ガバナー補佐、実は私と同期の佐々木善教さんの、もう亡くなったんでありますが、その人の息子さんなんでありますが、その人もやはり、うちのクラブでは一業一会員制を守っておりますと、こういうことを言っておられました。

したがって、この一業一会員制をとるかとらないかは、クラブ御自身がお決めになって結構であります。ただ、この原則はポール・ハリスがロータリーの発足に当たって決めた、偉大なるすばらしい原則だということだけは心にとめておいていただきたい。それを採用するかどうかは、各クラブが決める。これは、各クラブの自治権の問題でありますから、それでいいだろうと思うんであります。

それから、女性会員の問題であります。これも、ロータリーがどんどん変わってきた一つの問題だったんであります。従来、ロータリーでは、男性だけが会員として認められておりました。標準クラブ定款の第５条の第１節によって、ロータリーの会員身分というのは成人の男子に限るとしておったんでありますが、それを1989年の規定審議会において、その門戸を女性に開いたんであります。この規定審議会は、たしか今井先生、出席されてましたね。たしか、そのときに、規定審議会の結果報告を、私、聞きました。女性の会員が認められた、1989年であります。

そのことのロータリー的な意味は一体何かということであります。アメリカの連邦最高裁判所も、これについて判決を出しておるんでありますが、私はロータリーの原理から見て、この女性会員の入会をいかに考えるかということを申し上げておきたいと思うんであります。

女性会員入会の発端は、カリフォルニア州のデュアーテのロータリークラブが、３人の女性会員を入会させたんであります。これは、当時の定款に違反しますね、成人の男子に限るという。それに対して、３人の女性会員を入会させたんであります。したがって、国際ロータリー、ＲＩは、そのデュアーテのロータリークラブに対して、それを改めなさいと何度も勧告したんでありますが、デュアーテのロータリークラブは言うことを聞かなかったんです。そこで、国際ロータリーは、国際ロータリーの理事会が、このデュアーテのロータリークラブをロータリーの世界から放逐する、除名処分にしたんであります。

ところが、デュアーテのロータリークラブも黙っておりません。その翌年、東京の国際大会で、このＲＩ理事会の決定に対して異議を申し立てて、そして全体の判断を求めたんであります。そこでは、結局、ＲＩ側が勝訴しまして、デュアーテのロータリークラブは敗訴。それじゃあ、デュアーテのロータリークラブはそれで納得したのかなと思うと、そうはいきませんで、国際大会で却下されてしまった。そこで、今度は司法判断を求めたんであります。カリフォルニア州の地方裁判所に提訴しました。そこでも、結局、ＲＩ側が勝訴して、デュアーテのロータリークラブは負けたんであります。そこで、デュアーテのロータリークラブは、アメリカの連邦最高裁判所へ上告をいたします。ところが、その連邦最高裁は、デュアーテのロータリークラブを勝訴させたんです。ＲＩが敗訴したんであります。

そのことは一体どういう原理構造になっておるのか。私は、連邦最高裁の判決ではなくて、そのことをロータリー的な組織原理から理由づけをしておきたいと思うんであります。

憲法第21条、日本の憲法ですね。集会、結社の自由というものがあります。したがって、男だけのクラブをつくることも、そして女性だけのクラブをつくることも、この憲法第21条の集会、結社の自由からいきますと、完全に自由であります。だから、ロータリークラブも、男性だけのクラブをつくったっていいわけでありま

す。また、女性だけのクラブをつくっても結構であります。したがって、それは憲法の保障するところなんであります。

それじゃあ、なぜ連邦最高裁がＲＩを敗訴させたのか。それは、ロータリークラブというものは、一業一会員制の原則をとって、地域社会に存在するすべての職種から１人ずつ会員をとるという、いわゆる職業分類クラブ、クラシフィケーションクラブなんですよ。ところがロータリークラブは奉仕クラブであるという言葉が見受けられるようになった。私は、これちょっとロータリーがおかしくなったなと思ったんであります。日本ロータリーの創始者であります米山梅吉先生が言ってます。ロータリークラブは奉仕クラブではない。クラブとして奉仕するべきものは、原則としては何もないんだと。じゃあ、一体、ロータリークラブは何をするところか。それは、奉仕をするロータリアンを育てる、教育するところだ、こういう言い方を米山先生はなさっている。これは、ロータリークラブは奉仕クラブではなくて、社交クラブであって、その実質は職業分類クラブだということをおっしゃってるわけであります。

そうだとしますと、その職業分類クラブ、地域社会に存在するすべての職種、その中から必ず１人ずつ会員をとってくる。そして、その職種に良質な人だけをとる。だから、その職種に女性しかいなければ、女性をとらなければならない。こういう宿命を持ったのがロータリーの職業分類クラブです。そして、もし女性と男性とおった場合には、そのどちらか、良質な方を１人とりなさい。これが一業一会員制の考え方。だから、同じ職種に２人ロータリアンがおって、女性の方が良質であり優秀であれば、女性の方をとらなければならない。こういう原理になってくるわけであります。

この原理から言いますと、女性会員の問題というのは、実は1908年に、ロータリーの哲人と言われたアーサー・フレデリック・シェルドンが確立した、「この地域社会に存在するすべての職種から１人ずつ必ずロータリアンをとってきなさい」、こういう原理の理論的な帰結であったということができる。だから、シェルドンがその地域社会に存在するすべての職種から良質な人を１人だけとれという一業一会員制の原則、あれができたときに、1989年の女性会員問題は、そこでもう既に理論的な根拠を与えられておったということが言えるわけであります。これが、女性会員誕生の原理的な根拠なんであります。

その次、会員構成の問題についても、ちょっと触れておきたいと思います。

例えば、零細企業の経営者も、ロータリーの組織に入れなければなりません。昔の日本のロータリーは、実力100万石の大実業家ばかりで組織されておりました。そのことのよしあしは別にいたしまして、そういう事実があったことは間違いありません。これは、アメリカのロータリーと比べると、非常に対照的なんであります。

アメリカのロータリーは、ポール・ハリス始め４人で集まった。それからしばらくの間は、まさに貧乏人ばかりの零細企業者の集まりだった。これがロータリーの出発点であります。しかし、だんだん原理的に自覚をし、職業倫理を身につけ、そしていろんな企業上のノウハウを交換しながら、職業奉仕というものを実践していって、だんだんみんなが栄えていったんであります。そして、1910年ぐらいになると、もう一流の起業家がたくさん入ってきた。これが、ロータリーの発展の過程であります。

しかし、日本のロータリーは、一番最初から、もうすばらしい実業家、あるいは専門職業、そういう人たちばかりで組織をしておりました。しかし、金持ちであるということは、ロータリーの会員選考の基準とはならないんであります。お金持ちであるから、これは良質なロータリアンだとは言えない。お金がなくたって、私

みたいな貧乏弁護士でもロータリアンの資格はあるんであります。あくまでも、会員選考の基準は何かというと、良質性が基準になるわけであります。ひたすらに良質な人たちだけをとっていく。そのことによって、魅力のあるロータリーができるんであります。

最近、この会員選考が割合おろそかになってまいりまして、昔のロータリーは物すごい厳しい会員選考をやりました。したがって、私の友人の話をちょっと紹介しておきます。

彼が神戸クラブに入会するときです。推薦者が、おまえ、神戸クラブへ入会しないかと勧誘したんであります。すると彼は、あんなかた苦しいところへ入るのは嫌だといって、全然入らなかった。しかし、お年寄りというのは執念深いもんでありまして、執拗に勧誘をする。彼もついに負けまして、じゃあ入りましょうと。その推薦者は大変喜びまして、うんわかった、それじゃあ明日の朝９時におれの会社に来いよと。彼はとにかく行ったんです。そうすると、朝９時から夕方の４時まで、延々とロータリーの講義が続いたんであります。ロータリーの組織は何か、ロータリーの原理は何か、ロータリーの思想は何か、そしてロータリーの実践はいかにあるべきか。昼飯は食わしてもらったそうですけど、とにかく立て続けに講義を受けて、彼はうんざりしたんであります。しかし、このまま帰ったら悪いと思って、彼は質問したんであります。そうすると、その人が、おまえはまだ何もわかっとらんから、もう一度明日の朝９時に来いと言って、また朝９時から４時まで講義を聞かされて、やっとロータリーに入会させてもらったと言って笑ってました。

なぜここまで会員選考をやかましくするのかという問題であります。それは、１人でもロータリー的な人間、ロータリーがみんな仲よくする親睦、そういうことのできない人がロータリーに入会してしまうと、何億円出してもあがない得ないほど尊いロータリーの親睦、自分たちの仲間の親睦が崩れてしまうんであります。だから、会員を１人入れるときにも、徹底的に教育をして、この男なら自分たちの仲間に入れても大丈夫だということを確信した上で入会させておったんであります。これが、昔のロータリーの会員選考のあり方です。ですから、会員選考についても、14段階の過程を踏んで、やっと入会を許される。それが、今は６段階。それのみならず、こういう厳密な会員選考をして入会をさせておるクラブは、今ほとんどないと思います。とにかく、ガバナーの会員増強の声に押されまして、だれかれ構わず、とにかくお願いを申して入れてしまおうという風潮が強いんであります。これではロータリーは魅力あるものにはなりません。会員選考とか会員の教育、ロータリアン教育をいかに充実させるかということが、ロータリーの魅力を発展させる、ロータリーの核にあるものを大事にすることが、大前提条件なんであります。

もう一つ例を言っておきます。東京南クラブの黒澤張三さんという、職業奉仕の本家みたいな人、今、たしかもう99歳ぐらい、100歳近いですね。この間、会ったんで、まだお元気なんです。黒澤さんに、私、聞いた話です。東京南クラブというのは、お堀端のパレスホテルで例会をやって、ひな壇があって、その前にたくさんテーブルが並んでいます。会長、幹事のおるひな壇の真前の二つのテーブルだけは、グリーンのテーブルクロスがかかっている。ほかは、全部真っ白なテーブルクロスです。あそこは、たしか200名以上会員がおる大クラブでありますね。そのグリーンのテーブルには、必ず入会６カ月未満の会員は、そのグリーンのテーブルクロスのあるテーブルに座るんであります。そこで、そのテーブルには、元会長、それから元幹事、ロータリー情報委員長、それからパストガバナー。要するに、ロータリー経験の深い人が、必ず毎週、何人かそのテーブルに座って、そして口コミでロータリーの教育をしていくん

です。そして、6カ月たったら、「うん、やっと一人前。我々の仲間になった」と言って、白いテーブルクロスの方へ移っていく。こういうシステムをとっているんです。

二、三年前に黒澤さんに会ったときに、「黒澤さん、あれまだやってるの」と聞いたら、「やってますよ」とにこにこしていた。しかし、その後がおもしろい。「やってますけど、最近はグリーンのテーブルクロスで新入会員を教育する会員を、今、教育しなければならなくなってきた」と笑ってました。だけど、そこまでやって、とにかく会員一人一人を教育していこうというのは、東京南クラブというのは私はすごいクラブだと思う。今でもやってる。

そういうことを各ロータリークラブがやるということが、各クラブの自治権を確立するための基本前提。そういう人たち、教育されたロータリアンばかりが集まって初めてロータリーの魅力というものは出てくるんだろうと思うんであります。これが、ロータリーの核にあることであります。

したがって、ロータリーは人を育てると言います。人を育てるということは、大変大事なことなんでありまして、今、子供たちを育てるということも、一つ心にかけておかなきゃならない。青少年の問題ですね、未来の青少年を育てる。今年度のウィルキンソンＲＩ会長エレクトがおっしゃっています。「青少年というのは、私たちの未来の宝なんだから、それをどうしても育てなきゃならない。だから、子供たちの時代から育てていかなきゃならない」ということをおっしゃっていました。そのためには、ウィルキンソン会長エレクトは、一貫して国際協議会で述べておったのが、愛ということ。ロータリーは愛と親切心、他人に親切にする心。この愛と親切心が一番大事なんだということを説き続けておられます。

愛ということにつきまして、これは大事なことなんでありますが、青少年、特に子供に対する愛について言いますと、例えばある幼稚園の先生が言いました。大変裕福な家庭の子で、家に帰ったら、おもちゃでも何でもあるような家の子でも、愛されていない子は、おもちゃを他の子供に分けることができないそうであります。人に物を分けることを知らない。そして、いつも先生の手をとって先生を独占しようとします。したがって、豊かな家庭に育っておっても、本当の愛情を受けていないわけであります。したがって、愛されていないから、愛情飢餓になって、とにかく愛されたい、愛されたい。愛されることしか考えない人間になってしまって、人を愛する心のゆとりを失ってしまうわけであります。したがって、子供というのは、少なくとも幼児の間は抱き締めるようにして、なめるようにして愛してやるべきだと思うんであります。そうでないと、人は育たないと思います。

よく、抱き癖がつくなんていって、子供を抱かない母親がいます。抱き癖がつくなんて、恐らくどこかの評論家が言ったことだろうと思うんでありますが、とんでもないことであります。赤ん坊というのは、母親にいつも温かく抱かれておることによって、愛されておることを肌で感じるんであります。そして、母親に対する信頼感を持つわけであります。赤ん坊というのは、母親の心臓の鼓動を聞いて育つんだと、こういう哲学的な言い方をする先生もいるわけであります。

人間の世界でもそうでありますけども、これはチンパンジーの世界でも同じでありまして、チンパンジーは産まれた子供を6カ月間、自分の腹に抱き続けます。ところが、人間のエゴで、あるとき3カ月ぐらいでその子供を離して育てたんであります。やがて、その子が成長して、子供を産みました。すると、その母親になった子は、恐怖の余りに、産まれた子供を投げ殺してしまったんであります。これは一体何を物語るかということです。チンパンジーというのは、

６カ月間、母親に抱き締められて温かく育てられることによって、母親の愛情を一身に受けとめて、初めてチンパンジーとしての生き方、母親からそういうものを授けられていくわけであります。いろんな、人間には人間の知恵があります。チンパンジーにはチンパンジーの知恵があります。そういう生きる知恵、自分が大人になったらどうやっていくのか、そういうことを６カ月間、チンパンジーは抱き締められながら、母親から授けられていく。

ところが、人間のエゴによって、３カ月で母親から引き離してしまう。結局、その子供は、母親から愛情を受けるのを３カ月でとめられてしまいます。したがって、母親を愛することも知らずに、自分が生きていく上での大切な自然の摂理というものを授けられないままに育ってしまうわけであります。したがって、３カ月で引き離されたこのチンパンジーの子は、大人になっても、自分の子供を愛することができないんであります。

このようにいたしまして、子供というのは、まさになめるようにしてかわいがって育てるべきだと思うんであります。そうでないと、人は育たないと思います。そしてそのことは、自分自身がかわいいからこそ、相手を愛することができるということを意味するわけであります。要するに、愛されていないと、人を愛することはできません。したがって、今の子供たちがいじめに走っていくのは、自分が愛されていないからだと言えると思います。優しくされていない子は、人に優しくすることもできません。

ローマの格言にあります。「人はおのれの持っていないものを人に与えることはできない」。自分が権利がない、無権利者であるのに、他人に権利を譲り渡すことはできない。それと同じことなんであります。自分の持っていないものを他人に与えることはできません。したがって、自分が愛を持っていなければ、それを人に与えることはできないわけであります。人に優しくすれば、その人は優しくなってくれます。子供を愛すれば、その子供は他のだれかを愛することができる子供に育っていくわけであります。

ところが、今の親は、お金しか愛していない、名誉しか愛していない、自分のエゴで子供を進学させたり、入学や受験させたりしています。そうではなくって、子供によくやったと抱き締めてやる。そういう愛情が必要であろうかと思うんであります。

もうやめましょうか。１時間たったな。疲れたでしょう。じゃあ、もうちょっとしゃべってやめときます。

子供が愛されていないと、子供が優しくなれない。最近、少年の犯罪が非常に残酷になったと言われております。私は数年前に、19歳の少女２人を含む数人の少年が、１人の青年を殴り殺したという残虐な事件に、弁護士として関与したことがあります。これは、平成13年４月１日から少年法が改正されて施行されていったのも、こういう事件が当時多発しておったことが一つの原因かもしれません。しかし、果たして少年は残虐になったのか。元来、子供というのは、大人に比べて残虐なもんであります。

私どもが子供のころは、蛇をとってきたら、くるくると回して、ばたんとぶっつけて、よく殺して。子供は、それを何とも思わない、喜んでやっていたんです。例えば、ムカデの牙を抜いて、ここ手をはわして喜んだりね。あれ、ムカデはそんなことされたら、生きていけない。そんなことまで考えない。それから、空気銃でスズメを撃って喜んでる。私もやりましたけども、スズメの命が失われるということに対して、何の罪の意識もない。それが子供なんであります。

この子供、これはなぜそんな残虐なことをするかというと、それは結局は人間としての情緒がまだ不安定でありまして、未成熟だからこそそういうことをやるんだろうと思うんであります。しかし、その子供も、大人になりますと、

そういうことはしなくなります。なぜか。やはり人間というものは、成長するに従って情緒が安定し、心の中に歯どめができて、残酷なことをしなくなると思われるわけであります。いろいろな体験を積むことによって、世の中の成り立ちとか、ものの命の大切さ、いとおしさ、不思議さというものに目覚めるようになるわけであります。例えば、仏心がつきますと、鳥や動物を殺さなくなります。私も若いころは、猟銃で鳥を撃ったりしていました。だけども、長ずるに及んで、死ぬときに目をつむる鳥を殺すことができなくなりました。魚は平気で殺しますけどもね。それなんかも、やっぱり成長するに従って、仏心みたいなもんが出てくるんだろうと思うんであります。

要するに、人間というものは、子供から大人に育っていくに従って、心の中に歯どめができて、通常は残虐なことはしなくなるんであります。しかし、問題は、大人であっても、心の中の歯どめがなくなりますと、すなわち先ほどちょっと触れましたね、戦争という異常事態になりますと、人間は残虐なことを平然と行うようになります。

例えば、先ほどちょっと触れましたナチスの残虐さは、まさに目に余るものがございました。また、しかし日本人でも、戦時中に捕虜になった人を生体解剖実験、生きてるまま解剖する実験、そういうことに参加して、そして後でこの人は戦争犯罪人になって処罰されました。この戦犯の人は、ごく普通の人間だったんであります。後で当時を振り返りまして、「戦争中は心の中に何の抵抗もなく、ああいう残虐なことをしてしまった」、このように述懐をしておるわけであります。

このようなことを考えますと、少年に限らず、人間というものは、もともと残虐なもんなのかもしれないんであります。人間は、だれでも残虐になれるということも言えるかもしれません。しかし、子供の残虐性は、大人の残虐性とは違います。それは、心がまだ未成熟なための残虐性であります。これは、教育によって改善できる可能性が大きいと言えるわけであります。したがって、少年犯罪の残虐性をどのようにして改善することができるのか。これは、結局、道徳とか、ロータリーの説く倫理によって解決すべき問題。つまるところ、これは教育の問題だということが言えるだろうと思うんであります。

少年の非行というのは、家庭に問題があるとよく言われるわけであります。先ほど、私が担当した事件につきましても、この子供の非行の一番の原因は、親が子供を甘やかしたことにあるわけでありまして、このことは後で両親も反省をしておりました。例えば、その母親は、子供の欲しがるままに小遣い銭を与えておりました。これでは、金のありがたみも何もわかりません。また携帯電話、これについても使い放題でありまして、電話料を毎月１万5,000円も２万円も使っておったんであります。この辺は、この母親も反省しまして、リミットプラス方式というものを採用して、一定の料金以外は使えないようにする、こういうシステムに切りかえたりしております。

それからまた父親であります。少年はたばこを吸っております。しかし、それを黙認をしておりました。これは自分がたばこを吸うから子供に強く言えないと、こういう意識があったのかもしれませんが、未成年の喫煙は法律で禁止されておるわけでありますから、父親としては、悪いことは悪いと言って厳しくいさめるべきであったと思うんであります。父親自体に世の中のルールを守るという規範意識がなかったら、子供のしつけなんかはできるはずがないわけであります。とにかく、この世の中一般に規範意識が薄れてしまった。

このことはロータリーの世界でも同じです。ロータリアンが基本的なルールを守らなくなってまいりました。これは、1999年から2000年に

かけてのＲＩの会長でありましたラビッツァ会長、イタリア出身。あの人が、ロータリーの魅力がなくなった最大の原因は何か。それは、ロータリアンが基本的なルールを守らなくなったからだ。だから、ロータリーの魅力が減退してしまったと、このように結論づけておるわけであります。

話がちょっと飛びましたが、また従来、放任主義で親は育てておりましたから、子供の家庭の中の役割というものが全くない状態であります。すなわち、しつけというものが全くなかったんであります。したがって、例えば夕食の準備や後片づけをするとか、部屋の掃除をするとかして、それからまたふろの準備をするとか、子供に役割を与えるべきであったんであります。やはり子供というのは、それを育てるためには、他律、他から規律する。他律から入って、自律、自分が規律する。他律から入って自律に導くべきだと思うんであります。したがって、最初は親が厳しくしつけることによって、子供が自分に与えられた役割を果たすようになる。子供の人間的な成長につながっていくわけであります。したがって、子供が自覚と責任を持って、自分のことは自分でするようにしつけること、これが大切でありますが、私が担当したこの事件の両親は、全くそれをやっていなかった。

その親だけじゃなくて、私は高等学校の理事長をやっておりますが、このごろの若いお母さんたちは、全くしつけを受けていない。ルールも守る気がない。わからないんです。

子供が、うちの学校では単車を禁じておるんです。単車はいけないのにかかわらず、乗ったんです。それで、校長に呼び出されて、校長譴責です。母親とその子供が、校長の前に来ました。その母親が言うんであります。「あんた、単車に乗らないという約束で買ってやったのに、なぜ乗ったんだ」と言う。うちの校長は、それを聞いて、あいた口がふさがらなかったって。とにかく、母親がこのていたらくですから、それはもうしつけもくそもないんで、今、大変です、学校の現場は。学校の先生が悲鳴を上げているんです。生徒の質も随分変わってきました。だから、もう小学校から大変ですから、大変なんです。今、だから学校の先生、一番受難の時期だと思いますが、そんなこと言っとったってしようがないんで、何とかしていかないと、この状態。だって、その母親自体が親からしつけを受けていないから、しつけを受けてない母親が子供をしつけることなんて、到底できないわけであります。

したがって、この事件の両親は、子供の欲しがるものを全部与える。そして、子供の好きなようにさせることが、子供の幸せになるという誤った考え方をしておったのであります。

やはり、子供というのは、小遣い銭が足らなくなると、何のちゅうちょすることもなく万引きをしたり、そして万引きをした本を売って小遣い稼ぎをしてしまう。やはり、子供には辛抱させるということを教えなければならないと思うんであります。また、子供には、つらい思いもさせなければなりません。そのことによって子供が育つんであります。昔から、かわいい子には旅をさせよというのはこのためであります。

子供には苦労をさせなきゃならないということにつきまして、ノーベル化学賞を受けた福井謙一先生の話を紹介しておきます。

これは、アメリカのハーバード大学の２人の博士が、ノーベル生理学・医学賞を受賞したんであります。それは、どんな研究でとったかといいうと、猫の目の研究なんであります。生まれたばかりの子猫の片方の目に眼帯をかけます。それも、生まれてすぐかけたり、それから１時間後にかける。そして、２時間後にかける。あるいは、１日後にかける。そしてまた外すのも、すぐ外したり、１時間後で離す、１週間後で離す。そういうぐあいに、ありとあらゆる実験をいたしまして、それを科学的に分析をした

研究で、ノーベル賞を受賞したんであります。これは、人間の教育ということについて大きく貢献する研究だと思う、このように福井謙一先生は述べておられます。

どういうことかと言いますと、ある一定の期間、眼帯をかけておくと、かけていなかった方の片方の目は見えるのに、眼帯をかけておった方は、永久に視力を失ってしまうんであります。眼帯をかけないということを別の言い方で表現しますと、目をいろいろな苦労にさらすということなんであります。強烈な光もあります。また、ちりも入ります。つまり、目が苦労することによって、目が物を見ることができるようになるんであります。それを眼帯というものでカバーして、何の苦労もさせないでおきますと、物を見ることができなくなる。そういう目の本来の機能がなくなってしまうわけであります。このことは、ノーベル生理学賞の対象となった研究で証明されておるところあります。

この実話を日本でも聞いたことがあります。昔、空襲警報がありますね。生まれたばかりのお母さんが、その子供をいつも洋服ダンスの中に、暗いところに入れておった。そのために、その子供は視力が非常に衰えてしまったということが報告されております。だから、やはり人間の体というのは、苦労をさせなきゃならない。私たちの体には、こういうすばらしい力があること、そしてそのことは苦労をすることによって初めて育つんだということを知っておかなければならない。したがって、楽をすることとか、思いのままにすることが幸せであると、こういう間違った考え方を改めなければならないと思うんであります。

もう一つ例を言っておきます。これは、国際キリスト教大学の石川光男先生が、緑健農法の話をなされておりました。リョッケンというのは緑と健康の健。緑健農法であります。この農法は、野菜を育てるときに極端に厳しい条件を与えるんです。そういう考え方をとっております。例えば、野菜はしおれる寸前まで水をやらない。こういう水のやり方をいたしますと、ごく薄い養分を含んだ水を、地面の表層がぬれる程度、ごくわずかずつかけてやります。これを繰り返していきますと、野菜は少ない水を求めて、地上に細かい根を縦横無尽に張っていくんであります。このように、厳しい条件の中で、野菜は必死に細かい根を地表に張っていきます。そのおかげで、野菜は厳しさに耐えることができると同時に、わずかな水と養分とで自分の力でどんどん吸い上げていく。そのことによって、驚くことに、近代農法よりもはるかに栄養価が高くて、おいしい野菜ができるそうであります。

このように、ものの命を育てるためには、厳しさもまた必要なんであります。私たちも、また人間であり、同じ考え方でいいと思うんであります。私たちがいつも快適な温度、快適な湿度の生活を続けていきますと、いつの間にか私たちの生活機能が衰えていきます。日本人というのは、日本の気候風土の中で、四季折々の暑さ、寒さにある程度、体をならした方が、生活機能がよくなるわけであります。

このように考えますと、家庭で車やクーラーを使うという、この快適重視の考え方は、かなり問題を持っておるということになるわけであります。ある程度、夏の暑さに体をさらすという発想に立ちますと、むしろ家庭や車でクーラーを使わないで、暑さに体をならすという考え方が必要になってまいります。もしも、子供を薄着で育てると、冬に風邪を引きにくい子供が育つ。つまり、物の命を生かすためには、厳しさもまた必要なんであります。したがって、昔からある冷水摩擦の考え方というのは、同じような考え方に立っておるわけであります。できるだけ薄着をするという考え方も、また同じであります。

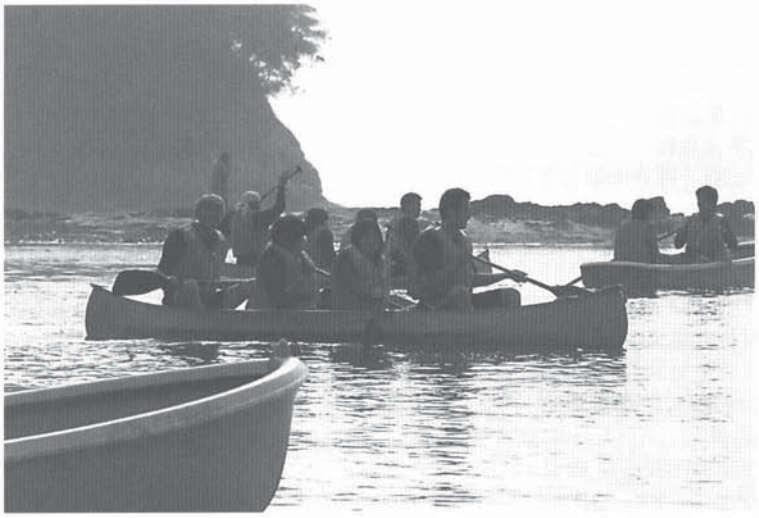
このような考え方に立ちますと、快適に対して快適でない、非快適、豊かさに対して貧しさ、

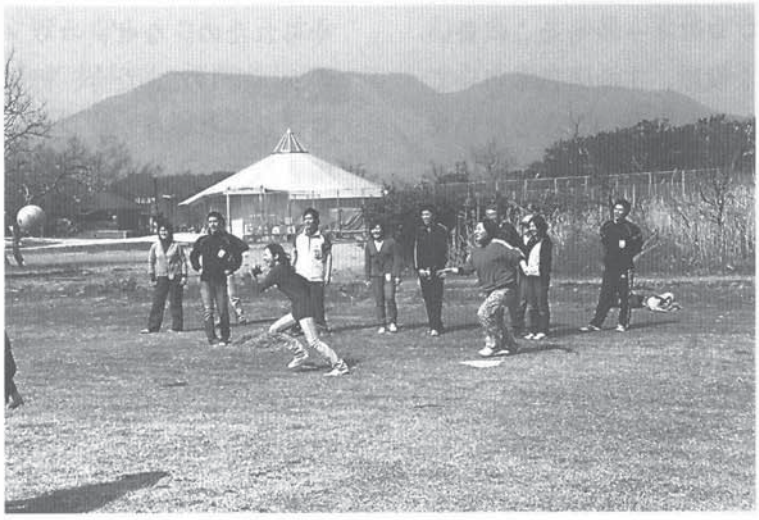
楽に対して厳しさ、こういう反対の価値をこれからの文明の中に取り入れていく、あるいは私たち個人の生活の中に取り入れていくという考え方は、大変重要な物差しになってくると思うんであります。

要するに、人を育てるとか、子供を育てるとか、そういうことは、やはり一定の厳しさがあって、それが本当の愛とか、会長エレクトの言う親切心になっていくと思う。子供の好きなようにやらせていることは、何もそれは愛でもなければ親切心でもないということを申し上げればよろしかろうと思うんであります。

ロータリーの話になってるのか、健康の話になってるのか、よくわからなくなりましたが、一応この程度で御勘弁をいただきたいと思います。

御清聴ありがとうございました。





日本人の貧しい選択

保田　茂 先生

神戸大学 名誉教授
兵庫県農漁村社会研究所 所長

プロフィール

■ 略　歴

1962　兵庫農科大学（現、神戸大学農学部）卒業
1965　大阪府立大学大学院農学研究科修士課程終了
1965　兵庫農科大学助手
1967　神戸大学助手（国立移管）
1985　農学博士（京都大学）
1986　神戸大学講師（農学部）
1990　神戸大学助教授（農学部）
1992　神戸大学教授（農学部）
1999　日本有機農業学会会長
2003　神戸大学定年退職、神戸大学名誉教授

■ 主な役職

兵庫農漁村社会研究所 所長
ひょうごの食研究会 幹事長
兵庫県環境創造型農業推進委員会 委員長
兵庫県ふるさと水と土保全対策委員会 委員長
兵庫県安心ブランド認定審査会 委員長
農林物資規格調査会 委員
コウノトリ野生復帰推進連絡協議会 委員

■ 主な著書

1986『日本の有機農業』　ダイヤモンド社
1994『有機農業運動の到達点』　スペースゆい
1989『環境保全型農業の展望』（共著）　農山漁村文化協会
1991『都市と農村を結ぶ』（共著）　富民協会
1998『国際競争化の農業・農村改革』（共著）　農村統計協会
2098『地球時代の経済学』（共著）ミネルヴァ書房
2001『有機 JAS 認定申請の方法』（共著）　全国農業会議所
2001『ごはん万歳』（共著）　神戸新聞総合出版センター
その他共著多数

○山口　徹　今日、お話しいただきますのは、神戸大学名誉教授の、そして今現在、兵庫農漁村社会研究所の代表でいらっしゃいます、保田茂先生です。先生のプロフィールもそこに書いてございますし、主な役職、主な著書も書いてございますので、お読みいただいたらと思います。

私も何度か先生のお話を聞いておりますが、これからの人生、今日の先生のお話は、むちゃくちゃためになりますよ。さっき先生、もう既に皆さんが食事しておられたでしょう、どんな選択をしてるか、チェックされてましたよ。皆さんの選択は、合ってるか間違ってるか、これも話があるかもしれませんが。それから、もう一つは主な役職の一番下に、コウノトリ野生復帰推進連絡協議会委員とある。みんな、あのコウノトリは知ってるでしょう。一生懸命、先生やられたの。なぜ、コウノトリがいなくなったのか。そしてまた今、野生復帰をやるためのプログラムというかプロジェクト。コウノトリを飼育して、ふやしたり、そして自然に帰すためには、いろんなプロセスがあるんです。地域の農村の人たちの協力という、そんな話も多分していただけると思います。大変興味深いお話をいただけることと思います。

早速ですが、保田先生よろしくお願いします。

※講義中に説明のある図表については本文後にまとめて掲載しています。

○保田先生　おはようございます。

元気？寝不足？大丈夫？大丈夫。じゃあ、おつき合いよろしくね。

みんな、こんなん知ってるね。これ、何？今、食堂でもらってきたんやけど。何。フレッシュ。コーヒーフレッシュ。フレッシュってどういう意味？新鮮。これ、常温保存してるね。冷蔵庫入れてないでしょう。その辺に転がってますよね。何でフレッシュなん。中身、何？ミルク。ミルクを常温保存して、大丈夫？殺菌してあるから。どんな殺菌した牛乳でも常温保存しないでしょう、牛乳製品ね。君んちの牛乳製品、常温保存してるの。じゃあ、コーヒーの店だけは大丈夫なん？ここの食堂も大丈夫？あんまり、そういうことは知らないよね。習わないもんね。中身はサラダオイルです。サラダオイル。つまり、コーヒーにサラダオイルを落としたと同じ意味ね。え、だって油浮かないもんね。わかんないね。サラダオイルに界面活性剤という薬を入れると牛乳そっくりの製品ができ上がるんです。界面活性剤というのは水と油をなじませるでしょう。だから、コーヒーに入れてもすっと水になじんであたかも牛乳を入れたようになるのね。じゃあ、今日の昼からコーヒー飲むとき、これ使うとき、あ、サラダオイル入れて飲むんやなと思って飲んでみて。ついでに、サラダオイルだけだったら油ぎらぎらするから、そこに石けん液を一滴落とすと、石けんって界面活性剤やからね。そうか。ほんなら、コーヒー飲むときこれ使ったらサラダオイル一滴落として、一滴どころじゃないね、これ。大分入ってるからね。サラダオイル５滴ほど入れて、石けん液も５滴ほど入れて飲んだのと同じかなと思って飲んでみて。

今日はいろんな話をしますけど、事のよしあしは皆さんで判断してね。淡々と客観的事実だけを話するからね。これも一つの選択の仕方です。コーヒー飲むときは使うか使わないかというのは、君たちの選択。だって、これなかったら飲めないもんと言うんだったら、コーヒーを飲むかどうかを選択する。

そこにコーヒーあるね。おんなじようなものが入ってるよ。缶コーヒーには角砂糖は何個入ってると思う？君たち、コーヒーショップ行って、コーヒー飲むとき角砂糖何個使う？このごろ、角砂糖ないか。じゃあ、スティックのあの袋、何袋使う？あれ、１本３グラム入ってますが。今の角砂糖、昔の角砂糖はでかかったから５グラムだったんです。今はあんまり大きいの使うと、みんな嫌うんで、３グラムの角砂糖になってます。小さくなってるんです。とりあえず、３グラムの角砂糖で君たちコーヒー飲むとき何個使う？２個？じゃあ、缶コーヒーに何個入ってると思う？15個？メーカーによって違うけど。15個入ったら、ちょっと甘くて飲めないと思うんでね。大体、７個ぐらい入ってるかな。コーヒーショップで２個使うか使わないかの選択をしながら、缶コーヒーでは７個の分、選択するねんね。すごい豊かな選択ね。

今日、私、貧しい選択というテーマいただいたけど、君たちすごい豊かな選択をしとんねんね。で、幸せ？幸せやね。こんな豊かな選択をしてるわけやから。そういう幸せな選択をしていると、ロータリアンのあの先輩の皆さんのような体になっていくねんね。ほら、山口さんの体見て。すごい豊かな体ね。豊かな選択の結果がこういう体として証明されていくわけです。じゃあ、この豊かな体が豊かな人生を意味するかどうかやね。

今日は、食料と環境というふうなことを中心にしながら、私たちの豊かな選択について考えてみたいと思います。皆さん、環境問題、興味あるよね。何で環境問題に興味があるんですか。私が学生のころには、環境問題なんかあんまり興味ありませんでした。社会の問題になっていなかったからです。なぜ君たちは環境問題に興味があるの。多分、君たちの正義感が許さないんやね。そうやね。じゃない。自分の命に関係

があるからと思うから。若者の一つの特徴は、やっぱり社会の矛盾にやっぱり許せない気持ちが働く。これは、若者の特徴なんやけど。社会の矛盾に許せない気持ちはいっぱいある。そんなことはどうでもいい。何か今の若者は少し違うというふうにも言われてるんだけど、僕はそう変わっていないんじゃないかとは信じてるんですけどね。

とりあえず、環境問題の一つの整理の仕方。これは、私のアイデアなんで、余り一般の本には出ていませんけども。私は大学でこんな講義をしてきました。

環境問題って何？実は、環境という日本語。環境という言葉には、実は七つの環境の要素が込められているんです。環境の要素というのは何かというと、大気・水・土・光・音・緑・食物。これが、実は環境という言葉に込められている七つの要素なんです。ですから、人が環境問題を語るとき、その人の興味関心によって、実は語ってる内容が随分違うんです。大気のことを語ってる人もいるし、水のことを語ってる人もあるし、土のことを語ってる人もいるしということなので、環境問題と一口に言っても、実は中身は七つのこの要素の問題を語っていることになります。とりあえず、今日は、この七つの環境要素をざっと見ておきましょう。

とりあえず、大気・水・土・光・音・緑・食物。実は、食べ物は緑の中の特別の緑なんです。ここで緑と書いてますが、括弧して生物としておいてください。生き物。緑の方がイメージとしてわかりやすいので緑というふうに書いてますが、括弧して生き物。そうすると食べ物は、特別の生き物なんです。ですから、特別の緑ね。この七つの環境要素は、どれ一つ取っても実は私たちの命がもたないんです。どれ一つ取っても、これがなくなったら命がもたないんです。ですから、この環境要素は、すべて私たちの命の土台、命の基盤というふうに見ることができます。生命基盤。七つの要素が命の土台、命の基盤であるとすると、この基盤が傷んだら、私たちの命が傷むことになります。だから、環境問題は自分の命の問題になるねんね。自分だけのことじゃありません。自分の子供の命にもつながるし、子々孫々の命の問題にもなるわけやね。だから、環境問題は真剣に考えなあかんと、こういうことになるわけやね。自分にとっても問題だし、子供にとっても問題だし。社会全体にとっても問題ということになっている。だから、君たちは関心を持ってるわけやね。

空気がなくなったら、君たち、暮らせる？水がなくなったら、暮らせる？大地がなくなったら、暮らせる？町に住んでる人はコンクリートに住んでるから、土なんかどうでもいいと思いがちよね。土なくても大丈夫？やっぱり暮らせない。暮らせないよね。じゃあ、光がなかったらどうですか。暮らせる。じゃあ、音は。音はどうでもいい。音って、何のために必要なんでしょう。今、こうして、君たちとコミュニケーションできる。これは音やね。音を通じてコミュニケーションを取るわけやね。音がなかったら暮らせない？緑、生物はいてもいなくてもいい？ゴキブリはいなくてもいい？蚊やハエはいなくてもいい？じゃあ、稲という生き物はいなくていい？キャベツという生き物はいなくていいという話になっていくねんね。この七つの要素が相対として環境を構成します。私たちの命も含めて、私たちのこの命の世界をつくります。この環境がどこか傷んだら、これは命の基盤ですから、結果として私たちの命が傷む。だから、環境問題は真剣に考える必要がある。こういうことになるわけやね。

環境というのは、一定の空間の中で存在しますから、空間には一定の私たちの概念で仕切りを取ることができます。一番小さい仕切りは、この建物の中。こんなの便宜上の仕切りですから、幾らでも仕切ったらいいんですが、あんまりむちゃくちゃ仕切ったってしようがないんで、とりあえず建物の中という仕切りで環境

問題を考えることはできます。今度は、自分の住んでる地域という仕切りの中で環境問題を考えることはできます。自分が住んでいる国という仕切りの中で環境問題を考えることはできます。一番大きな仕切りは地球やね。マスコミがよく報じている環境問題は、この地球のレベルの仕切りで問題をよくよく私たちに報道してくれているわけです。

例えば、大気という環境要素に不都合な現象が起こった。最近、ゴアさんが「不都合な真実」という映画をつくったり、本を出されましたけれども。不都合な現象が大気というこの要素で起こったとき、温暖化現象といったような、地球レベルの環境問題が起こるわけやね。こんなのは、君たちは十分知っていることなわけです。あるいは水という要素で地球レベルの問題が起こったときには、例えば海が汚れるとか、あるいは酸性雨が降ってくるとか、こんな問題が目につくようになるわけやね。土という要素で地球レベルの問題が起こったら、砂漠化というふうなこうした環境問題が起こるわけです。

砂漠化って、日本にとっては余り問題ないように思うけど、砂漠化が何で問題ですか。サハラ砂漠が広がったって、日本には関係ない。ゴビ砂漠が広がったって、皆さんには関係ない。よそのことだもんね。でも、どこかに関係するように思う。皆さんは、直感的に考えてくださったらいいんで。これから、じっくり勉強してくださったらいいわけやから、直感的にやっぱり問題だと思う。その直感を大事にしてね。学問の出発は、この直感から始まります。何か変だぞ、何かおかしいぞ。そこから学問は始まりますから、今は十分わからなくても、その直感を大事にして。何か変だぞ。思う。ぜひ思ってね。皆さんの直感まで、私が深入りできませんけどね。というような、こうした整理をすることはできるというわけです。

でも、私たちに一番命に直接関係するのは、実は建物の中だとか、この地域の中で起こる環境問題ね。余りマスコミが報道しない環境問題、いっぱいあるわけです。ちょっと見てもらいましょうか。例えば、この部屋の中、ここはまだ自然の素材がいっぱい使われています、この建物はね。ですから、私の目から見て、あんまり問題がないなと。例えばこの建物の中の空気の問題ね。つまり、建物という仕切りの中で、大気という要素を考えたとき、ここにはあんまり問題はないかなと思うのね。ただ、ロータリーの人、たばこいっぱい吸ってはったからね。その人のこの空気から、大分たばこの煙が出てるかもしれない。そうすると、若干この部屋の空気が汚れているわけです。そういうロータリアンだめね。たばこ吸うようなロータリアンだめ。部屋の中を汚すわけやからね。自分の体を一番汚すわけやけど。でも、あんまりここは問題がないかなと思うけど。

皆さんのおうちに帰ったら、皆さんのおうちっていっぱいじゅうたんひいてある部屋があるでしょう。しかも、ふわふわじゅうたんのおうちって結構あるでしょう、このごろ。ふわふわじゅうたんのうちは必ずすごい分厚いカーテンがかかってると思うのね。かかってない？その部屋で暖房して、テレビを見たりしない？する。ヨウコちゃん、するねんね。あのふわふわじゅうたんに、もしお父さんがたばこの火を落として、ぱっと燃えちゃったら困るよね。でも、あのふわふわじゅうたん火がつかないようになってるんです。お父さん、たばこの火を落としてぱっと火が燃えて、石油製品ってすぐ火がつくはずやからね、普通は。でも、すぐ火が出ちゃって危ないから、お父さんがたばこの火を落としても火がつかないように加工してあるんです。難燃加工というんです。ナンといったら難しい。ネンは燃える。難燃加工がしてある。主に塩素系薬物をしみ込ませてあるんです。塩素というのはなかなか燃えにくい成分ですからね。そんな部屋で、つまりこの分厚いカーテンにも当然難燃加工がしてあります。そういう部

屋で暖房をかけて、しかも冬閉め切ってテレビなんか見てると、難燃加工物質が揮発するねんね。ほんなら、ふわふわじゅうたんの部屋で暖房をかけたら、すごく空気が汚れます。そこにお父さんがたばこ吸いはったら、さらに汚れるねんね。こういう部屋という仕切りの中の大気の汚染が、実は皆さんに直接影響を与えるんです。とりあえずは、温暖化という現象は皆さんの命の直接すぐには影響を与えません。じわじわ、じわじわと影響が及んで、多分皆さんのお子さんか、皆さんのお孫さんに深刻な現象が起こりますが、部屋の中という仕切りの中の大気問題は直接皆さんの命に影響を与えていくねんね。

皆さんちでお母さんがタンスにゴン入れてない？テレビでよく宣伝してるでしょ。ちょっと商品名言っちゃってまずいんやけど。宣伝の意味じゃないんで、タンスにゴン。何あれ？知らない人もいる？大抵知ってる。タンスにゴン。何か反応鈍いね。おもしろくない？こんな話は聞くつもりなかった。何かあんまり反応ないね。殺虫剤、タンスにゴン。虫よけ薬剤ですけど。あれは、においがしないことを売り物にして、結構評判を呼んで、お母さんも使ってらっしゃるわけです。私から見たら、においがしない薬物を部屋の中に使ってもらったら困るのね。衣類につく虫を殺す薬剤ですから、常温で揮発するわけです。揮発しなかったら虫は死なないからね。昔はナフタリンといってにおいがするから、すぐにちょっとにおいがきつすぎるわといって窓をあけたんです、昔のお母さんは。換気を心がけたわけです。今、においがしないから、だれも気がつかない。今言ったように、部屋の中、このごろは密閉のおうちが多いし、難燃加工したじゅうたんだとかカーテンいっぱい使ってるおうちあるわけやし、そこにタンスにゴンまで揮発して、部屋の中に充満したら大変ね。でも、みんな元気そうやからよかったね。でも、皆さんが間もなく親業を果たすようになると思いますけど、赤ちゃんをそんな部屋に寝かせないでね。赤ちゃんにすごい影響があると思いますよ。だから、私たちが気がつかないうちに、さまざまなこうした環境問題に触れることに実はなってるんです。今は、大気の話だけ。

もう一つ水の話もしておこうかな。皆さんは、どこの水飲んでる？いろんなところから来てると思うけど。ちょっとよその地域よくわかんないで、ここには何人か神戸から来た人がいるんで、神戸市民は、どこの水を飲んでる？桃ちゃん、神戸市民はどこの水飲んでる？淀川？淀川の水を飲んでる。神戸には、神戸ウォーターという大変すてきな水があるんですが、これは専ら港から船に売るために供給している水で、ほとんど市民は飲んでいないんです。淀川の水を飲んでいます。大阪市民と同じ水を飲んでるんです。淀川ってどこから来てるのかな、桃ちゃん。琵琶湖。琵琶湖、すごいきれいよね。でも、神戸でくみ上げている水は、淀川の一番下流。大きなパイプでくみ上げています。そこまでには、何人の人が住んでるのかな。あんまり桃ちゃんばっかりいじめんとこうか。淀川から始まって、淀川の一番下流、十三という町の近くでくみ上げるんですが、その間に何人の人が住んでるのかな。そうすると、滋賀県の大津の人も住んでるし、京都市民は全員が淀川の上流に住んでるし、それから大阪の淀川の右岸の人たちはみんな神戸市民がくみ上げる上流に住んでるわけやね。左岸の人も一部入ってきますけどね。そうすると、どうでしょうか。300万人ぐらいの人が上流に住んでるということになるかな。この300万人の人が豊かな選択をしてるわけやね。そして、一部は固形物でごみに出しますけど、多くは水と一緒に流すわけやね。石けんも流れるし、洗剤も流れるし。さすがにここにいらっしゃる女性はあんまり髪の赤い方はいらっしゃらないけど。涼子ちゃん、ちょっと赤いね。この赤く染めた薬物は、どこに流れていくの。流さない。洗う。染色するでしょう。その

染色液はどこへ行っちゃうわけ。自宅に庭に捨ててる？どこに流しとん？おふろ場で流しちゃうね。おふろ場で流しちゃう？300万人の半分は女性やし、その半分がこれ、最近の女性使ってはるように思えるんやけど。それ、みんなおふろ場から下水道に流れていくねんね。下水道で、今度下水処理場に行くけど、こんな薬物処理できないからね。これ全部淀川に入っていくわけです。淀川の水が真っ赤になるねんね。そこに洗濯や食器洗いに洗剤をたくさんの方が使うから、洗剤もみんな淀川に入っていくわけです。こんなん処理場で全部処理できない。そうすると、十三近くで神戸の市民が飲む水がくみ上げられていきますけども、そんなんみんな水道水に入っていくねんね。これは地域の水の汚染ということになります。それを私たちが、神戸市民が飲むことになります。でも、元気そうやからよかったね。でも、それは一見元気そうであるわけやね。人間の体ってすごい適応力を持ってるから、少々のことでは適応しますけれども、でも、何年も適応できるわけじゃないから、やがて無理が来て、そして病気になる、あるいは命を失うということになっていくわけですね。四国の人は、神戸市民に関係ないから、四国の人は髪、染めてもええんかな、こういう話やね。同じことが日本だけ使ったってええやん、世界の人に影響ないんやから、というふうな選択をひょっとしたらしてるのかもわかりませんね。でも、地球は一つやし、ということです。こんなふうにして、さまざまな実は私たちが選択をするときに、その選択の仕方が全部環境にさまざまな影響を及ぼしているということになります。

実は、私が学生のころ、環境問題をほとんど言わなかったのは、そんな深刻な環境問題がなかったからです。海も美しく、でも、大分汚れ始めていたけど。山もまだまだそんなに荒れていなかったし。淀川の水もうんときれかったから、それほど問題にしなかったんやね。つまり、私たちの親がきれいな環境を残してくれていた。だから、私たちは、その親が残してくれたきれいな環境の中で若い人生を過ごしていた。ですから、環境問題は問題にはならなかったわけですが、今度は私たちが親になりかけたころに、豊かな選択をするようになっていくわけです。もちろん工業文明というこの文明がさまざまなものをつくり出していくわけですけれども、この工業文明がつくり出してくれたさまざまな品物を私たちは当然として選択をし、使っている。それを全部環境にほり投げていったわけですね。自分の家の中だけはきれいにしたけれども、自分の家の外にみんなそれをほり出して、環境に大きな負担をかけながら今日まで過ごしてきました。結果、今度は君たちが汚れた環境の中で今、青春を過ごすことになったと。これを繰り返してはならないと思います。今度また君たちが、私たちと同じような暮らしをして、今度は君たちの子供にもっと汚れた環境を残したときには、今度はいよいよ命がもたないということになるんじゃないでしょうか。この環境の七つの要素は命の基盤なわけですから。だから、どこかが傷めば必ず命が傷む。そういう関係にある。だから、環境問題を真剣に考えていく必要があるということになると思います。

実は、私も山口さんも皆さんに説教する資格はないんです。私たちが汚してきたんですからね。だから、私たちは、これを自分の問題として、今一生懸命取り組んでいるつもりです。でも、君たちには、私たちと同じ暮らしを繰り返してほしくない。そういう願望があります。だから、皆さんにこうしてお願いとして話をしているというところです。同じことを繰り返してはならない。でないと、今度は、今度はいよいよ君たちの子供が命がもたない。そういう環境になっていくだろうというふうに思っています。よろしくね。そしたら私は、コーヒーなんか飲んどっていいのかなという、こんな気がするのよね。

それ、缶かん、どこへいきますか。缶かん。あるいは、これ使った後のプラスチックケースはどこへいきます。そこに缶かんがずらっと並んでいるけど、後缶かんどうなるんですか。

じゃあ、今日は、この環境要素の最後の要素、食べ物の部分をちょっと強調して。実は食べ物というのは、すごく環境問題と深いつながりがあるんです。七つの環境要素の中で一番私たちの生活に密着していて、しかもこの部分から取り組まないと、環境問題そのものが解決しないもの。それは食べ物の世界。食の世界。これをちょっと今日は皆さんと一緒に勉強してみたいと思います。

この食の問題を世界レベルで考えたときには、飢餓問題になります。今、世界は65億の人口、民が住んでいると言われていますが、そのうちの約12～3％ぐらい、約8億人の民が既に飢えている。でも、私たちの国にはそういう世界は見えない。見えないどころか、山口さんのような要らんエネルギーまで取って暮らしをしている人が結構いるわけです。別に山口さんが悪いという意味で言ってるんじゃありませんよ。豊かな選択の結果として、こういう方がいらっしゃるというだけです。

図表1のグラフをごらんいただきましょう。これは、日本の食料自給率の線です。日本に住んでる限り食べ物問題は存在しないというふうに見えますけれども、実は日本の食べ物をつくり出す力、自給力、それを率で自給率と言いますけれども、この自給率は確実に下がり続けています。自給率という計算は、皆さんが一日に食べてくださる中で、国内の食べ物が幾らあったかという計算です。お金ではかったり、重さではかったり、いろいろはかり方がありますが、お米や牛乳やお肉を一緒に重さではかったって意味ありませんから、食べ物を全部カロリーに置きかえて、カロリーの中で国産カロリーが幾らあるか、こういうふうな計算をすると、食べ物全体のいわば総合的な自給率が計算できるわけね。それを見たのが、この3本の線の下から2本目の太い線。これがカロリーで見た自給率です。

今朝、皆さん、豊かな選択をしていました、食事ね。君たちの選択の仕方をずっと見せてもらいました。中には二皿取ってる人がいましたね、おかずをね。随分豊かな選択をしておりました。腹が減るから、当然若い世代ですから食べたらいいんですが。だから、何回も言いますよ。よしあしは私言いませんから。よしあしは皆さんで判断して、事実だけ私はしゃべりますからね。今朝、二皿取った人いたでしょう。何も批判的に言ってるんじゃありませんよ。事実をしゃべってるだけです。その中で、国産カロリーが何％ぐらいあると見当づけられます。今日、朝はそうやね。昨日の晩も豊かやったけども、今朝も例えばベーコンがあったし、いろいろあったよね。豊かな食材がね。ずっと計算したら、皆さん今日だけでも、500キロカロリー以上取ってるねんね、朝一食でね。もっと取ってる人もいたよね。800キロぐらい取った人もいるでしょう。そのうち、国産カロリー何％ぐらいあったと思うかな。というふうなことは、今までの常識にはなかったと思うのね。常識と言ったら失礼か。そういうセンスを磨くことはなかったと思うのね、そういう見方と言った方がいいかな。あるものは食べたら当たり前。これが君たちのこれまでの選択の仕方だったと思うのね。できたら、今日から食べるときに、国産カロリーが何％あるかなという、そういうセンスで一回食卓を見詰め直してもらうと、少し選択の仕方が変わるかもわかりませんね。

今、私たちの国は、このようにどこのもんでもええやんか、おなかいっぱい食べられたら。あるいは、皆さんの御両親の選択の基準は、おいしさとかおなかいっぱいというだけの基準じゃなくて、安かったらいいという、そういう基準も入っていくねんね。安かったらどこの国のもんでもいい。その上でおいしくて、何と言う

んかな。華やかなそういう食事ができたらいいというそういう選択の基準で暮らしているわけでうすが、そういう基準で暮らしをすると、このように自給率がずっと落ちてきたわけです。

昔、私たちが子供のころ、100%。日本はお金がありませんでしたから、外国から食べ物を買う余裕はありませんでした。だから、国内で取れなかったら我慢するしかなかったんで、私たちはやせて大きくなっていきました。なかったんですから。それでも死ぬことはなかった。やがて、だんだん日本は経済力を持って、お金を持つようになった。お金を持つようになってくると、円が強くなるから、レートがうんと有利になって、外国のものが安く買えるようになる。経済の世界ってドライでね。お金持ちになればなるほど、たくさん買える状況になっていくんです。それは国全体からしてもそうで、国が豊かになったら日本の円が強くなる。外国のものが安くなる。ですから、もうかってお金があればあるほど安く買える。安く買えるから貯金がたくさんできる。その貯金で海外旅行に行ける。こういうふうな世界を築くことができるわけね。もちろん、外国の食べ物もうんと安くなって買えるわけです。だから、安ければいいという価値基準が入ってくると、日本のものより外国のものが安いわけですから、どんどん入っていくわけやね。こうして、自給率がずっと落ちていきました。高度経済成長の裏側で、毎年１％ずつ落としてきました。今、40%です。

では、質問です。あと何年後にゼロになりますか。単純な計算。毎年１％ずつ落とし続けてきました。これは、皆さんの責任ではない。皆さんって、若い方ね。後ろの方は別ですよ。前に座ってる諸君には責任のない話。後ろの方に責任があるわけです。毎年１％ずつ落とし続けてきたのは、後ろの人。その結果、君たちがこれからこの影響を受けて暮らしをすることになりますが。今、40%。あと何年後にゼロになりますか。単純に計算をしたらね、実際にはならないと思いますけども。でも、私たちがこれまでと同じように豊かな選択をすると、40年後にゼロになる。ずっと落ちていくわけですから、いつかはゼロになるでしょう。カロリー自給率ゼロということは、日本が食べ物を失う国ということを意味いたします。じゃあ、40年後。若い諸君は何歳になってます？例えば涼子ちゃんは、ちょっと名前がわかんないんで、涼子ちゃんは何歳。あっ、真奈美ちゃんか。何歳になってます。60。今私、67歳ね。ちょうど私と同じ年になるわけです。私は、107歳やから、おらんね。でも、真奈美ちゃんは多分いてるわけです。そのときに日本が食べ物を失う国になる。そのときに君たちが、どれほどの幸せを手にしているかどうかという話。

今、世界で一番食べ物に困っている国は、北朝鮮と言われています。戦争に明け暮れている国は別ですよ。じゃあ、北朝鮮は、このカロリー自給率は何％あるんでしょう。北朝鮮は決してそんな情報を公開しないんで、わかりませんけれども、例えば人工衛星なんか使って作物の取れぐあいなどから、ある程度の推計はできるわけ。多分、60から70％ぐらいは自給してるんですよ。だけど、北朝鮮はお金がないから買えない。すると、国内の分配がうまくいってないから、偉い人がみんな取っちゃうわけね、あるいは軍隊が全部取っちゃうから、一般の人に回らない。だから、飢えが起こっているんですけれども。実は、日本の方が実力は下なんですよ、こと食べ物に関しては。それでも、こんなに皆さんがのんきに暮らせるのは、もう山口さんの例を出すのはやめて、後ろの方も何人かいらっしゃるから、こんな体になるのは、みんなお金があるから。だから、こういう暮らしができているわけです。

高度経済成長をするためには工業化を進めなければなりません。工業化を進めるためには、工場用地をつくらなければなりません。工場用地だけではない、工場の働く人たちの住宅団地

も用意しなければなりません。そうした土地を日本でどういうふうにして開発するか。残念ながら、日本の国土は山が多いので、結局は平野部で工場をつくり住宅を建てるとすると、田んぼ、畑をつぶさざるを得ない。あるいはできた品物を運ぶための道路。あるいは人や情報を流すための高速道路網、あるいは新幹線網などをつくるためにすべて平野部をつぶしていくわけです。このようにして、もともと人口に比して土地が少ない日本で、なお土地をどんどんどんどこ少なくして、工業化を進めてきたわけです。でも、工業製品をつくって輸出して外貨を稼げば、食料が買える。かつ安く買えるではないか。こういう考え方で日本は国づくりを進め、国民もまたこの政治を選択してきたわけやね。工業化を進めてお金を稼いで、外国から安い品物を買ったら、差し引き貯金ができて、海外旅行ができる。その方がええやんか。これ、国際分業論と言います。こういう考え方で国づくりを進め、国民もまた多くこの政治を選択してきたわけです。

じゃあ、世界のリーダーと目される国、あるいは工業の先進国と言われる国々は、日本と同じように工業に特化して産業を、そして畑、田んぼをつぶして、どんどん工業製品を輸出して外貨を稼いで、外国から食べ物を買うような政治を選択し、あるいは国民がそうした暮らしを選択してきたかが、今度は**図表2**のグラフにあらわれています。どうですか。フランス、アメリカ、ドイツ、イギリスは、日本と同じように将来食べ物を失う国になろうとしているかどうか。いかがですか。40年後、日本は食べ物を失うかもしれない流れをずっと国民が選択してきたわけやね。では、ヨーロッパの皆さんは40年後食べ物を失うような国になるような暮らしを選択しています？どうですか。国土の広さが違うやんかとか、日本と外国とは違うとすぐにそういうことを言いますけど、でも同じように工業化を進めることにより高い価値を置いて、食べ物生産なんか外国に任したらええやないかというふうな選択をするんやったら、レベルはともかく、流れは右下がりになってもええわけやね。でも、なってないでしょう。何で。明らかに政治が違い、国民の暮らしが違うからやね。

例えば、主食を考えてみましょうか。フランス人の主食って何ですか。フランス人の主食。パン。何パンですか。フランスパン。じゃあ、ドイツ人の主食は何ですか。ジャガイモ。ジャガイモはよく食べますけども、よほど南方の国以外は全部穀物なんです。主食はね。だから、ドイツ人、ジャガイモたくさん食べますけど、ジャガイモが主食じゃないんです。主食はやっぱりパンだよね。何パンですか。ドイツパン。何かおかしい。事実を淡々としゃべっとるんですよ。じゃあイギリス人の主食は。あんな北の国は、北海道より北でしょう、イギリスってね。あんなところ、お米なんか取れないわけやから、何食べてますか。パン。何パンですか。イギリスパン。いや、何もおかしいことじゃありません。イギリスパンを食べてるんです。フランスパンはフランス小麦で焼きます。フランス小麦は日本の小麦にやや似て、グルテンというたんぱくが少ないんで、ふわっと焼けない。すると、大陸で夏はほとんど雨が降りませんから乾燥しやすいので、最初から乾燥しにくいパンを焼いて食べてるんよね。表面のかたいパン。しっかりかみつかないとかめないパン。ドイツは寒くて、小麦がつくれませんから、ライ麦をつくります。ライ麦ってあんまりおいしい麦じゃないんですが。それを一番おいしく食べる方法として黒パンにして食べてる。これもまた大変表面のかたいパンです。かみつかないとかめない。このかみつくというこの食習慣が前歯を鍛えて、皆さんのような前歯２本だけがでかくなるようなこんな体にならないんやね。前歯２本でかいでしょう。もう今、皆さん世代で大分前歯が２本でかくなってると。今の小学校の１年生、特に１年生、２年生で顕著に見えるんです

が、前歯２本だけがっとでかくなって、ネズミのような歯になってます。でかくなり過ぎて、隣の歯が生えなくなって、生える場がなくなっていくんで、反転してしまって、横向いちゃうんです。

イギリスでは、時雨があったりするから、割に湿気が多いので、そんなかたいパン焼く必要はない。それとあそこ良質の小麦粉が取れるので、それで焼くとふわっと焼ける。あそこはもともとパンの国やから、至るところにパン屋さんありますから、そんなに大量に輸送する必要ないんで、何も輸送の便を考えて焼く必要ありませんから、ふたはしないで当たり前に焼いたら山パンになるわけやね。ふわっと焼き上がるわけです。イギリスパン、別名山パン。じゃあ、みんなが食べてる食パンは何パン。世界に例のない真四角なパン。あれは立派なイギリスパンなんです。アメリカから伝わったんですが、日本は最初からパンは大量輸送する必要があったので、運びやすくするために四角に焼いたんです。そしたら、いっぱい積めるでしょう。だから、世界に例のない四角いイギリスパンを食べる。そういうふうな食習慣になっていったわけやね。このパンを食べるという習慣は、実はキリスト教がかなり影響を与えているんですよ。けども、そのことはまた別として。そういうふうな食習慣を私たちは当たり前にしてきたわけです。

こういうことです。フランス人が国境を接している。今はトンネルでもつながっているわけですから、あのやわらかいイギリスパンが幾らでも食べられるけど、フランス人は決してイギリスパンは食べない。また、反対にイギリス人もフランスパンを食べない。ですから、それぞれの民が自国のパンを食べるとき、自国の麦が守られるわけです。ヨーロッパの皆さんは、それぞれ自国の食文化を大事に守る、守るという意識はないかもわかりませんが、食習慣を過ごすということを当たり前にしているわけです。だから、自給率が落ちないんやね。そうした暮らしを前提として政治が行われるから、外国から安い食べ物を輸入しようという政治もまた行わない。アメリカが盛んに圧力をかけますけども、国民が反対をしてアメリカの麦が入らない。ですから、ヨーロッパの農業はずっと国民の力によって守られている。国民の食文化が自国の食料を守っているわけです。

じゃあ、翻って日本人は何を食べたから落ちたんですか。あるいは何を食べていたら落ちなかったんですか。昔、自給率100％だったんです。だから、何を食べていたら落ちなかったんですか。お米食べとったら落ちないんです。40年後に、つまり真奈美ちゃんが私の年になるころに日本が食べ物を失うという心配をしなくてもよかったわけやね。考えたら、日本には世界のパンが集まってますね。食パンが皆さんのおうちにあるし、一歩外に出たらフランスパンもあるし、ドイツパンもあるし。ついでにインドのナンもあるし、中国の中華饅頭もあるし。日本独特のあんパンもあるし、世界のパンが日本にある。こんな国は世界にないんじゃないでしょうか。この世界のパン、ひっくるめて日本のパンは何パンというか御存じ？ジャパンという。マルコポーロさんは、将来日本人はジャパンというパンを食べるに違いないと思って、こんな国名を早々とつけてくれたんでしょうかね。まさに彼には先見の明があったというふうに言えるかもしれませんね。

今朝、君たちの半分はジャパン食べてましたね。半分以上かな。食べてましたでしょう。事のよしあしは皆さんで判断して。客観的事実として、多分３分の２ぐらいの若者は、今朝ジャパンを食べていたわけです。多分、それは君たちの御両親が君たちにそれを習慣化させたから。あるいは学校の先生が習慣化させたからかもしれませんね。でも、それが皆さんに習慣になってることは、もうこれで目に見えるわけです。この習慣は、これから君たちが親業を果た

すときにも多分抜けない。そうすると、今度は君たちの子供もそういう習慣を身につけていくわけやね。そして、このようにして、習慣が親から子、子から孫へと受け継がれていくとき、自給率がずっと落ちていくわけです。そして40年後にはゼロになるというふうな可能性があるような暮らしをすることになっていくねんね。そのときに考えておかなければいけませんね。

40年後、ええやんかと、なくなったって、日本が工業力を維持できたら買えるんやからというわけやけど。ちょっとそのときに、日本が食べ物を失ってもなお食べ物が外国から買えるには、どんな条件が、あるいは前提が満たされる必要があるかちょっと考えてみようか。日本が食べ物を失っても外国から食べ物が買えるとき、まず第一は地球の環境がもうこれ以上悪化しないという前提が満たされる必要があるよね。これ以上地球環境が悪化したら、もう食べ物取れないでしょう。二つ目。世界の人口がもうこれ以上ふえない。今でも８億の民が飢えているわけやから、これ以上人口がふえたらさらにさらに食べ物が窮屈になるわけやから、世界の人口がもうこれ以上ふえないという前提が満たされる必要があるわけやね。３番目。世界の農地。食べ物は全部農業の土地しか生まれないんですから、世界の農地がこれ以上減らないという前提が満たされる必要があるかもしれませんね。

皆さんの中で、中国に旅した人、何人もいるでしょう。中国を旅した人。何人かいる？何人もいるでしょう。いない？いるでしょう。どこ見てきたかわかりませんけど、例えば北京の郊外、あるいは福州の郊外、ちょっと足を伸ばしたら、上海でもいいです。猛烈な勢いで農地がつぶれてますね。あれだけ都市が拡大していくということは、当然農地をつぶしているわけです。今、中国は物すごい勢いで農地をつぶしています。これも、事実だけの話です。これで、環境・人口・農地。

４番目。石油がこれ以上値段が上がらない。上がっちゃったら運べないでしょう。これが４番目の前提条件ね。５番目の前提条件。日本が経済力を維持して、なお、たくさんの食料を買うことができるお金がある、５番目ね。これで整理しましょうか。環境・人口・農地・石油、それから経済力。もうほかに前提考える必要ないかな。

環境がこれ以上悪化しない。例えば、温暖化を考えましょう。温暖化がこれ以上進行したら、さらにさらに温度が上がると、必ず地面海面の水分の蒸発量がふえるんです。温度が上がった分だけ、必ず水分の蒸発量がふえるんです。蒸発した水分は必ず雨で返ってくるわけです。だから、温暖化は必ず大雨をもたらす。ですから、今でも必ず大雨が起こってますが、これからなお、温暖化が進行すると世界のどこかに必ず大雨が降るんです。必ず降るんです。それがアメリカであるか、インドであるか、中国であるか、日本であるか、それはわからない。必ずどこかで大雨が降るんです。それが陸上の場合であれば、必ずどこかで大洪水が起こって、食べ物が取れなくなるんです。もし、中国やインドのような大人口国で大雨が降って、大洪水が起こったら、億の単位で食べ物が欠乏するわけです。そしたら、世界の食糧の値段がばっと一遍に上がってしまうわけです。そして、もし雨雲が今度は海の方に移動しちゃって、陸地で降らんかったら、温度が上がった分だけ干ばつが進行するんです。そうすると、何も砂漠地帯だけが拡大するわけじゃなくて、普通の緑の地帯だって大干ばつで食べ物が取れなくなっていくんです。だから、地球温暖化というのは、氷が溶けて海面が上がって、島国が沈没するというふうなことだけが問題ではないんです。農業の立場からすると、大雨と干ばつによって、世界の食糧生産が極めて不安定になる。実は、去年の秋はオーストラリアは春ですけど。去年のオーストラリアの春は、大干ばつで麦が取れません

でした。でも、まだアメリカの麦のストックがあったから、まだ今麦の値段は国際価格はそんなに上がってませんけど。今年の春、北半球の春は干ばつの気味です。もし、アメリカで大干ばつが起こったら、オーストラリアにない、アメリカにないわけですから。世界の小麦の値段は一遍に上がります。ですから、今、今年アメリカで干ばつが起こらないかどうか、私にとってはひやひやもの。だって、皆さん、パン食べとんでしょう。パンを食べとる習慣は抜けないんでしょう。麦の値段が上がったって、食べたいと思う心は消えなかったら、高いパン買うことになるでしょう。でしょう。それを習慣というわけですから。だから、世界の気候がこれ以上悪化したら、大変という話。よろしい。時々質問してください、わかんなかったらね。

もう一回いくで。環境・人口・農地・石油・経済力。最後にもう一つ入れとくか。あと、世界が平和である。これ以上平和が乱れない。もし、戦争状態が起こったら、船なんか動かせませんからね。というような、こうした前提が満たされたとき、日本が食べ物を失っても買えるわけです。

じゃあ、私が申し上げた六つの前提条件が、これから20年、30年後になお満たされているかとどうかの話。例えば、経済力を考えてみましょうか。今、日本はたくさんの外貨を稼いでそのお金で外貨が稼げるから円高になって、何度も言うように経済の現象、経済の世界は、まことにドライな世界で、お金があったら安く買えるんです。お金がなくなったら高くなっちゃうんです。ですから、今、お金があるから、安く買えるからいつまでも安く買えるというふうには思ってはいけないんですよ。経済の世界は極めてドライな世界で、お金があるとき安く買える。お金がなくなったら高くなっちゃうんです。じゃあ、日本の経済力はこれからなお、君たちが私の年になるまで、豊かな外貨を稼ぎ続けているかどうかです。どうですか。国際関係の勉強をしている諸君。どう見通していますか。大丈夫？日本の経済力。

今、日本の大ざっぱな経済構造は500兆円の国内総生産ね。全体で働いている人が生み出す金額は500兆円。うち、1割の50兆円を輸出して、そしてその生産力を上げるための原燃料、食料を40兆円分輸入して、差し引き10兆円稼いで、これが外貨の蓄積になって、これが円高を引き起こしているわけです。だから、安く買えるんです。じゃあ、500兆円という金額が、これからなお続くかどうかです。今年から、団塊の世代がおよそ700万人、3カ年間で引退されます、君たちの御両親でしょうけど。この700万人の有能な労働力が引退するだけでも、日本の経済力は相当に落ち込むでしょう。そして、その方々の何人かが、第2の人生を中国で送られる可能性がありますが、そうすると優秀な労働力が中国に移転されて、あちらで生産力の向上に貢献されたら、日本にどんどんと中国の製品が輸入されてくることになるでしょう。それだけでも、相当日本の経済力はダメージを受けていくわけやね。そして、500兆円の金額がうんと落ち込んで、逆に中国からたくさんものが入ったら50兆円分の輸出ができないわけですから。これが30兆円ぐらいしか輸出ができないとして、一方で輸入が、皆さんがパンが食べたいというふうな暮らしをして輸入が減らなかったら、貿易収支がアメリカと同じように赤字になっていくでしょう。貿易収支が赤字になったら、必ず円安になるんです。そしたら、私が皆さんの年のころは1ドル360円だったわけですから、今120円ぐらいでしょう。もうちょっと高いか、117円ぐらいですか。大ざっぱに120円としたら、今3分の1の安さでものが買えてるわけです。しかし、そのうち、もしそれが240円になったら、今の倍の値段で輸入しなければならなくなっていくわけでしょう。それだけでも、一遍に生活費が、食費が高くなっていく。こういうことになっていくわけやね。そうすると、今の六つの

前提条件が満たされているかどうかという話。

そうすると、君たちは君たちなりに考えて。私は、私たちの責任ですから、この線をずっと右下がりにしてきたのは。だから、私たちはせめて君たちには、この線が横どまりになって、できたら少し上向くぐらいで死にたい。そのためには、今67やから、まだ来年では、ちょっとそんな実現はしませんから、来年には死ねない。もうちょっと先に死ぬ予定にしてますけども。もうちょっとこの線が右上がりになるように頑張りたいと、こういうふうに思っているんです。その頑張りの一つは、君たちにもこの事実をぜひ理解をしてほしい。こんなお願いがあるということです。

ですから、本当は、今日は来たくなかったんです。今日、実は午後に私の行事を持っていて忙しいんで、本当は「山口さん、勘弁して」と言ったんですけど、「朝だけやったらええやんか。」長いおつき合いしてて、偉い人なんで。「朝だけでもええやんか」と言われて、「ほんなら、まあ」と言って来たわけです。ということで、こうしてお伝えさせていただける機会を与えられたことは、大変私としてはうれしく思ってるんです。

ほんなら、明日の朝は、何選択する？その前に、ここの山根さんに、ここで働いていらっしゃる山根さんに、ちゃんと食材を検討してもらわなあかんね。皆さんは出たものしか食べられないわけやからね。ぜひ、今回皆さん帰るときに、ここの山根さんにこれからは食材ちゃんと検討してと言って帰って。

フランスの子供に、「あんた、何でパン食べるん。」と聞くと、だってフランスには麦畑があるものと答えるんだそうですよ。やや、でき過ぎたエピソードかもしれませんが、その言葉の真偽はともかくとして、この言葉からしっかり私たちは学ばなきゃいけないと思うねんね。「だって、フランスには麦畑があるもの」、実は、この言葉はある本で読んで知ったんですが。そうや。どこの国でも、親は子に決して将来飢えることがない食教育をする。これが、食教育の基本なんやね。ですから、フランスは、多分おうちでは、窓から見える風景と結びついた教育を、学校では、学校の窓から見える風景と結びついた食教育を行っているに違いない。そう思ったんやね。だって、フランスの学校の窓から見える風景は麦畑でしょう。だから、窓から見える風景と結びついた食教育をしておけば、飢えることはないわけです。その風土にマッチした暮らしなんです。

翻って日本ではどうなんですか。皆さんのおうちの窓からは麦畑が見えます？あるいは学校の窓から麦畑を見てきた？四国から来た方も多いと思いますが、四国なんかは学校の窓からはほとんど多くの学校は、水田が見えるんじゃない？実は世界で日本だけね。学校の窓から田んぼを見ながら、パンを食べる教育を行っている。こんな国、世界にないんですよ。考えて見てくださいよ。フランスの学校で、麦畑の真ん中の子供に御飯を食べる教育をしてると思います？イギリスの学校で、麦畑を見ながら御飯を食べる教育をしてますか？ドイツしかり。何で日本で、食料難でもあるまいに、田んぼを見ながらパンを食べる教育を何でこんなに長々と行っているんですか。そのことによって、子供が将来、飢えるということがないんですかという話やね。だから、この**図表2**のグラフの線にこんだけの違いが出るわけです。当然それが教育として行われたわけですから、君たちは疑問とも思わずに朝、パンを食べる。何の抵抗もなかったんじゃない。でも、明日の朝は少し違うかもね。私はべきという言葉を使いませんから。すべきという言葉ね。君たちが価値判断して。つまり、どういう選択をするか。そして、その選択の仕方を今度は間もなく君たちが親業を果たすんですから、子供にどういう選択をさせたら、将来子たちが飢えることがないかということをしっかりと考えてほしいと思うんやね。

図表3の棒グラフを見て下さい。食べ物の中で一番大事な穀物の自給率だけを人口大国12カ国で比較しています。食べ物の中で一番大事なのは穀物です。人口大国であればあるほど、穀物が不足したら、国内が争乱状態になります。だから、穀物の自給率を高くする政治を行い、その政治をまた国民も支持をします。だから、こんな棒グラフになるわけです。一人、日本だけ食べ物は外国から買ったらええやないかというこういう判断をしてきたわけやね。だから、こんなに低いんです。

今、異常気象で大雨が降ったり、あるいは氷が溶けて海水面が上がろうとしています。もし、この下が海水面であるとしたとき、海水面が上昇したら、どの国が一番先に沈没します？大陸の高さの、高さ低さの問題じゃないんです。大洪水が起こったら、どこの国が経済的に沈没するかです。標高の高さの話じゃありませんよ。どこが沈没します？多分、私が生きている間は沈没しない。でも、君たちが私の年になるころには、沈没する可能性ありますよ。そしたら、君たちがどんな政治とどんな暮らしをしっかりと身につけ、かつ社会に広げていくか。そのことをぜひ考えてほしいと思うのね。

何もそんなに深刻になる必要はありません。明日の朝から、何を選択するかです。こういうふうなものを選択するかどうかの話。それが、全部環境につながるわけでしょう。ですから、環境問題を一生懸命考えても抽象論になるけれども、食の問題からアプローチしたらすごく具体的になり、自分の気持ちを変える一番大きなきっかけになるんやね。

地球温暖化問題を一生懸命考えても、なかなか自分の暮らしにつながりません。例えば、たばこを吸う方、ロータリアンの中にも結構いらっしゃるけど、たばこを吸いながら、地球温暖化を語っている人はいっぱいいるねんね。たばこ1本ぐらいという発想でしょう。でも、1億の人がたばこ吸ったらごっつい温暖化になるでしょう。つまり、たばこ1本ぐらいというこの暮らしの仕方は、小さいこと。でも、人口がようけ集まったら、大きなことになるんです。だから、御飯がパンに変わったとき、一人一人の暮らしは大したことない暮らしです。でも、日本中がそういう暮らしをしたら、自給率が落ちて、田んぼがつぶれて、そして君たちが将来飢えるかもしれないような世の中になるねんね。環境問題を語るときは抽象的になりやすい。でも、食の問題を考えたら自分の問題になるねんね。だから、ここはちょっと強調して食と環境は裏腹の関係にあるというふうにして考えてくださるとうれしいな、こんなふうに思います。一番飢えない暮らしは、風土とマッチした暮らし。この暮らしをするとき、飢えることはないんです。

実は、地上に生きてるあらゆる生き物は、二つの選択基準で食べ物を選択しています。選択するというよりも、そういう体になったからということでもありますけれども。今となっては、選択をすることになります。例えば、モンシロチョウは何を選択してますか。皆さんがよく知ってるモンシロチョウのえさは何ですか。キャベツやね。もともと日本にはキャベツはなかったんやけど、キャベツが日本に入ってから、これええわといって選択したんやけど。何でキャベツを選択するんですか。キャベツだけじゃなくて、要するに大根の仲間を選択するんですけれども。モンシロチョウもキャベツが食べやすかったんでしょう。キャベツを好んで食べるわけです。モンシロチョウが食べるんじゃないですよ。モンシロチョウの子供、幼虫が食べる。親は食べませんからね。何で、選択するんですか。アゲハチョウは何選択してますか。かんきつ類を選択するね。それぞれ生き物は全部食べ物が決まっています。何で決まったかというのは、動物に聞かないとわかりませんけれども。多分、いっぱい地上に生物が誕生してくる中で、おまえがそれ食べるんやったら、わし、これ食

べようかといって、戦争することなく、分け分けして食べ物を選択してきたと思うのね。植物は、みだりやたらに動物に食われたらたまりませんから、一般に皆さんが「あく」と呼んでいる、動物にとっては害なる成分を植物はすべて持っています。それが、香りであったり味であったりしますけども。だからそれを乗り越えるために、動物はまたその「あく」を、「あく」ではないように体を仕組んでいくわけですね。そして、いろんな生物の中で、戦争しないで、住み分けをして食べ物を選択していって、自分がキャベツを選んだとき、キャベツにもそれなりの毒物がありますけども、それを毒でないような体を仕組んでいくわけです。そして、安全に食べれるような体をつくっていくわけやね。

そうすると、地上の動物は、実は二つの選択基準で食べ物を今現在は選んでいることがわかります。一つは、それを食べていたら、つまり親の知恵として伝えられた知恵に沿って暮らせば安全に暮らせるという安全の基準と、それを食べていたら飢えないという基準で、地上のあらゆる動物は食べ物を選択しています。それを食べていたら、安全に暮らせる。もう一つは、それを食べ続けたら飢えることがない。この二つの基準で地上のあらゆる動物は食べ物を選択しています。

君んちのおじいちゃん、おばあちゃんまでは、ずっと親が子へ、子が孫へと米だけ食べとったら飢えへんということを教えてきました。また、米だけ食べとったら、病気にならへん。だけ、といったら、ちょっと誇張やけど、この中にお医者さんもいらっしゃるんで。米だけやったらあかんと言われるから。まあ、ちょっと誇張として、米だけ食べとったら安全に暮らせるし、米だけ食べとったら飢えることはないということを言い続けて、「米食べ」とずっと言い続けてきたわけです。戦後、新しい教育の中から、その強調する言葉が消えていったんやね。いつしかパンを食べるわけですが。じゃあ、パン食べたら、日本人は安全に暮らせるんですか。まして、飢えることはないんですかという話ね。

あんまり深刻にならないでね。あんまり、深刻に考えたって、それは本物にはなりませんから気楽に聞いといて。気楽に聞きながら、でも決意だけはかたくして。気楽に聞いて。肩張ったって、身にはつかないんですから。といって、すぐに生活習慣が変わるわけでもないんで、そんなに深刻に考えなくて、にこにこ笑いながら聞いて。でも、心だけは決意かたくして。為定君は。今朝、何食べました？パン食べた。明日の朝は何食べたらいいと思います？習慣やから、簡単には変わらないと思うけど、でも、ぼつぼつね。

実は私たちは、心で思うか思わないかによって、すごく暮らしが変わるんです。例えば皆さんが、自動車を運転するとき。多分、ほとんどの君たちは運転できると思いますが、自動車を運転するとき、真っすぐ行ったらどぶに落ちる。左曲がった方がいいと思ったときに、ハンドルを急激に切るかどうか。どうですか。車がこう三叉路になってて、真っすぐ行ったらどぶに落ちる。左か右に行ったら安全に暮らせるといったときにハンドルをどう切ります。ぎゅっと切る。ほんのちょっと意識したら、車って曲がるんじゃない？そんなにハンドル大きく切らなくったって、車のハンドルってちょっと意識したらすっと曲がって行くんじゃない？私は車、よう乗りませんけど、私はいつも自転車に乗ってるんですが。自転車乗るときも一緒ね。ここを左折せないかんと思ったときに、こんなぎゅっと曲げなくったって、自転車をちょっと、ほんの気持ち働くだけで、自転車って曲がるでしょう？つまり、車の運転と同じで、私たちの人生も意識するかしないかで人生の航路が変わるんです。だから、今、私がお話申し上げたようなことが皆さんの心の中に根づいて、「ああ、そうやな。ちょっとは変えなあかんな」という気持ちになってくれたら、明日の暮らしがちょっ

と変わり、明後日の暮らしがちょっと変わっていったら、10年たったら、大分航路は変わるんじゃない。だから、時々パン食べてもいいけど、ちょっと変えてくれたらどうかなと思うねんね。そして、子供には、しっかりといい習慣を教えてくださると、それは大きく変わることになるんだろうと思うのね。そのとき、多分、日本が食べ物を失う国になるということはない。日本が食べ物を失う国になるということは、悪いけど今の北朝鮮より、よほどレベルの低い生活を強いられるということを意味するんですよ。それがいいかどうかの話なんで。だから、そういう選択をするというでもいいんだったら、今の暮らしを続ければいいという話。でも、私は、この流れは私たちに責任があるわけですから、私はこの流れを変えたい。そのためには、君たちにもぜひ理解をしてほしい。こんなふうに思うのね。

じゃあ、次行きます。図表4は、食べ物ごとの自給率が書いてありまして。お米だけはずっと100％の自給率ですが、これは消費が減って、減った消費に合わせるために生産を調整しているんで、100になるのは当たり前。ですから、お米の100％という数字はあんまり意味がありません。小麦や大豆はもう見るべきもない数字に落ち込んでいる。お野菜までがどんどこと落ちてきている。こんなふうなことだけ確認をしておいてください。

図表5をごらんいただきますと。今、日本がたくさんのお金を稼いで、そのお金で何を買っているか。一番たくさん買っている買い物が豚肉、それから牛肉、それからトウモロコシ、大豆、小麦。そして6番目に野菜が頭を出してきました。何のことはない。工業製品をどんどん輸出して稼いだお金で、何買ってるか。豚肉・牛肉・トウモロコシ。これ、全部動物性を買っているんです。トウモロコシもこれは、皆さんがポップコーン食べるために輸入してるんじゃなくて、家畜のえさとして輸入してます。ですから、豚肉・牛肉・トウモロコシは全部君たちがお肉を食べるために輸入しているということになります。工業製品をどんどん売って、外貨を稼いで、食料を輸入する。何を輸入しとるか。肉を輸入しておる。肉を食べるために輸入している。君たちが、肉を食べて、確かにおいしいけど、健康になったかどうか。6番目に野菜がどんどこふえてきて、そして、今小麦を追い越そうとしています。間もなく、小麦の金額を追い越すんじゃないかな。そしたら、日本って野菜が取れない国という話ね。図表6に、どこから輸入してるかという国別の順番が書いてありますので見ておいてください。アメリカからたくさんの食べ物を買ってます。

今、君たちは、アメリカの大地からもたらされたカルシウムで君たちの骨ができています。君たちが食べ物を食べるとき、なぜ食べ物を食べるかというと腹が減るからですが、もう一つは体の成分を取るために食べ物を食べます。例えば体の、皆さんの真ん中に走っている骨は、燐酸カルシウムというかたいかたい成分ですが、この燐もカルシウムもみんな元は大地から来たものです。したがって、君たちの体は、どんなに町の中で農業と無縁に暮らしていても、土の成分でできていることには違いがないんです。君たちの体は土の成分でできています。だから、土が要るねんね。カルシウムも燐も、みんな土の成分。そして、今君たちは日増しにアメリカの土の中にあった燐とカルシウムで骨をつくる。そういう暮らしをしているわけです。ほんなら、君たちは何人になりますか。アメリカ人もアメリカの土の成分で体をつくってるわけでしょう。そして、君たちもアメリカの土の成分で体をつくっていたら、何人になるの。国籍違う。顔つきも違う。顔つきって、こんな皮一枚はいだら、一緒でしょう。皮べろっと一枚はいだらアメリカ人も日本人も変わらへんねんからね。あなたの命の本質は何人。表面だけで決まってるわけじゃないでしょうという話や

ね。

図表7を見ていただいて。これは、食べ物の中で一番大事な穀物を、先ほどは10カ国で比較してありましたけど、今度は統計の入る、およそ50カ国で比較しています。穀物だけの自給率です。これは量ではかっています。皆さんが一年間で食べる穀物のうち、国内で生まれた穀物の割合です。日本、何番目にありました？見つかりました？順番はどうでもいいんですが、日本の下にどんな国がありますか。日本の下にある国を旅したら、どんな風景が目に入りますか。砂漠やね。つまり、日本の穀物を生み出す力量は砂漠の国並みなんです。砂漠の国並みの力量でしかないんです。砂漠の国は多く、石油という資源を持っています。日本にはあいにく石油はありませんが、それでも石油よりもなお大事な資源があります。何が日本にありますか。石油にまさる資源。おっしゃるとおり、水です。そして、水から生まれる緑があるんですが。それを活用しないで、砂漠の国並みの食べ物をつくる力しかない。こういうふうな国で人々が幸せに暮らせるかどうかという話になっています。

ちょっとここで休憩しましょうか。じゃあ、10分休憩して、後ろの時計で25分から再開します。

（　休憩　）

○保田先生　それじゃあ、再開してよろしいでしょうか。

あんまり、おもしろくない？おもしろい？深刻な話をしとんやけど、おもしろい？オッケー。このぐらいの気楽な気持ちで聞いていただくといいと思うねんね。顔は笑って、心で締めて。

今、お話してるのは、どちらかと言えば食料という、食べ物という環境要素の一つの日本の問題。そして、今は飢えという側面の話をしています。将来、日本人が飢えるかもしれないという話。いや、日本人が飢えるんじゃない。私たちが飢えの世界をつくろうとしているという話をしています。だから、責任は私たちの心の中にある話をしています。外部から飢えが迫ってきているのでは決してありません。そこは勘違いしないでね。私たちが飢えの世界をつくろうとしているという話をしています。特に後ろに座っている方々がその責任者であるということをお話をしています。だけど、若い方は、それをまねをしないという、そういう決意をしていただけたらいいな、こんなふうに思うのね。

図表8からは食べ物の中でも大変大事な、お野菜の世界を御紹介します。お野菜の世界も先ほど見ていただいたように、間もなく大量に輸入した小麦の金額を上回ろうとするほどのお野菜を今、日本は輸入し始めました。最大の理由は安ければいいというこの考え方です。皆さんのお母さんが選択されている姿がこれをあらわしています。そして、どんどん、どんどん輸入の野菜がふえまして、例えば、金額は後でまた見ておいてください。タマネギ・カボチャ・ゴボウ・ブロッコリー・ショウガ・ニンジン・ネギ・メロン。こんなふうな順番で輸入の野菜が多い。多分君たちも冷凍野菜などで利用しているかもしれない。これもほとんど輸入野菜。えっ、日本で野菜は取れないのという話になります。だけど野菜は、日本は実はイタリア人に並んで、野菜の消費の多い国で、その野菜の100％を日本はつくっていたんです。いつしか、野菜の消費を減らしながら、ついでに食べ物の場所まで移してしまったんです。今、中国から大量の野菜を輸入する国に変わりました。

注目をしておいてほしいのは、図表9。今、日本の野菜畑が猛烈な勢いで崩壊を始めました。日々、野菜畑が減りつつあります。このようにして、野菜はカロリーを持ちませんから、さっきのカロリー自給率の中に野菜は反映しませんけれども、しかし、野菜畑もまた確実に皆さんの目の前から消えようとしております。そ

して、その野菜が減った理由が二つあるということで、図表10に書いてあります。図表10は輸入がふえた。ちょっと目盛りが小さくなったので、線が強調できていませんが、輸入がふえた。もう一つは、一人当たりの野菜の消費量が減った。この野菜の消費量の減り方は、余りにも顕著で、先ほど申し上げたように、日本はイタリア人と肩を並ぶ野菜消費大国だったんですが、今は野菜消費が少ないアメリカ人をなお下回るような、野菜の食べ方に変わり、こうした暮らしが若者にいっぱい生活習慣病を生み出してきているわけです。

申しわけないけど、今朝の食事も野菜は少なかったよね。何で野菜の消費量が減ったんやろう。あれ、逆に言えば、昔の人は何でよく食べとったんやろう。最大の理由は生野菜を食べるようになって、野菜の消費量が減るようになったんです。生野菜を食べると、野菜って見かけだけたくさん見えるでしょう。今日も、あんな薄いお皿に生野菜を出していただいたら、ちょっとつまんだら、お皿がすぐいっぱいになっちゃうじゃない。ほんなら、ちょっとほかのものを乗せようと思ったら、野菜は遠慮してもらわないとあかんわね。あの野菜を湯がいたり、煮たりしたら、どうなる。うんと容積が小さくなったら、たくさん食べられるでしょう。でも、今日は煮たあれを、おナスかな。何か出てたね。でも、あんまり君たち取ってなかったね。煮野菜が一品だけあった。でも、私の順番のときにはほとんど残ってたから、君たちは食べていなかった証拠やね。生野菜だけが皆さんの胃袋に入ったけど、あれだけの野菜って食べたうちに入りません。まあ、いわばちょっと片端を食べた程度の量でしかなかったんやね。

こんなふうな暮らしの中で、つまり外圧、内圧から日本に野菜畑がどんどこ、どんどこつぶれて、そして、君たちがいよいよ日本の社会を背負って、もう間もなく担うんか、もう担っている人もいるのか。だけどもっと責任ある立場になったとき、日本の野菜畑はもう半減しているでしょう。そのときに、今度は君たちがとことん困るのは、日本の野菜の種が消えてしまうこと。

野菜の種というのは、それぞれの風土の中で狭い狭い風土の中で培われ残された遺伝的資源なんです。例えば、この香川県で取れた野菜を兵庫県に持っていってもつくれないんです。それほどに野菜というのはそれぞれの風土で長く長く先人が培い、そしてはぐくみ育てて残してくれた種、遺伝的資源。これを野菜畑がつぶれていったときに、一緒に失っていくんです。失われた遺伝的資源は二度と返りませんから、今度いよいよ君たちがお金を失って、野菜もつくらないかんなという時代になったとき、種がない。どうします。こういう問題を、実は私たちがつくった。そして、私たち、私というのは君たちは入ってませんよ。私たちがそういう世界をつくって、種を失って困るのは君たちなんです。つまり、私たちの都合が君たちの不都合を生んでるんよね。だから、ゴアさんの言う不都合な世界というのは、実はそれをつくったのは私たち。不都合を受けるのは君たち。こういう関係にあります。だから、君たちは本当に親のまねをしてくれては困る。もっと親と別の価値観を持って暮らしてもらわないといけない、こう思うねんね。あんたたちばっかりいいことをして、わしらに苦労させるんか。こういう話やけど、悪いけどそうして。

じゃあ、次。もうちょっと急ぎます。今度図表11のぐんと膨らんだ折れ線グラフだけちょっとごらんくださいますか。今、日本が飢えに直面してるという話を専ら量の話でしてきました。中には、だれかつくってくれるわいと思って聞いてくださったかもしれません。今度は、労働力の面から。あるいは人の面から将来を見通してみたいと思います。これは、今現在、カロリーベースで40%を自給してくださっている農家の皆さんの年齢別人数です。何歳が一番多

いでしょう。男、女に左右に振り分けてあります。統計が平成２年、７年、12年、16年。つまり、1990年、95年、2000年、2004年という年に取られた統計がプロットしてあります。ペケペケ、ペケペケのプロットが平成16年の一番新しいデータです。何歳が一番多いですか、男で。一番の山よ。70から74が一番多いね。大体、このグラフで80歳になると引退なさるという傾向がわかります。そうすると、この70から74歳の方はあと10年で引退されるねんね。そうすると山が消えます。今度は60から64歳の方はあと20年後にここで消えます。そうすると、ここで山の向こう側のふもとの人数が減るわけやね。そうすると50代はがさっと減っていくわけです。そうすると、労働力の面から見ると、カロリーベースではじわじわ、じわじわと減るように見えるわけね。だから、40年後にゼロになるように推計できますが、労働力の面から見ると、今度はガウスの関数でがさっ、がさっと減っていくねんね。20年後に食べ物を失う国になる可能性があります。

ちょっと残るやんか。労働力がちょっと残ったって、日本の農業は維持できないんです。理由は日本の農業は水田農業です。麦作と違うねんね。水田農業というのは、水が確保されて初めてお米づくりができるんです。じゃあ、水を確保するためにはどんな苦労が要るかというと、まず山から流れ込んだ川をうまく整理して、そして川の適当な場所に井堰といって水をためる装置をつくって、そこから水路で水を引いて、それで田んぼに水を引っ張って、ようやくお米づくりができるわけね。田んぼの下に流れている川の水は決して利用できないんです。ですから、この田んぼよりも高いところで井堰を切って水を引っ張ってくるわけね。この段々畑の一番高いずっと川の上流に井堰を切って水を持ってくるんですよ。段々畑の下に流れている谷川の水、はるか下は水上がってこないでしょう。だから、使えない。そうすると、私は兵庫県の北の但馬の出ですが、この段々畑のいっぱいの村では、この段々畑で一番高いところに、この川の上流の高くなったところから、延々とこう山をまいて、水路で水を持ってきて、一番上に水を持ってきたら、あとはだんだん落とせばいいわけやからね。こんなふうにして、日本の棚田のお米づくりができてるわけです。そうすると、山をまくこの水路は、４キロメートル、５キロメートルはもうざらにあるねんね。こうした井堰を切る。つまり石を組んで、あるいは今、コンクリートで固めますけど、水をたまるようにして、しかし完全にためたら、今度は大洪水になったら困るから、適当にあふれながら、水がたまって水路に入るような大変たくみな装置をつくるんです、あんまりお金かけないで。だけど、台風のたびに傷みますから、それを修理する。川も整備しなきゃなりません。それよりも何よりも、４キロメートル、５キロメートルの水路を掃除するのは、大変な労働力。ですから、ちょっと残るやんかと、図表11で言えますけど、ちょっと残ったってあかんねんね。今は大勢の人が無償の労働力でこの水路が維持され、あるいは道が管理されてお米づくりがなされています。その無償の労働をずっとこれまで提供してきたこの方々が引退されたら、日本の水田農業は一挙に崩壊する可能性があります。そうすると、労働力の面から見ると、あと20年後には、日本は相当に食べ物を失ってしまう。

20年後って、何歳かな。油のっとるよね。油のる人生やけど、油がのるほど食べ物があるかな。がりがりの体になったときに油がのったとは言えないのかもしれないね。そうすると、今の油、大事にしといて。実は、事態は本当に深刻なんです。だけど、そんなに深刻には考えないで、事態は深刻ですけど、といってすぐに君たちが何か張り切ってくれたって、そんなに簡単には問題は解決しませんから、一番君たちに協力していただきやすいことは、明日の朝から何食べるか。この選択です。

今、結局お米づくりに若者が育っていないのは、みんながお米を大事にしないからでしょう。お米を大事にしないから、お米の値段が上がらないわけでしょう。お米づくりしたって、もうからへんかったら、若者はそんなもんせえへんわけですから。だから、みんな町へ出ていくわけやね。この中にも本来農家の跡を継がなきゃいけない人も中にはいると思うけど、そんなことやっとられへん。だれも米を大事にしない国に、米づくりする若者が育つはずがない。みんながパンを選択する国の中で、若者が米づくりなんか、だれがしますかという話でしょう。そしたら、若者が農業をしようというふうに決意してくれるためには、彼がつくった作品をみんなが支えてくれなきゃあかんわけでしょう。皆さんがパン食べたら、だれが支えることになるんですか。アメリカの農家を支えることになるんでしょう。つまり、何げなくパンを選択するというその暮らし方は、アメリカの麦畑を青々と茂らせて、片や日本の田んぼにまた青々と何が茂ります？雑草が茂ってるんじゃない。で、自給力が落ちていくわけやね。事のよしあしは君たちが判断してね。淡々と事実をしゃべってるから。明日の朝、君たちがパンを食べるとき、この暮らしはアメリカの麦畑を青々と茂らせて、片や日本の田んぼにまた青々と雑草を茂らせているんやなと思いながら食べてみて。そのことがいいかどうかは君たちで判断してください。私はすべき論を言いませんから。けど、私自身は言いたいねんね。もうちょっと目を開きなさいって。言いたいけど、君たちだけ開けと言って、年寄りがパンを食べとったらあかんわけやから。私たちは、私たちの問題として取り組んでいきます。だから、君たちは君たちとして判断をして、明日からの暮らしを考えてほしいと思うねんね。こうして田んぼが守られてこそ、日本の環境が守られるんです。

今、実はコウノトリの御紹介いただきましたけど、コウノトリ大事にせないかんと言う人はいっぱいいるんです。それは鳥だけのことを考えていただいてるねんね。コウノトリ大事にせないかんと言って会議した後に、パンを食べる人はいっぱいいるわけです。コウノトリって何食べとるの？コウノトリのえさは田んぼの中に生きてるドジョウやあるいは田んぼの水路に生きてるフナなんかをえさにしてるんです。わっと農薬まいて、みんな死んだからコウノトリ、絶滅したんです。何で農薬まいたか。たくさん食べたいからとあの当時は思った。今は食べないから草が生えた。だから、暮らせない。あるいは農薬まいたら、ドジョウがみんな死んじゃった。だから、暮らせない。

今、豊岡という土地の人に私たちも一生懸命お願いをして、なるべく農薬を使わないお米づくりをお願いして、今少しずつその面積をふやしていますけど、せっかく苦労して農薬使わないお米づくりをしても、まず米食べない人がいっぱいいる。つくっても売れない。次にちょっと高い。そんな高い米嫌。アメリカの米の方がええ。今、アメリカの米、いっぱい入ってますからね。そういう選択をしてくれたら、せっかく農薬を使わない米づくりをした方の田んぼは、再び草が生えていくわけやね。そういう関係はわかりやすいでしょう。だから、コウノトリというその環境要素を大事にしようと考えてくださるんやったら、抽象的に考えてもらったらあかんねんね。殺すな、薬まくなまではわかるけど、その人の暮らしが変わってくれんかったら、コウノトリは暮らせないんです。つまり、そこで農薬を使わないで頑張った農家のお米をみんなして食べていこう。そういう決意をしてくださったら、農家の皆さんも張り切って農薬を使わないお米づくりに努力くださるし、その面積がふえたら、コウノトリは暮らせるわけです。

コウノトリって、羽広げたら２メートルもある大型の鳥で、タンチョウヅルに並んで日本で一番大きい鳥なんです。それをむざむざ殺して

しまったんです。今、100羽ほど人工的に飼育して、そのうちの今14羽を放して、野に飛ばしていますけども、今年もまた飛ばす予定にしています。もしドジョウがたくさん住んでる田んぼがあるとすると、１羽の鳥が１年間に約４ヘクタールの土地のドジョウを必要とする。そのぐらいのたくさんの生き物を食べて暮らす鳥なんです。１羽の鳥が１年間に暮らせるのは４ヘクタールの田んぼが無農薬でつくられなければならない。まだ、そこまでの面積がいってないんで、残念だけど時々えさをまいてるんです。でないと死んじゃいますから。つまり、環境問題は、押しなべて私たちの食という暮らしとつながっているんです。だから、決して自然保護運動のように抽象的にやってもらったって困るんです。

では、次に行きます。今までは専ら飢えの話で、私たちの選択の仕方、表面上は豊かな選択をしています。今朝の皆さんの朝御飯の選択の仕方もすごく豊かな選択をしました。私は食事というのはバイキング方式は反対なんです。バイキング方式は目の前にいっぱい取れるというふうな食事の提供をしながら、理性を求めてあんまり食べるなということを君たちに求める食べ方やねんね。そうでしょう？いっぱい盛り上げて、食べ食べというのが前提でしょう、盛り上げるというのは。いっぱい食べ食べというふうな誘惑を目の前に示しながら、でも、みんなで分けて食べなさいということを言うわけやね。いっぱい誘惑させながら、君たちに理性を求めるというのは、これは間違い。食事は、最初から分けて食べるものなんです。本来豊かなものじゃないんですからね。だから、君たちが親業をするときには、食べ物はその子供の体の大きさに、あるいは食欲の程度に応じて分け分けして与えるというのが当たり前というふうに考えて。バイキング方式という食事、家庭なんかでせんといてね。お母さんにとっては楽です。盛りつけせんでええわけやからね。でも、そういう横着な発想はあきませんねん。だから、誘惑に負けた人はようけおったでしょう、今朝も。二皿も取ったりして食べた人いるでしょうが。それは誘惑に負けた人。豊かな選択の人。この豊かな選択は、やがて貧しい世界をつくるねんね。ひょっとすると、その豊かな選択をする人が既に心が貧しくなってるかもしれませんね。それは「かもしれない」だけの話よ、決めつけませんから。

じゃあ、次は図表12です。黒い山なりの図が左方に出ている。今度は、今の選択の仕方で健康に暮らせるかどうかという、健康サイドの話をしてみたいと思います。昭和35年当時。1960年。私がちょうど学生のころです。一日にカロリーで2,290カロリーが取れる、ようやく戦後の食糧難を克服する時代を迎えました。いや、迎えたんではない、みんなが努力してつくり上げた世界です。そのとき、若者であふれた社会ですから、2,290キロカロリーでは少し足りない気味でした。でも、おやつを買うほどのお金もなかったので、私たちはいつもおなかがすいていた。したがって、３度の食事が大変待ち遠しい、そういう時代でありました。

そのときお米から取るカロリーが1,100キロカロリーとちょうど半分を占めていました。ですから、まさにお米は主食。お米によって私たちは命をつないできたと言ってもいいわけですが、その当時の栄養学は、日本人は戦争に負けたのは、体が小さかったんや。小さかったのは肉と油を食べへんかったからやというふうなことで、もっと肉と油を食べなあかんということが学校で、あるいは地域婦人会の社会教育で語られ、みんなそれを信じて、肉と油を食べるようになりました。あわせて、お米を食べるよりは麦を食べる方が栄養的に価値が高いということも語られました。理由は麦の方がたんぱく・ビタミンが多いという理由であったんです。当時の栄養学のレベルでは、やむを得なかったことかもしれませんが、今は全くお米の方がいい

というふうに栄養学ではもうはっきりとわかっていることですが、当時の栄養学は米より麦の方がいいという、そういうふうな説になっていたわけです。ですから、米より麦を食べる方がいい。つまり、パンを食べる方がいい。パンがなければ粉にして、要するにだんごにして食べたらいい。そして、肉と油をできるだけ食べ、食べと言ったって高かったから食べられませんでしたけども、せめてみそ汁を飲むときに、油を一滴入れて、みそ汁を食べなさいとか。あるいはほうれん草を食べるときは、お浸しにするんじゃなくて、油いためにして食べなさいとか、こんな指導が行われて、もうこの昭和30年代の栄養学、特に昭和35年以降、本当に熱心に繰り広げられたこの食生活改善運動によって、私たちの常識が覆されて、米よりも麦。そして肉や油はすぐれた食材。芋や野菜は劣った食材。こういうふうな考え方にだんだんなっていって、選択の仕方が変わったわけです。そして、今、お米の消費が半分に減って、畜産物と油。つまり肉と油がすごくふえるという、こういう暮らしに変わったわけです。

さっき見てもらったね。肉の輸入が多かったよね。つまり、膨らんだ肉、膨らんだ油はみんな輸入品です。小麦ももちろん輸入品ですから、この食生活の変化はそのままそっくり輸入食品がふえた。そして、国産食品が減ったということを示しています。わかりますでしょう。さっき豚肉、牛肉の輸入の多かったということを見てもらいましたからね。つまり、この暮らしが、実は輸入食品をふやす動きを支えてきているわけです。

この当時、お米を食べるなということを率先して医学的立場からお話しいただいたのが、慶応大学医学部の先生で、林先生という方ですが、この先生は、お米を食べるとばかになるとまでおっしゃった。真に受けたわけですね、私たちもね。ほう、米食べたらばかになるんか。だから、パンを食べろということになったんやね。

それから、昭和35年、私が学生のころ、学生食堂でいろんな食堂で食事をするような生活スタイルになるわけですが、そのときに働いていてきれいな栄養士さんがおられまして、よく栄養士さんの部屋に遊びに行ったんですけども。それはそれはすてきな栄養士さん。その栄養士さんが雑談の中で、タケノコやこんにゃくは、あれは食物繊維の塊やから食べんでよろしいという、そういうことをおっしゃった。私なんか田舎もんですから、タケノコ、こんにゃくは嫌というほど食べてきたんで、へえ、価値ないんですか。食べて損したと言った覚えがあって、それからタケノコ飯とかこんにゃくのおかずは食べんようにしたんです。だって、そんなきれいな栄養士さんが食べるなとおっしゃったんですから、それは信用しますわ。今はタケノコ、こんにゃくは食べないとあきませんよ。今は食物繊維の塊だけじゃなくて、血圧降下を下げる効果とかいろんな効果があるので、タケノコ、こんにゃくはすぐれた食材ですけど。そのときに、彼女はちょうど栄養学部を卒業したぱりぱりの栄養士。ぴかぴかのと言った方がいいかな。ぴかぴかの栄養士で、なぜそういうことを語ったかというと、そのとき彼女が習った栄養学は西洋のヨーロッパ源流の栄養学であったんです。つまり、肉と油といったようなこうしたカロリーの高い食べ物こそがすぐれた食材という、そういうことを習ってきたから、それを即刻私たちに教えてくれた。でも、私たちはその彼女の言葉の意味合いの真偽はわからなかったから、頭から信じたというわけでもあります。多くの人が信用したわけです。

そして、皆さんの御両親がそうだと思いますが、このようにして暮らしが変わった。こんなふうな暮らしになった。この暮らし方を今の栄養学で分析したら、図表13の三角形、丸、三角の、この三角の形になる。昔は確かに肉、油。特に油が足りなかったと言えるかもしれない。けれども、今は既にPとFが飛び出した。Pは

プロテイン、Fはファット。つまりたんぱく、脂肪は今食べ過ぎ。そしてC、カーボハイドレイト。炭水化物は今は食べなさすぎ。上のグラフから言えばお米の食べなさすぎ。今、既に平均的ですよ。これ、日本人の平均値ですから、平均的に今日本人はたんぱく、脂肪の取りすぎ。そして炭水化物の取りなさすぎ。もうちょっと具体的に言えば、肉と油の食べ過ぎ。お米の食べなさすぎという暮らしになっていますが、でも、図表12のグラフからまだこの流れはお米の消費減、肉と油の消費増につながっていくことを予測させますよね。あわせてこれ平均値ですから、私たちはあんまり肉を食べる世代じゃないんで、君たちは、もっとPとFがオーバーをしていると考えなければなりません。そして、もっとCが不足しているというふうに考える必要があります。あわせて、次の棒グラフが示しように、今日本人はカルシウムと鉄が足りない。これほど豊かな選択をしながら、実は体が健康に生きられるかどうかという基準から考えたら、貧しい選択をしていることがわかります。カルシウムと鉄が平均的に足りない。私たちは足りてるつもりでいますから、君たちがもっと足りない。君たちはこれから親業を果たさなければならない体であるにもかかわらず、君たちの親の教えが不十分であったために、君たちは平均値以下のカルシウムの取り方しかできていないというふうに考えていただかなければなりません。

では、カルシウムって何食べたら取れると皆さんは習ってきた？小魚。平間君はどこですか。小豆島。この辺は魚がおるもんね。でも、そんなに食べとる？小魚だけ。牛乳。牛乳からできたチーズ。ほかに。カルシウム。皆さんの体の真ん中を走ってる骨は、カルシウムでできてるねんね。そんだけ。小魚と牛乳だけ。こんなことを考えるときに参考になるのは、我々人間のすぐそばに生きてる牛を考えていただくとわかりやすいんです。例えば、日本には、但馬牛という世界に誇る牛がいますけど。この但馬牛、黒牛と言ってもいいですが、この黒牛は何を食べて骨をつくっています？小魚食べとる？牛乳飲んどる？何食べてます？草やね。何色の？緑の草やね。おんなじ哺乳動物やから、人間も緑の野菜やね？草じゃないよね。じゃあ、今朝緑の野菜があった？今日、緑の野菜、なかったん違う？白い野菜はあったけどね。つまり、牛は緑の草をしっかりと食べることによって、葉っぱ一枚一枚は少ないんです。でも、それをしっかり食べ続けること。食べ続けることによって、あれだけの立派な骨をつくり上げていくんです。もちろん肉もつくっていくわけです。実は、緑のこの野菜は、私たちが体をつくっていくのに極めて大事な食材なんです。にもかかわらず、今、緑の野菜を君たちはほとんど食べることがなくなった。だから、カルシウム不足になるんです。

ただし、人間は牛ほどたくさん緑の野菜が入らないので、だからこそ食文化がちゃんとつくられているんです。緑の野菜を牛のように生で食べたらうまく消化できない。だから、湯がいたり煮たり、容積を小さくして食べやすくして、しっかりと食べる。これがまさに食文化。これは長年の経験の中で、こういう食べ方をしたら、健康に生きられる。この健康に生きられるという知恵が文化として反映して伝えられていくわけです。それを私たちは戦後惜しげもなくほかしてしまったわけやね。そして、欧米の人が築いてきた食文化をよしとして導入したけれども、その欧米の食文化は欧米の風土でつくられたもの。欧米の風土が欧米の人間をつくったわけです。日本は日本の風土で進化をして、日本の風土で合うような体をつくってきた。だから、欧米の栄養学をうのみにしてはならないにもかかわらず、その辺をうっかり私たちは区別するのを忘れてきたわけですね。

そして、なお菜っぱだけじゃ足りない分を日本人はマメで補ってきたんです。ヨーロッパに

はないんです。そのマメ文化というのは。このマメを無数のマメを私たちの先人はつくり、そして育て残してくれたわけです。間もなく春に何が取れますか。マメでは？春のマメ。イメージがわかへんねんね。そうそう、エンドウ豆。それから、ソラマメ。若い衆にはイメージがわかない。この待ちに待った春に取れるマメがあって、それからインゲンマメがあって、夏には枝豆があって、そして春には無数の大豆や小豆やその他さまざまなマメ類がたくさんあって、それを年間通してずっと食べ続け、マメの一部をお豆腐に加工したり、またお豆腐を油揚げに加工したり、あるいは高野豆腐に加工したりして、とにかく豆製品を年中しっかり食べる。こういう暮らしの中で昔の人たちは君たちよりもよっぽど骨が強かったんです。

今、牛乳飲んで君たちの骨が強いですか。同時にカルシウムというのは取っただけでは骨には沈着しないんです。使わなかったら。そうすると例えば牛乳を飲むときに、歯を君たち使う？牛乳飲むとき、こうして歯を使う？ごくんと飲んだときに歯なんか使わないでしょう。カルシウム取れる計算にはなるけど、そのことによって歯は鍛えられると思う？じゃ、菜っぱ食べるときはどうですか。ごっくん飲みできる、菜っぱを？マメさんら食べるときにごっくん飲みする？しっかりかむでしょう。だから、栄養分というのは取るということと同時に、その体を使う。そして骨に沈着していくんです。だから、体を使わなきゃごっくん飲みした牛乳が胃袋よく動かす？あるいは腸をよく動かしますか。じゃあ、マメさん食べたときに、胃はじっと寝たままでうまくこなれる？内臓ってみんな骨にぶら下がっているんでしょう。内臓がよく動いたら骨がよく鍛えられる計算になるでしょう。病人じゃあるまいし、ごっくん飲みして横着して骨が鍛えられるかどうかの話。まだ、君たち若いから、あんまり顕著にあらわれないけど、少しお年を取った人が、病院に入院したときに、すぐ骨がやせるでしょう。そのとき、どんなふうなリハビリをするんですか？体を動かすんでしょう。栄養分というのは体を動かして初めてその大事なところに運ばれて、身につくわけです。体を使わないで、飲んだらいいという話ではないんでね。ですから、この今、カルシウムが不足しているのは、そうした菜っぱやマメが食べられていないからということがあるから。じゃあ、何で菜っぱとマメが食べられないの？主食と深い関係があるわけです。何を主食にしたから、菜っぱとマメが入らなくなったわけ？もうここまで来たらわかるよね。パンを食べると、青い菜っぱがほとんどくっつかない。煮たり湯がいたりするような菜っぱとパンとはくっつかないでしょう。大体生野菜になるでしょう。生野菜に使う野菜とは何ですか。今日も出たキャベツとレタスとキュウリとトマトと、みんな牛の嫌いな野菜ね。骨にならないことを知ってるからですよ。皆さん牛より賢いわけ？こんな話やね。

そして、今日野菜にドレッシングかけた人いたよね。このごろの若者はドレッシング、もしくはマヨネーズをしっかりかける。もう既に油を取り過ぎているにもかかわらず、まだ油を取るわけ。だって、この左の三角形で油取りすぎになってるでしょう。これ、日本人平均値ですから、私たちはこれよりも少ないんです。だから、君たちはもっとPとFが飛び出しているはずなんです。その上にドレッシング、マヨネーズ使ったら、もっと飛び出すんじゃないの？

私も長年学生とつき合って、お好み焼きやすし屋に連れていってやったんですけども、そしたらだんだん、だんだん若い世代の学生はお好みににゅるると、こうかける食べ方をするねんね。わかるよね、これ何か。にゅるる、何ですか。そんなものかけたらあかんって。せっかくこんなに油が少ない食べ方。お好みって結構いいんですよ。野菜たくさん使うから。青菜は入らないけど。まだほかのものよりはましなんで。せ

っかく油が少ない食べ方をするのに、そんだけマヨネーズうにょうにょしたら、油の取り過ぎになるんであかん。でも、学生が「食べたらおいしいですよ」と言うから、なんなら一口もらおうかと食べたら、やっぱりおいしかったです。確かにおいしい。油っておいしいんですよ。ある学生と行ったら、すしにマヨネーズつけよったんです。気色悪い、やめとけって。やっぱりその学生が「いや、食べてみてください。おいしいから」と言ったんです。食べたんです。やっぱりおいしかったんです。だけどそれは、やっぱり食べ方としては間違っているんで、それは明らかに油の取りすぎ。

実は、マヨネーズというこの油食材は習慣性を持つんです。ですから、一回マヨネーズになじんだ舌は、なかなかマヨネーズから脱出できなくなるんです。たっぷり、たっぷり使うようになっていく。ですから、これから君たちが親業を果たすときは、子供に絶対マヨネーズを使わないということを決意してやって。小さいときからマヨネーズになじませない。でないと、一生油味になじんだ子供に、大人になっていくことを保障します。もう既に君たちは脱出できない子がいるかもわかりませんが。決意すれば、少しずつ変わることはできますから、決意して。ドレッシングもできたらやめて。せっかく野菜というのは油のない食材として意味あることなんです。そんなものに油をなじませてどうするんですかというふうな話ね。でも、べきということは言いませんから、君たちで考えて。

図表14に小さな三角形グラフがありますから、ここをちょっと御紹介してみたいと思います。これは、おんなじでん粉やけど、でん粉は消化液で消化されてブドウ糖になって血糖値を上げて、血糖値が上がると、インシュリンが出て、血糖値を大体2時間後には元に戻す。これが私たちの体の仕組みになっています。ですから、糖尿病かどうかというのは、食後、御飯を食べた後、2時間後に採血してこの血糖値を測定するわけやね。通常健全な方は2時間後には血糖値が元に戻っている。いつまでも2時間たっても血糖値が下がってない人は、糖尿病の予備軍としていろんな指導を受けることになるわけです。これは2時間後じゃなくて、1時間半後の測定値ですけど、ほぼ元に戻っているというこうしたデータですけれども。

実はでん粉によって、インシュリンの求め方が違うんです。インシュリンの要求度と言った方がいいと思います。ここで、君たちにもぜひ承知しておいてほしいんですが、私たち日本人は日本の風土で進化を重ねた子孫です。ですから、この日本の風土で何を先人が食べてきたかによって、例えばインシュリンというホルモンの分泌能力が影響を受けることになります。実は日本人は、欧米人に比べてインシュリンの分泌能力が2分の1しかありません。個人差がありますから、中にはへとも思わない人もいますけれども。平均的は日本人は欧米人の約2分の1なんです、インシュリン分泌能力が。中には、少ない上になおインシュリンの効き目の悪い人が多い。これが日本人の特質なんです。何でか言うたら、日本の風土はインシュリンをたくさん必要とするような食べ物を生み出さなかったから。必要でなかったからインシュリンの分泌能力が低いんです。こういう日本人の特質をちゃんとわきまえて暮らしをすればよかったんですが、そういうことを無視して、食べ方だけをヨーロッパから習ったわけやね。そうすると、例えばパンを食べると、小麦でん粉はお米に比べてインシュリンの要求度が高い。ジャガイモが一番インシュリンの要求度が高いんですが。つまり消化が早すぎるんです。日本人の体からするとね。つまり、お米でん粉よりも小麦でん粉。小麦でん粉よりもジャガイモでん粉の方が消化が早い。それだけ早くおなかがすくということでもありますが。絶えず、こうしてインシュリンを求められると、インシュリン分泌能力の低い人はその人から順番に糖尿病にかか

っていく可能性を持つわけやね。ですから、私たちは私たちの体は私たちの風土で育つ食べ物によって進化してきたということを忘れてはならない。日本人がインシュリン分泌能力が低いのは、低いんではないんです。分泌をたくさん出さなくてもいいような食べ物を食べてきたから、そういう体になっただけのことなわけです。だから、そのことはぜひわきまえて、そうすると、君たちの体も割ってみないとわかりませんから、インシュリンの分泌能力が高いか低いかは個人差があるので、全員が低いということには決してなりませんけれども、平均的には日本人は低いということはわきまえといて。

そうすると、何が一番いいんですか。主食には。とりあえずジャガイモとパンとお米と比べたら、日本人は何が合うということになりますか。判断ぐらいできるでしょう。この中で左の油の食べ過ぎということと、ジャガイモって食べ過ぎたら血糖値上げやすい食材だということを、一日のおかずで肉ジャガにして食べる程度のジャガイモの食べ方は何にも問題ありませんけれども、例えば子供があるもの食べたらやっぱり私は問題だと思うんよね。つまり、油の食べ過ぎとジャガイモは血糖値上げやすいというふうなことを重ねたときに、子供の最悪のおやつって何。ということは割に簡単にわかるでしょう。今度、君たちが親業を果たすときに、絶対に子供にそんなものをおやつにやらないという決意をしてほしいと思うんよね。同時に油のお菓子は過酸化脂質が多いので、子供を早く老化に導くと言われています。いやいや、それは君たちのことでもあるよね。早く、じいさんばあさんになりたい人は食べたらよろしい。けど、やっぱりそんなことはぐあい悪いなと思う人は、そういうものは選択しないという話になるねんね。もちろん、山口先生がビールのおつまみにちょっと食べはるぐらいやったら、何の問題もない。けども、小さな子供が一袋、おやつでばりばりばり、むしゃむしゃと食べるような、こんな食べ方は私は断固反対。だって、電車の中で結構そういう姿を見るわけやからね。

この辺までお話したら、お米のよさが大分御理解いただけたかな。つまり、お米を食べるという行為は、私たちが飢えに直面しないということと同時に、私たちが生涯健康に暮らせる。同時に、もちろんこのお米を食べるときには、おかずとして菜っぱとマメをしっかり食べるということが大切ということになりますけれども。そうした食べ方は、まさに日本の風土にマッチした食べ方。いずれも飢えに直面しないし、同時に健康に暮らせるということじゃないでしょうか。

私はちょっと不整脈という持病を持っているので、3年前にその不整脈があんまりひどかったので抑える薬を一錠だけ飲んだんですが、効かなかったんでやめました。ですから、この10年間で、薬はこの一錠だけ。これ、飲んでなかったら、10年間何も薬を飲んでいないと自慢ができたんですけど。ちょっと3年前に一錠飲んだのでゼロじゃないんですけども、全く薬に依存しない暮らしをしています。じゃあ、君たちは、この10年間で。10年も言わんでもいいや。この2年間で、薬飲まんかった人、何人ぐらいいる。この2年間で薬をまったく飲まなかった人。飲まんかった。一人かな。何、飲んだん。花粉症の薬。これはちょっとつらいよね。でも、花粉症そのものは、もうちょっとみんなで考えたらええんやけどね、なっちゃったからしようがないけど。今、アレルギー疾患が多くなったんで、あの辺ちょっとつらいところですけども。内臓疾患だとか風邪で薬を飲んだ人が多いかな。風邪が多いかな、一番。風邪薬効いた。ここにもお医者さん、何人かいらっしゃるけど、多分お医者さんは自分のお子さんには、風邪薬はお与えにならないんじゃないかな。また、後で聞いて。私からは言わない方がいいかも。

実は、私の大学時代の友人が医学部に進みまして、そして卒業して、わしは地域に貢献する

医者になりたいと、えらい理想高かったんですが、開業をしまして、風邪ひいた子供がたくさんいますから、風邪ぐらい寝かせなさいと言って追い返したんやね。そしたら、やぶ医者の評判立てられて、それから一念発起、今度薬をがんがん出す医者に変わりました。それから私は新興住宅に住んでおったんですが、間なしに彼は、そこからまたすぐ隣の土地を３区画買いましたわ。一遍に金もうけに変わったんです。なかなかお医者さんも良心的にやろうと思ったらつらいねんね。要するに、お薬大好きな人がいっぱいということなんです。だから、薬を飲まないと決意をしたら、本来医者は、薬は要らない。だから、本当に深刻な病気になったときに、お医者さんに相談を受けるというふうな、そんな関係ができたら今のような、莫大な医療費が要らなくて済むんやけどね。

その前提としては、病気にならないという決意をする必要があります。健康は食べ物だけじゃありませんから、環境だとか、あるいは運動だとか、あるいは心の持ち方だとか、いろんなことが重なって、健康ということを支えますけど、６割分ぐらいは食べ物が支配をしてるわけですから、やはり食生活をどうするか。食べ物をどう選択するかということをちゃんと考えておけば、薬を飲まないという決意は十分できるわけです。私はこれからも薬を当分は飲まないでおこうと考えています。もちろん、この年になりましたから、明日お医者さんの世話になるかもわかりませんけども。少なくとも、この10年間は多少は自慢できるかなという、そんな選択の仕方をしています。この10年間でパン何枚食べたかな。

次に、これは、兵庫県の統計なので、皆さんのお住まいの統計とちょっと違うかもわかりませんが、図表15の帯グラフをちょっと見てくださいますか。兵庫県の健康増進課という一つのセクションが、兵庫県内にお住まいのおおよそ一万世帯の皆さんに御協力いただいて、飯調べ。御飯とは言いません。飯調べ。今、御飯と言っても、御飯の中身はいろいろでしょう。飯もあれば、パンも御飯やね、ラーメンも御飯。だから、飯調べ。つまり朝昼晩。これは平成15年度、2003年の統計で比較的新しい統計ですが、10月１週間７日間に毎朝飯食べた人、黒塗り。毎昼、飯食べた人は黒塗り。毎夕、飯食べた人は黒塗り。こういうふうに朝は23％の人が毎朝飯食べてる。右から二つ目の幅の広いところは７日間とも飯食べなかった人。大部分がパン。ですから、兵庫県にお住まいの皆さんはどうもパン派の方が多い。こういう暮らしをし、そのパンを食べる暮らしが昼へ広がり、夜へ広がってきているということがわかります。もちろんパンだけじゃなくて、スパゲッティもあるし、ラーメンも入りますが、いずれにしても麦食ということになります。つまり、輸入食品に頼る暮らし。

図表16は、こうした御家庭の中で、今、若い世代が、世代別にどんな朝飯の食べ方をしているか。これからというよりも、君たち世代、20代の若者は一番少ないですね、朝飯を毎日食べてる子は。毎朝、どうも小麦を食べてる子がやっぱり圧倒的に多い。これが兵庫県の若者の実態。もちろん年寄りだってええ加減な暮らしをしています。そして、次に地域別で見ると、一番人口の多い神戸市民は、圧倒的にパン派が多い。神戸はパンの町とも言われてますから、やむなきかもしれませんが。こうした兵庫県にお住まいの皆さんの暮らしは、間違いなくブッシュさんが喜ぶ暮らし。そして、今、兵庫県の田んぼに青々と草が、これから生えてくるわけです。これだけの県民がこれだけ麦に頼る暮らしをしたとき、日本の田んぼに当然草が生えるし、草が生えた田んぼが広がる中でコウノトリが生きられるとも思えないし。そして、この暮らしは今度は子供から孫へと伝えられていったときに、兵庫県の田んぼにみんな草が生えて、いよいよ君たちが私の年になるころに、日本に

は食べ物がないというような国になるかもしれないというわけね。この数字は兵庫県のデータですが、よその県にしたって生活の仕方が違うというわけではないでしょう。ほとんど変わらないはずですからね。そうすると、少し数字が違うけれども、ほとんど同じような暮らしを皆さん地域でもなさっているに違いない。つまり、君んちのお父さん、お母さんは君たちの幸せを考えてはいるけれども、心底考えた暮らしにはなっていない。どちらかと言うと、お父さんたち御両親は、自分の幸せだけを考えて暮らしていらっしゃる。そして、君たちにはあとは野となれ山となれというふうな形で接してくださっているのかなというふうにも思えるねんね。

私は、幸いシルバーカレッジという神戸市内の高齢者大学でも講義をさせていただいているので、いつもこの話をするんです。この世の中をつくったのは、だれ？こんなにお米を食べない習慣を植えつけたのはだれ？シルバーの皆さんに皆さんの御両親ですかと聞くねんね。「いや。」「皆さんのお子さんですか。」「お子さんが始めたんですか。」「いや。」「だれですか。」「わいたちや」と。「そしたら、皆さんはようけ貯金を持ってはるんやけど、その貯金を何に使いはる予定ですか。」ほとんどの人が海外旅行やね。今ね。今、一番たくさん、そのお金の使い道で一番考えてはるのは海外旅行。「ほんなら、皆さんはとことん子供たちが飢えに直面するかもしれないような習慣を植えつけといて、そして日本で食べ物がなくなるかもしれない国をつくっておいて、なおその稼いだお金を今度は海外旅行で使って、みんな自分の都合で暮らしてはるねんね？ゴアさんが言う、『みんな親の都合で暮らして、子たちには不都合をいっぱい残そうとされているんですね、』と違いますか」と聞くねんね。そしたら、「そうやな。」ほんなら、そのお金の一部でいいから、子たちが飢えないようにするために使ってほしい。そんな難しい話じゃないんです。明日から、神戸市民の人が飯食べてくれはったら、そんだけ兵庫県の田んぼが生きてくるわけでしょう。なら、パンよりも米の方が高いんですか。神戸のパンは高いからね。だから、値段の話じゃないねんね。そうすると、今度は便利さの話なわけです。便利やから。ちょっと朝起きて、いや、そんなことない、今の炊飯器なんかやったら、よっぽどパンよりも便利に炊けるはずやから、飯で。おかずだって、そんなに無理してたくさんつくる必要ないんですから。もう年取った人であれこれつくって食べる必要ないんです。もう、今の年取った人が大きくなるところなんかないんですからね。あと、年取った人で大きくなるところといったら、おなか周りしかないんですから、ようけ食べんだっていいわけで。だけど、何を選択するか。そして、子たちにどんな国を残すか。どんな意識を残すか。どんな習慣を残すか。そのことのためにお金を使ってほしい。使い道のわからない人、私が預かります。こんな話をさせていただいて、今、シルバーの皆さんとともに、改めて親の都合が子の不都合をつくらないようにしたいと。そんな決意で、全員がそうなってるわけじゃありませんけど、今、かなりの神戸市内の高齢者の皆さんが、そんな決意で新たな人生を今、歩まんとしていただいております。そんな皆さんのお手伝いもまたさせていただいているところです。

最後の資料は、目を世界に向けて。そうすると、今、地球温暖化が進行してることをもう既に皆さんは嫌と言うほどお聞きくださってると思います。図表17のこのグラフが地球温暖化を示す長期統計です。申し上げたように、地球温暖化は必ずどこかで、これから大雨をもたらします。雨が降らなかったら必ず干ばつを引き起こします。そして、それは必ず世界の食料を不安定にします。もうそれは必ずです。間違いがないことです。ですから、君たちも地球温暖化が進行すれば、いつ何どき食べ物に困るかもしれないという時代が来るということだけは覚

悟しておいてほしいんです。そのときに、一番安全なことは、私たちの身近なところで食べ物がつくれていること。身近なところでつくられていたら、世界がどうなったって困ることはないわけでしょう。石油がなくなったって、身近なところでつくれていれば大丈夫なんですから。これから、私たちがどう選択するか。これからは、日本は次第に経済力を落としていきますけれども、経済力が落ちてもなお私たちが心豊かに暮らせるためには、食べ物がしっかり身近なところで取れるような国にしておくこと。きれいな環境がもう一度つくられ残されていること。健康に生きる知恵がしっかりと磨かれていること。そして、お金がなくなっても心豊かに暮らせるための最低の条件はお互いが助け合って暮らすこと。あるいは助け合って暮らせる心を磨くこと。この四つが最低限、これから21世紀の課題として私たちに迫ってくるだろうと思います。もう一度、申し上げておくと、食べ物と環境と健康と共同する心が。これだけあったら、日本が経済的に貧しくなったって、なお私たちは心豊かに十分暮らせる。そんな国なわけです。これだけ恵まれた風土があるんですから。世界に誇る水と緑という資源があるんですから。この資源を失わなければ石油がなくなったって困ることは決してない。昔の先人がこの資源を生かして暮らしてきたんですから。これからも暮らせるはずです。

図表18は、世界の人口が今世紀半ばには90億に達するという国連の推計があります。こないだアメリカは90億ではとどまらん。92億になるというふうなことを言っておりましたが。90億が92億になったって、問題は一緒です。要するに、世界は飢えに直面する。私は世界192カ国が総動員、政府が安定していて、総動員農地を活用しても私は世界の人口は80億人しか養えないと見ています。90億人は暮らせない。そうすると、このグラフから、世界の人口が80億になるのは、何年後ですか。今、2007年やから。何かなお反応が鈍いね。あと何年後。23年後。ちょうど日本の農業は労働力の面から生産力をちょうど失うころ。世界の人口が80億に達して、世界の食糧はもう余裕を失うわけです。世界の食糧の余裕がなくなったとき、国内では食べ物がない、労働力の面からね。さっきグラフで見てもらったでしょう。

それはともかくとして、そういうことを予測して、農林水産省の若手研究者は既に図表19のようなグラフを密かに公表しています。皆さんのところには、目に届いていないと思いますが。2030年になる5年前、2025年には、世界の主要な値段。穀物の値段がおよそ4倍に上がるかもしれない。いろんなシナリオが書いてありますが、最悪の場合ね。私は多分最悪こうしたケースがあり得ると思っています。これ、人口要因だけです。ここに今度は人口要因ですから、石油要因をくっつけてみましょうか。あと20年後、石油は安くなってる？高くなってる？どのぐらい高くなってる？わからへんけど、2倍にしときましょうか。先のことやから、ならなければいいということを期待を込めながら、最悪石油の値段が2倍に上がるとすると、生産費から輸送費から全部上がるわけですから。およそ2倍に上がっていくわけやね。これ、人口要因で4倍、石油要因で2倍。今度、そのときレートが何ぼになっとるかな。レートが変化したら、買うもんが、値段変わるからね。レートは円高にいく？円安にいく？海外のものが高く買える方に変化する？安くなる方に変化する？高くなる方に変化する？昔、1ドル360円ということは、昔、アメリカの品物1ドルのものが360円で買えたんやね。運賃無視したらね。今、117円やから、今安く買えるねんね。だから石油も食べ物もいっぱい入ってるわけです。あと、20年後はどうなる。もし、240円ぐらいまでいったら、ちょうど2倍になるねんね。そしたら、人口要因で4倍、石油要因で2倍、レート要因で2倍、合計何倍。足したらあかんで。何

倍。16倍。今、何で海外から食べ物、輸入しとったんかいね。何で麦をたくさん輸入しとったん。何で中国の野菜を輸入しとったん。安いからやね。安いから。安いからということで、どっと輸入して、田んぼをつぶして技術をなくして、種をなくして、そしてこのとき高くなるから、ほんならつくろかと。つくっとったら安全やからね。国内でつくっとったら、国際的は影響を受けるのがうんと小さくなるわけやから、つくっとった方がええわけです。ほんなら、そのときになって、つまり君たちが40になるころに、ほんならだれかつくれや言って、だれがつくるんかな。中につくる人が出てきたとして、ほんでも土地がない、技術がない、何よりも種がなかったら、つくりようがないんじゃないということも一応予測しといて、ということも予測しといて。そして、このような予測ができるような社会をつくったのは、だれ？ロータリアンの人たち？だけどその人には不都合はないんです。そして、不都合をまともに受けるのは君たち。だから、君たちが親とおんなじような暮らしをしてもらっては困るんではないか、こう思うんよね。

したがって、君たちには21世紀、君たちがたくましく生き、かつ心豊かに暮らせるためには、どういう暮らしをしたらいいかということを決意してほしいと思うねんね。だけどそれは、決して肩を張って生きる生き方ではありませんので。ゆっくりのんびり選択をしながら、新しい暮らしを求めていく。差し当たって、明日の朝から、ということで終わりにしたいと思います。

ありがとうございました。

○山口　徹　保田先生、ありがとうございました。

とてもわかりやすく、優しく語りかけていただきながら、影ではどんどん私たちに迫っていただいて感謝しております。先生は、さっきお話にありましたように、今日３時から大事な会がございまして、もう12時半まであと５分ほどありますから、特になんか御質問とか御意見があったらお受けしますが、いかがですか。

はい、どうぞ。

○……　環境ホルモンは、どのように食と関わっているのか教えてほしいです。

○保田先生　今日は、ちょっと時間もありませんでしたので、触れませんでしたけども。環境ホルモンというのは、環境中に漂って、主として人間にホルモン的効果をもたらす物質の総称を言います。つまり、性ホルモンです。男性ホルモンと女性ホルモンがありますが、ほとんどが女性ホルモンの働きをする物質になります。ごく一部、男性ホルモンの働きをする物質がありますが、それはごく限られたもので、大部分が女性ホルモンの働きをする物質です。

代表的なものがダイオキシンと言われる化学物質で、主として、塩素系の薬物が多いんです。塩素系薬物ということになりますから、化学薬品も多いんですが、農薬も多いんです。農薬と食べ物とは不可分ですから、農薬をたくさん使う農業にこうした環境ホルモン効果を持つ物質が自然界に漂っている。こういうことになります。

もう一つ、皆さんがお使いになってる頭を洗う洗剤、あるいはバスを洗う洗剤、あるいは食器洗い洗剤の中にもこの環境ホルモン効果を持つ物質を含んだものが結構あります。ですから、食器洗いに洗剤を使うというふうな暮らしもまた食とつながるわけですね。私んちは食器洗いは石けんを使って洗いますし、基本的にあんまり油は使わないので、あんまり石けんも要らない。固形石けん１個置いといたら、もう半年ぐらい持ってるかな、うちの場合は。子供もいないし、家族数が少ないからあんまり使わないということですが、できたら君んちも、ピンクやとか黄色やとかグリーンのような合成洗剤で食器を洗わないというふうな、そうした暮らしも

してほしいと思うんよね。こういうふうなことがつくる段階で、洗う段階で、食べる段階で、そうした物質を環境にばらまいてしまうということがあるということで。しかも、こうした物質の環境ホルモン効果は、ほとんどがごくごく微量。私たちの常識で言えば、ゼロに等しいぐらいの濃度で環境ホルモン効果を持ちます。

例えば、ダイオキシンの場合は、1兆分の1の濃度で女性ホルモンの効果を持つと言われています。1兆分の1というと、普通私たちが農薬の問題を考えるとき、1ppmというppm単位で考えますが、1ppmというのは1メートル×1メートル×1メートル分の1。つまり1メートルの立方体にぽとっと1cc落としたら1ppm。今度、10メートル×10メートル×10メートルの立方体に1cc入れたら、1ppb。ダイオキシンは1ppt。トリリオンといいます。100メートル×100メートル×100メートルの立方体、つまり1兆cc分の1ccで女性ホルモン効果を持つとされています。私たちの常識ではゼロに等しい。100メートル×100メートル×100メートルというと、巨大なビルにこれをぽとっと溶かして均一にまぜ合わせて、そこからくみ上げた1cc中の濃度。1ピコグラム。そのぐらいでホルモン効果が発揮されるとされています。そうすると、どんなところで発揮されるかいうと、例えば私たちがお母さんのおなかで育っていくわけですが、妊娠3カ月ぐらいでちょうど女は卵細胞の元の卵母細胞が、男の場合は精子の元の精母細胞ができますけれども、この精母細胞ができるその一番大事なときに、女性ホルモン効果が働いちゃったら、うまく精母細胞ができない。そうすると、その後健全な男の育ったように見えても精子がない子供ができる。もしくは、精子をつくり出す能力が低い子供ができる。現に今、日本人の若者は私たちの当時に比べると、精子が半分になっとうでしょう。君たちが半分かどうかは知りませんけども。私たちが学生のころは日本人の平均精子数は1億から1億2,000万と習った。神戸大学の医学部の学生が使ってるテキスト見せてもらったら、日本人の平均精子数は6,000万と書いてありますよ。ですから、どうも私の考えでは、日本人の平均精子数が半分に減ってるなという感じがしますが、そうしたこともまた、これだけじゃありませんけど、一つの理由。つまり、環境ホルモンの影響を受けて、お母さんの体で精子の元になる精母細胞ができるときに、女性ホルモンの影響を受けたらうまく精子ができない。そういうことが起こり得るということです。一見見えないわけです。でもそれが次の世代に広く影響を与えるということはあり得るということね。だから、できるだけ薬物に依存しない。髪なんか染めたらあきませんねん。

○山口　徹　はい。いろいろありがとうございます。本当、もう少しと思うんですけれども、とても残念ですけれども。先生には次のところがございますので、これで終わらせていただきます。

先生、どうもありがとうございました。

それではこの後、思索の時間、バズセッション、フォーラムと続きますが、これらの意義とか、どのように運ぶか、深川先生の御指導をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

○深川純一　バズセッションのテーマは、非人間化時代における人間化というテーマであります。そしてサブテーマが、人々とどのように手をつなぐか。難しいかもしれませんけども、これは何を言ってるのかということを、皆さん方一人前のリーダーでありますから、御自分でそれぞれ考えて、答えを出していただきたいと思います。

まず問題の提起がありますね。その問題の提起をどう考えるか。そして、それに対してどのような回答ができるのか。対策でもいいですが、

回答と言っておきます。それを皆さん自身で考えていただきたいと思います。

それからもう一つ。この後、先ほど山口さんがおっしゃったように、思索の時間が1時間ございます。これはどういうことかと言いますと、皆さん、今までこのＲＹＬＡでは、講義を聞くのもみんなと一緒。キャビンタイムもみんなで一緒でありました。食事もみんなで一緒に過ごしてきました。しかし、このＲＹＬＡでは、たったひとりぼっちになって、自分を見詰める時間を設定したわけであります。一人で思索にふけっていただきたい。何を考えたらいいかわからない人は、何を考えたらいいかを考えてください。何で、こんな時間をＲＹＬＡが設定したかと言いますと、今の世の中というのは、非常に技術的でありますし、余りに効率的であります。何でも効率的にものを考えて仕事を処理していく。そのことばかり考えるから、すべてが技術的であり効率的であります。例えば本屋に並んでいる本を見ても、どうしたら金がもうかるかとか、どうしたら魚がたくさん取れるかとか、そういうハウツーものばかりで、人間とは本来いかにあるべきかとか、この人類社会は本来いかにあるべきかとか、そういう哲学的なことを説いた本は非常に少なくなりました。昔の学生は、人間はいかに生きるべきかとか、考えておったんですが、このごろは効率的な世の中になって、いかに効率的に快適に便利に自由に過ごせるかと、そういうことばかり考えている。そういう中で、このＲＹＬＡではとにかく1時間でもいいから、一人で自分を見詰める時間をとり、その思索にふけっていただく時間を設定したわけであります。ですから、ひとりぼっちになって海岸へ行ってもいいし、その山へ入ってもいいし。とにかくみんなで群れないで、ひとりぼっちで自分自身を見詰めてください。思索時間はそういう意味で置いております。こういう時間を設定しているセミナーはほかにはないだろうと思うんでありますが、これは、まさに玉のような時間でありますから、そのことを心にとめて、過ごしていただきたいと思います。

その後、今申し上げましたこのバズセッションが4時間あります。バズセッションについては、最初のオリエンテーションでなぜこういうバズということをやり出したかと御説明申し上げましたから、もう繰り返しません。四、五人ずつの小グループに分かれて、思いっきりみんながいろんな議論をしてください。そして、それをまとめて、代表の方が、午後7時から3時間のフォーラムをやります。そのときは、みんながここへ集まって、そのバズセッションでまとめた意見を発表していただいて、他の班の人たちの意見も聞くし、全体で討議もしていく。これはフォーラムの時間であります。意見を発表するときに、各班からまとめを発表していただくわけでありますが。そのとき、代表の人が一人か二人、あるいは三人出てきて、意見を発表してください。昔の人間はみんな一人でやったんでありますが、このごろは割合みんなで分担して発表するのがはやってるようです。とにかく意見を発表していただく。そのときにパフォーマンスはやめてください。どうも、最近はみんなすぐパフォーマンスをやり出して、そういうことに非常に興味が移っておるようでありますが。これはあくまでもフォーラムで、ディスカッションする時間ですから、粛々と意見だけを述べてください。それをみんなが聞いて、後でまたそのフォーラムをディスカッションしていくということにしたいと思います。

以上であります。よろしくどうぞ。

○山口　徹　深川先生、ありがとうございます。

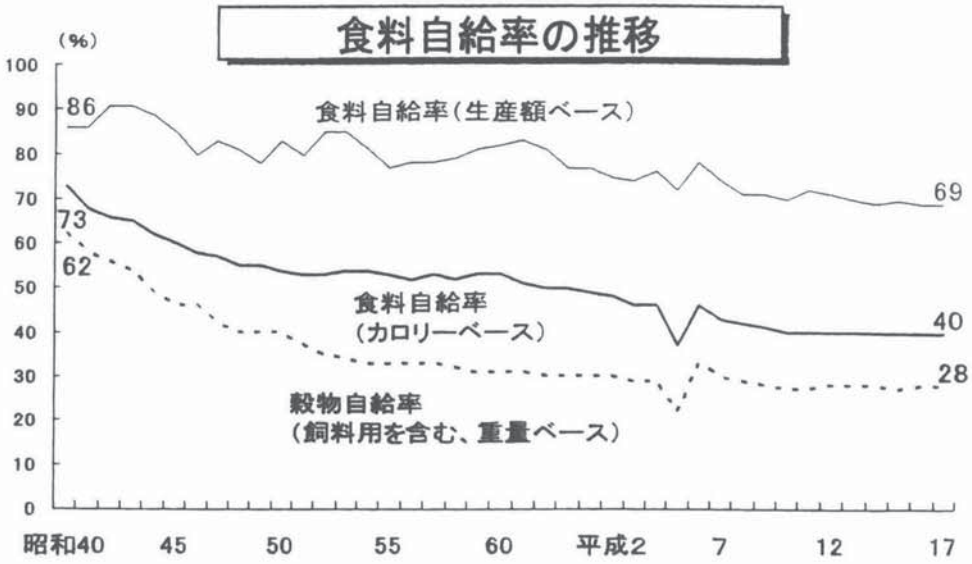
皆さん方、今、深川先生のお話、御理解いただけましたでしょうか。よろしいですか。

では、12時少し前ですが、12時からお昼御飯ということで、食堂の方へ。先ほどの先生のお話じゃないですけれども、それも少しは頭の中

で描きながら、食事と対面というか、対話しながら食べていただくのも、また一つかなと思います。たくさんお召し上がりください。

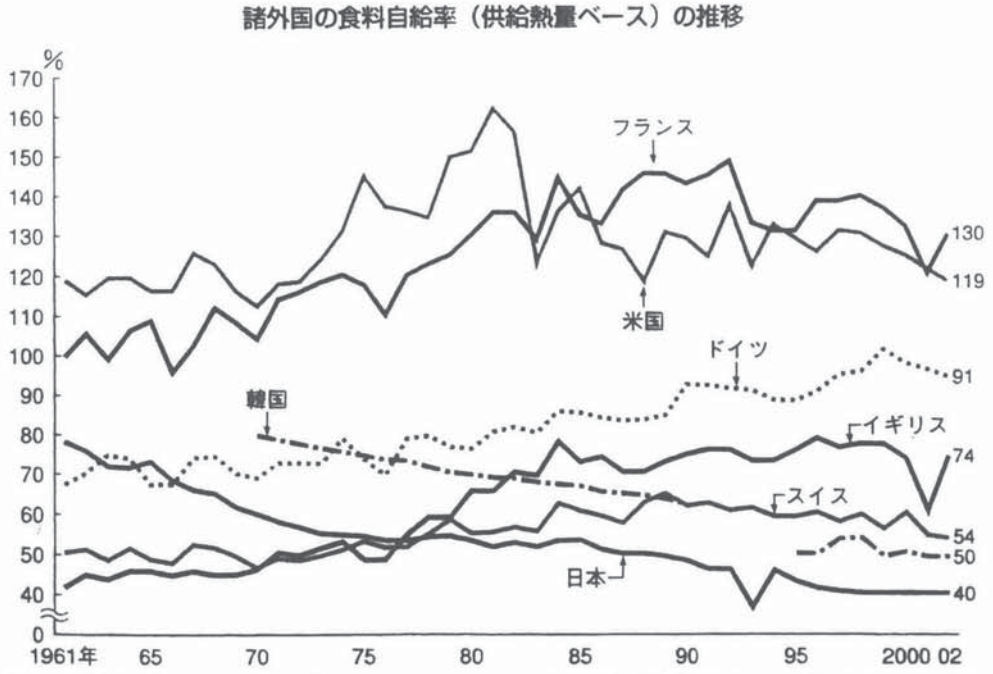
じゃあ、これをもちまして、午前中の講義を終わらせていただきます。ありがとうございました。

図表１



◇我が国の供給熱量ベースの食料自給率は、主要先進国のなかで最低水準。
◇穀物自給率（重量ベース）は、世界173か国・地域のなかで124番目に位置し、経済協力開発機構（OECD）加盟国30か国のなかでも27番目と低い水準。

図表２



資料：農林水産省「食料需給表」、FAO「Food Balance Sheets」、韓国農村経済研究院「食料需給表」等を基に農林水産省で試算。
注：韓国は1970、1980、1990及び1995～2002年の数値である。

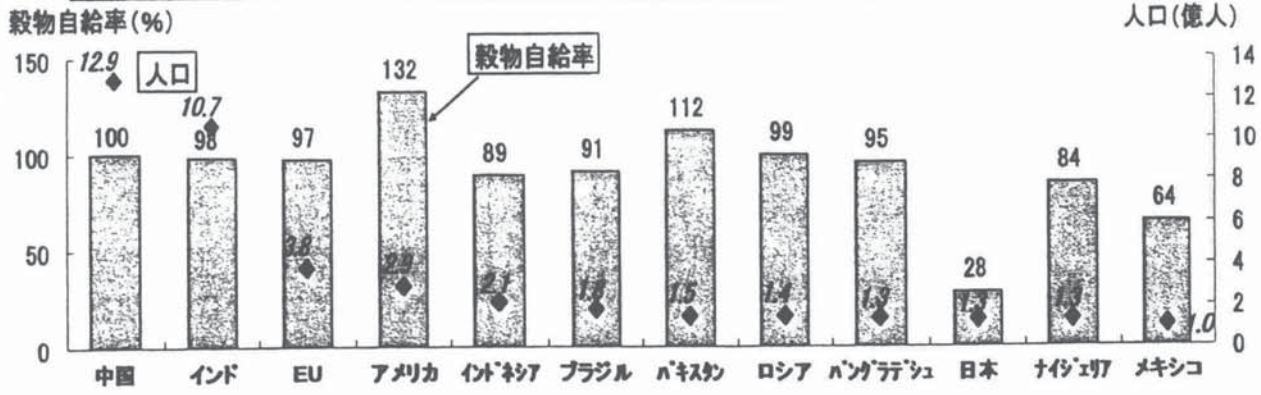
農地面積の各国の比較

	日本 (05年)	米国 (02年)	EU(25) (03年)	独	仏	英	豪州 (01年)
農地面積 (万ha)	469	37,971	16,348	1,701	2,943	1,696	45,572
農家1戸当たりの農地面積 (ha)	1.8 (1)	178.4 (99)	15.8 (9)	41.2 (23)	45.3 (25)	57.4 (32)	3,240.9 (1,801)
国土面積に占める割合(%)	12.6	39.4	65.5	47.6	53.3	69.6	59.3

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」「2005年農林業センサス」
米国　USDA "UNITED STATES – 2002 Census of Agriculture"
EU　"Agriculture in the European Union Statistical and Economic Information 2004"
豪州　"AUSTRALIA 2001 Agricultural Census"

図表3

人口1億人以上の国の穀物自給率



資料：「食料需給表」、FAO"Commodity Balances"を基に農林水産省で試算。

図表4 食料農水産物の自給率の推移

（単位：%）

		昭和40年度	50	60	平成7	11	12	13（概算）
主要農水産物の品目別自給率	米	95	110	107	104	95 (100)	95 (100)	95 (100)
	小麦	28	4	14	7	9	11	11
	豆類	25	9	8	5	6	7	7
	野菜	100	99	95	85	83	82	82
	果実	90	84	77	49	49	44	44
	鶏卵	100	97	98	96	96	95	96
	牛乳・乳製品	86	81	85	72	70	68	68
	肉類（鯨肉を除く）	90	77	81	57	54	52	53
	砂糖類	31	15	33	31	31	29	32
	魚介類	100	99	93	57	56	53	49
穀物（食料＋飼料用）自給率		62	40	31	30	27	28	28
主食用穀物自給率		80	69	69	65	59	60	60
供給熱量総合食料自給率		73	54	53	43	40	40	40
金額ベースの総合食料自給率		86	83	82	74	72	71	70

資料：農林水産省「食料需給表」

図表5 我が国の輸入農産物の上位品目の推移

（単位：100万円）

	昭和35年	45	55	平成2	7	12	13
豚肉	1,049	7,534	92,249	242,989	349,500	347,517	411,303
牛肉	1,156	8,025	139,100	272,475	305,349	279,910	279,853
とうもろこし	29,175	146,481	454,052	330,720	224,849	203,343	237,022
大豆	38,678	131,676	298,394	183,053	128,825	131,889	142,106
小麦	63,666	114,611	279,164	146,806	126,011	111,107	126,015
生鮮野菜	17	19,968	13,438	46,756	92,597	101,841	110,449

図表6 輸入相手国別の割合（平成13年）

（単位：100万円、%）

豚肉	米国	デンマーク	カナダ	メキシコ	ハンガリー	その他
411,303	144,840	121,711	88,780	24,848	7,650	23,475
100	35	30	22	6	2	6
牛肉	米国	オーストラリア	カナダ	ニュージーランド	その他	
279,853	151,625	113,795	8,503	5,744	186	
100	54	41	3	2	0	
とうもろこし	米国	南アフリカ	アルゼンチン	ブラジル	中国	その他
237,022	205,396	12,069	6,534	6,233	5,512	1,278
100	87	5	3	3	2	1
大豆	米国	ブラジル	カナダ	中国	パラグアイ	その他
142,106	104,873	18,337	9,878	6,638	1,653	728
100	74	13	7	5	1	1
小麦	米国	カナダ	オーストラリア	その他		
126,015	61,703	38,209	26,029	74		
100	49	30	21	0		
生鮮野菜	中国	アメリカ	韓国	ニュージーランド	メキシコ	その他
110,449	42,490	20,698	11,096	10,047	5,382	20,735
100	38	19	10	9	5	19

資料：財務省「貿易統計」を基に農林水産省で試算。

注：「生鮮野菜」については、35年と45年以降とでは品目が異なるため、厳密には連続しない。

図表7　各国別の穀物自給率及び国内総生産（2000年）

国　　名	穀物自給率（%）	GDP／人（米ドル）	GDPの対象年
オーストラリア	280	19,925	2000
アルゼンチン	254	7,699	2000
フランス	191	21,987	2000
カナダ	164	23,124	2000
タイ	148	1,960	2000
米国	133	35,403	2000
ドイツ	126	22,829	2000
スウェーデン	120	25,627	2000
ミャンマー	119	7,397	1999
デンマーク	115	30,401	2000
ハンガリー	114	4,554	2000
イギリス	112	23,822	2000
パキスタン	110	437	2000
フィンランド	110	23,419	2000
チェコ	108	4,943	2000
インド	107	461	1999
オーストリア	103	23,431	2000
ネパール	101	231	2000
トルコ	101	3,025	2000
南アフリカ	98	2,881	2000
中国	94	782	1999
ロシア	94	1,726	2000
ポーランド	90	4,082	2000
ギリシャ	89	11,182	2000
インドネシア	87	728	2000
スペイン	87	14,145	2000
イタリア	84	18,668	2000
フィリピン	83	979	2000
ブラジル	80	3,550	2000
ニュー・ジーランド	79	13,212	2000
アイルランド	76	25,153	2000
ノールウェー	75	35,501	2000
メキシコ	68	5,901	2000
エジプト	68	1,417	1999
スリランカ	68	842	2000
ルーマニア	67	1,635	2000
ケニア	62	355	1999
スイス	61	33,645	2000
ペルー	57	2,085	2000
イラン	55	3,802	1999
ポルトガル	37	10,495	2000
韓国	33	9,673	2000
チュニジア	31	2,055	2000
オランダ	29	23,271	2000
マレーシア	28	3,840	2000
日本	28	37,556	2000
モロッコ	24	1,239	1999
サウディ・アラビア	21	8,515	2000
アルジェリア	11	1,617	1998
イスラエル	7	18,267	2000
クウェイト	1	17,253	2000
アイスランド	0	30,410	2000

EU（15カ国）	115	22,766
多面的機能フレンズ国平均	87	22,989
ケアンズ・グループ平均	130	7,790
産油国等平均	16	13,311
その他諸国の平均（米国除く）	82	2,398

資料：国際連合「世界統計年鑑」、総務省「世界の統計」、FAO「Commodity Balances」を基に農林水産省で試算。

図表8

野菜の輸入状況

（単位　千トン，%）

	生鮮野菜		野菜加工品				合計	
					うち冷凍野菜			
		前年(同期)比		前年(同期)比		前年(同期)比		前年(同期)比
1991年	310	120	791	115	262	122	1,101	116
1992	286	92	836	106	262	100	1,121	102
1993	393	137	909	109	299	114	1,302	116
1994	652	166	1,010	111	354	118	1,662	128
1995	708	109	1,146	113	379	107	1,854	112
1996	630	89	1,174	102	405	107	1,804	97
1997	573	91	1,146	98	414	102	1,720	95
1998	740	129	1,217	106	466	113	1,957	114
1999	885	120	1,313	108	492	106	2,199	112
2000.1～9月	654	105	943	99	363	100	1,597	102

資料　財務省『貿易統計』

品目別の生鮮野菜輸入量の推移と主要輸入先国

（単位　千トン）

	1996年	1997	1998	1999	2000	増加率(2000／1996)	2000年の主要輸入先国
たまねぎ	184	175	205	223	262	1.4（倍）	米国(169)，ＮＺ(53)，中国(27)
かぼちゃ	144	136	129	154	133	0.9	ＮＺ(91)，メキシコ(20)，トンガ(14)
ごぼう	－	－	－	72	82	－	中国(69)，台湾(13)，豪州(0.2)
ブロッコリー	74	72	75	91	79	1.1	米国(68)，中国(10)，豪州(0.6)
しょうが	31	33	30	34	48	1.5	中国(45)，タイ(2)，インドネシア(0.1)
にんじん	30	13	34	50	44	1.4	中国(21)，ＮＺ(12)，台湾(6)
ねぎ	9	9	18	30	42	4.6	中国(42)，豪州(0.3)，ベルギー(0.2)
メロン	27	24	29	39	34	1.2	メキシコ(22)，米国(11)，ＮＺ(0.5)
にんにく	24	25	27	26	29	1.2	中国(29)，アルゼンチン(0.1)
アスパラガス	22	21	20	24	25	1.1	豪州(6)，米国(5)，メキシコ(5)
キャベツ	3	3	43	42	21	7.9	中国(20)，インドネシア(0.7)，台湾(0.6)
えんどう	14	15	14	20	21	1.5	中国(21)，タイ(0.1)
さといも	26	6	6	10	20	0.8	中国(20)
ピーマン	4	6	9	11	16	4.1	
うちジャンボピーマン	－	－	－	－	10	－	オランダ(6)，韓国(2)，ＮＺ(2)
その他	－	－	－	－	6	－	韓国(5)，オランダ(0.8)，ＮＺ(0.3)
トマト	0.5	1	4	9	13	25.9	韓国(11)，米国(2)，カナダ(0.1)

資料　財務省『貿易統計』
（注）1.にんじんは，にんじん及びかぶの数字である。
2.ねぎは，リーキ及びねぎ属の数字である。
3.ごぼうは，1999年から細分類された。
4.キャベツは，キャベツ等あぶらな属の数字である。
5.ピーマンは，ジャンボピーマン，その他とうがらし属(ピーマン，ししとう)の数字である。
なお，ジャンボピーマンの分類は2000年から設けられた。

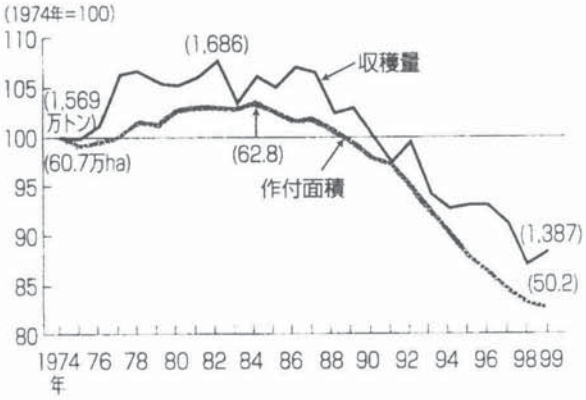
野菜の輸入量の増加

（単位　トン，%）

	輸入量			増加率		輸入先国別シェア(97年)	
	1991年	94	97	94／91	97／94	米国	中国
生鮮野菜	311,844	679,976	602,219	218.1	88.6	37.3	21.8
たまねぎ	62,781	206,849	174,611	329.5	84.4	69.0	4.6
かぼちゃ	101,080	156,783	135,665	155.1	86.5	3.9	—
ブロッコリー	21,441	72,171	71,811	336.6	99.5	98.0	0.1
しょうが	13,487	28,190	33,101	209.0	117.4	—	94.4
にんにく	3,945	10,342	25,373	262.2	245.3	0.4	99.1
アスパラガス	12,482	21,270	21,078	170.4	99.1	22.2	1.8
冷凍野菜	406,863	529,279	654,896	130.1	123.7	45.0	34.5
じゃがいも	144,486	175,601	241,120	121.5	137.3	86.9	1.7
えだまめ	42,621	56,700	60,314	133.0	106.4	0.1	45.4
さといも	27,287	42,084	54,435	154.2	129.3	—	99.7
スイートコーン	36,517	43,612	50,139	119.4	115.0	80.5	—
混合冷凍野菜	21,315	25,709	31,356	120.6	122.0	42.8	24.2
ほうれんそう	14,025	21,846	30,633	155.8	140.2	0.8	98.7
塩蔵野菜	216,170	220,281	227,992	101.9	103.5	—	84.0
きゅうり，ガーキン	60,180	64,457	60,476	107.1	93.8	0.6	87.8
こなす，らっきょう	16,642	22,614	21,094	135.9	93.3	—	91.8
乾燥野菜	29,731	44,241	49,801	148.8	112.6	12.2	80.7

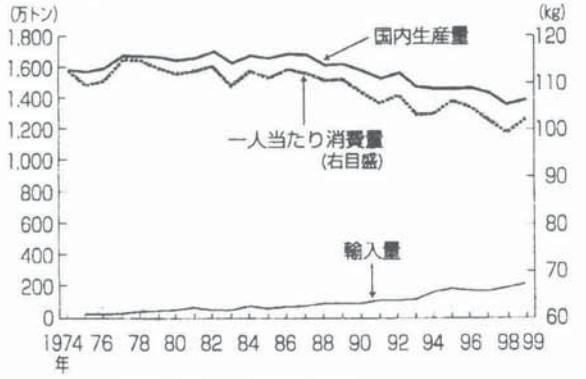
出典　高橋正郎編著『野菜のフードシステム』
資料　野菜供給安定基金『1997年野菜輸入の動向』から作成
原資料　財務省『通関統計』

図表9　**野菜の作付面積・収穫量の推移（食料需給表ベース50品目）**



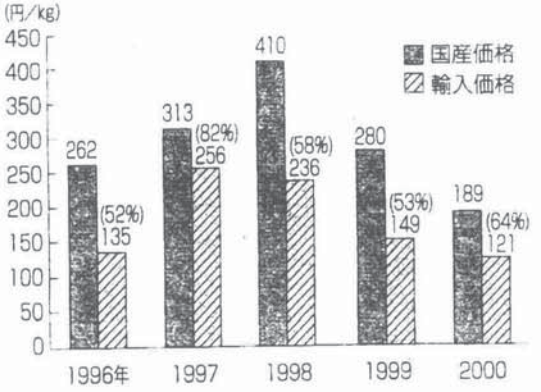
出典　農林水産省資料
資料　農林水産省『野菜生産出荷統計』『地域特産野菜の生産状況（野菜生産状況表式調査結果）』
(注)　50品目の合計であり，作付面積にはもやし及びカイワレダイコンを含まない。

図表10　**野菜の生産・消費の推移**



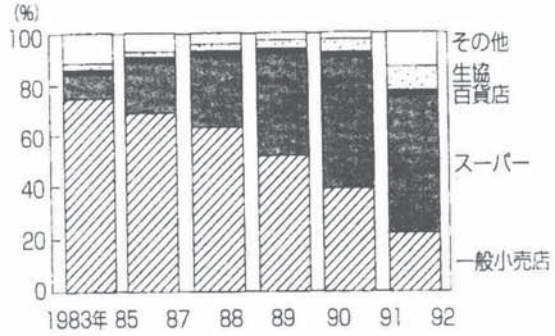
出典，資料，(注)とも第1図に同じ

国産と輸入の卸売価格の比較(白ねぎ,各12月)



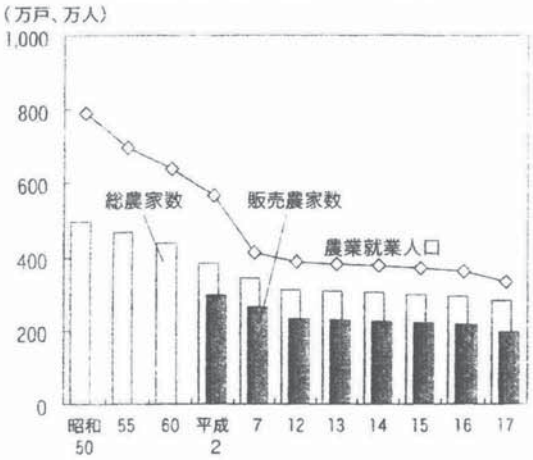
出典　農林水産省資料
資料　全国主要都市の卸売市場月報等
(注)　輸入価格(　)の数値は,国産価格を100とした割合。

野菜の購入先別支出金額比率



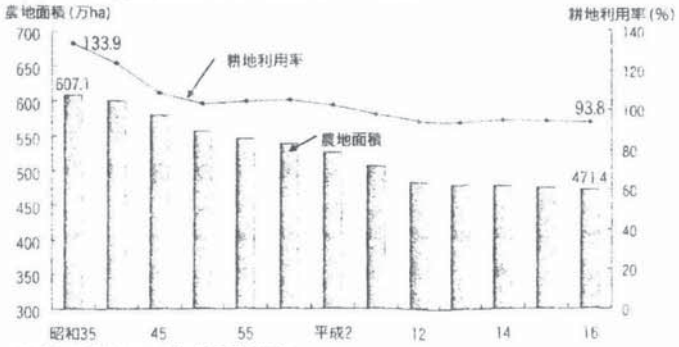
出典　高橋正郎編著『野菜のフードシステム』
資料　農林水産省『全国消費実態調査』

農家数及び農業就業人口の推移



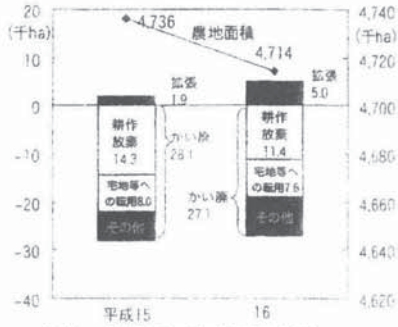
資料：「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

農業面積及び耕地利用率の推移



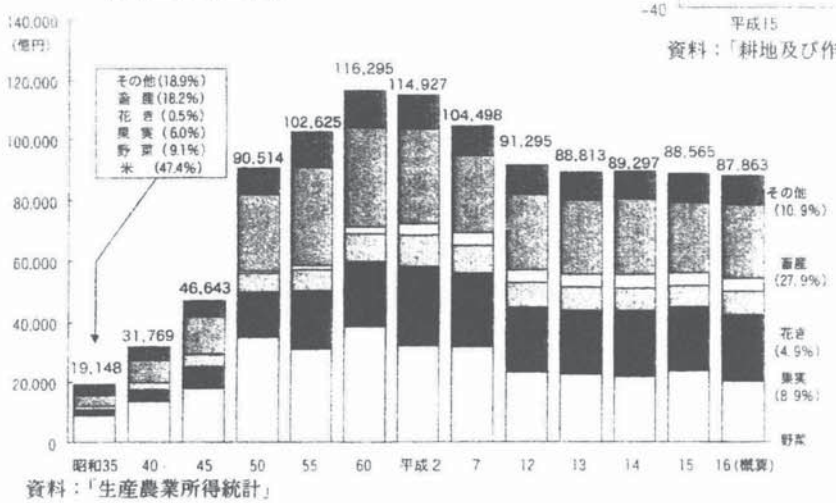
資料：「耕地及び作付面積統計」

農地の拡張・かい廃面積とかい廃要因



資料：「耕地及び作付面積統計」

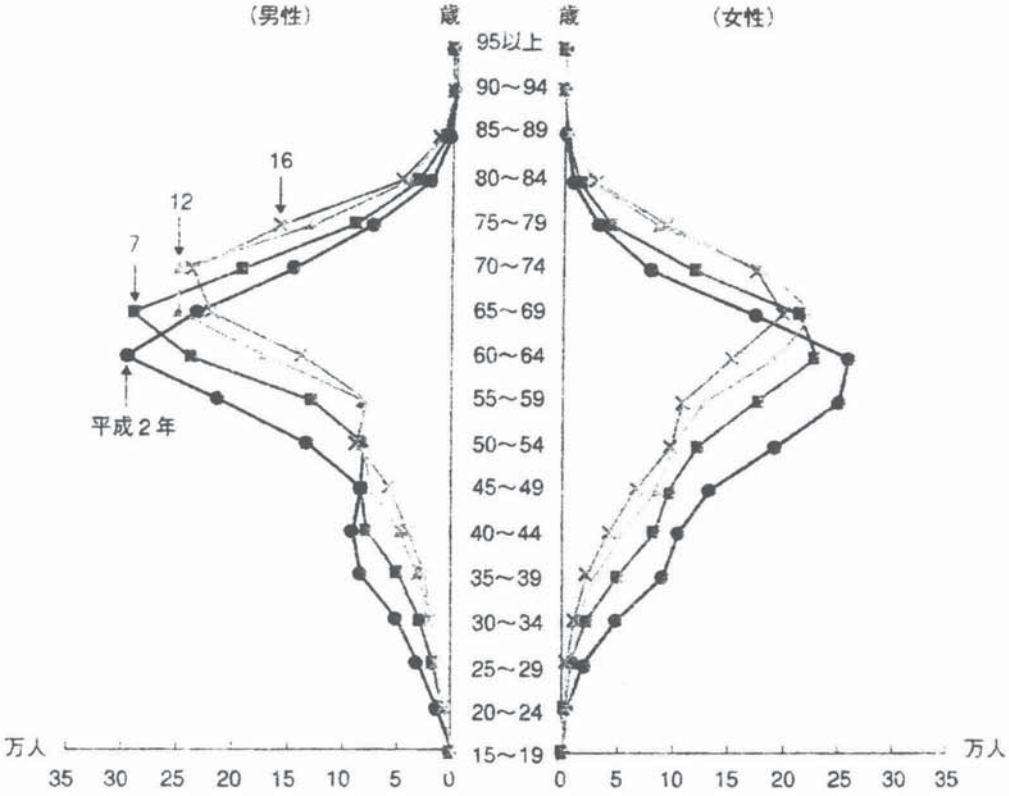
農業産出額の推移



資料：「生産農業所得統計」

図表11

年齢階層別にみた基幹的農業従事者の動向



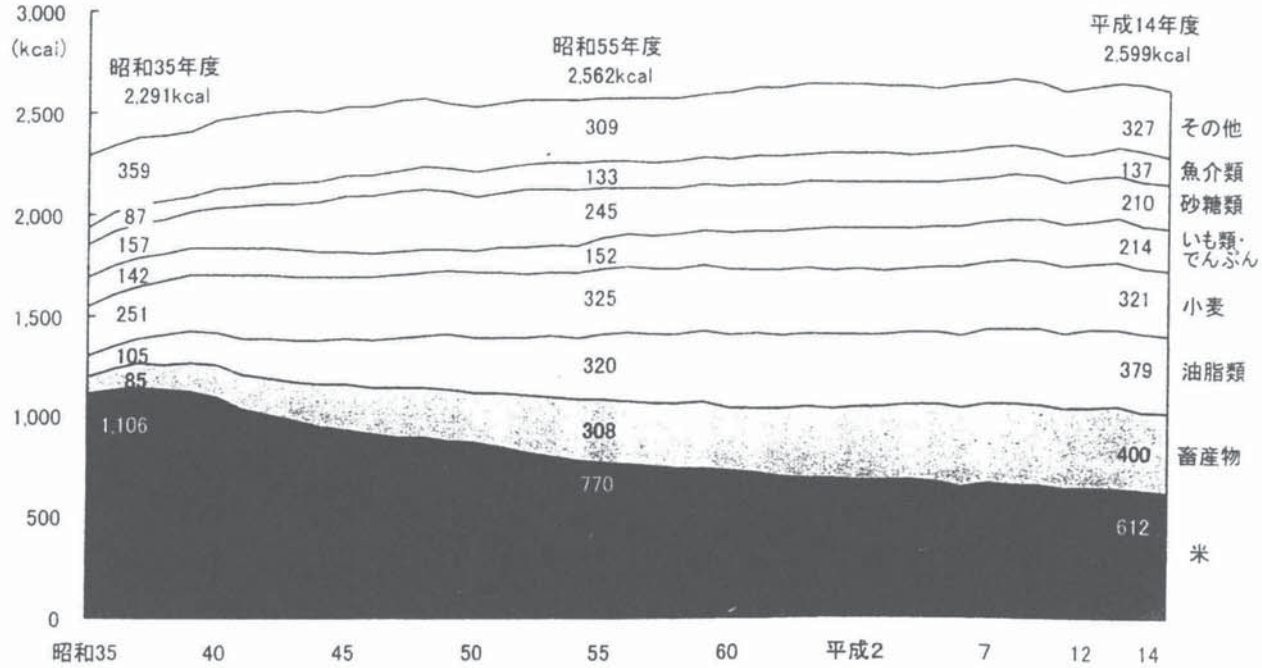
資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

新規就農者等の推移

	新規就農者					新規就農相談センターへの就農相談者等		
		うち新規就農青年			うち中高年			
	（千人）	（千人）	うち新規学卒就農者（千人）	うち離職就農者（千人）	（千人）	就農相談（件）	就農相談者（人）	就農者累計（人）
昭和60年	93.9	20.5	4.8	15.7	73.4	—	—	—
平成２	15.7	4.3	1.8	2.5	11.4	1,831	754	92
7	48.0	7.6	1.8	5.8	40.4	3,447	2,474	311
12	77.1	11.6	2.1	9.5	65.9	9,786	8,859	915
13	79.5	11.7	2.1	9.6	67.8	12,571	10,040	1,183
14	79.8	11.9	2.2	9.7	68.0	14,164	11,499	1,423
15	80.2	11.9	2.2	9.7	68.3	12,276	10,223	1,659

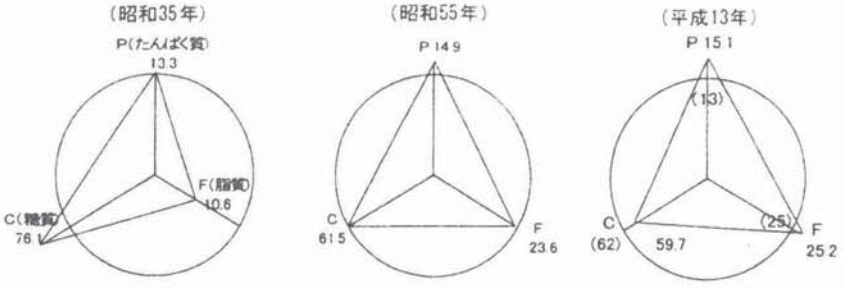
資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」、全国農業会議所調べ。
注：1）「新規就農青年」は39歳以下の新規就農者、「中高年」は40歳以上の新規就農者である。
2）「新規学卒就農者」とは、新規学卒者のうち主に自営農業に従事した者であり、２年以前は総農家、７年以降は販売農家の数値である。
3）「離職就農者」とは、離職等により就業状態が「勤務が主」から「農業か主」となった者（在宅、Ｕターンを問わない。）である。
4）新規就農相談センターへの就農相談者数は、全国新規就農相談センター（全国農業会議所）及び都道府県新規就農相談センター（都道府県農業会議）への相談者数の合計であり、年度値である。

図表12　我が国の食生活の変化（１人１日当たり供給熱量の構成の推移）



（資料）「食料需給表」
（参考）米・畜産物・油脂類の合計（色塗りの部分）の水準にはほとんど変化はない。
主食のごはん（米）が減少（昭和35年度から４割減）する一方で、畜産物（同約５倍）、油脂類（同約４倍）が増加してきたことが分かる。

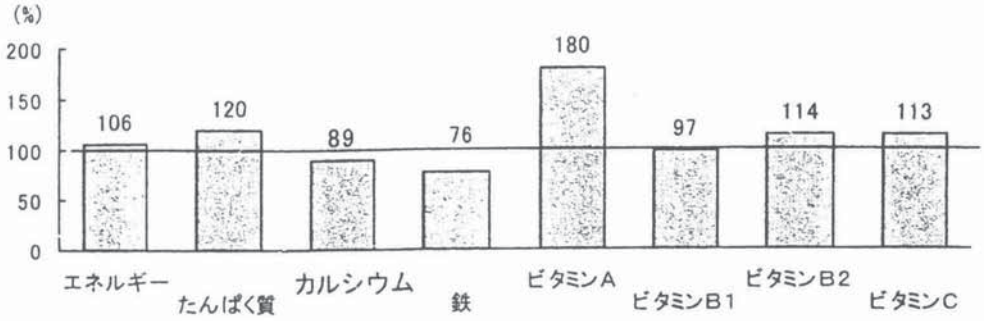
図表13　栄養バランスの推移（%）



（資料）厚生労働省「国民栄養調査」、「第６次日本人の栄養所要量」
（注）適正比率は、年齢階層ごとに異なっていることから、（平均値）は以下のように求めた。
① 脂質は、18歳以上階層の適正比率（20～25%）の上限25%
② たんぱく質は、18歳以上階層の適正比率を人口で加重平均した13%
③ 糖質は、100%から脂質・たんぱく質の比率を差し引いた62%

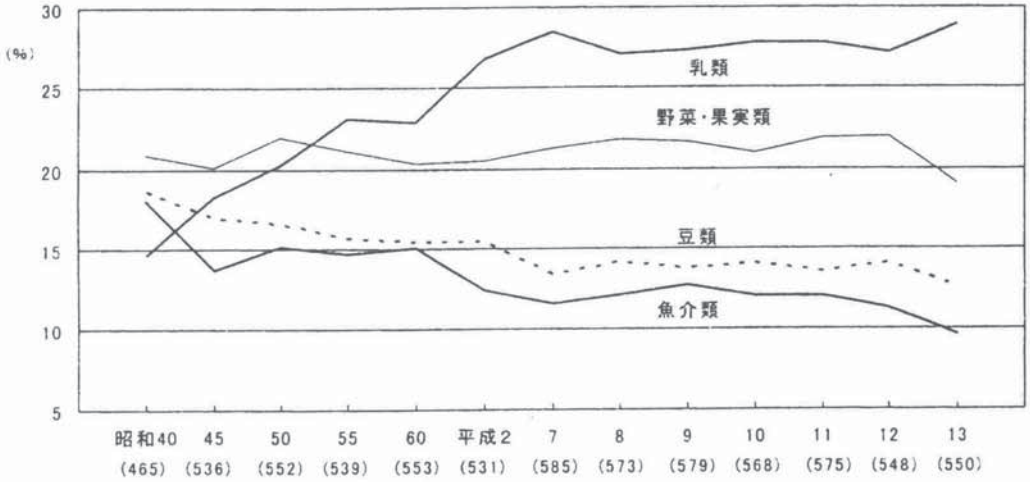
糖尿病　212万人　（糖尿病が強く疑われる人　740万人）
高血圧疾患　719万人、　虚血性心疾患　107万人
（資料）厚生労働省「平成11年 患者調査」、「平成14年 糖尿病実態調査（速報）」

栄養素等摂取量の平均栄養所要量に対する充足率（平成13年）



（資料）厚生労働省「国民栄養調査」
（注）平均栄養所要量は、調査対象者の年齢、性別、生活強度等を勘案して求めた栄養所要量の平均値を100としたものである。

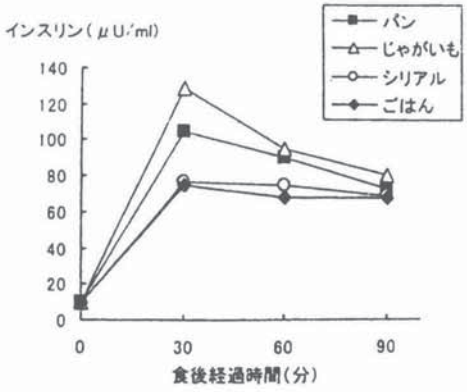
カルシウムの食品群別摂取構成比の推移



（資料）厚生労働省「国民栄養調査」
（注）1．各年におけるカルシウムの摂取量を100とした場合に、それぞれの食品群からどの程度摂取しているかを示したものである。
2．（　）内は、当該年における1人1日当たりのカルシウムの摂取量（単位：mg）。

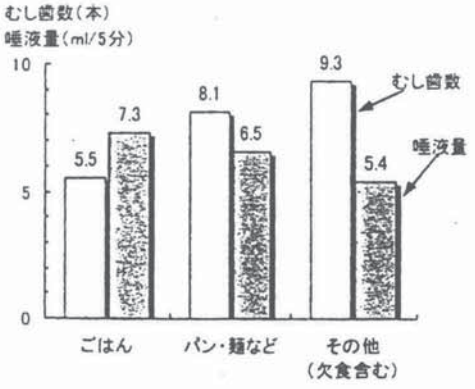
図表14

糖質食品摂取後の血中インスリン反応



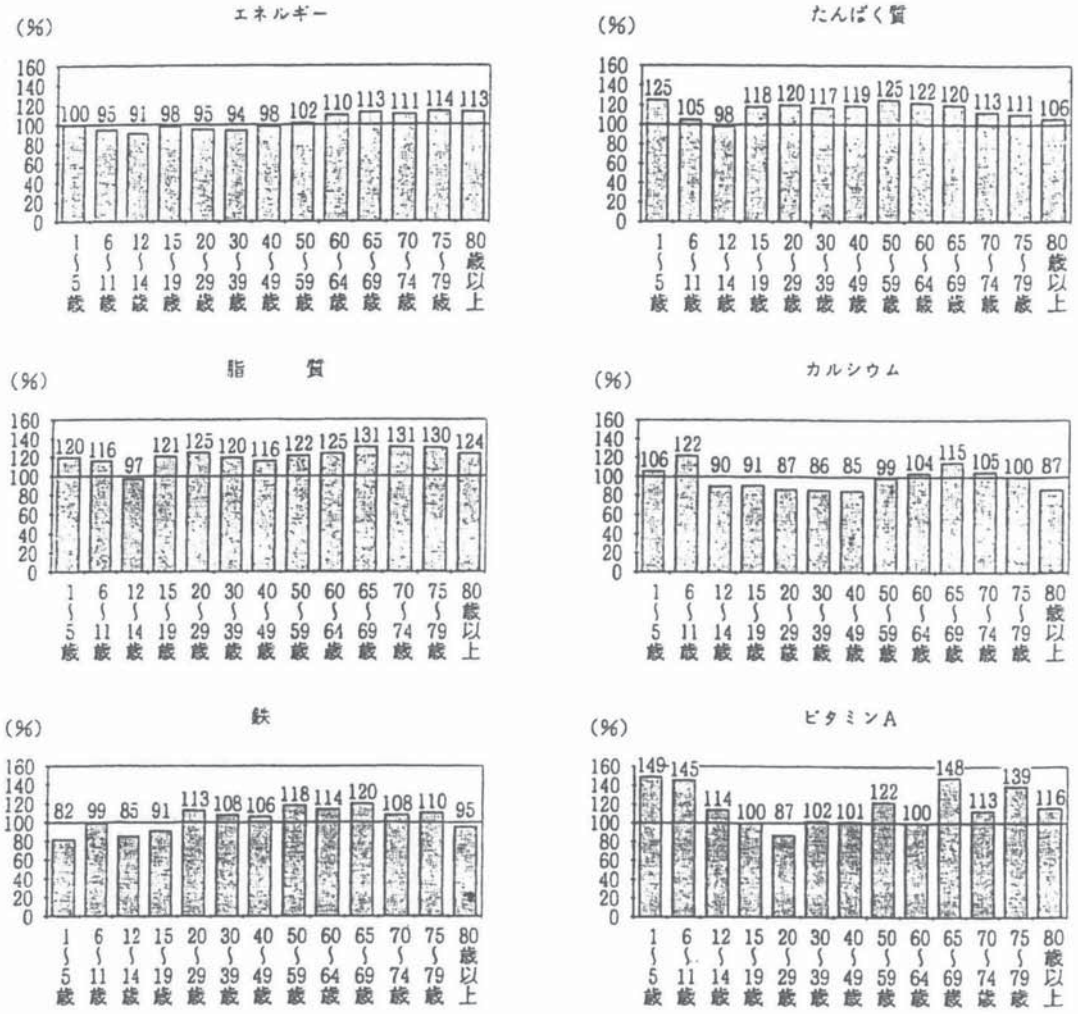
（資料）「平成12年度ごはん食基礎データ蓄積事業研究報告書」
（注）インスリン反応とは、糖質食品を摂取することによる血液中のインスリン値の変動を言う。

朝食内容による歯と唾液量の状態

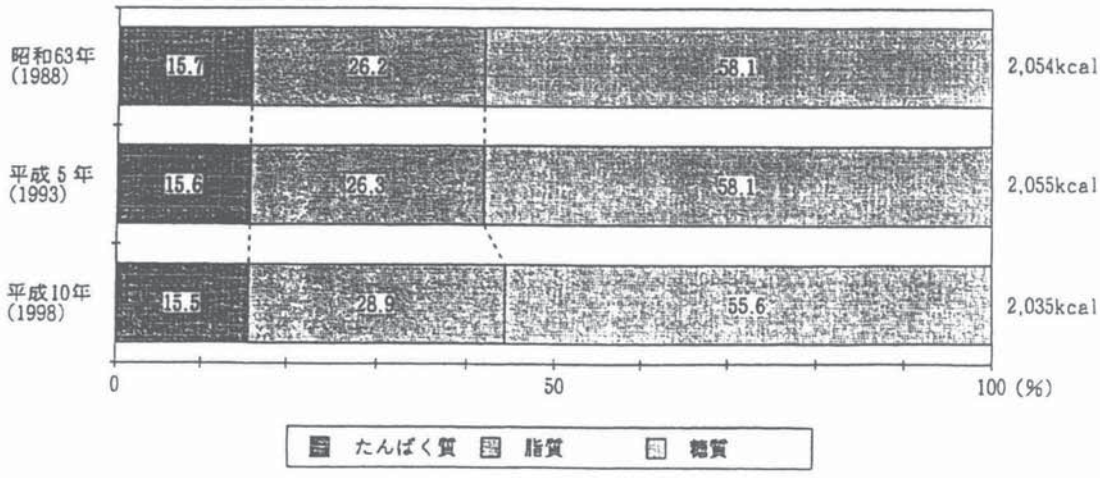


（資料）「平成12年度ごはん食基礎データ蓄積事業研究報告書」

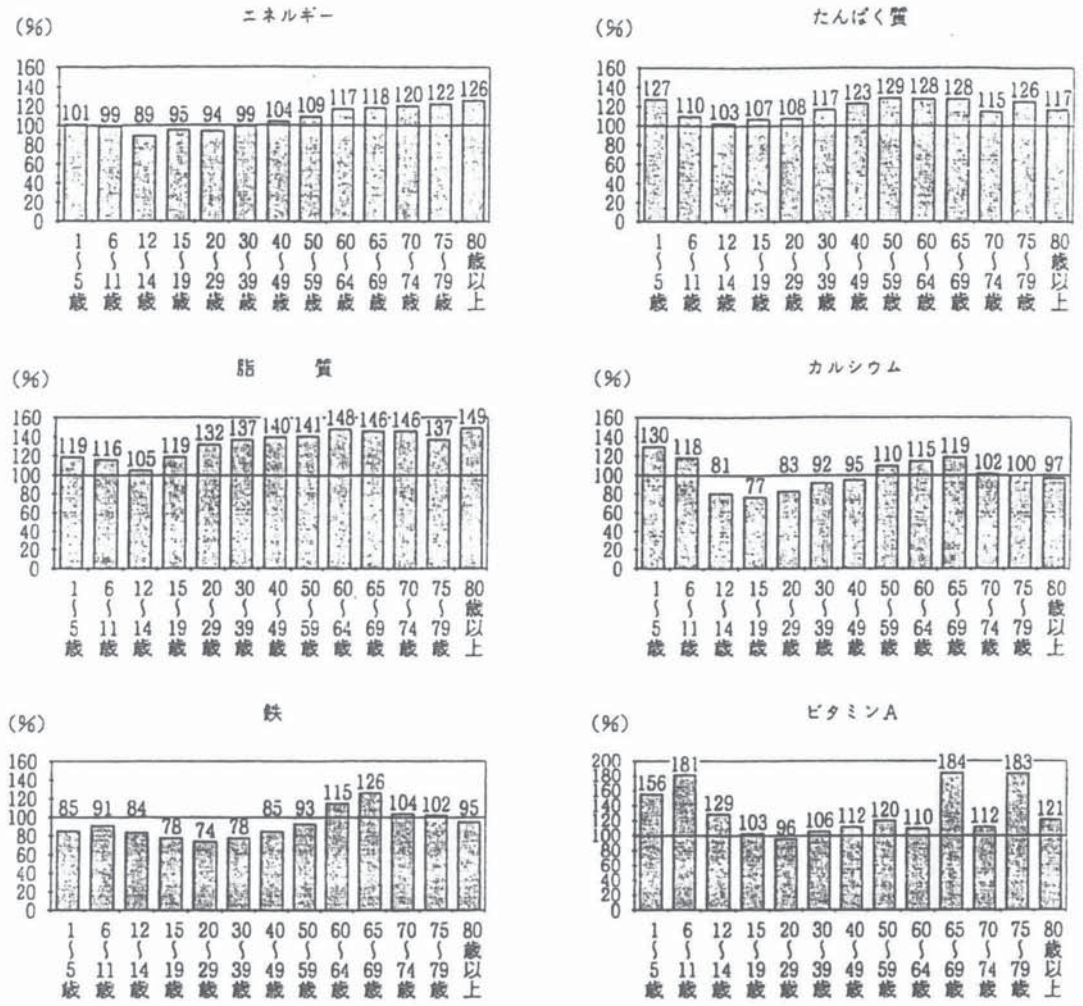
栄養素等摂取量と調査対象の平均栄養所要量との比較（性・年齢階級別）
<男性・調査対象の平均栄養所要量＝100>



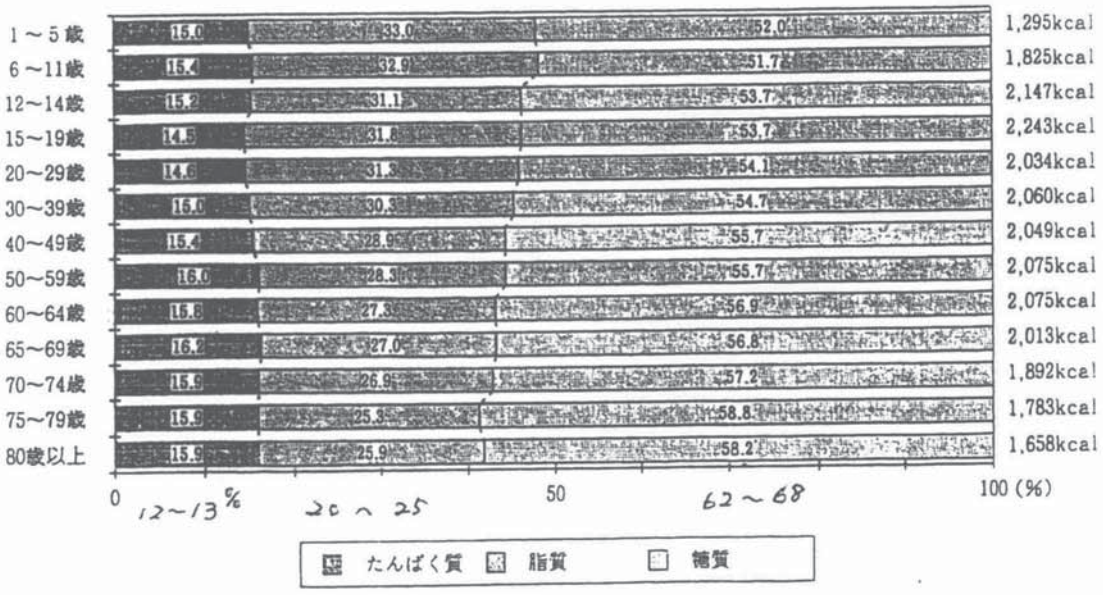
エネルギーの栄養素別摂取構成比の年次推移（15歳以上）



<女性・調査対象の平均栄養所要量＝100>



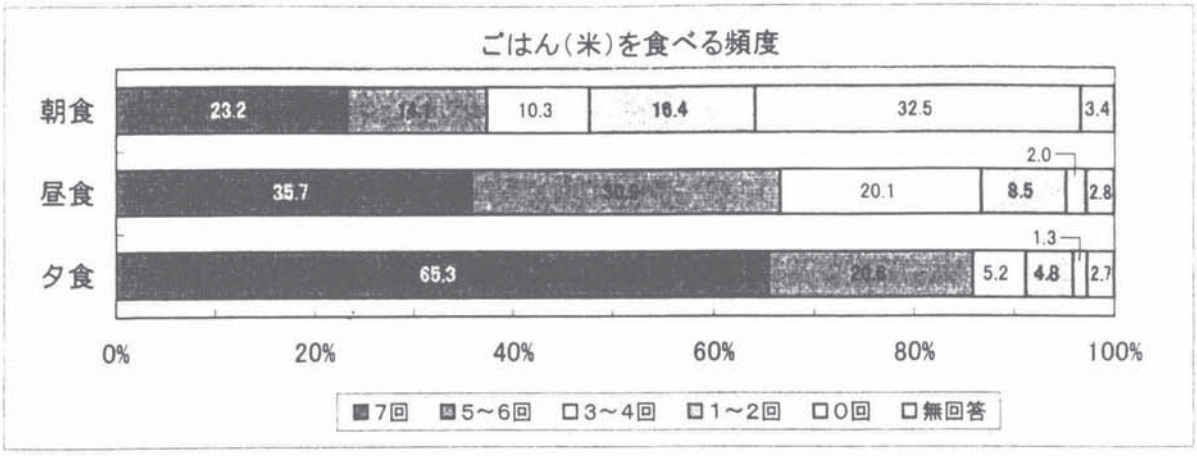
エネルギーの栄養素別摂取構成比（年齢階級別）



ごはん(米)を食べる頻度は、夕食、昼食、朝食の順に高い。
毎日朝食にごはん(米)を食べる人は20～30歳代で最も少ない。
毎日朝食にごはん(米)を食べる人が多い地域は、但馬・丹波地域。

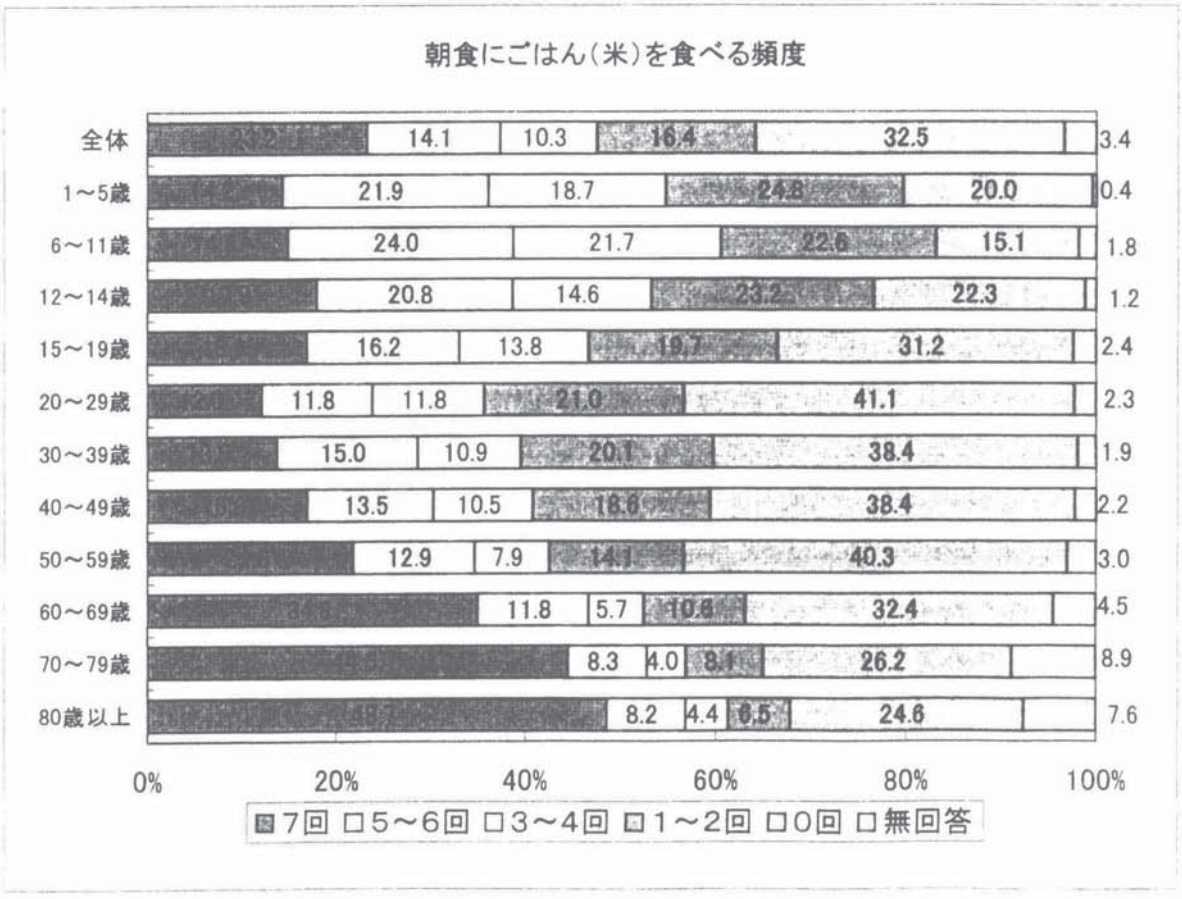
図表15

毎日（週７回）ごはん（米）を食べる人は、朝食で23.2%、昼食で35.7%、夕食で65.3%である。

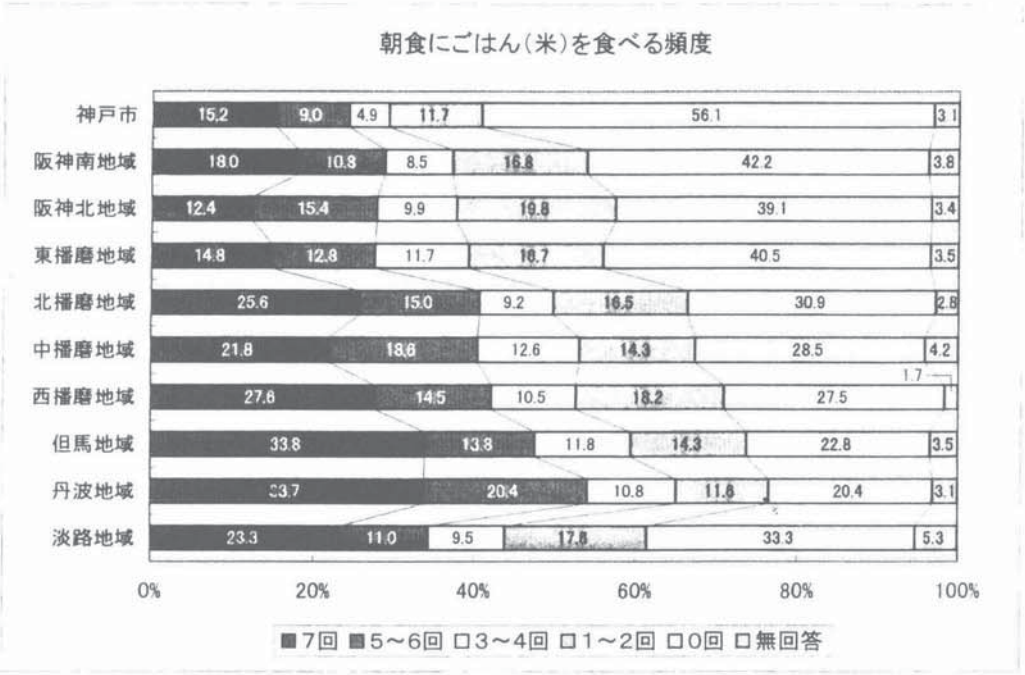


図表16

毎日(週7回)朝食にごはん(米)を 食べる人は、20～29歳が12.0%最も低く、次いで30～39歳が13.6%である。年齢があがるにつれて毎日(7回)食べる人の割合は増加する。

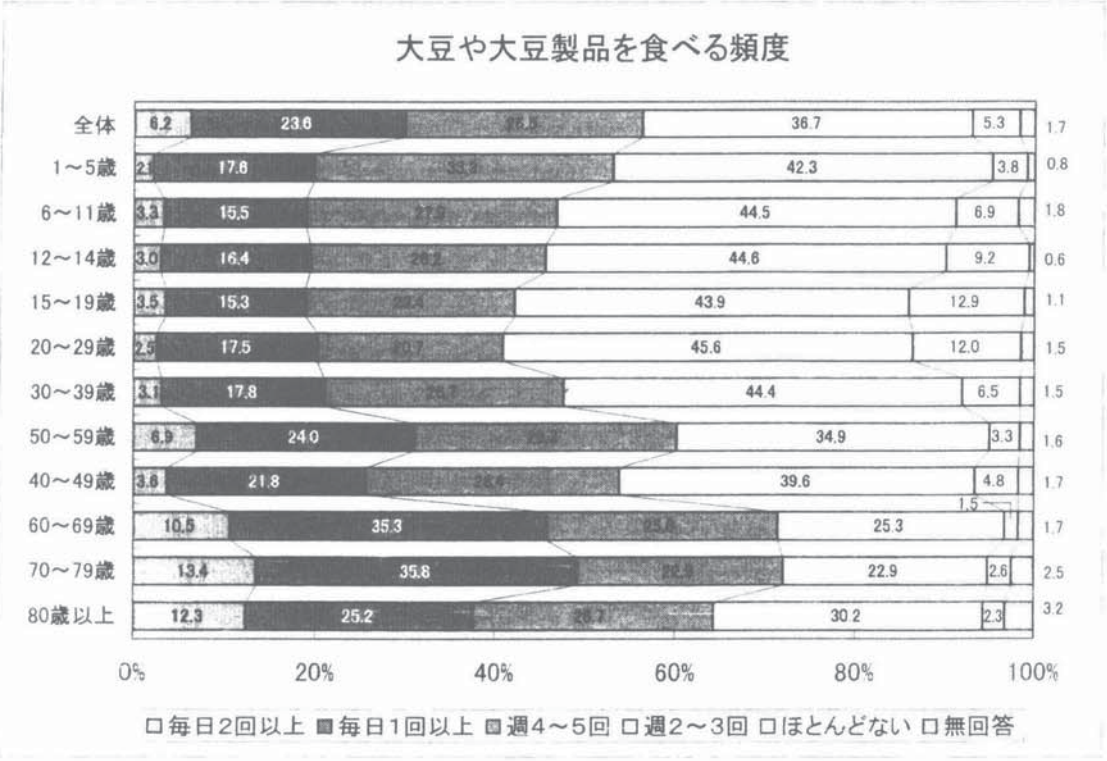


毎日（週７回）朝食にごはん（米）を食べる人が多い地域は、
但馬地域で33.8%、丹波地域で33.7%である。

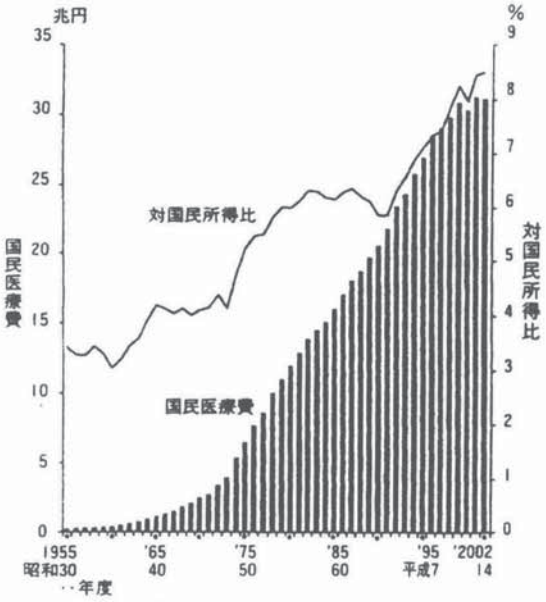


大豆・大豆製品を毎日1回以上食べている人は30%

大豆・大豆製品を毎日１回以上食べている人は、29.8%である。全年代において、週２～３回の頻度で食べる人が最も多い。一方、ほとんど食べない人は、15～19歳で12.9%、20歳代で12.0%で他の年代に比べ多い。

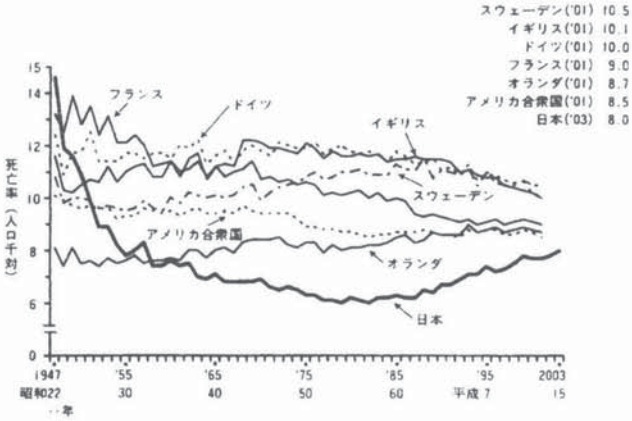


国民医療費と対国民所得比の推移



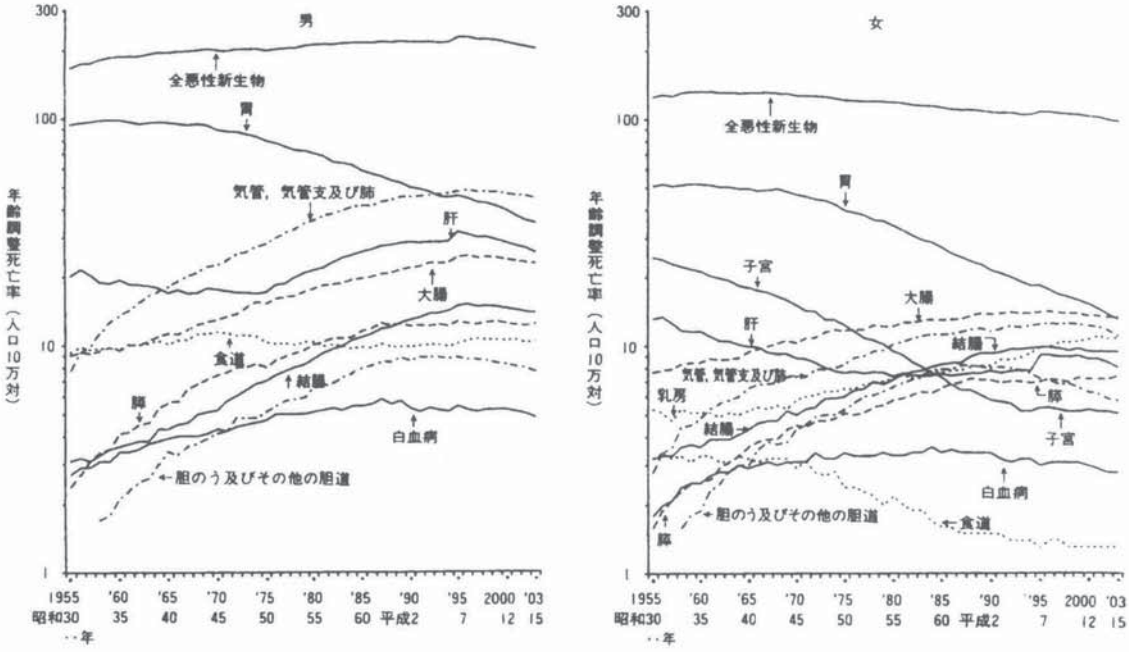
資料　厚生労働省「国民医療費」

死亡率（人口千対）の国際比較



資料　厚生労働省「人口動態統計」
　　UN「Demographic Yearbook」
注　　ドイツの1985年までは旧西ドイツの数値である。

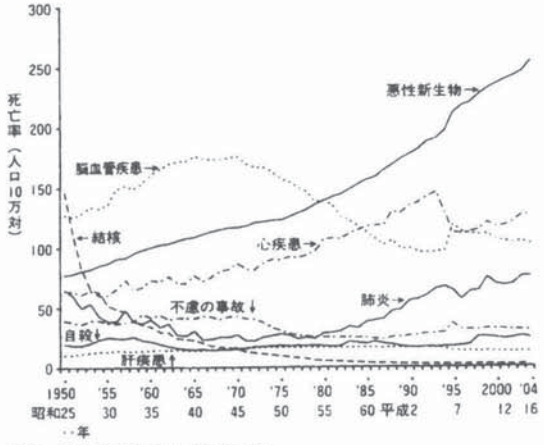
部位別にみた悪性新生物の年齢調整死亡率（人口10万対）の推移



資料　厚生労働省「人口動態統計」
注　1)　大腸は，結腸と直腸S状結腸移行部及び直腸とを示す。ただし，昭和40年までは直腸肛門部を含む。
　　2)　結腸は，大腸の再掲である。
　　3)　肝は，肝と肝内胆管を示す。
　　4)　年齢調整死亡率の基準人口は「昭和60年モデル人口」である。

資料：国民衛生の動向 2005

主要死因別にみた死亡率(人口10万対)の推移



資料　厚生労働省「人口動態統計」
注　　平成6年までは旧分類によるものである。

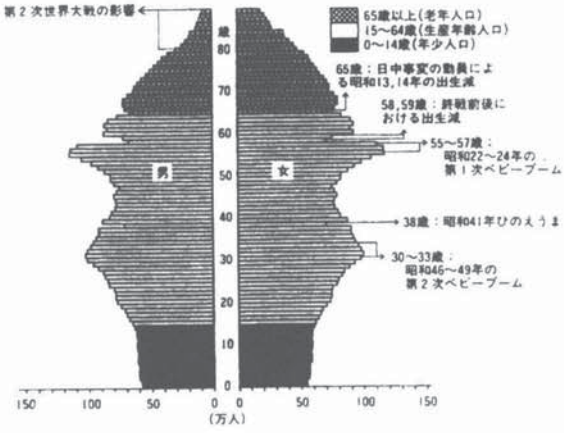
性・部位別にみた悪性新生物の年齢調整死亡率(人口10万対)の国際比較

	男			女			
	悪性新生物	胃	肺[1]	悪性新生物	胃	肺[1]	乳房
日本('03)	163.1	27.9	35.4	82.9	11.3	9.4	9.2
カナダ('00)	171.2	6.1	49.8	119.9	3.0	27.8	20.8
アメリカ合衆国('00)	167.6	4.3	53.8	118.9	2.2	29.7	19.9
フランス('00)	206.6	7.3	50.8	98.8	3.1	8.3	21.5
ドイツ('01)	176.2	10.6	45.8	110.5	6.0	12.2	21.6
イタリア('01)	186.5	13.1	53.2	102.8	6.3	9.8	20.2
オランダ('03)	185.2	8.6	54.4	121.1	4.0	20.8	25.0
スウェーデン('01)	141.2	6.4	23.9	110.0	3.7	16.0	17.6
イギリス('02)	175.2	8.4	43.9	126.5	3.6	22.8	23.9
オーストラリア('01)	161.6	5.9	36.5	104.6	2.8	15.9	18.5
ニュージーランド('00)	176.6	8.0	36.9	124.1	4.1	19.5	23.7

資料　厚生労働省「人口動態統計」
　　WHO「World Health Statistics Annual」
注　1)　気管，気管支と肺を示す。
　　2)　年齢調整死亡率の基準人口は世界人口である。日本も同様である。

わが国の人口ピラミッド

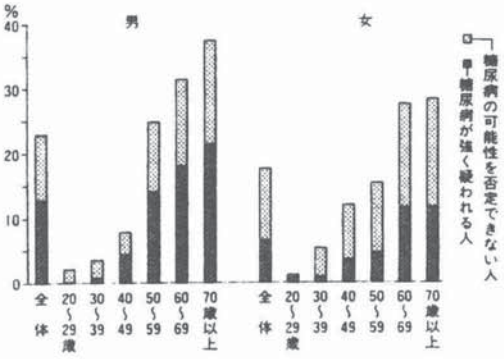
平成16年('04)10月1日現在



資料　総務省統計局「平成16年10月1日現在推計人口」
注　　90歳以上人口(男24万7千人，女76万9千人)については，年齢別人口が算出できないため，省略した。

糖尿病が強く疑われる人および糖尿病の可能性を否定できない人の割合

平成14年('02)



資料　厚生労働省「糖尿病実態調査」

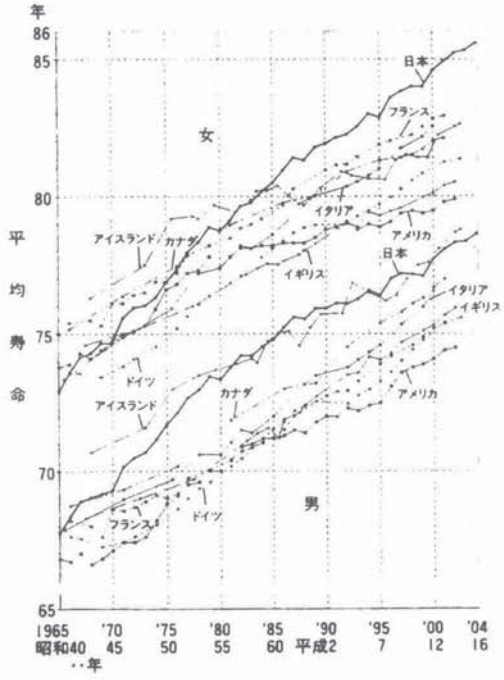
平均寿命の国際比較

(単位　年)

	男	女	作成期間
日本	78.64	85.59	2004＊
アイスランド	78.8	82.6	2001-2004＊
スウェーデン	78.10	82.46	2004＊
スイス	77.8	83.0	2002＊
イギリス	75.94	80.51	2001-2003＊
フランス	75.4	82.9	2001＊
ドイツ	75.59	81.34	2002-2003＊
アメリカ合衆国	74.5	79.9	2002＊

資料　UN「Demographic Yearbook 2002」
　　Council of Europe「Recent demographic developments in Europe」等
　　＊印は当該政府からの資料提供によるものである。

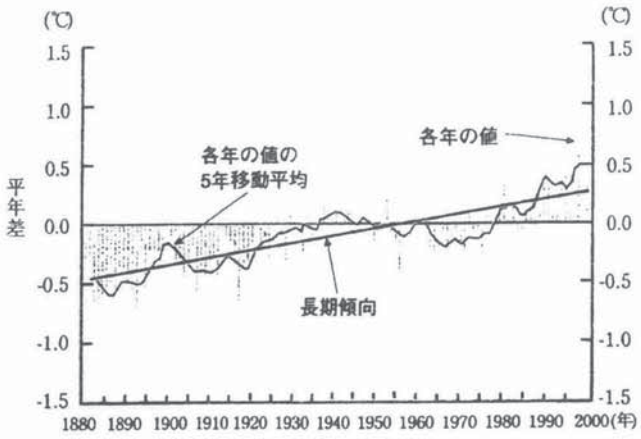
諸外国の平均寿命の比較



資料　UN「Demographic Yearbook」等
注　　1990年以前のドイツは旧西ドイツの数値である。

図表17

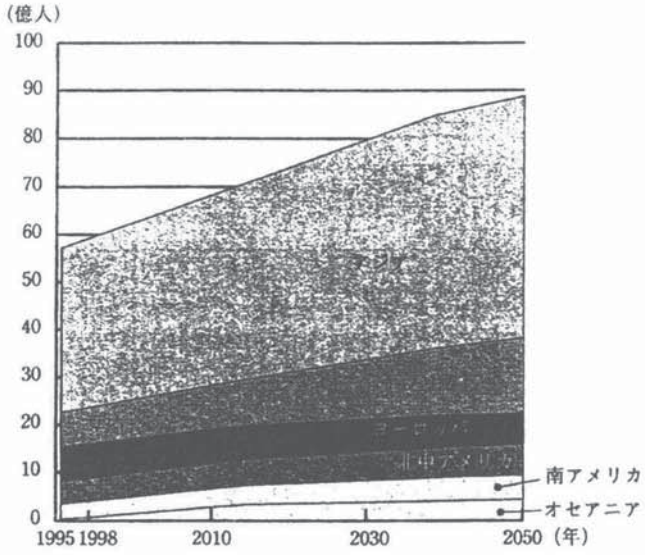
世界の年平均地上気温の平年差の変化



出典：環境庁「平成12年度版　環境白書総説」
注：平年差は最近100年間の平均気温との温度差

図表18

世界人口の推移（中位推計）

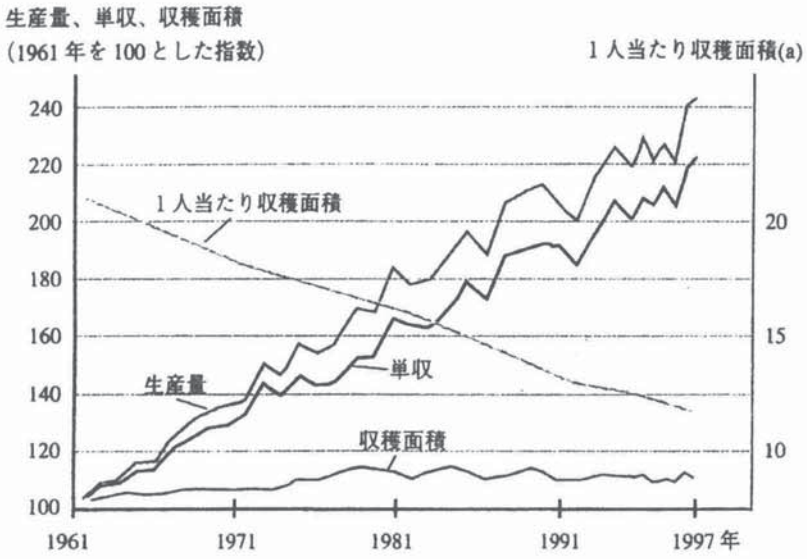


(単位：百万人)

	1995年	1998年	2010年	2030年	2050年
世界全体	5,716	5,901	6,794	8,111	8,909
アジア	3,458	3,585	4,135	4,876	5,268
アフリカ	728	749	973	1,405	1,766
ヨーロッパ	727	729	724	690	627
北中アメリカ	455	473	532	617	666
南アメリカ	320	336	394	479	534
オセアニア	29	30	341	411	461

資料：国連「Population and Vital Statistics Report (1996年)」及び
「World Population Prospects (1998年)」

世界の穀物生産量、単収、収穫面積及び１人当たり収穫面積の推移

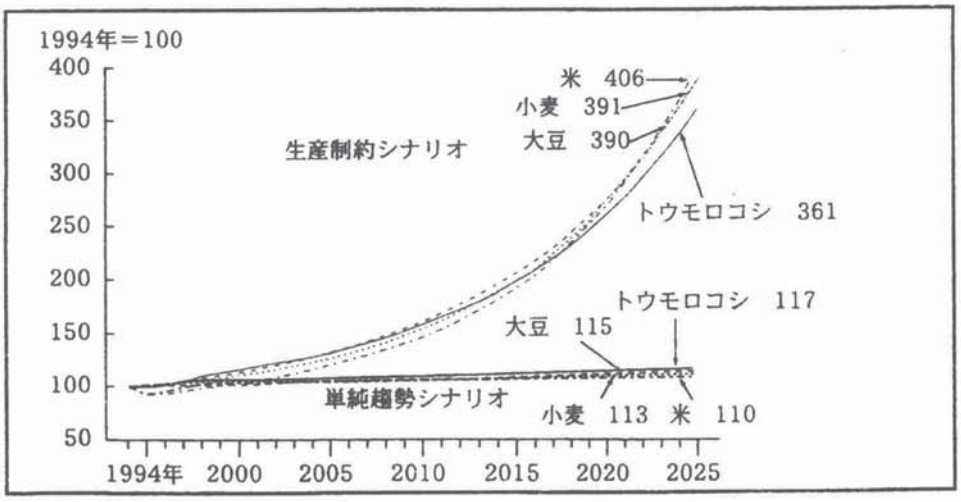


	収穫面積 (ha)	単　収 (kg／ha)	穀物生産量 (t)	人　口 (千人)	1人当たり収穫面積(a)
1961年	647,761,270	1,354	876,889,525	3,085,756	21.0
1971年	684,863,237	1,897	1,299,084,980	3,777,287	18.1
1981年	727,177,125	2,246	1,633,106,320	4,523,928	16.1
1991年	705,281,375	2,679	1,889,403,370	5,365,755	13.1
1997年	707,511,547	2,966	2,098,280,190	5,848,731	12.1

資料：FAO「FAOSTAT」

図表19

穀物及び大豆の国際価格（実質）の予測



資料：農林水産省

「非人間化時代における人間化」
－人々とどのように手をつなぐか－

フォーラムリーダー　**深川 純一**

バズセッション報告　D班

○D班(前田)　それじゃ皆さん、こんばんは。私、初っぱなを務めさせていただくD班代表の、前田と申します。覚えておいてください。

今日は、非人間化時代における人間化、人々とどのように手をつなぐかというテーマなんですけども、どうですかね。平間さん、このテーマはどうでした。

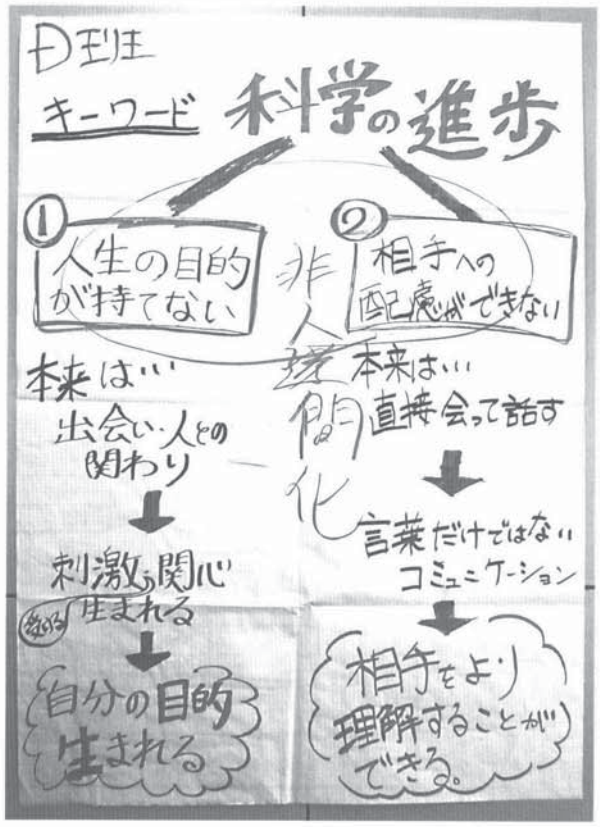
○B班（平間）　難しかったです。

○D班（前田）　難しかった。ああなるほど。そしたら、じゃあ岡崎さん、どうでしょうね。

○A班（岡崎）　難しかったです。

○D班（前田）　なるほど、皆さん難しかったようなんですけども、僕らも結構悩みました。

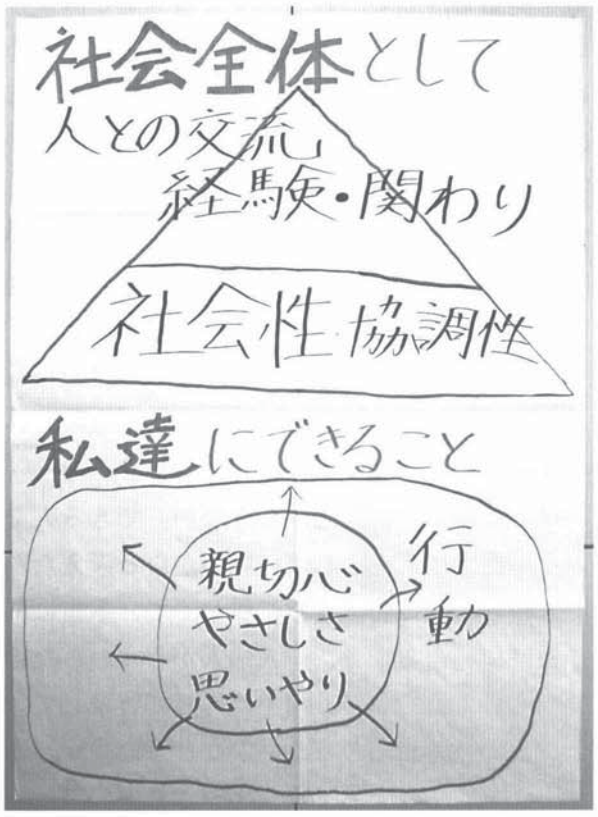
どういうふうにとらえるのがいいのかなというところで、僕らは3チームにわかれて考えたんですけども、その中で共通項として、科学というのが、今の時代におけるキーワードになるんじゃないかなというふうに思いました。そのグローバル化であったりとか、少子高齢化であったりとか、時代をあらわすキーワードというのは幾つかあるんですけども、この非人間化というものを考えるに当たって、科学の発展・進歩というのは避けて通れないものじゃないのかなという結論に達しました。その結果、僕らは非人間化時代、非人間化の例として、1番、人生の目的が持てない。2番、相手への配慮ができないというものが、特に挙げられるのじゃないかと思いました。これについて、今から説明させていただきます。



まず１番目、人生の目的が持てない。この科学の進歩というのが、どうなって、人生の目的が持てないにつながるのかについて説明いたします。

普通の場合ですと、いろんな人とかかわって、いろんな人たちの経験とか、知識とか、考え方、いろんなものに触れて、そこに刺激、それらに対する関心というのが生まれて、その中で、人としてどう生きるべきかという目的が生まれてくるかと思うんですけども、科学が進歩することで、我々の生活は非常に豊かになりました。

それまでは集団として生きなければいけなかったんですね。例えば農耕社会であれば、その村全体が協力して、その村の作物を育てなければいけなかったんですけども、生活が豊かになってくると、極端な場合、今、ニートでも生きていけます。つまり集団に頼らなくても、個人の中で生きていくことが可能な社会になってしまいました。ということは、それまでは集団に依存して、集団というアイデンティティーに頼って生きていくことができたんです。高度経済成長期であれば、戦争に負けてしまったこの日本を何とかして良くしようというのが国としてのアイデンティティーであり、その波に乗っかっている自分自身の人生の目的にも大きく影響していたはずです。でも科学が発展して生活が豊かになってしまったがために、人とそう交わる必要がなくなってしまった。集団に依存する必要がなくなって、こういう流れが起こらなくなってしまって、人生の目的が持てない人がふえてしまったんじゃないかなというふうに思いました。



次に、相手への配慮ができない。これも科学が進歩する前はと言いますと、人と人というのは、言葉を使ったり、いろんな方法で直接会って話していて、そこでは、言葉を交わすだけじゃなくて、例えば、この僕の表情であったりとか、しぐさであったりとか、この場の雰囲気、いろんなあらゆる情報を手に入れて、コミュニケーションを行っています。

詳しいデータというのは忘れたんですけども、どこかの研究で、人間というのは言葉、耳から入る情報というのは７％ぐらいで、そのほかに、目から、多く情報を得るらしくて、言葉以外の情報というのが大部分を占めるそうなんですね。なので、直接会って話すことによって、相手をより理解することができていたんですが、この科学の進歩が起こることによって、例えば、携帯であったりとか、インターネット、パソコンのＥメールなどが普及することで、直接会って話すということが減りました。本当にそれこそ携帯で、10 文字、20 文字程度の文字でコミュニケーションを行います。

ところが、そういう文字としてのコミュニケーションはあるんですけども、やはり直接ではない、その言葉以外の部分というのは欠如してしまうので、どうしても相手に対する情報というのが不足します。

その情報が不足すると、どうして相手への配

慮ができないのかというのを例にとって話しますと、自分については、毎日考えてるんで、いっぱい情報がありますよね。だから、自分のことはよく知ってるし、大切にしたいと思います。例えば、親もそうですね。親とかも毎日話するんで、親についてもいっぱい情報を持ってる。だから、こうしてあげたらいいというのが大体わかる。

だけど全然知らない国の人とかだと、全く情報がないので、相手に何かしてあげたいと思っても、どうしていいのかわからないから結局やらないんですよ。なので、情報の量というのがある程度、相手への思いやりにつながる部分はでかいんじゃないかなというふうに思ってます。

なので、科学の進歩により間接的なコミュニケーションがふえることによって、相手を気遣うという経験自体が減ってしまって、相手への配慮ができない人々がふえてしまったんじゃないかなというふうに思います。

こちらの２点、ここが非人間化の大きな二つ例としてあるんじゃないかなというふうに思いました。これが僕らが今回考えた問題であり、現状なのかなと思ったんですけども。

じゃ、これをよくするためにどうすればいいのかというのはこちらです。上の方が社会全体として、これはこちらの１番の人生の目的が持てないにかかっていて、こちらの私たちにできることというのは、相手への配慮ができないの方にかかっています。

こちらの社会全体として何ができるのか。人生の目的が持てないという理由として、人々とのかかわりが不足しているなというのがあったので、それをふやすためにどうすればいいのかということを考えて、こういうピラミッドをつくったんですけども、まず基礎として、教育の中で、こういった社会性や協調性といった能力を身につけることをしなければいけないんだろうと。そして、こういったものを身につけた上で、さまざまな人との交流や経験、かかわりといったものを持っていくことで、自分がどう生きるべきかというのを経験として、自分の実感として持てるようになるんじゃないかなと思います。

ちょっと抽象的なので具体例を挙げます。この具体例はそれほど実現可能とは思ってはいないのですが、イメージとして定着される上では非常に有効なので話します。例えば高校までの期間があります。高校までずっと学校で育ってきたんですけども、今でしたら、高校を出て大学へは大体６割ぐらいの人が行くんですけども、大学へ行っても勉強しかしてないんですね、ほとんどの人は、特に日本の場合は。そうなると大学で学問をするといっても、実際にその学問がどう使われるのかであったりとか、何をするために今、勉強しているのかというのがちょっとあいまいになってしまう。それがすごい問題かなと思うので、一つの案としては、高校を出た後に一度働く、そして働いて実社会の中でもまれて、世の中で何が必要なのかというのを実感した上で、もう一度大学へ入り直すといったことがやりやすくなるような制度をつくってみてはどうかなと。例えば、ロータリーとのかかわりで言いますと、ロータリアンの方でしたら、いろんな職場にいますので、その働き先といったところで協力はできるんじゃないかなというふうに思います。なかなか日本の制度にかかわることなのですごく難しいんですけども、このピラミッドのモデルを具体化したら、こういう感じになるんじゃないかなと思っています。

次に、相手への配慮ができない。できる人をふやすためにどうすればいいのかなと考えたんですけども、これは非常に難しくて、本当に草の根的に私たち自身、一人一人がそういった行動をとっていく中で、相手に対して啓蒙していくことが必要なんじゃないかなと思います。こういった親切心であったり、やさしさであった

り、思いやりであったりといったものを持って行動して広げていく中で、その人々に対して、よりいい社会、いい人を育てるような社会にしていけばいいんじゃないかなと思いました。

以上がD班の非人間化時代における人間化に対しての現状把握と、それに対する解決のアプローチでした。

以上です。ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。御紹介がおくれましたけれども、このフォーラムのリーダーは深川パストガバナーでございます。今後の進行をお願いしたいと思います。

○深川純一　それじゃ、一言、最初にお断りしておきます。これフォーラムと言いまして、結論を出すところじゃございません。結論を出すというのは決議と言いまして、その決議によって、全体意思を集約していくんでありますが、ここはそういうところではございません。

皆さん方はそれぞれいろんな、バズセッションでいろんな意見を出されたと思いますが、そういうことをもとにして、この全体のフォーラムでいろんなことをおっしゃってください。そして、人それぞれが、あの意見はおれはとってもいいなと。この意見は私はとれないよと。そういう取捨選択は皆さん方自身でやってください。その意見を集約して、全体意思で決議をすることはしません。ディスカッションで、いろんな意見を聞きながら、そして取るべきもは取り、捨てるべきものは捨てる。そのように取捨選択して、そしてそれぞれの皆さんの心の糧にしていただく。そういうのがこのフォーラムであります。

ですから、どんな意見でも結構であります。憲法が保障しておる、思想・良心の自由というのがありますね。あれは、自分の最も憎む思想を保障するのが、思想・良心の自由なんであります。ですから、どんどん自分の御意見を出してください。そして、ほかの方もその意見を聞いて、あの意見は賛成だ。あの意見はおれはとらないよと。そういう形で全部意見の取捨選択は御自身の責任と判断でおいてやってください。そして、できるだけたくさんの意見がこの場に出てくる方が、学び合う場でありますから、みなさんのためになると思います。そのことだけ最初にお断りしておきます。

次はB班ですね。まず、今のように意見を発表していただきます。その発表について、フロアの皆さん方が、この点はよくわからないから説明してほしいとか、そういうことがあればおっしゃってください。そしてその提示された問題を整理した上で、そして全部出た後で、最後にディスカッションに入っていきます。

続きましてB班の方、意見の発表をお願いいたします。

バズセッション報告　B班

○B班（平間）　B班の平間といいます。よろしくお願いします。

今回、先ほどのD班の方もおっしゃってたんですが、非人間化時代とか、人間化という言葉に、私たちは、どういう意味なのかと班の中でも分かれまして、この言葉について、どういう定義をつけようかということを話し合いましたので、まず説明させてもらいたいと思います。

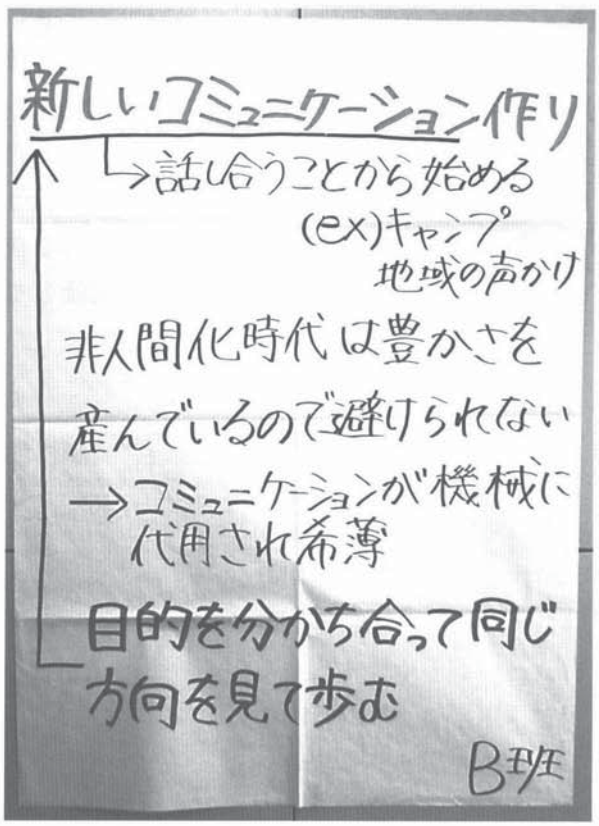
まず、非人間化時代というのは、今の時代そのものだと思うんですが、マニュアル化された会社であったりだとか、それからコミュニケーションが希薄化しているような雰囲気があるとか。そういうのをひっくるめて、非人間化時代というふうに考えました。

そこで人間らしくなるには、この人間らしくというのも、みんなが感情をぶつけ合って、感情を出して楽しく生きていけるにはどうすればいいのかなと考えました。

今まであるコミュニケーションを少し生まれ変わらせて、新しいものをつくることを考えました。その新しいコミュニケーションづくりというのは、まず話し合うことから始めましょうということで、今回のようなキャンプであるとか、地域においてみんなが声をかけていくであるとか、簡単に言うとそういうことです。

今の非人間化時代というのは、とても豊かで便利で、自然に今受けとっています。例えば、コンビニエンスストアですが、昔のような、村にある八百屋さんや、駄菓子屋さんと比べると、ただ1個のものを買いたいというときに、コンビニに行って、品物を選んでレジに行けば、すぐ買えるんですけど、駄菓子屋さんに行けば、まず、駄菓子屋さんのおばちゃんに、「僕、今日は何で来たん、何買いに来たん」とか言って聞かれて、「今日はガムがほしいんよ」とか、「カップラーメン食べに来たんよ」とか、何かそういう話をしながら品物を選んだり、1個買ったくじ引きつきのガムを手にとって、あけてみて、「ああ、はずれとった。おばちゃん、もう1個買うけん」とか言って。こう何か、おばちゃんとのやりとりをしないと、お菓子が買えないものだったと思うんです。そういう時代から比べるとコンビニエンスストアというのは逆に、「いらっしゃいませ、ありがとうございました」というのは言ってくれるんですけど、すごく単純化、マニュアル化されてて、昔の駄菓子屋の雰囲気が好きな僕たちからすると、ちょっと寂しい感じがする買い物だと思うんです。

とは言いましても、昔の駄菓子屋さんを今のコンビニエンスストアに押しつけるのはちょっと難しいと思うんです。僕たちはスピードや便利さを求めてコンビニエンスストアをつくったわけなので、今さら、コンビニを八百屋とか酒



屋に戻すのは逆行してるし、無駄じゃないかなと思います。

コミュニケーションが不足している理由のもう一つに、今まで、お金の計算なんかを暗算でしたり、電卓を使うてゆっくりおばちゃんがやってくれよる間に、おばちゃんと話をするとか。そういうもののかわりにもうレジで、バーコードをピッ、ピッとやって、それで終わりであるとか。何か機械によってそういう取ってかわられとるような気がします。

こういったものを含めて、今の時代に最も足りないのは、コミュニケーションをする機会や時間や場所が足りないんじゃないかなと考えました。そのコミュニケーションの場が不足しているのであれば、場所や時間を強制的につくってやる必要もあるのではないかなと思って、新しいコミュニケーションづくりという点から、キャンプであるとか、地域の声かけをしようというふうに考えました。

今回のキャンプなんですが、僕たちＢ班は集まって今日３日目ですけど、毎晩、夜遅くまで話をしたり、もう男、女関係なくすごく和気あいあいとしています。僕自身、いろんな研修というのを受けてきたんですけど、こういったふうに、すぐにみんなと友達になれる、好きなことを言い合えるような関係にはなれませんでした。

でも、今回のＲＹＬＡに参加させてもらって、プログラムもすごくいいんだと思うんですけど、自分の意見を必ず言わなければいけないような時間であるとか、その人の意見を聞かなければいけない時間であるとか、コミュニケーションにとって、一番大事な部分がまず引き出されたような気がします。

このようなキャンプにロータリークラブとか、ＹＭＣＡとかから参加させてもらってるんですけど、地元に戻って、会社や地域の中でいろんな人が集まって、そういう座談会的なキャンプをしたり、「地域のためにこういう行事せんか」とかいう話し合いをするのも必要なんじゃないかと。そういう行事の話し合いをすれば、自然にコミュニケーションをお互いにとるようになったり、お互いのことを知ったり、関心を持つようになって、例えコンビニであっても、無関心でおらずに、「いらっしゃいませ」と言われたときに、にこっと笑ったりであったりとか、向こうが「ありがとうございました」と言ったときに、こちらも何か「ありがとうございました」と言えるような関係が自然に築けていけるんじゃないかなと思いました。

また、このコミュニケーションをするというのが目的ではなくて、コミュニケーションを始めたところから、みんながある一つの方向に向かって、お互い手をつないで進んでいくことが、その先にある目的だと思うんです。例えば、「おはよう」とか、「こんにちは」というのが、コミュニケーションであるとするなら、その先に、このキャンプのように、こういうテーマに沿って話し合いをして、一つの答えを探していくという経験を積むことによって、みんなで同じ方向に進んでいけるんじゃないかなというふうに考えました。

話がちょっと変わるんですけど、コミュニケーションをとる方法として、携帯電話であるとか、インターネットであるとか、最近いろいろな方法が編み出されてます。昔からも手紙とか、年賀状とか、固定電話であるとか、ファクスとか。僕たち30代、20代は携帯電話のメールや、電話や、インターネットとかは、多分ロータリアンの方より特化しているんじゃないかなと思います。それから今の小学生や、幼稚園児であるとか、これからはもっと新しい手段が出てきて、僕らには扱えないような手段が出てくるかもしれませんけど、新しく勉強してくる子はそういうのをどんどん自然に学んでいって、僕たちとは違うコミュニケーション手段を使うようになると思います。世代の違いによってコミュニケーションの取り方に違いはありますけど、

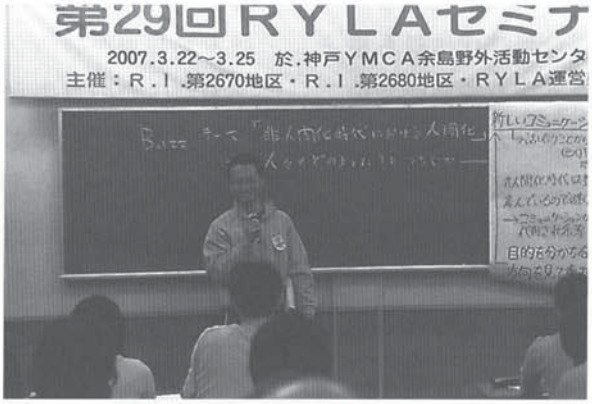
そういったものはお互いが、折り合いをつけて、こちらから相手を思いやって、こういうやり方でもコミュニケーションはとれるんだろうかとか、このやり方はここでは使えないなとか、そういうのを学びながら使っていけば、新しい通信手段が出ても、いつの時代でもやっていけるんじゃないかなと思っています。

新しいコミュニケーション、とにかく話し合いを始めましょうということで、キャンプ、地域の声かけ、そういうのを積極的に行って、どんどんその手を広げていって、みんなでもっとお互いが関心を持って取り組めるような地域をつくっていけたらなと思います。

以上で、B班の発表を終わります。

○深川純一　ありがとうございました。

それじゃ次はC班です。



バズセッション報告　C班

○C班（亀田）　皆さん、こんばんは。C班の亀田と申します。よろしくお願いいたします。ちょっと足をくじいてしまいまして、お見苦しいところをお見せしますけども、御容赦ください。

まず非人間化という言葉自体がすんなり自分の中で消化できなくて、これはどういうものを指しているのかということをまず話し合ったんですね。非人間化とはどういうことなんかなということで、まず抽象的なんですけども、人間らしくない人間ということがあるのかなと。表現として情が薄れてきたという言葉を使っています。感情とか、愛情とか、表情に欠けていると言うと、また語弊があるんですけども、薄れてきているのが非人間化じゃないかという話になりました。

デジタル人間ですね、択一的であると。白と黒しか認めない、グレーはないぞという。こういったものが非人間化というんじゃないか。一応、非人間化はよくないんじゃないかということで、道筋を立てて進めてます。

まず現状ですね、非人間化について、今の社会ではこういったふうになっているんじゃないかというのを挙げています。そのあと要因分析の方をしました。最後に解決策や対応策や防止策についてまとめています。

まず現状なんですけども、まず疑似の人間社会になっているのじゃないか。また疑似人間の社会というのもあるんじゃないかと。それから人間関係の喪失ですね。これらのことが非人間化社会で起きてる現状じゃないかなというふうに考えています。

疑似の人間社会なんですけども、今はインターネット社会になってますね。電子メールでやりとりはできますし、ネットのチャットで簡単に会話が交わせるようになりましたし、それはそれで非常に便利な社会にはなってると思うんですけども、つき合い関係いうたら希薄やと思うんですね。気に入らん人、気に入らんコメントを残す人がいれば、もう話をしなくてもいいですよね、つながなくてもいいんですから。それでお気に入りの仲間のコミュニティーだけで話ができると。そういう擬似的な人間社会というのが今非常に活発につくられているんじゃないかなと思います。

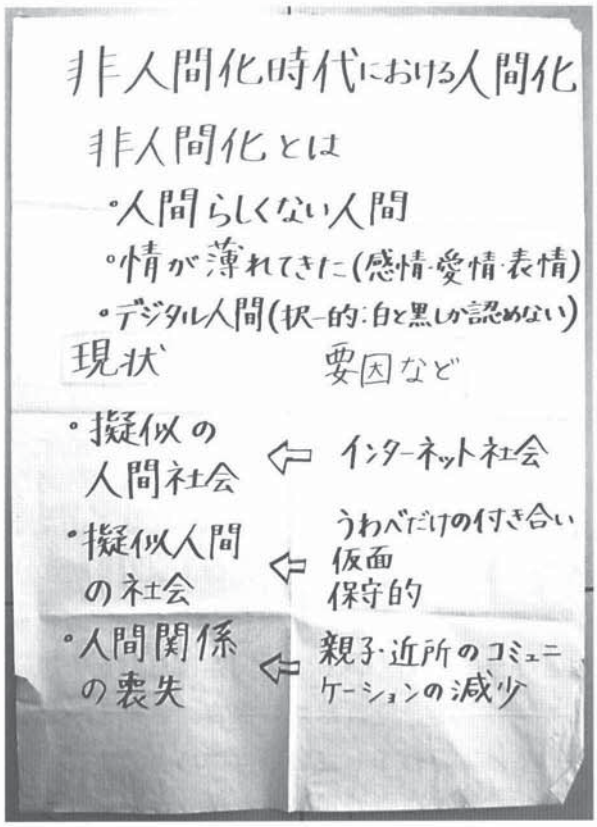
それからもう一つは疑似人間の社会。上辺だけの簡単なつき合いになっているんじゃないかなと思います。皆さん、人と接するときに、いい仮面をかぶったりして、相手と接していることもあると思います。

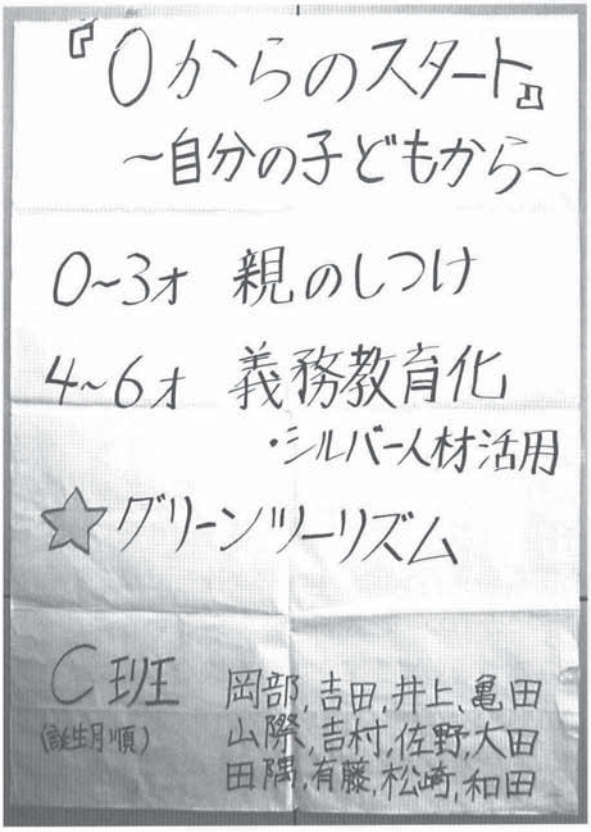
それから保守的なとこですね、やっぱり自分が一番かわいいですから、相手のためになるようなことでも、言ったら相手傷つきますし、自分も言わん方がよかったなと思うこともあり、何もしない方がいいんじゃないかということで、保守的な面というのは出てくると思います。

それから、人間に対する評価というのが、非常にデジタル的になってるんじゃないかなというふうに思います。極端な例を一つ挙げさせていただきますと、学校の通信簿ですよね。それからテストの成績、これもう点数社会になってると思います。ちょっと今回、悪いところだけ言わせてもらうんですけども、点数では、学術とかの能力的なものは判断できても、その人がどういう人かというところまでは評価できないですよね。

極端な話をしますと、私が教師だとして、評価するのが私だけという場合ならば、別にテストの点数を使わなくても、ある程度、この人はこういう人、この人はこういう人ということで、恣意的な評価はできると思うんですね。

ただ、評価する先生が複数が出てきたら、目





線の統一が必要になってきます。そしたら、一番いいのが点数化することですね。その点数社会にならざるを得ないこの状況というのが、こう非人間化社会に結びついてるんじゃないかなというふうにも思います。

それから人間関係の喪失ですけども、親子、近所のコミュニケーションや、親子で会話する機会や、近所づき合いなんか、だんだん減ってきてると思うんです。マンションの隣の部屋の方の名前もわからない。子供会に参加されますかというふうに聞かれますね。参加しません言うたら、そこで終わってしまうんですよ。人とつき合いするというのが非常になくなってきているのが、やはり原因の一つとしてあると思います。

また競争社会、格差社会の中で全体的に余裕がなくなってきてると思うんです。体の余裕もそうなんですけども、心の余裕というのがなくなってきてると思います。心に余裕がなかったら、人と接しようと余り思わないですよね。

満員電車でつり革で揺られてるおばあちゃんがいました。僕は肉体的に物すごい疲れててとか心に余裕がないと、席をかわってあげようと思えないんです。やっぱり余裕がなくなってきてるのが、一つ、非人間化における問題につながるのかなと思います。

それから今、親子関係では、子供さんが何か困難にぶつかったとき、理想的には何とかそれを乗り越えさせてあげようと子供を支援するのが親としてのいいあり方だと個人的には思うんです。

でも、今の親御さんというのは子供が困難にぶつかったら、その困難自体を取り除いてしまう。だから、子供がなかなか挫折しない、困難にぶつからない。挫折する年齢というのがだんだん高くなってきて、大学受験で失敗して、社会人になってすぐにやめてというような状況で、立ち直れない状況というのがだんだん多くなってるんじゃないかなと思います。それはやっぱり過保護的なこともあるんじゃないかなというふうに思います。

こういうことを改善するためにまず題なんですけど、「ゼロからのスタート、まずは自分の子供から」コミュニケーションの機会を多くしていきましょうというのが主題になってます。

まず、自分の子供から何とかしていければいいんじゃないかなというふうに思いますんで、まず0歳から3歳まで、これはもちろん、親がしつけます。子供のためでもあるんですけども、親のためでもありますよね。母親も父親も不安でしょうが、極端な話ですけど、いきなり0歳から保育園に預けたり、幼稚園に預けたりするんじゃなくて、最初は自分たちでまず育てて、しつけをしてもらうと。三つ子の魂百までということで、まずは自分でしつけてもらう。

○C班（男性）　4歳から6歳につきまして、ちょっと説明させていただきます。これ、制度的な改正が必要になるかと思うんですけども、保育園や幼稚園等の未就学児の機関を義務教育化するということと、その施設に対して、シルバー人材を活用するということを一応提案させていただきたいなと思います。

この義務教育化というのは、今、核家族化というのが問題になってますが、保育所に入れないという話をいろいろ聞くんですけども、そういったことも解消するということで、一応義務教育化という形で、すべて4歳から6歳の子供が入れるような仕組みを整えたいなと思います。

そして子供が高齢者に対する考え方、敬老思想を養うという観点で、シルバー人材を活用するということにしました。

あと、リタイアされた保育士の方とかも再雇用ということで、いろいろ問題はあるかと思うんですけども、それは若い保育士さんと一緒に働いて役割分担をしていけばいいと思います。

シルバーの方は費用の方も多分少ないと思い

ますので、予算的な面でも課題的には易しくなるんじゃないかなと思います。

高齢者と子供には世代的なコミュニケーションが最近はないと思うんですよ。孫と一緒に住んでないおじいちゃん、おばあちゃんが多いと思うので、３世代のコミュニケーションというのができるんじゃないかなと思います。

短所といたしましては、子供を預けるにあたって、安全性の面がありまして、それは資格等、外国はベビーシッターも資格があることですし、あと講習等もして、シルバーさんの活用をしたらいいなと思います。

○C班（女性）　シルバーの人材活用というところで出てきたんですけど、まず具体策としてどういうふうにしたら、子供にしつけやコミュニケーションをとる訓練をさせれるかということを考えたんですけど、具体策としてグリーンツーリズムというのを考えました。これは聞いたことないという人もいると思うのですが、ツーリズムというのは旅行とかいう意味なんですけど、ただ観光目的でどっかに行って、何かを見たりとかするだけじゃなくて、例えば、田舎に行って、その土地の食べ物のつくり方を教えてもらったり、自然と触れ合いながらそこで何日間か暮らすということなんです。

この４歳から６歳の間に、自給自足の生活体験をすることで、子供たちというのはすごく感性豊かなので、そういうところで、みずからつくって、どういうふうに生きていくかというのをすごい考えることで知識が豊富になりますし、またシルバーの方たちともコミュニケーションがとれるので、とてもコミュニケーション力のアップにもつながると思います。

○C班（亀田）　世代別にこうしたやり方が考えられます。このグリーンツーリズムの下の我々の世代なんですけども、ここにはあえて書かなかったんですけども、こういったＲＹＬＡのような場をもっと設けていただければ、私たち以外の青年も勉強ができますし、いろんな人と会話して、コミュニケーションが図れるので、非常にいい取り組みなんじゃないかなというふうに考えてます。こういったＲＹＬＡを年２回していただければもっといいんじゃないかなと考えます。

最後にちょっとこれだけ言っておきたいことがあるんですけども、よろしいですか。私いつも思うんですけども、正直に言いますと、こういったことというのは、やっぱり、この時点では紙に書いた取り組み、机上の空論やと思うんですね。考えただけのこと。

実際これ実行に移さないと全く意味がないんですよ。確かに難しいこといろんなこと書いてるんですけども、こうやって考えて、じゃいい取り組みだね、頑張ってみよかだけじゃやっぱりだめだと思うんですね。

私がそれを考えたときに、ＲＹＬＡというのはこれ今まで２９回されてるんですね。その２９回された、継続された方もすごいと思うんですけども、それ以上に、第１回目をされた方々というのは、すごい偉大な人だと思います。だって僕らこれ実際にやろうとしても、できません。ありがとうございました。

○深川純一　ありがとうございました。何か御質問ありますか。

○D班（上村）　「非人間化とは」のところで、人間らしくない人間というのを、具体的にC班としての意見を聞きたいです。

○C班（亀田）　非人間化を定義するときに非常に難しかったんで、あいまいなんですが、人間らしくない人間という言葉を使わせてもらってるんです。そのときに出た意見というのは、デジタル人間、ドライであるとか、択一的、０か１かというとこですね。これでいいのか、ち

ょっと何かちゃうんちゃうかというようなレベルでしか話し合いができてません。

○深川純一　それじゃ最後はA班です。お願いいたします。

バズセッション報告　A班

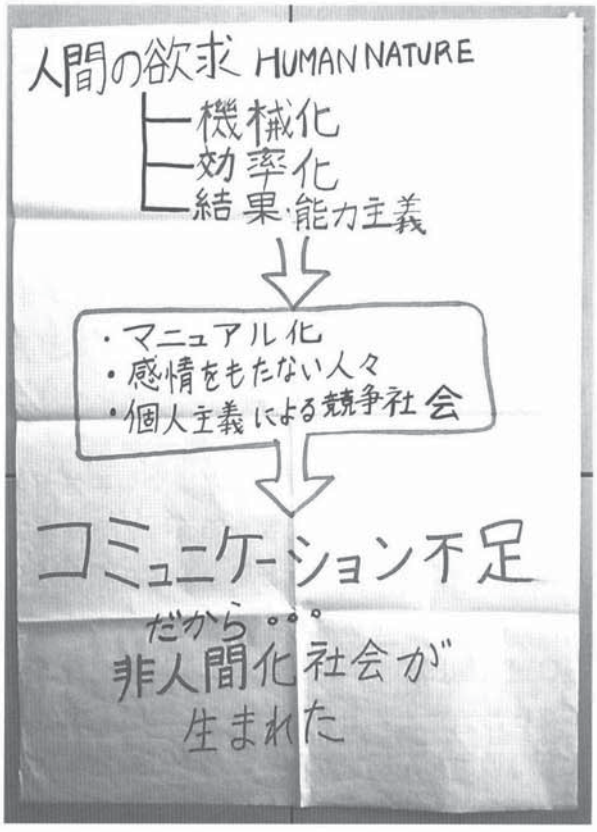
○A班（サビン）　こんばんは。私の日本語は余りよくないですから、ちょっと間違えたら申しわけございません。でも頑張ります。

非人間化が始まる前にまず、ヒューマンライフが始まりました。その後で２番目に欲求がありました。その後３番目で、デベロップメントステイツといいますね。開発がありました。その後で、テクノロジー、技術がいろんなことありました。グローバライゼーションとアドバンスメント。その後で、アダプテーション、ソフトテクノロジー、マシンズ、ヒューマンライフがありました。それで私たちはみんな、テクノロジー、マシンといろいろなければならないですね。携帯、例えば、いろんなことがありました。その後で、エデュケーション・ネセサリーになりました。それはなければならない。なければ全然できないです。

では、私たちはどうやってバランスがとれますかということを話します。

○A班（男性）　最終的にどのようにして、バランスをとっていったらいいかという結論にまで結びつけていきたいと思いますので、御静聴ください。

まずですが、先ほど、サビンの方が言いました、ヒューマンライフ、マシンライフ、人間と機械の生活ということですね。そしてインパク



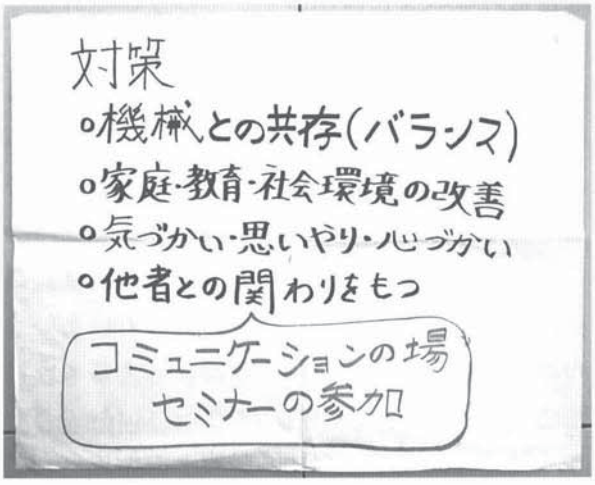
ト・オン・ヒューマンライフということで、人間が生きていくために最低限必要なことは何かと言いますと、コンピューターとかではないと思うんです。食べ物、服、家。この三つ、衣食住。この三つがそろっていれば、人間は最低限な生活はできると思うんです。

けど、人間には欲求というものがあります、これが英語でヒューマンネイチャーと言うんですが、それがコンピューターでありますとか、ゲームでありますとか、あと携帯電話とかいうもので、機械化されてきております。

それによって、世の中がもっとスムーズに回ることになり、今度、効率化が図られております。その結果、能力主義による社会へと変わっていったと考えます。

そしてそこから、マクドナルドとかに代表されるような仕事のマニュアル化でありますとか、コンピューターに向かい合って感情を持たない人々が出てきたり、あと個人主義による競争社会ができてきたと考えました。

そのことから全体を通して、今、何を必要としているのかというのが、このコミュニケーション不足という一言に代表されると思います。だから、結果的に、このタイトルである非人間化社会ができたのだと考えました。ここからこれをどのようにしていったらいいかという対策を、日下部さんより説明いたします。



○A班（日下部）　今から対策について話したいと思います。意見が出たのはここに書いてある四つなんですが、まず機械との共存、バランス。こちら欲求の方でも説明させてもらったとおりに機械化、コンピューターやメール、インターネット、携帯が手放せない状態になってきてますよね。なくてはならない時代、切っても切れない状態になっているので、機械と共存するために、バランスを考えながら生きていくということも大切だと思ってます。

次に、家庭教育、社会環境の改善ですね。非人間をつくらない、つくらないというより非人間を育てないためにも、子供たちを小さいころから育てていく。そういうので、だめなことはだめ、いいことはいいという。家庭でちゃんと教育していくことです。

その次に教育。これは教育現場になるんですけど、だめなことはだめと、先生がよく教える。昔だったらよくだめだったらだめとちょっとたたいたりしてたと思うんですけど、今だと体罰だと親が言って、裁判まで行くことがあります。そういう教育改善もちょっと必要だと思います。

次に社会環境の改善、これちょっとコミュニケーションとかかわってくるんですけど、よくマンション住まいとかだと、お隣の人は顔は知っているけれども、どんな人かもわからない。名前、どんなお子さんがいるのかもわからない。そういう状態で、会って会釈はするけど、たいした世間話もしない。そういう人とのコミュニケーションも大切じゃないかなと思っています。

気遣い、思いやり、心遣い。ちょっと外へ出ていって電話をするのならまだしも、友達で集まっている前で携帯を取り出して電話をしだしたり、メールを打ちだしたり、その場の雰囲気をやっぱり壊してしまうじゃないですか。人がせっかくいるのに機械とコミュニケーションしているというのも、ちょっとだめなんじゃない

かなと思っています。

次に、他者とのかかわりを持つ。ＲＹＬＡセミナーのようなコミュニケーションの場では、私たちの班、全員が一致したんですけど、知らない人だからこそ言える意見ってあるんですね。知ってる人だと、あの人はこう思ってるから、こうは言ったらだめとか、こう言ったら傷ついてしまうからこれは言わないでおこうと、気を使って本音で話し合えない。だからこういう知らない人とのかかわりを持って、本音で話をするというのもいい機会だと思います。

これが以上で、Ａ班の発表にしたいと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

それじゃあ今の発表した意見について、何かありましたらおっしゃってください。

○Ａ班（サビン）　私はネパールから来て、ＲＹＬＡに参加して、ロータリーのファンクリーデイルーセットから言った言葉を一つ思い出しました。英語だったら、We cannot built the future for a youth, we can built youth for the future.

日本語だったら、私たちは若者のために未来をつくることはできないが、未来のために若い者を育てることができる。本当にＲＹＬＡはそういうところでした。

本当にありがとうございます。

フォーラムディスカッション

○深川純一　ではディスカッションを始めます。皆さんからいろんな意見が出てきたんですが、この四つの班の意見を集約して、一番肝心なところはどうもコミュニケーションの問題だろうと思うんです。コミュニケーションを図る方法として、コンピューターとか、携帯とか、ゲームとか、いろんなことがあるわけでありますが、これについて、今、四つの班から出てきましたが、それ以外に、こういう問題があるんじゃないかと思われる方、何か意見出してください。

はい、どうぞ、前田君。

○Ｄ班（前田）　先ほどＤ班で発表させてもらったんですけど、ちょっと個人的に思ってる部分があるので、それをつけ加えたいなと思います。

Ｃ班に、人間らしくない人間という言葉があったんですけども、僕はその人間らしいというのは何なのかなというのを最初に考えるようにしました。

人間らしいというのは、動物とかと比べたと

きに、すごいいろんな側面があるなと思って、例えば、知識の面、知的な面であったり、心の面であったり、社会へ集団を持っている部分とか、ホモルーデンスって聞いたことあるんですけど、遊ぶ側面であったりとか、いろいろあると思うんです。今回副題で、人々とどのように手をつなぐかというところで、ほかの動物と違って人間は、人間同士で社会というのを形成するために、社会性というものに対して、今すごく問題があるので、コミュニケーションについて提案するものが多かったかなと思ったんですけども、ちょっと残ってる部分がまだあるのじゃないかなと思います。

それが、人間という言葉を言うときに、ホモサピエンスとホモルーデンスという言葉がありますが、たしかホモサピエンスは考える猿というか、人間の知性をあらわす部分だと思うんです。人間というのはほかの動物と違って自分で考えて、自分でつくり出す生き物であるというところに、人間らしさの一つの側面があるかなと思います。今、非人間化時代というのを考えたときに、自分で考えられない、自分で決めて判断して行動できない。究極的に言ってしまえば、自分の中に哲学みたいなものを持っていない人が多くなっているんじゃないかなと思ったので、人間化するためには、そういった知的な側面をもうちょっと強めることも必要じゃないかなというのが1つ。

それからそのホモルーデンスといわれる遊ぶ存在。動物は余計なことはしない、エネルギーの無駄はしないんですけども、人間であれば、趣味に走ったり、レジャーに行ったり、お笑いとか、別に生きるために必要じゃないのにやっている。それは余裕という部分につながるかもしれないんですけども、忙しくなってきて、競争にさらされて、その遊ぶ心というのがなくなってきてるので、そういった遊びの側面という部分も検討した方がいいのではないかなというふうに思いました。

以上です。

○深川純一　ありがとうございました。

今の御意見に対して、自分はこう思うんだという違う意見があったら出してください。どんな意見でも結構ですよ。何でもおっしゃってください。それが皆さんの勉強になるわけですから。

○C班（松崎）　C班の松崎と申します。今日は皆さんからコミュニケーション不足という言葉が出ましたけども、僕は、コミュニケーションの基本というのはあいさつだと思うんですね。

やっぱり、人間としての基本は、僕はあいさつだと思ってるんで、コミュニケーションを始める前に、お互いにあいさつがしっかりできて、お互いを尊重できることが僕は大切だと思います。例えば極端な話をしますと、電車とかで足を踏んで、すみませんも言えない人も世の中にはいますけども、やっぱりこういうことが非人間の一つでもあると思ってます。

○深川純一　ありがとうございました。

今、あいさつというのがコミュニケーションの基本だとおっしゃいましたが、皆さん、朝起きたときに、お父さんやお母さんにおはようと言ってますか。言ってる人、手を挙げて。ほとんど言ってる、大丈夫、安心しました。

それから、喫茶店なんかで、例えば、だれかからお茶を運んでもらったりなんかしたときに、ありがとうと言う人いますか。よく人によっては、喫茶店なんかに行ったら金払ってるんだから、向こうがコーヒー運んでくるのは当たり前だと、礼も言わない人があるんだけども、その辺のところが大変大事なことだと思いますから、ありがとうとか、おはようとか、そのあいさつというのは一番大事なことだろうと思います。いい御意見でありがとうございました。

そのほかに、先ほどの前田君の意見に何か、わしはちょっと違う意見持っとるという人があったらおっしゃってください。

○D班（旭）　D班の旭と申します。今、あいさつの話があったんですけども、もちろんあいさつが大事だというのは、僕も当然そうだと思うんですけども、ただ逆に、あいさつというのは言葉が決まっているものですね。ですから、常にマニュアル化しやすいものであって、実際、コンビニとかの話も出たと思いますけども、あいさつをすればいいとなってしまう危険性、言えばいいという危険性をはらんでいるんだということを一応気をつけておかなければいけないと思いました。

○深川純一　わかりました。今の話は恐らく、心がこもってないとだめだという意味じゃないかと思うんですが、心がこもってなくても、あいさつすれば、受けた方はいい、悪い心持ちがしないだろうというふうな考え方もあると思いますが、この点について、自分はこう思うという意見があったらおっしゃってください。

○D班（増田）　D班の増田です。今の旭さんの意見で、あいさつがマニュアル化されてるが、心がこもっていないといけないんじゃないかというのに、自分も同調できるところがあります。某携帯のCMで、親に謝るのに携帯でメールをするというのがあるんですが、親と一緒にいるはずなのに、なぜ、恥ずかしいから携帯を使うというふうになるのか、まあ言わないことよりかは言う方がいい、自分に非があるから言いたいけど言えない。「ごめんなさい」という一言をちゃんと言うべきではないのかな、心を込めて言うことが大切になるんではないのかなと思います。

○深川純一　ありがとうございます。

今の御意見いかがですか。面と向かってあいさつがしにくいということらしいんですが、メールでやるのはどうかという、御意見あったらおっしゃってください。

メールであいさつしてる人があったら、それも言ってください。もしあったら。

○D班（藤岡）　D班の藤岡です。メールであいさつをしたり、やっぱりあいさつが基本だとおっしゃったり、いろんな側面があると思うんですが、もっとちっちゃい子とか、本当に解決しなきゃいけないところの基本は、人に向かって話をするというとこじゃないですか。だとしたら、心がこもっていないとか以前に、人に対して何かを発言する。会ったら話すという習慣づけでもいいから、あいさつは基本として、子供たちに定着させるなり、そういう基本のことをどんどんもっと初めの段階からやっていった方がいいと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

それは要するに、面と向かってあいさつをするということですね。

○D班（藤岡）　そうです。

○深川純一　ですから、メールのあいさつはだめだというの。

○D班（藤岡）　だめだと思います。

○深川純一　だめですか。

実は、私たちロータリークラブでは、毎週1回必ず例会で、みんな顔を合わせるんです。そして一番大事に思ってることは、みんな顔を合わせて、面と面と向かい合って、そしていろんな話をするんです。奉仕の話を聞いたり、いろんな情報を……。顔と顔を合わせて、毎週1回会うことによって、みんなが仲よくなっていく

し、そして、そこから世のため、人のためのエネルギーも出てくるわけですね。ですから一番大事なのは、やはり顔と顔を合わせて、そして話し合うこと。ということは、あいさつといえば、やはり顔と顔と合わせてあいさつをしなければならない。

最近ちょっと世の中がおかしくなってまいりましてね。電話で今、地球の裏側の人とお話しすることができます。インターネットでも話はできる。だけど、隣の近所の人と意外に話ができないようなことになってきている。こういうのをどのようにしたら改められるかということですね。皆さん、御意見があったらおっしゃってください。

ブラジルの人とでも電話で話しできるんですよ。だけど隣の人と全然話をしない。

○D班（上村）　D班の上村です。どのように隣の人と話すかなんですけど、私はマンションに住んでいるんですが、なかなか隣の人と話す機会というのは本当にありません。すれ違った時にあいさつをするようには心がけてるんですけど、返してくれなかったり変な顔をされるんです。でもそれを積み重ねていくことによって、どんどん人間関係がつながっていくと思うんで、少々のことであきらめてはいけなくて、ずっと続けていくものだと思います。

○深川純一　根気よくあいさつを繰り返していくわけですね。いい意見だと思います。ありがとうございました。

ほかに何か意見ございますか。

今までの流れではどうもインターネットやメールでのあいさつはだめだということになっているけども。いや、それでもあった方がいいという意見があったら出してください。

○C班（吉村）　C班の吉村です。あいさつに気持ちがこもってるかどうかというのを言われていたんですけど、そのあいさつをすることによって、コミュニケーションのきっかけになることもあると思うんです。例えば、今日はお天気がいいですねとか、そういうことにもつながっていくので、マニュアル的であってもあいさつをすれば、その後のコミュニケーションにはつながっていきやすいかなとは思います。

○深川純一　私はメールはやりますけど、皆さん方、メールを打って、それで友達関係ができていって、親しくなったという経験のある人ありますか。

○B班（秋山）　あります。B班の秋山です。

私ちょっと海外へ行ってたことがありまして、帰ってきたときに、向こうでは余り深く仲よくなかった友人と、もう帰る寸前にメールを交換して、その後、帰国してからもう毎日メールするようになりました。文章で書くと、たくさん話すことができるし、時間に拘束されなくて、自分の好きなときに書きためたり、削除したりという形を続けて、自分の思いを交換することができたので、仲よくはなりました。

○深川純一　その仲よくというのは、現実にその人と顔と顔を合わせて、仲よくなった？

○B班（秋山）　顔と顔は合わせてません。

○深川純一　あくまでもメールの上でだけで、仲よくなっているということですね。

○B班（秋山）　はい。

○深川純一　それについて、自分はそれはちょっと問題だという人ありますか。何の意見でもいいですからおっしゃってください。

なさそうね。じゃメールでいいのかな。

○D班（旭）　また、D班の旭です。メールどうこうって話ですけども、今のお話はとてもすばらしいお話だと思います。メールから生まれたそういう関係というのも、もちろんあって当然だと思います。個人的にはメールのあいさつがだめだという話は少々賛同しかねます。

というのは、メールというのも一つのコミュニケーション手段だと思います。電話とかほかにもいろいろとありますけども。これらの特に機械を使ったコミュニケーションというのは、基本である面と向かってのコミュニケーションの、その代用品であると思うんです。

あくまで代用品である以上、本来、面と向かってするコミュニケーションを超えてはいけないと思うんですね。だから、例えば久しぶりに会った人とか、たまたま顔を合わせたときに、特に複数集まって、みんなで話してる時、何人かが携帯でメールしてたりすると、それでいいのかなと思ってしまうことがあります。

○深川純一　疑問には思う。だから建前として、あくまでも顔と顔を合わせてコミュニケーションを図るべきだけど、メールも必要悪みたいなんでいいだろうってことですか。

○D班（旭）　必要悪というほどではなくて、やはり遠く離れている以上は、面と向かって話すことができないわけじゃないですか。それは当然使うべきだと思います、むしろ。しないという選択肢よりは、使うべきだと思います。ただ、それが実際に面と面を向かってするコミュニケーションを超えてはいけないと思います。

○深川純一　わかりました。ありがとうございました。

ただ、今、よく事件なんか起こっておる、マンションなんかでも隣は何をする人ぞ、で全然知らない。コミュニケーションが全然ない。そういう社会で果たしていいのかなということを思うわけです。

昔、今から27年前に、今井先生がガバナーのときに、イギリスのマンチェスターに行かれたときがありましてね。そのときに、その地区の青少年奉仕委員長のロジャー・ウォーリーさんという人が一緒にマンチェスターの郊外の町へ入っていきますとね、全部2階建て以下の建物なんです。3階以上はないんです。

なぜ、ここには近代的な町なのに、高層建物がないのかといったら、結局、2階以上の建物を建てますと、住民の中でお互いにコミュニケーションがとれない。だから、町の条例で、この町は2階以上の建物は建てさせていないというようにしてコミュニケーションを図っておるんだということを、今井先生がガバナー月信に、月信というのはガバナーの各クラブに対する公的な書簡なんでありますが。そういうことを書いておられました。それをちょっと思い出したんで、御紹介いたしました。

だから、あくまでも、マンションでも何でもいい、その町ではそれほどまでにして住民のコミュニケーションを大事にする。コミュニケーションのある社会のことをコミュニティーという。だからコミュニケーションがなくなったら、コミュニティー、地域社会というものはなくなってしまう、原理的にはね。だからそういうようにして、コミュニケーションを図っておる人たちもいるということも心にとめておいてください。

さあ、それで問題は、じゃどのようにしたら、隣近所とのコミュニケーションが図り得るんだ。

どんな意見でもいいので出してください。

○D班（前田）　D班の前田です。地域社会でのコミュニティーをどうやってつくり出すかというとこなんですけども、僕のとこのマンションでは、年に2回ぐらい、何かイベントをやるんですね。こないだやったのは、災害のため

の防災訓練でした。みんなで一斉にマンションの1階に集まって、集合して、そのときに交流も兼ねて、一通り、名前とか顔を紹介したりして、そのマンションの防災訓練をやったんですけども、それまではそんなにお互いに知らなかったのが、割と顔と名前を覚えるようになって、あいさつぐらいはできるようになったので、そういったイベントというか、きっかけみたいなをどんどんつくり出すことが大事じゃないんかなというふうに思います。

○深川純一　一応、それで効果が出てるわけですね。イベントなんかやるということで。

○D班（前田）　あいさつはするようになったので。プライベートで交流があるかというところまでは、ちょっとわからないんですけども。

○深川純一　そのイベントなんかのとき、みんな、たくさん出てきますか。

○D班（前田）　そうですね、結構、思ったより来ましたね。

○深川純一　それは一つのいい方法だと思いますね。ありがとうございました。

ほかに何かありますか。

○D班（高橋）　うちのマンションでは、子供会と60歳以上の方が自主的にクラブをつくって、何かいろいろ活動されています。ボランティアで掃除したりとか、詩吟とか、ラジオ体操とか。それは60歳以上であればだれでも入れますし、その中でまたサークルがあって、結構、入れかわりが激しいんですけど、子供会とかその老人クラブで提携を組んで、顔見知りがすごく増えまして、おしょうゆの貸し借りとか、おみそがないんで貸してくださいとか、私のうちへもよく来られるんですけど。だからそういう交流を始めて、だんだんそれが積み重なって、お隣さん同士、そういうふうに貸し借りができるというのもすごくいいことだと思いますし、これからもうちのマンションに住む限りは続けていきたいなと思ってます。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかに何かありますか、御意見。いろんな方法もあると思いますが、できるだけたくさんの意見を出していただいた方が、ほかの人の勉強になります。あの意見、とれるな。あの意見はとれないと、御自分で全部、取捨選択したらいいわけですからね。

○C班（井上）　C班の井上と申します。今近所のコミュニケーションの話になっていましたが、私は学校の現場で働いてまして、インターネット上に掲示板という、だれでも入れるようなとこがあるんですけど、クラスの子がそこに悪口を書き込んだと。それを見たその子は、「こんなん書かれました。それで私もこういうこと書きました」と。そこで悪口を言って、いじめという状態をつくってるんですけども、実際その子らは教室では全然話してないんです。

掲示板では、会話はしてるんやけど、次の日、教室へ行って、同じクラスなんですけど、会話をするかというと全然会話がない状態で、それはすごい状態やなと。悪口を書かれて嫌やったら、もう入るなというんですけど、そういうとこやったら会話ができると。

「これどうしたらいいのかな」という話を子供にしていくんですけど、なかなか伝わらない状態です。そこやったら自分が出せるという状態が今、学校の方であります。

○深川純一　ありがとうございました。

今、ああいう意見が出てきたんですけど、皆さんどう考えますか。難しい問題だと思いますね。だけど一番大事な問題です、今。

今、学校の現場大変なんですよ。だからおっしゃってる意味はよくわかります。私も高等学校の理事長やってますから、学校の現場のことは全部、校長から報告を受けてますけどね、今大変なんです、本当に。

何か、何でもおっしゃってください。何かありませんか。

○D班（嵯峨山）　D班の嵯峨山と申します。これは私が一応ふだんから気をつけていることなんですけれども、まず、人とあいさつをするときは、絶対に相手の目を見てあいさつをしたり、にこっというふうに、表情も一緒に伝えていくように心がけているんです。

そうすることによって、自分自身も朝からすごく気持ちがよくなると思います。相手にとっても、おはよう、にこっとされたら、ちょっと何かいい気分になると思うんですね。だから、あいさつだけじゃなくて、あいさつプラス笑顔という、そういう取り組みというのも大事じゃないんかなというふうに思っています。

○深川純一　そうですね。ありがとうございました。

今、相手の目を見て話をするということをおっしゃいました。これ、一番大事なことでしてね、やはり人と話をするときに相手の目を見ないとだめです。私は弁護士で、暴力団なんかのやつと話をする。私は相手の目を見てしゃべるんですね。そうすると相手は、そんなにじろじろ見るなよと言うの。見られると怖いから、彼らは。だけどそれでやめたらだめ。相手と話をしたり、交渉したりするときは、必ず真っすぐに相手の目を見て話しないと、横見てやってたら、相手を無視してることになるんです。

それから、ついでに言っておきます。乾杯ってやるでしょう。あのときに、みんな乾杯言って、コップとコップがかちゃんということばかりやって、相手の目を見てない。外国の人とやってごらんなさい、必ず相手の目を見て乾杯とやります。

コップを見て、相手の目を見ないでやるということは、相手を無視してることになります。これはあいさつの基本なんです。それからマナーでもありますけどね。その辺のとこ覚えておいてください。余計なこと言いましたが、ほかに御意見ございますか。

○B班（篠原）　B班の篠原です。先ほど学校の先生の話について。掲示板だと自分らしくなれるというの、すごい納得で、子供ってそんなところまで行っとんやなと思って。皆さん言われているように、目と目を見てあいさつができるというのは基本やと思うし、本当に大切なことだとは思うんですけれども、もし掲示板だと自分らしくなれるという子は、例えば、普通の生活ではコミュニケーションが下手で、普通の生活では受け入れてもらえなくても、掲示板の世界では、自分を受け入れてくれる世界があるといいます。だから、一概に掲示板を反対することはできないんじゃないのかなと思いました。

○深川純一　ありがとうございました。

今、掲示板に反対することはできないという御意見が出ましたけど、ほかに、いや、やっぱりそれはおかしいよという意見があったら出してください。どんな意見でも結構ですから。

○D班（上村）　D班の上村です。掲示板で受けとめてくれる人がいるからいいとおっしゃったんですけど、現実に誰かに自分を受けとめてもらうことができたら、掲示板の世界にしか居場所が無いといことはなくなると思うんです。理想なんですけど。例えば、今は子供が言ったことに対して、親がしっかりは受けとめてない時代だし、先生も言われたことには、うん、うんというけど、それだけで終わってしまって、

流してしまうことが多かったりします。受けとめることを、親とか大人が忘れてしまってるから、掲示板に走っていってしまうんじゃないかなと思います。1対1で話を聞く場をつくったりすることも大切だと思うし、やっぱり思いがないから受けとめられないとか、親の愛情不足とか。受けとめる思いというのがもっとあればいいかなと思いました。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかに何かございますか。ありませんか、何か。

○A班（児玉）　A班の児玉ですけども、その学校は小学校ですか。僕、基本的に小さい子供にインターネットをさせるの反対なんですよ。ここから機械が入ってきて、コミュニケーションの取り方自体が人と人ではなく、機械を通してとなってしまうので、基本的にインターネットを始めるのは、大人だけにしてほしいんですよ。

○A班（日下部）　A班の日下部です。3年か4年前ぐらいなんですけど、女の子同士、小学校の女の子がインターネットにその子の悪口を書いて、学校で殺してしまったという事件がありましたよね。ちょうどそのとき私海外にいて、海外のテレビでもそのニュースが流れて、それを見てびっくりしたんですけど、そこまで大きな教育問題になってるなら、子供にインターネットで掲示板で書かせるというのも、ちょっとどうかなと思います。

また今、パソコンの授業は小学校から入ってきているので、気をつけてねとか、そういうことを言って、制限していくというのも大切だと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

結局、せんじ詰めると教育の問題ですね。そういうことをしないように、心を育てていくということでしょうね。ありがとうございました。

一度、話題を変えたいと思います。

先ほどまではコミュニケーションの図り方につきまして、いろんな意見を出していただきました。大事なことはメールでも、掲示板でも何でもいいんでありますが、それはすべて言葉で表現することであります。

要するに、メールにせよ、掲示板にせよ、コミュニケーションを図る一つの手段、一つの道具にすぎないわけであります。その道具を使うのがいいか悪いかの問題ではなくて、そういう道具を使っていかに心と心を通わせるかが問題だろうと思うんですね。

それから、顔を合わせなければ、言葉だけでは相手の本心を伝えられないという点でありますけども、結局、言葉自体も一つの心を通わせる手段にすぎないわけであります。掲示板とかメールに書かれた言葉だけで判断はできない。相手の本当の心を見るためには、その相手の言った言葉を発したその態度を見なけりゃだめだと思うんであります。例えば、心の中では相手が好きだと思っていても、「あなた嫌いよ」といってしまう。それを文字どおり受けとったらだめなんでありまして、それは態度で大体わかると思うんですね。そういうことが大事だろうと思います。

よく私たちは、ロータリーって一体何よと議論をします。そのときに私たちは、ロータリーというのは紙に書かれたものではないんだよ。一人一人のロータリアンの心の中にあるもの、それがロータリーなんですよと、こういう回答をするわけですね。心が大事ということ。コミュニケーションの手段はたくさんあります。それを使うときの態度、行動。相手にいかに心を伝えて、お互いに心を通わせるか。そうでなければコミュニティーというのはでき上がらないわけでありますから、その辺のところを気をつけていただければと思います。

そこで、次の問題に移ります。C班で、親のしつけが問題だというふうにおっしゃってました。これについて、実は今、親のしつけというんだけども、その親がしつけを受けていないから、子供をしつけることができない。ですから、子供をしつけるときにどういうことに気をつけなければならないかという問題を議論してみたいと思うんでありますが、どなたかいらっしゃいますか。意見出してください。

○C班（亀田）　C班の亀田と申します。私は2児の父なんですが、しかることと、怒ることは違うと思っています。怒るというのは感情的に任せてどなり散らすというようなことで、しかるというのは、教育的に冷静にしつけをするというようなことやと思うんです。

ただ、やっぱり子供と接してるときに、何かというと、しかるであるとか、怒るであるとか、こっちの方ばかり優先してしまいます。でもしかってばっかりではなく、褒めることも優先的にしなければならないということを嫁さんとよく話してるんです。嫁さんが言うには、二つしかって、三つ褒めて、五つ教えて育てる。それをモットーに日々悪戦苦闘しながらやっております。

○深川純一　ありがとうございました。

○A班（藤本）　A班の藤本といいます。僕は親からはしかられたこととか、怒られたことはあんまりないんです。今、僕ひとり暮らししてるんですけど、時々、親から電話がかかってきて、今何しとるんやとか言われたら、親に心配してもらってるすごい愛を感じます。「親のしつけ＝怒られる」というのも大切だと思います。でも僕自身はあまりそういうしつけは受けていないけど、親にはすごく感謝しています。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかに何かありますか。

○D班（増田）　D班の増田です。私も子供を褒めることが大切だと、すごく思います。

なぜかというと、私は学生時代に個人で家庭教師をしてまして、塾ではついていけない子とか、大型の家庭教師のところに頼むお金もない子供を教えていました。

中には親から点数という、結果しか見てもらってなくて「この子80点しかとれんのよ、あと20点どうにかしてよ」とかいう親もいました。そういうことを言われてる子供は、頑張らんといかん、自分はできない子なんだというふうに、劣等意識をすごい持ってたんですね。だから親は成績の結果だけでなく、子供の能力を見た上で、その子の頑張りを褒めてあげることがすごく大切なんだと思います。

以上です。

○深川純一　ありがとうございました。

今、褒めることが大変大事だという意見です。褒め殺しという言葉もありますからね。できるだけ褒めて、褒めて、人を使うことが大事かな。

ほかにありますか。

○A班（サビン）　A班のサビン・サキヤです。私の経験ですが子供は本当は何も書いてない白い紙みたいだと思います。例えば、ライターの火は、子供たちは初めて、さわったら熱いと知ります。でもそういうことがなかったら、全然わからないです。それから、真剣に勉強してなければ失敗します。いつも本当に心から頑張るじゃなくて、勉強しなかったら、お父さん、お母さんからしかられるから、そのために勉強します。それから試験が終わったら、勉強したことは本当に覚えてないです。私の経験でもそういうことだと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかにありますか。

○B班（荻野）　B班の荻野です。親自体にしつける能力がない、例えば、経済的な問題で共働きしている場合、0歳から3歳までの間に、しつけ自体をする時間がないとか、心の余裕がないとか。そもそも経済的な収入がなければ子供を育てていくこともできないわけで、しつけももちろん大切なんですけど、それ以前に親の側の事情もあるんだと思います。先ほどコミュニティーの話が出てたんですけど、結婚して子供ができて、外出するときや、仕事に行くときは自分の親に預けるとかいうふうなことができていた時代であれば、もちろん、じゃかわりにだれかがしつけるとかいうふうなことがあったと思う。保障されとったと思うんですけど、実際にはなかなかそれもできていないんだと思うんです。

そうなると第一義的には、やはり親がしつけをしていくというのは、当然社会的にだれもが認識しないといけないと思うんですけど、じゃそれが保障されなかったときに、その周りにいる人がどうするのか。親が共働きであれば、恐らく保育所に行かれると思うんですけど、保育所だけがそのしつけをかわりにやるのかとかいうふうな問題にも、目を向けていく必要があるんではないかというふうに思います。

○深川純一　ありがとうございました。

今の発言は社会保障制度にも関連すると思うんですね。今、核家族になってますから、おじいちゃん、おばあちゃんの面倒なんかみてる暇がない。共働きであったら結局保育所に預けなきゃしようがないと、そうなってくる。

昔は大家族制度がありましたでしょう。おじいちゃん、おばあちゃん何世帯にもわたって一つ屋根の下に住んでて、病人が出てきたら、その家族のうちのだれかが面倒をみる。赤ん坊が産まれる、お母さんは野良仕事で忙しい。そういうときには、その大家族の中のだれかが面倒を見ていく。

だから社会福祉の原点というのは実は、大家族主義の考え方の中にあるわけです。ところが今はそれが崩壊しちゃって、核家族になってくる。そうすると、結局、おじいちゃん、おばあちゃんの面倒までは見てられない。それで、おじいちゃんは養老院にいく。子供ができても、子供の面倒がみれないから保育所に預ける。それができなきゃどうするの、国家が保障してくれとかいろんな問題が出てくるわけですね。

それは社会制度にかかわっていく問題でありますから、私たちだけでは解決できない問題だと思います。国の力も借りなけきゃならないし。ただ、その福祉社会をつくっていくときに、これは国民ひとりひとりがその気持ちになって働きかけていかないと、実現できないと思います。

ほかに今の御意見に対して、私はこう思うという意見があったらおっしゃってください。

特にありませんか。

○飯ガバナー　褒めるという話が出ましたね。褒めなくてもいいから、ばかねとだけは言わないでね。

実は子供のコンプレックスのシャッターというのは、1秒で落ちます。覚えあるでしょう。あの先生嫌いだから、私、英語嫌いよ、とシャッターがちゃんと落ちるんです。私は落ちこぼれた子3、4人をボランティアで週に3日教えてたことがあります。その中で、「おい、ここ大事なところだからわかったか」と言ったら、みんな一様に「わかりました」と言うんです。でもわかるんですね、わかってへん子が。

わかってへんというのを、その前で指摘したらいかん。翌日その子の家まで行って教える。「あんた、おいで。あんたわかったと言うたけどね、日本語の意味の三単現という言葉がわからんかったんやろ。一人称ってわかるか。中学校1年生ですよ。わからん。そうやろ、一人称

というのは、あなたがね、私は、ほかの教科はいいんだけど、英語だけはだめというの、これ一人称。僕はいつもあなたのことを心配してるよというの、二人いないといけないだろう。あなたのというのが二人称。あなたのお母さんはとてもすてきな人だねというの、あなたでもない、僕でもない、３番目で、それが単数のときには、知覚動詞以外の現在動詞にはＳがつくのよ、わかった？」というやり方をしていかなきゃいけない。

コンプレックスのシャッターは愛情でしか、じわじわとしか上がりません。学校教育ではひとりひとりの面倒を見ていくことはできない。１クラスで50人、あるいは30人の子供を見てて、それを上げることはできない。せめて親だけが、ばかねと言うことだけは、やめておかないと。

だけど僕自身がなぜそんなことを言うか。僕は自分があほだと思った経験を持ってますから。小学校１年生のときにあほだと思ったんです。少し前に子供は白紙だという話がありましたが、僕の２番目の兄は僕の白紙のところにいっぱい絵をかいた。僕、幼稚園のときに多分漢字が1,500ぐらい書けて、4,000ぐらい読めて、４桁の掛け算と割り算ができた。小学校１年に入ったら、１足す１は２。咲いた、咲いた桜が咲いたと、片仮名で書いた。おもしろくなかった。試験のときに、足し算を掛け算にして、引き算を割り算にして、小数点以下４桁まで出して、四捨五入して、先生のところへ出した。当然、答えは０点ですよ。先生、赤い字で、試験で遊んではいけないと書いてあった。

でも僕は、このクラスの中で、こんな易しい問題で０点をとるのはおれ一人に違いない。おれはきっとばかに違いないと思いこんだ。ばかに違いないと思いこんだら、本当に頭動かなくなる。そういう経験をしてますから。まんざらばかでもないのかなと思ったのは、大学の２、３年になるまで本当に自分はばかだと、かたく信じ込んでいました。

そのときの助けは母親の、「あんたは本当は賢い子」と言ってくれた言葉です。子供さんが産まれたら、ばかねとだけは言わないでください。

以上です。お願いです。

○深川純一　ありがとうございました。

今、褒めるという話が出てきておりますが、こんなこともあるんです。褒めるのもいいんですが、あなた色が白くてきれいねと褒められる。そのために、夏に海水浴に行かなくなった子もいる。時と場合によって、褒め方を考えてやらないとだめだと思うんですね。

次に親にしつける能力がない話が出てました。しかし、親というのは、子供をしつけ、育てるために本当に心血を注いで育ててるものなんです。

昔、岩村昇先生って、神戸大学の、ロータリーの第１回の世界理解賞をとった方がこのＲＹＬＡに来てお話をされました。その先生は一人っ子で、好き嫌いが激しかったらしい。あるときお母さんが全然自分で御飯を食べようとしない。自分の好き嫌いを直すため、お母さんがずっと絶食していたことにある日気がついて、それから好き嫌いをなくした。母親とは命を削り、健康を害してまでも子を育てる。それが本当の親の愛情だと思うんですね　今、ここまでして育てる親御さんが一体おるかどうかということになると、大分考えなきゃならない。こういうことも一つ紹介をしておきたいと思います。

先ほど、Ｃ班から、子供が困難にぶつかったときにどうするかというので、それはみんな親が取り除いてやっておるじゃないかという話が出ました。親が困難を取り除き子供に苦労をさせない。それが本当の愛情かどうかという問題だろうと思うんですが、Ｃ班、詳しくそのことを説明してくれますか。

○C班（亀田）　教師の役割の話で釣りの話がありますよね。釣り方を教えてあげるのか、実際に釣ってあげるのか。実際に飢えて苦しそうな人がいると、実際に釣って渡すのは簡単なんですけども、教育する立場から見たら、釣り方を教えてあげないかんのではという話ですね。

困難があってそれを乗り越えられたときに、自信とかになると思うんですよ。苦労してやってなし遂げられたことがもし失敗したとしても、それまでやったことは決してむだじゃないと思います。

かわいい子には旅をさせろという言葉もあって、苦労させないとだめやと思うんですね。私もそうですけど親にしてみれば、子供はむちゃくちゃかわいいから、そんな苦労させてまで育ってほしくはないなという気持ちもあります。ただ理想的に思うのは、ほんまは心配なんやけども、この子のためやと思って、送り出すのが親としてのあり方じゃないかなというふうに思います。

○深川純一　ありがとうございました。

今の御意見に何か違った、自分はこうと、吉村さんでしたか。

○C班(吉村)　C班の吉村です。補足ですが、失敗を親が排除することによって挫折する年齢が上がることにより、自分は何でもできるという全能感が高い年齢まで続いてしまうというのが最近は見られるというのが出てました。そうやって失敗する経験というのがどんどんなくなっています。

○深川純一　ありがとうございました。

いい話ですね。子供も例えば、4歳、5歳ぐらいになってくると、どんどんいろんなことを自分でやり出します。そのときに、はさみを持って誤って自分の手を切ることもあれば、そして、近所の子供たちと遊びに行って、けんかして泣かされて帰ってくるときもあれば、うまく遊べるときもある。

今おっしゃった失敗の経験と成功の経験がフィフティー・フィフティー、五分五分になってるときに、その子供には、相手に対する思いやりの心というのが生まれていくわけです。

これが今出た全部成功経験ばっかりで、困難を全部取り除かれて、成功経験ばかりで育った子は、本当の人格がわからない。これは熊本での話ですが、小学校1年生の子に、おまえばかだなと言われた小学校6年生の子が、その子を墓場へ連れていって殺してしまったんですね。成功経験ばかりで育った子供というのは、ばかと言われたことが耐えられなくなって殺してしまう。

40歳くらいに突然学校に行かなくなった先生がおって、校長先生がいろいろ聞いたんだけどわからない。それで奥様が心配して病院へ連れていったら、奥さん、これはもう手おくれだから早く別れた方がいいですよ、と言われた。

なぜかというと、小さいときからの成功経験ばかりで育ってきた子供というのは、人格的に欠陥があると。精神科のお医者さんが言ってるんですよ。そういう例もありますから、子供というのは、ある程度失敗もさせなきゃいけない。つらい目にも遭わせなきゃいけない。そのことによって子供というのは育っていく。

アメリカの二人の博士が猫の目の研究で、ノーベル生理医学賞を取った。生まれたばかり猫の子の片一方の目に眼帯をかけます。その眼帯をかけてすぐ離す。1時間たって離す。2時間たって離す。1日たって離す。1週間たって離す。そういう実験をずっと繰り返しました。そして出た結論は、ずっと長い間隠しておった目は、物を見ることができなくなるというものでした。

目というのはちりが入ったり、強烈な光を当てられたり、そういう刺激を受けて痛めつけら

れて、物を見ることができるようになる。それを完全に眼帯をかけてふたをしてしまうと保護されてますから、自分で物を見る能力が消えてしまうという研究だったんです。

ノーベル化学賞をとった福井謙一先生は、これは人間の教育という面でも、大変すばらしい研究だとおっしゃってる。実はこれには実例がございまして、戦争中に空襲警報で灯火管制といって、家の中を暗くしておる。お母さんは、洋服だんすにいつも空襲警報が鳴ると生まれたばかりの赤ちゃんを隠し、ふだんも余り明るいところに出さなかった。そうするとその赤ちゃんは、視力が非常に衰えてしまったという報告があります。

人間というものは必ず、ある程度苦労をさせて、困難にぶつからせることによって、能力が開発されていく。そういう一つの例だと思います。いい意見を出していただきました。そういうことも心にとめておいていただきたいと思います。

ほかに何かありますか。

○D班（上村）　D班の上村です。先ほどの親のしつけとかのことなんですけども、苦労をさせた後のフォローが私はすごい大切だと思うんです。

例えば、親が受けとめてあげたり、一緒に困難を乗り越えていってあげる。乗り越えたら、次は一人でさせるというふうに、段階を踏んで、急に難しいことをばんとさせても、きっと子供は挫折感だけを味わうと思うので、一緒にステップアップしていけたらいいのではないかと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

そういう愛情が大切だということですね。

ほかに何かありますか、御意見。おっしゃってください。

○A班（サビン）　一つことわざを思い出しました。例えば、汚い水の上にはきれいな花、ハスが咲きます。自分で失敗すると心配するときは、何もできないし、自分をばかと思ったときは、こういうことを考えた方がコンフィデンスはできると思います。そして積極的に。自転車に乗る人は転ぶ。その後で本当にできます。そういうことわざをたくさん聞いたことがありますから、そういうことは本当にそうと思います。

みんな失敗するとき、だれもばかではありませんと思います。みんな頭があります。みんな一緒です。世界で一番ばかな人からもほんとにいいことを知ることがあると思います。私は。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかに何かございますか。

○A班（笹谷）　A班、笹谷奈々です。私は今保育園で働いていて、子供が困難や体験をして、たくさんのことを学ぶのだと毎日実感しています。けがをしたりすることで、頭を打つことを学んだりすると思います。

子供同士の思いやりをつくるためには、子供がこけてしまっても、それを見守って、自分で立とうとする気持ち、それと友達同士が大丈夫と言える気持ちを見守りながら、その後の保育士の優しかったねと言うフォローが大切になると思います。

○深川純一　ほかにありますか、何か。

なければ、話題を変えます。

先ほどの親のしつけのこと、ちょっと補足しておきます。子供が0歳から3歳児くらいまでは、母親というのは子供を抱きしめてなめるようにして育てなきゃならない。よく抱きぐせがつくとか言って抱かないお母さんがいるんだけども、それは大間違いでありまして、いつも抱きかかえるようにしてやっていく。そうすると

子供はその母親のぬくもりから信頼感を生み、人に対する思いやりというものを芽生えさせるわけです。

よく、子供は母親の心臓の鼓動を聞きながら育つんだという哲学的な表現をする先生方もおられるくらいであります。

これは人間だけじゃなくて、チンパンジーでもそうなんで、チンパンジーは子供が産まれると6カ月間はずっと抱き続けるんであります。

ところがあるところで、3カ月で子供を母親から離しちゃったんです。その離された子供がやがて大きくなって子供を産みました。そうすると、恐怖のあまり、びっくりして自分の産んだ子供を投げ殺してしまったんです。

ということは、6カ月間ずっと抱かれて育てていって初めて、そのチンパンジーの子供は母親の愛情を感じ、いろんな知恵を教わっていくんです。それを3カ月で離されたもんだから、母親になったときに、いかにして子供を育てるかとか、そういう知恵がなくなってしまった。そういう一つの例であります。これは人間でも同じであります。だから私は子供というのは、生まれたらとにかく3歳児ぐらいまでは、なめるようにしてかわいがるべきだと思います。

私は実は保育所も経営しております。このあいだお金が必要だからと言って、親御さんが保育所なんかへ子供を預けるのは大体間違いだというふうに言ったら、それからその保育所の所長は私に話をさせないようになったんです。

だけども保育所というのはまた別の意味で必要なんですね。世の中にはやはり共働きをしなければ食べていけない夫婦があり、そのためにそういう施設があるわけですから、福祉の施設に携わっておる人たちの心が大事。

それから地域社会の人たちにも福祉の心がなければ、本当の福祉社会というのは生まれないだろうと思うんですね。

さっき非人間化の問題で、人間らしくない人間というC班から出た問題につきまして、人間とは何かということについていろいろお話がありました。

これからは哲学的な非常に難しい話になりますけども、今、科学技術が発達したことによって人間の寿命が大変伸びました。人間にとっては大変幸せなことなんでありますが、その陰で、何億という実験動物の命が犠牲にされております。しかし、そのことに思いをはせる人は非常に少ないんであります。

彼らもやはり神様から与えられた命を一生懸命生きておる。それが人間の幸せという名目のもとに、これら実験動物の命を奪うことは罪ではないのか。もし罪であれば、その罪はだれが、いつ、どこで、どのようにして償うのかという、問題があります。

また、牛や豚や鶏でも、私たちは生きとし生けるものの命をいただいて生きておりますね。だから、「いただきます」というわけです。色々なものをおいしく食べている罪の意識は全くないと思うんですね。

このように、生きとし生けるものすべての命を奪って生きていく人間とは一体何か。こういう問題を本当は考えなきゃならない。人間とはもうちょっと謙虚にならないとと思います。

これどう考えますか。罪ですか。例えば、野良猫や野良犬だって、神様から与えられた命を一生懸命生きている。それを野犬狩りをして、命を奪ってしまう。それを当然のことと考えていいのかどうかという問題です。

実はそういう問題を若者たちに問いかける教育が、今の教育体系の中で欠落してるんです。どう考えますか。

○D班（前田）　人間を本当に生態系の一部として見るのであれば、弱肉強食というか、生きるために食べることであったり、実験動物を使用するということも、人間という種を生かすためには必要悪なのかも知れません。ただ、そこで割り切ってしまうのは、人間としてはいい

とは思ってないです。

なぜならその人間とは他者のことを考えられる動物でもあると思うんです。生きる上、生理学的に仕方がないんですけど、それについて頭の片隅で感謝の気持ちを持つことが大事なのかなと。

飽食をするとか、毛皮、トラとか、象とかを娯楽のために殺すとかというのはやめた方がいいと思ってるので、ケース・バイ・ケースで必要最低限のところで、生態系を守っていくように努力すべきなんじゃないかなと思ってます。

○深川純一　ありがとうございます。

難しい問題だということはわかってるんだけど、実に丁重に答えていただいてありがとうございました。

御意見あったら、どうぞ、どうぞ。

○C班（吉田）　C班の吉田です。人は魚にしたって、牛にしたって、殺すことは罪じゃないと思います。逆に、ライオンが人間を襲っても、それはライオンにとっての罪じゃないし、サメが人間を食べたところで罪じゃない。

だから人間が動物を殺したところで罪じゃないんだけども、哲学的に言えば、罪を意識したときにそれが初めて罪になると思うんですよ。だから、人が人を殺すこともありますよね。でもそれも罪を感じてない人間が人を殺すのは罪じゃないけど、その人がそれを罪だと思った時点で、それが罪になると思います。

以上です。

○深川純一　ありがとうございます。

主観説というべきもんですね。大変おもしろい考え方です。

ほかにありますか。

○D班（前田）　今の中で、罪を意識したときに罪になるというふうにおっしゃっていたんですけど。それについて気になった点として、罪であるのに、それが罪でないと思い込んでいるのは、もっと罪なのじゃないかなというふうに思いました。要は意識しなければ、罪ではないというのは、目を背けているだけで、そこにないものだと思い込んでいる。でも実際にはそこにあるということもあり得るんじゃないかな、とちょっと気になりました。

○深川純一　そうですか。ありがとうございました。

反論があったらやってください。

どうぞ、どうぞ。

○C班(吉田)　でも、それを言うんだったら、国によっても法律が違いますよね。その法律によって罪も違いますよね。罪を認めるのは自分自身だから、客観的にだれが見るかということは関係ないと思うんですけどね。

罪の定義というのは人によって違うんだから、本人にとってそれが罪だと思った時点で罪になると言うのが正しいと思うんですが。

○深川純一　それはその意見でいいですよ。ありがとうございました。

ほかに御意見ございますか。

○D班（藤岡）　D班、藤岡です。ちょっと多分この問題と離れてしまうんですけど、さっきの罪になるとか、罪にならないとかいう問題ですごく気になってることがありまして。殺人事件なんかで、そのときに、何だろう、自分が責任を負える状態かどうか。

○深川純一　責任能力ね。

○D班（藤岡）　責任能力の問題です。例えば、わけがわかんなくなってた人が無罪になってしまう。殺しても無罪になってしまうという

のにも、法律であったり、自分の意識であったり、そういうものがすごく関係してくると思うので、これはすごく難しい問題だと思います。

○深川純一　ありがとうございました。

ほかにありますか。どんどんおっしゃってください。そして、どの意見をとるかは皆さん方の自由です。

それから、今までは全然感情的にはなってないけど、日本人というのは議論すると感情的になるんですね。議論というのは冷静にやらなきゃならない。昔、吉田首相と徳川夢声が対談したとき、徳川夢声が話のきっかけをつくるために、ロンドンの動物園にはいろんな種類の猿がおるそうですねと言った。そしたら、吉田首相が猿なら何もロンドンに行かなくったって、永田町に幾らでもおるわって。それがＮＨＫの公共放送に流れちゃった。それで国会議員がかんかんになって怒って、吉田首相がつるし上げにあったことがあります。

私はこれちょっと問題だと思うんですよ。吉田首相に猿だったら永田町に幾らでもおると言われたら、そしたら吉田首相に向かって、おまえだって猿の仲間じゃないかと言って笑い飛ばしたら済むことでしょう。それがユーモアなんです。それを笑い飛ばさずに、吉田首相に対して議論の場でつるし上げるというのは、議論に感情や私情が入っている。国会の場でそういうことがあってはならないと思います。ロータリーでは、議論は全部冷静にやって私情は出しません。それは心得てくださいね。

ほかにありますか。これは難しい問題で、実は第１回のＲＹＬＡで今井先生が、地域社会と青少年の役割という題で講演をなさいました。そのときの講話の中に出てきた問題なんです。

ポール・ティリッヒという神学者がいます。この学者が言うには、教育には三つの分野がある。第１はテクニカル・エデュケーション、第２がヒューマニスティック・エデュケーション、第３がインダクティブ・エデュケーション。

テクニカル・エデュケーション、これは技術教育であります。今、科学技術が進歩しております。これ全部テクニカル・エデュケーションのおかげなんであります。そして２番目のヒューマニスティック・エデュケーション、人間らしくなる教育であります。それから最後のインダクティブ・エデュケーション、これは今井先生は、人間とは何かという真実に招き入れる教育だと、こういうふうにそのとき解説をなさいました。

日本は技術教育一辺倒で戦後わずか30年にして、世界第２の経済大国を築き上げてきたんであります。しかしその反面において、ヒューマニスティックな教育、インダクティブな教育の分野を忘れてしまった。そのことが問題だということを、今井先生は御指摘なさいました。

インダクティブ・エデュケーションというのは、特に私はこの言葉に心を引かれましたので、その後いろいろな先生に質問もして教えていただきました。その教えていただいた先生が小学生のころに理科の実験でカエルの解剖をしたとき、それを指導しておった恩師の先生が、人間はどうしてこうして動物の命を奪うんだろうかと、ぽろぽろ涙を流しながら、子供たちに訴えられたそうです。先生はそれに非常に感動したんだけども、まだ子供ですから何と答えていいかわからない。しかし、そのことがずっと先生の一生の課題として心にこびりついておって、やがて宗教の世界、禅の世界に入って、みずからその問題を解決したということをおっしゃってました。

若者たちにこういう課題を与えて、一生の課題として、自身に考えさせて、解決させていく。そういう教育、人間とは何かという真実に招き入れる教育がインダクティブ・エデュケーション。そういうふうに教わったんであります。

今、本当にこのヒューマニスティック・エデュケーションとインダクティブ・エデュケーシ

ョンの分野が欠落しておるんであります。だから今残虐な事件とか、子供が親を殺したり、親が子供を殺したり、命が非常に軽んじられてる、こういう社会になっちゃったんですね。

本当は日本が高度経済成長の過程でこの二つの分野の教育をやらなきゃならなかった。それが欠落してしまったために、非常に難しい世の中になっちゃったということだけを申し上げておきたいと思います。

他にもたくさん問題提起をいただきましたが、後日報告書を送ります。そのときおれはこの問題についてはこう考えるんだと、おれはまたこれを考えるんだともう一度問題を整理していただきたい。そして、インダクティブ・エデュケーション、皆さん方が育っていく過程を通じて、このＲＹＬＡで議論したことをいつも温めながら、心に問いかけていただきたいと思うんであります。

これから皆さんはＲＹＬＡの同期生ですね。ＲＹＬＡの学友会というのをこれから組織しようと考えています。そして年に何回かみんなで集まって、情報交換をしたり、それから機関誌を発行しますから、そこでみんなの意見を出していただく。全部でここを卒業した人が1,800人くらいになってるんですが、そういう人たちの意見の交流の場もつくりたいと思っています。御自分の意見があれば、機関誌で発表していただいても結構だろうと思います。

今井先生、何か一言。

○今井鎮雄　たくさんいろんなことがありました。皆さんが考えられてることもよくわかりました。大変、みんな、お利口なんだなと。今の時代に、本当にまじめにいろんなことを考えてるということを、後ろで感心しながら聞いてました。意見はそれぞれあると思います。

最後の問題、何が罪になるかというやつ。そのことについて、意識するまでは罪にならないんじゃないか、あるいはやっぱり罪だと思うというような話がありました。

これはあんまり詳しく私が申し上げることはできませんけど、一つは、むしろこれは哲学の問題よりも、それを超えて宗教の問題になるかもしれません。キリスト教では原罪という言葉を使います。私たちは生まれてから一度も罪を犯してないと思ってるけども、強いものが持っている特権で、他のものをひどい目に遭わせていくことがあり、人間は生まれながらに、そういう罪を持っているということなんです。それを意識しながら謙虚に生きていくということが大事だという教えが、キリスト教の原罪という言葉なんですね。大事な言葉であります。

もう一つ、ドストエフスキーというロシアの作家が「罪と罰」という小説を書きました。読んだことある人いますか。読んだことがある人も、また何かのときにまた機会に読んでいただきたい。ラスコーリニコフという青年が下宿をしてるんですけども、その下宿をしてるところのおばあさんが小金を持ってる。「このおばあさんはこのまま年寄りで、これを持ってたってどうっていうことはないだろう。しかし、私はこれから出世していかなけきゃならないんだ。だから、このお金は私が使った方が社会のためには役に立つんだ。」

それでこのラスコーリニコフはそのおばあさんを殺すんですね。そしてそれは罪ではないと、よりよく使うことのためにということであります。しかし、裁判になったときに罪になるんです。

この小説は世界のベストセラーになった。罪と罰について人間の深く大きな問題として取り上げて提供したことにおいて、だれもが読まなきゃならない本だというふうにいわれるようになりました。今でもその本は大事に扱われています。興味がある人はこのドストエフスキーの「罪と罰」という小説、それに携わる判事さんや、検事さんや、弁護士さんのいろんな意見もいろいろ入っていながら、このことを説いてますか

ら、読んでみてください。

ありがとうございました。

○司会　どうも、今井先生、深川先生、ありがとうございました。

深川先生に感謝の拍手をお送りください。

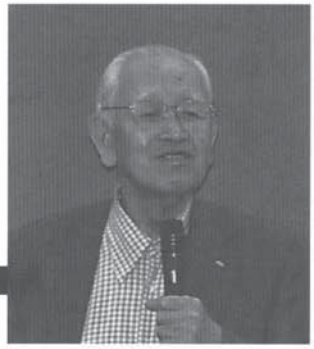
それではフォーラムをこれで終わりまして、山口さんの方から、明日の予定について説明をいただきます。お願いします。

○山口　徹　お疲れさまでした。心地よい疲れやね。明日の予定を申し上げます。７時半から朝食はいつもと変わりません。８時40分カウンセラーミーティングもやります。９時から２時間、今井先生の講義に入ります。

その後、閉講式をとり行います。そしてその後、記念植樹をいたします。各班で用意しておりますので、ウバメガシという木です。

記念植樹が終わったら、感想文を皆さんに書いていただきます。ただのＡ４の紙をお渡ししますから、何字でも結構なんですが、報告書の後ろにつけたいと思っています。そして昼食をとっていただいて解散となります。

21世紀の課題



今井 鎮雄 先生

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー
（神戸西RC）

プロフィール

1920生　同志社大学経済学部卒業

■ ロータリー略歴

1980−81	RI第2680地区 ガバナー
1982年5月	国際協議会グループ リーダー
1983年5月	〃
1984−89	RI青少年活動委員
1993−94	アジア地域ローターアクト 実行グループ メンバー
1995−97	国際ロータリー 理事
1999−2000	RI RYLA委員
2003	RI ブリスベン国際大会委員会 副委員長
2004	RI 大阪大会委員会 副委員長
2003−06	ポリオプラスパートナーグループ 委員長補佐（ゾーン1，2，3，4および9）

ロータリー財団 メジャードナー、米山功労者

■ 主な役職（現職のみ）

兵庫県青少年愛護審議会 会長
神戸市青少年育成協議会 会長
神戸市市民福祉調査委員会 副委員長
神戸市シルバーカレッジ 学長
（財）兵庫県青少年本部 理事長
（社福）神戸市社会福祉協議会 理事長
（学）啓明学院 理事長
（財）ＰＨＤ協会 理事長
（財）ひょうご子どもと家庭福祉財団 理事長
（社福）ひょうご障害福祉事業協会 理事長
（社）家庭養護促進協会 理事長
スペシャルオリンピックス日本・兵庫会長

○今井鎮雄　おはようございます。

「21世紀の課題」とタイトルがついていますが、最後に総括をするようにということでした。皆さんが担う新しい時代は、皆さんがどのような方向を選ぶかによって、国も、世界も違った方向に進みます。皆さんは、それほど大きな責任を持った世代です。私には関係ない、今の自分のことだけ考えていたらいいんだ、というのでは済まない状況が迫っています。そこで、皆さんにぜひ考えていただきたいという願いを込めて、幾つかの課題をお話します。

昨日の野々山さんのお話は、私たちが当たり前と思っている家族の形態が、異なる形になりますよということでした。結婚観や家庭観も、僕と家内が結婚した頃と現代のそれとは大きく変わりました。

学生時代に余島でキャンプリーダーをしてくれた知人は、若い頃フランスへワークキャンプに行って、そこでフランスの高校の先生と仲よくなって結婚し、今フランスに住んでいます。フランス語できるのと聞くと、できませんが、飯、風呂、寝る、だけ言えたら大丈夫と、日本の中年夫婦みたいなことを言ってます。日本に里帰りするときは、フランス人の奥さんも一緒です。彼女は、日本語はあまりできない。でも、ご主人の様子を見て、お腹がすいているとか、風呂に入りたい、眠いということがわかる。退職したら日本に帰ってくるのと尋ねると、奥さんの故郷がボルドーというフランスワインの産地で、そこへ行って葡萄酒でもつくります、ということでした。結婚とは、人と人とが顔を見合わせてコミュニケートができ、命と命がつな

がるということ。互いのことを考えながら生きていくということですね。

今は非人間化の時代と言われます。直接的なコミュニケーションなしに成立する、機械を通してのみ成立する時代には、人と人が顔を合わせる関係とか間柄がだんだん希薄になり、人間の問題が浮かび上がってきます。非人間化への傾向のある社会、ロボット化し機械化する社会では、人間と人間とがつき合うことが、人間の心を取り戻すことにつながります。人間とはどう生きるものかと考えることは、大事なことです。

ロータリーの歩みと背景

ロータリーが生まれたのは、20世紀の初頭、日露戦争が終わった年です。1905年2月23日、シカゴで、弁護士のポール・ハリスを中心に4人の青年が集まりました。当時、シカゴにはイギリス、イタリー、ノルウェー、スウェーデンなど様々な国から来た、言葉も文化も異なる人々が住んでいました。言葉の通じる者同士がグループをつくって住むモザイク都市だったんです。人々は他人を出し抜いてでも儲けよう、何としても生きていこうと必死でした。他人を信じられない孤独な生活の中で、互いに心の通じ合う青年たちが、友情と信頼をかわそう、まじめに仕事をし、社会正義のもとに生きていこうと、ロータリークラブをつくりました。これがロータリーの始まりです。

ちょうど同じころ、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本を出しました。いまも社会の大きな柱となっている本です。そこに書かれているのは、職業は天から与えられた役割である。その役割を通して、各人が社会に役立つ仕事をすることが神様の心にかなう。たとえば、人は靴がないと困る。だから靴を売って儲けようと商売をするのと、いい靴をみんなに履いてもらおうと思って商売をするのとでは、ずいぶん違います。人のために靴をつくることは天職だ。ロータリーのメンバーは、そんな気持ちで仕事をしました。あの店に行けば、間違いのない品物が手に入る。あの人のところで洋服をつくろう、石炭を買おう。そういうふうに、街の人々に信頼される実業家になっていった。これがロータリーの初期のメンバーの心意気でした。

最初は友を求めて集まったロータリーですが、やがて単なる社交クラブではなく、職業を通して他の人へ奉仕するという気持ちを持つ人々の集まりになります。メンバーのために、服屋さんは安価でよい服をつくり、石炭屋さんも仲間には安くで石炭を分ける。ロータリーに入れば互いに経済的にも得だし、仲間もできる。会員同士の互恵のクラブができた、もう少し仲間を集めようと、勧誘を始めました。そして、ドナルド・カーターという人に声をかけると、彼は、仲間うちの相互扶助と親睦だけのグループなら私は入らない、と言ったそうです。

ポール・ハリスはカーターの話を聞き、互いによかれと思ってやっていたことは、他の人から見ればメンバーだけが得をしたり楽しんでいると見られているようだ、これではいけない、社会に役立つことをしようと考えました。この考え方は、徐々に拡がりを持っていきます。

コミュニティーの中で自らの職業を通してどんな奉仕ができるかを考え、やがて世界のすべての人々が私たちと同じコミュニティーの仲間だと考えるようになります。地域は、エリアです。そこに人が暮らすために必要なシステム、たとえば病院、学校、消防署をつくってコミュニティーができる。互いに顔と顔を見合わせて生きていく社会がコミュニティーで、ロータリーはそのコミュニティーのためにどんな奉仕ができるかと考えました。皆さんは職業について考えるとき、将来出世できるかな、儲かるかなとか、いろいろ考えることがあると思います。ロータリアンは、まず、職業を通して社会にど

んなサービスが提供できるかと考えます。そういう思いを持つ人の集まりがロータリーであり、ロータリーが職業奉仕を大事にするグループといわれる所以です。

国際はInternational、国際協力とは国と国が協力をすることですね。ロータリーは国際奉仕に取り組んでいますが、その中に世界社会奉仕（World Community Service）という活動があります。私たちのコミュニティーを世界に拡げて考えれば、地球のどこにいる人も同じコミュニティーの仲間だ。世界のどこかに飢えている人がいるなら、私たちはその人の隣人として、見過ごすことはできない。会うことはないアフリカの子どもたちを私たちの隣人と考えるなら、その子たちにパンを届けたいという気持ちは自然に生まれるじゃないか。ロータリーはそれぞれの時代の中で、その時々のコミュニティーの人々のために奉仕を続けてきました。

文明の流れの中で

1980年にアルビン・トフラーが「第三の波」を著し、世界に大きな衝撃を与えました。人類という動物は600万年ぐらい前からいたそうですが、木の実を取り狩りをして生きてきた。立って歩くようになって脳が発達し、知恵を使って土地に種を蒔き、農作物を育てるようになった。これが農業革命といわれる「第一の波」です。今から大体１万年前ぐらいで、狩猟採集のために食物を求めて移動していた人類が土地に定着し、そこに人間の社会が生まれます。これが農耕文明社会です。チグリス・ユーフラテス川流域のメソポタミア文明、ナイル川流域のエジプト文明、インダス文明、黄河文明など、大きな川の近くに大文明が生まれたのが、大体6,500年位前です。農耕文明社会はその頃から現在まで続いています。

人間が定住するようになると共同体が生まれます。作業を効率的にやるにはどうしたらいいかと考え、手で作るよりは機械で作る方が便利で効率がいい。西欧では18世紀に産業革命「第二の波」が起こり、石炭や蒸気、石油、電気を利用する産業社会が生まれてきます。ライト兄弟の飛行機が飛んだのは1903年、つい100年前のことです。人間は新しい時代に入り、それが産業社会とか、工業化社会といわれて、今まで続いてきました。

それから情報革命という「第三の波」によって引き起こされた脱産業社会。1980年にトフラーが本の中で、今や脱産業社会だと書きましたが、やがて「脱工業化社会」から、ITの時代になり、「情報化社会」と呼ばれるようになりました。皆さんが生きているこの情報化社会は、生まれてまだ30年くらいしか経っていません。

新しい時代、新しい社会には新しい秩序が生まれ、文化や価値の体系が変わります。社会構造が変われば、その中で共通に認識される常識とか価値観と言われるものが変わってきます。

農耕文明の起こる前、人類は生きることがすなわち目的でした。寒さに耐え、飢えに耐えて生きることが願いでした。人間の満足とか欲求は、どんどん変わるものです。農耕社会になると作物を植えることができるようになり、満足の度合いが変わってきます。工業化社会では、欲望を満足させることが幸福に至る道と考えられました。「効率」が優先し、欲望をバネに社会が成長しました。生産のための機械化ができる国とできない国の格差が生まれ、豊かな国と貧しい国ができました。私たちは「満足」を追い求め、もっと豊かに生きようと努力しました。その結果、20世紀が終わる頃、モノは豊富になったが、はたして人間は幸せになったのだろうかという反省が生まれました。

工業化社会の時代を振り返ってみて、いったい何が欠けていたんでしょう。私たちは、前の社会の何を反省し、何を受け継いでいくかを考える必要があります。人類には、過去から引き

継いで次代へつないでいくという、ある目標がある。歴史とはそういうものです。

時代は地球規模でものごとを考えることを要求しています。これが基本的な変化のひとつです。工業化社会と情報化社会では、生活様式も価値観も変化し、文化の段差ができています。今はいろいろな作業が機械化され、便利になりました。私の親の世代の人は、寒くなれば服を一枚着込むとか火鉢に火をおこして暖を取った。今は、寒いといってはエアコン、暑いといってもエアコン。温度はボタンひとつでコントロールできる。一昔前には考えられなかった。同様に、今の人には一世代前のことはなかなか理解できない。それぞれの時代の価値観、文化は大きく変わってきています。ただ、時代は変わっても、前から続いている生活様式や価値観はあり、新しく見える生活様式や価値観も過去から続くものであると認識することが大切です。情報化社会の中で、新しい社会をどうつくればいいかを考えるのは、今を生きる人の課題です。

変化する世界

さて、私たちの周りには価値観とか意識の問題以外にも、変わったものがありますね。ペットボトルの水が120円するといったら、明治の人ならびっくりしますよ。私の子どもの頃は、キャンプに行けば、そのあたりの流れの水が飲めた。ところが、大人になってキャンプをするときは、もう飲めなくなった。どこの田畑も農薬を使うようになり、流れの水は汚染されている。昔は健康のために、よく日光浴をしました。ところが、オーストラリアのシドニーの海岸に行くと、立て札に「紫外線にあたると皮膚がんになるから肌を晒さないでください」と書かれていました。外を歩くときはサングラスをかけ、日傘を差す。日本でも、昔の子どもは真っ黒に日焼けすると健康そうだといわれ、今は太陽に肌を晒さらさないようにと注意される。180度考え方が変わったでしょう。環境ホルモンの話が出ましたが、20年ほど前、ロータリーの会議のためアメリカのフロリダへ出かけました。あちこちに大きな沼があって、当時はワニがところどころで顔を出していた。そのワニが、だんだん減ってきたそうです。調べると、環境ホルモンの影響で雌化して卵がかえらず、どんどん数が減っていると、話題になりました。

自然環境の変化の中で、人間への影響が大きいのは地球温暖化現象です。昨日の話でも、水がなくなり砂漠化が進む、といわれていましたね。私は毎年9月、学生を伴って中国へ行きます。中国の黄河に水が流れていないんです。黄河文明を生んだほどの大河ですよ。川の近くには村ができ、やがて町になって周りに工場がたくさんできる。工場は工場用水として、黄河の水を地下からどんどん汲み上げる。工業化社会は大量に地下水を利用しますから黄河には水がなくなり、渇水期には干上がって黄河の流域は砂漠化が進んでいます。長江（揚子江）はチベット高原から水がきますから、水が豊富です。その水を黄河に引いてきて、ダムをつくって水力発電し、北京までその電気を送るということです。中国は毎年訪問するたびに様子が変わっています。それぐらい中国の変化は早いということを認識しておくことも大切です。

様々な変化の中でも、皆さんに考えていただきたいのは経済システムの変化です。資本と労働力と資源があって会社ができて、産業社会を形作ってきました。それが今、変わりつつあります。小泉首相の時代に構造改革が叫ばれ、法律も変わり、金融資本主義と言われる時代に入りました。金融資本主義とはなるべく多くの資本を集め、なるべく安い労働力でモノを生産するシステムで、それがこれまでの経済構造より効率的だと言うのは、ノーベル経済学賞を受賞したフリードマンのような人々です。金融資本主義に移行したとはっきりはいえませんが、日

の前に事実として現れています。

デイ・トレーダーと呼ばれる人々が、この会社の株が安いからと買い、数時間後に株価が上がればそれを売って儲けを得る。コンピューターで何億という金を瞬時に動かす。堀江貴文さんが日本放送の株を買おうとして、日本放送側は私たちには長い放送文化があるから売りませんと言ったり、村上ファンドが阪神電鉄を買うと言うと、阪神タイガースはどうなるとファンが大騒ぎしたのは、ついこのあいだのことです。アメリカではジョージ・ソロス氏など、国を買えるぐらいの資本家がでてきて、経済構造は金融資本主義に変わりつつあります。

フリードマンは「効率を上げ、金を儲けて経済が活性化すれば、ひいてはみんなが豊かになって満足するだろう」と考えました。金融資本主義のシステムでは、労働力を安く抑えるため、人間がやっていた作業は機械化され、仕事をするのは非正社員、派遣社員の人たちで、正社員の半分ぐらいの給与で働く。結果として、格差社会ができます。これは、死活問題ですね。若い人たちは苦境に追い込まれています。何のために生きて、何のために働くかということと深くかかわる問題です。それが今という時代なんだから仕方がないと考えるのか、こういう流れだから、その中で何を大事にすべきかを考えるのか。

ロータリーも同じ苦境に立たされています。会社の社長は、自分の仕事は天職で神から与えられたものだから、よい品物を作ろうと努力してきました。しかし金融資本主義になると、製品を作って売るより株を売買するほうが儲かると大株主の資本家が言えば、会社はデイ・トレーダーになる。では、社長の役割とは何か。今では、できるだけ利益を上げてその利益を株主に返すことが大事な役割になっています。この考え方では、会社が社会的にどのような役割をとるかではなく、この会社は幾ら儲けてどれだけ株主に還元するかが会社の目的になります。今までの会社の目的とは全く異なります。資本をより多く集める方が効率はいいだろうけれど、それがはたして社会のためになるだろうかということが考え始められました。大企業が進出して、地域に根ざした中小企業が壊れつつあると感じている方も多いと思います。大きく影響を受けるのは、ロータリーも同じです。

ロータリークラブは職業を通して社会に奉仕する、よいものを人々へ提供する、それが職業人としての社会的な役割であり、職業奉仕こそロータリーの大事な責任だ。それによって社会が豊かになることを望んで、1905年から今まで続いてきて、多くの人の信用を得てきました。金融資本主義になって儲かりさえすればいいのであれば、本来の仕事をやめて、よその会社の株を売買して儲けようと考える人も出てくるでしょう。もしそうなら、職業奉仕を謳っているロータリアンは、いったい何をしているのかという疑問が起きてきます。

この問題に取り組んでいるお一人が、東京の佐藤千壽パストガバナーです。佐藤さんは、職業奉仕とは何か、みんなのためになるかどうかを考えることは、どんな社会にあっても大事じゃないかと、言い続けてこられました。同じことをおっしゃっているのが、深川パストガバナーです。ロータリーの本質は職業を通してみんなのために奉仕をすることだとおっしゃいます。佐藤さんと深川さんが、人間と経済の問題、新しい時代の中で何が問われているか、ロータリーは人間の幸福を願うことが大事だということについてやりとりされた手紙が、最近、本になりました。こういう問題を解決しなければ、ロータリーもだめになりますよ、一人ひとりのロータリアンが真剣に考えよう、ということが書かれています。

1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・セン教授は人間を幸福にするための経済を考えねばならないとし、新古典派の経済学は経済という現象の中でどう効率を上げるかを

追求し、その意味においては賢いけれども、「人間」という視点が抜け落ちているという点では愚か者だと言いました。

価値観の共存

日本は、長い間、孤立した島国の中で日本民族としての価値体系、考え方や価値観、文化や伝統を育て、それを洗練させてきました。江戸時代、日本は鎖国政策をとり、明治に入るとアメリカからキリスト教の宣教師がたくさん来日しました。日本にくる前は中国やアフリカなど世界の様々な地域に派遣されていた彼らは、日本に来て日本人の知的レベルの高さに驚いています。日本人はもっと高いレベルの教育を望んでいると考え、ほかの国とは状況が違うと、宣教師たちは感心しました。当時はまだキリシタン禁制でしたから、布教をすることはできない。それなら英語を教えようということで、宣教師たちは英語の聖書を材料に英語を教え、日本人は英語を学びながら、欧米の精神文化に触れることになりました。

1871年、日本という国をつくるために海外事情を視察しようと、岩倉具視をはじめとする使節団が船で欧米を訪れます。行く先々で驚いたことがたくさんありました。アメリカではどこへ行っても死体がぶら下がっている。キリスト教のシンボルである、十字架上のイエス。アメリカというところは大きな建物の中に死体をぶら下げている、醜悪なり、と報告に書かれています。異なる価値観のものを見て「醜悪」なりと。また、ご主人と奥さんが二人で出てきて、奥さんが座っていて、ご主人がお茶を配ってくれる。それを見て、アメリカはかかあ天下の国なり、とある。

皆さん、笑うけれど、伝統、文化、価値体系が全く異なる世界があるということを、この日本人たちはそのときはじめて知ったわけです。その後、一行はフランス、ドイツと回って、ビスマルクに感激し、ドイツ文化を日本に導入しようと決めます。明治期にはドイツから多くの学者が招かれ、哲学や建築学などドイツ文化が随分日本に入ってきました。

岩倉使節団は欧米を回って大きな衝撃を受け、新しく文化を考え直そうとしました。最初に見たときに「醜悪なり」と考えたものは、われわれとは違う価値体系があるということには気がついたが、実はそれがヨーロッパ社会の精神文化の中心であることまでは気がつかなかった。

それに匹敵するほどの大きな文化の違いを今、多くの高齢者が味わっています。情報化社会は醜悪なり。何がぶら下がっているかといえば、携帯がぶら下がっている。多くの高齢者は「情報化に遅れている」わけではありません。これまでの文化と新しい文化をどう重ね合わせるかが、課題です。

長い間培ってきた伝統的な文化のよさというものを認識しつつ、同時にそれを乗り越えた新しい文化をどうつくるかというのが、いまの日本の課題です。

戦後日本の転換点

近代に入り、大日本帝国は戦争に絶対に負けないと言われていました。しかし、第二次世界大戦は量的にも質的にも大きな差があり、完敗しました。そして戦後、紀元2600年と言われた大日本帝国がその歴史の中で築いてきた一つの価値体系が、異なった価値体系とぶつかり合いました。そのとき、日本人は船を乗り換えるように、こっちの体系からあっちの体系に乗り移ったのか。そうではなく、それまで日本の国が持っていた価値体系の中で、新しい世界では何が通用し何が通用しないか、新しい世界で日本の文化はどのような貢献ができるか、世界の一員として、伝統の中の何を日本から発信できるのかということについて、何人かの心ある人

たちが深く考えました。

第二次世界大戦は、帝国主義と民主主義の戦いといわれます。それまでの帝国主義の戦争は近代化に必要な資源を得るための戦いで、勝った方は相手の領地や資源を略奪し、人間を捕虜とし、労働力として扱うというものでした。戦争に負けるということは、国がなくなることでした。学徒出陣で戦争に学生を送り出す頃には、日本が戦争に負けることは皆わかっていました。当時のほとんどの若者、皆さんぐらいの年齢の若者は、あとどのくらい生きられるだろう、明日死ぬのか、３カ月後かと考えていました。戦地に行くと、今日生き延びれば、明日はどうなるだろうと考えるわけです。だから、どうしても死ななければならないのなら、国を失わないためにどのように死んだらいいのかと考えた。よもや日本が降伏するとは、思ってもみませんでした。日本は負けても降伏はしないだろう。玉砕、みんな殺されるだろうと思っていました。

立花隆さんというジャーナリストで評論家が、去年、「８月15日と南原繁を語る会」を東大で８月15日に開きますと呼びかけました。日本が置かれている状況とこれからについて考えるため、戦後の原点としての「８月15日と南原繁を語る会」を企画し、2,000人近い申し込みがあったそうです。当時学生だった人たちが思い出を語り、それをもとに、この２月に「８月15日と南原繁を語る会」という本が出ました。南原繁は、東京帝国大学の最後の総長、新制東京大学の最初の総長で、香川県大川郡、今の東かがわ市の生まれです。

昭和20年（1945）の７月10日と日付にありましたが、東京の東部管区防衛指令部から責任者が東大に来て、帝都防衛の司令部にするため東大を接収したいと伝えた。もちろん機密事項です。敵は既に沖縄を占領し、8月には東京に進撃してくるだろう、そしたら私たちは隅田川などを堰き止める。敵の戦車がくれば、堰を切って川の水を一気に流しこむと東京の下町は水浸しになり、戦車が使えなくなる。上野と東大の本郷は高台なので、水位はそこまで来ない。だからここに司令部を置くという計画まで打ち明けた。そのとき東大側は何と答えたか。私たちの国がどんな形であれ、生き残るならば、日本の文化、伝統、日本の大事なものを、日本のためだけでなく世界のためにも、次の時代を継ぐ人々へ伝えなければならない。学生は今、必死に勉強している。私たちはそういう人を育てることに命をかけて、ここを墓場にしようと思っています。だからお貸しすることはできませんと言って、軍隊の要求を断ったというエピソードが出てきます。

当時、文系の学生は学徒出陣に出て、大学に残って勉強していたのは医学部の学生です。戦場では医療班が必要です。今、大学の医学は何年勉強するんですか。５年ですね。それを早く戦場へ送り出そうと、６カ月で一通りの勉強をやるというので、朝早くから夜6時頃まで必死に勉強させて、卒業すると医者の卵はすぐ戦地に送られた。昭和20年８月15日、医学生たちは朝から授業を受け、昼に講堂へ集まるようにいわれ、12時10分前に授業を終えて安田講堂へ行くと、外部から来た人もたくさんいた。ラジオの放送を聞いたが、何といっているかよく聞きとれない。ただ、「忍びがたきを忍び」というようなことは聞こえた。終わると、皆うなだれて教室に戻り、午後の授業を受けた。教授が入ってきて講義を始めたが、玉音放送とか戦争に負けたことには一言も触れず、学生も何も言わないで、授業が終わる6時まで勉強したというエピソードがありました。敗戦を迎えるころ、東大生をはじめ教育を受けていた人たちは、学ぶことについてどれほど真剣な目標を持っていたかの証として、そう語られていました。

８月15日に敗戦を迎え、いよいよ連合軍に占領されて、今度はＧＨＱ、アメリカ軍が東大を使いたいと言ってきます。兵隊や将校が来て、

ここは何に使うと図面を書いている。ただ、進駐軍の命令は来ないんです。日本の敗戦処理の委員会から、進駐軍が東大を自分たちの指令部にしたいから譲れと言っている、そのつもりでいてくれ、という電話がかかります。すると東大の人たちは、私たちは7月に日本の軍隊すら断った。戦争は軍隊の問題ではありません、価値の体系の問題です。私たちは戦争に負けたかもしれないが、私たちが持っている考え方や文化を新しい世界に提供し貢献しようと努力しているんです。それはマッカーサー元帥もわかると思いますから、そう言ってください、と言って断るんです。

マッカーサーは、降伏した日本を治めるだけでなく、新しい日本をつくろうと何人かの学識経験者やアメリカの文化を知っている人を呼んで、日本を新しく世界の一員とするために何が大事か、あなた方の国の価値をどう伝え、どうすれば新しい秩序に貢献できると思うか、と聞きました。その中には、例えば恵泉女学園の創立者、河井 道さんや賀川豊彦さんがいました。日本の文化は大事だが、天皇を現人神とする考え方は世界に通用しない。昭和天皇は人間宣言をしました。「8月15日と南原繁を語る会」では、私たちは何を持って世界の一員となることができたのかを考えようとしました。因みに、賀川豊彦は社会事業家で、1909年、21歳のときに貧しい人と共に生きることを決意して神戸のスラムに入りました。マハトマ・ガンジー、アルベルト・シュバイツァー博士とならんで世界の聖人と言われ、ノーベル平和賞の候補になるほど世界の人たちから尊敬された人です。

余談ですが、資本主義経済の社会では、事業に成功する人もいれば失敗する人もいる。必然的に金持ちも貧しい人も生まれ、格差ができます。社会的に弱い立場の人を支えるために、国が法律をつくります。イギリスでは16世紀に、病気で働けない人などを助けるための法律、救貧法が定められ、1601年には有名なエリザベス救貧法ができました。第二次世界大戦でイギリスはドイツにロンドンを空爆され、大きな被害を蒙ります。イギリス議会は、国民にこの戦争を生き延びる希望を持たせようと考えました。そこでイギリスは、ドイツのような侵略戦争で領地を拡げようとするWar State（戦争国家）ではなく、国民がともに生きていくシステムを国が支えるWelfare State（福祉国家）への道を選ぶと決意し、1942年、戦時中にベバリッジ報告を発表します。雇用、医療、衛生、公的扶助、教育を柱に社会保障のセーフティー・ネットをつくろう。イギリスはそれを福祉国家として国が保障する制度を打ち出しました。

1945年に戦争に負けた日本は、戦後、新しい国の枠組みをつくるときに、このイギリスの福祉国家構想を取り入れました。戦前の日本には年金制度はなく、義務教育といっても、お金がない家の子は学校に行けなかった。戦後は小学校の6年間と中学校の3年間を義務教育とし、国民として必要な基礎的な教育を9年間でやる義務教育制度をとりました。これらを保証するための財源は、税金です。ところが近年、日本経済がうまくいかなくなり、お金がうまく回らなくなって、政府予算で何が削られるかというと、社会保障費ですね。

時の曲がり角にたって

今、日本を変えよう、憲法を変えようといわれていますね。けれど、国民は等しく健康で文化的な生活をする権利があるという憲法の、どこが悪いのかというと、どこも悪くない。新憲法の最初の原案は日本がつくったんですが、旧憲法とほとんど変わらなかった。これでは世界的な視野に立つ国家として、他の民族とともに生きるという姿勢が表れていない。そこでアメリカは自分でも守れないようなことを、日本に言った。もう戦争はしません、と書き入れたらどうかと。それで理想主義の見本のような日本

国憲法ができた。今になって、これはアメリカがつくった憲法だ、これでは戦争を吹っかけられても戦争ができないじゃないか、どうするんだということで、憲法を変えようという動きがあるようです。

時代の曲がり角に立つ私たちが、いま考えねばならないのは、基本的な問題は何かということ。あの戦争を契機として生まれた日本国憲法は、誰が作ったかということより、あの憲法によって、日本という国が世界へ向けて何を発信できたかを明確にすることです。日本が世界の中でどんな役割を担い、どんな貢献をし、どんな文化すなわち価値の体系を伝えることができたのか、ということが大事なんです。

いま問われているのは、世界の中の日本の存在。世界の中で大事な役割を果たせる日本をつくることです。異なる国、異なる文化について考え、受け入れ、対等な立場に立って考えるという日本に育てないといけない。これが戦後、日本の選んだ方向です。その60年後の今日、それが果たして有効であったかどうかが、問われています。時代が変わり、グローバリゼーション化が進展し、経済システムが変わり、世界のどこかで紛争が続いているという現状で、私たちの選択は変わるのでしょうか。

時代の変化の中で、というよりこんな時代だからこそ、「こう決まったんだから、これでいいじゃないか」などと容易に考えないことです。よいか悪いかは、各人が判断し互いに意見を出し合うことが大事です。世界の人々とともに新しい世界を作ることを考えないと、地球社会を支えることはできない。次の世代を受け継ぐ皆さんには、そういうことをしっかり考えていただきたい。

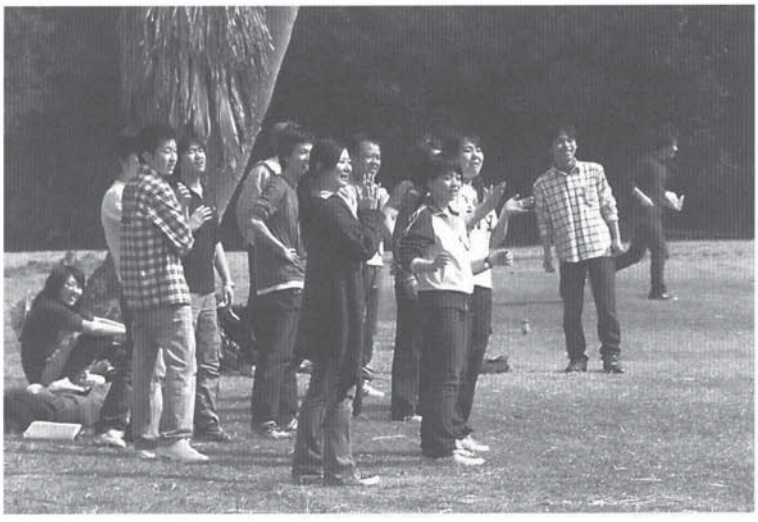
西暦2000年に国連は、世界の人々が平和で安全で人間らしく生きるためにはどうすればいいかと考え、2005年にまとめられた国連ミレニアム・プロジェクト報告書の責任者は、ジェフリー・サックスという人です。彼が調べたところ、アフリカの人々は既に教育を受けて十分な知識を持っている。どの国の人も教育を受け、民度が上がって新しい生活をしている。問題は、金がないために、彼らは次の段階へ上る前に倒れていく。では、彼ら自身で立派な国がつくれるところまで応援しようじゃないか。世界から貧困をなくすためには財源がこれくらい必要ですと、国連は世界の国々にお金を出してくださいと言ったんです。サックスは、アメリカはイラクで使う戦費の2日分を、国連の分担金として出すことを拒否した、あれだけ国力があるにもかかわらず、アメリカは世界と一緒に生きていく姿勢を国として見せていない、と言っています。国際ロータリーはジェフリー・サックスを2006年国際大会のゲストスピーカーとして招きました。

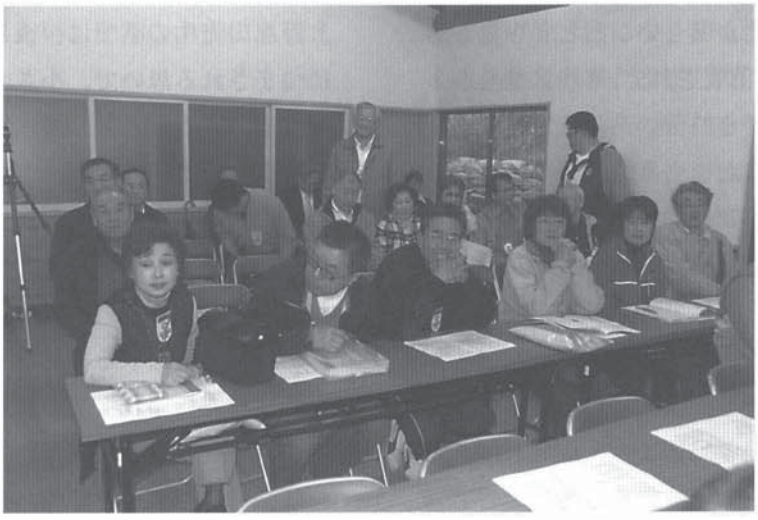
ロータリーは地球上からポリオを撲滅しようと資金を集めているが、なかなかポリオはなくならない。貧しくて衛生状態のよくないところから次々発症する。(ロータリアンからも、いつまで続けるつもりなのか、と言われます。)それでもこつこつ続けて、世界中で一人でも子どもが救われるなら、それは世界平和を築く立派な仕事だ。世界的な視野からも、また国連の立場から見ても、ロータリーが行なう奉仕には大きな意味がある、とジェフリー・サックスは絶賛しました。ロータリーは120万人が集まっているけれど、そんなにお金持ちがいるわけじゃない。会員が自分の財布から、あるいは会議の費用を切り詰めてお金を集め、世界のためにと寄附している。地球上からポリオを一掃しようとするポリオ・プラス運動は20年続けていますが、まだ完全には撲滅できない。ロータリーがそんな大事なことをしているならと、ビル・ゲイツ財団が寄附してくれた金額は、世界のロータリアンが懸命に集めたお金より多いんです。

ジェフリー・サックスが書いた“The End of Poverty”という本は、「貧困の終焉」とい

う題で、日本語に訳されています。また、金融資本主義については、岩波新書にロナルド・ドーアの「誰のための会社にするか」があります。ステークホルダー、地域、国、世界の問題を考えたときに、会社をだれのものにするのか、もう一度考え直そう。ドーアはイギリスの人ですから、アメリカの人とは違った視点で、新しい金融資本主義の問題点を指摘しています。

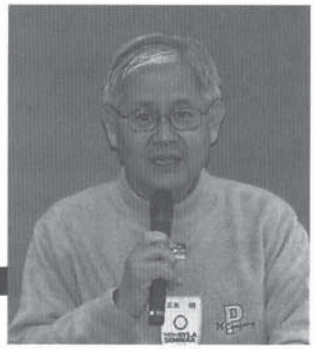
今、何をしなければならないかということを、若い人たちに真剣に考えていただきたい。時代の変化はいろいろあります。ことさら愛国心なんていわなくても、誰にもあります。前の戦争のとき、日本の多くの若い人が、いつ国が滅びるか、いつ死ぬか、という時を持ちました。それでも日本のために何ができるかと、真剣に考えていました。グローバリゼーションのときを迎えて、日本が、あなたが、世界の一員として、これからどう生きていくかを考えることが、大事なんです。自分の民族のことだけを考えるという偏狭な考え方は、あの戦争で否定されました。グローバリゼーションの時代とは、個が全体と直接かかわる時代です。世界における日本を、多文化が共生していく世界を見据えて、どう伝えていけるか。そういう心を持った若者が、このセミナーから巣立ってくれることを願っています。





閉講式

閉講のあいさつ



三木　明

国際ロータリー第2680地区ガバナーエレクト　（姫路RC）

皆さんおはようございます。

講評というほどのことはできないんですけれども、この４日間のＲＹＬＡセミナーにおける、私なりの感想と申しますか、あるいは、このＲＹＬＡに対する思いをお話しさせていただきたいと思います。

４日前、皆様方、期待と不安に胸がいっぱいで、この島においでになったと思うんですけれども、あっという間に４日間が過ぎまして、もう間もなく、このセミナーも幕を閉じるという時間になってしまいました。初めて余島においでになった方がほとんどだと思うんですけれども、周りは知らない人ばかり、どうしたものか、ここは一体、どんなとこなんだろうと。サンフランシスコの沖に浮かぶアルカトラズという、凶悪犯人を閉じ込めておく監獄がありますけれども、それに近い環境ではないかと、逃げることもできない。えらいことやというようなことで、大変、不安だったと思うんですけども、パーティーがあったりして、いろいろと皆さん方同士が楽しいひとときを過ごして、例年にないお酒を消費されて、本当に楽しかったと思います。

今井顧問がいつも、おまえたちはよく酒を飲むなと私たちロータリアンに向かっておっしゃるんですけれども、それは、そのままそっくり皆さん方に言いたいというふうに思っております。

４日間の間に、今、隣に座っている友達、そして、同じ班の仲間たちと、本当に10年来の友人のように親しくなられたと思います。深いきずなで結ばれたというふうに考えておるところでございます。これもＲＹＬＡセミナーの一つの魔力でありますけれども。

講評と申し上げるわけにはいきませんけれども、野々山先生の講義の中では、家族のあり方ということを学びました。社会学は世間学である。世間学という言葉は、私自身は初めて聞いたんですけれども、家族制度と家族集団。そして、もう一つの側面である家族ライフスタイルという、そんな単語も学びました。21世紀は合意制家族であると。それは家族の中に民主主義があるということだそうでございます。

また、野々山先生は、リーダーとは概念を構築できる人である。大変、深い内容の言葉だと思いますので、皆様方リーダーとして、ここから育っていかれるわけでありますし、また既に地域のリーダーとして活躍されている方ばかりでありますので、皆様方の中で、将来、こんな家族を築きたい、こんな地域社会を築きたいという希望に胸を膨らませておられると思います。

野々山先生の話では、後ろの方々はちょっと身につまされる思いで、小さくなって聞いておられる方もあったかと思います。

保田先生ですけども、食料と環境ということで、いろいろと御専門の話を伺ったわけでありますけれども、私たち、50代、60代、70代の人間が、世代が残そうとしている負の遺産ですね。それを皆さん方にお渡しする。これ、保田先生の、統計にいろいろあらわれているんですけれども、この数字やデータを本当に真剣にとらえて受けとめなければいけない。そして皆さん方が、私たちが皆さ

ん方に差し上げるすばらしい負の遺産をしっかりと受けとめて、それで皆さん方が、これではいかんと、皆さんの先輩たちは何をしてくれたんだということで、正しい日本をつくっていただきたいと。そういう努力をしていただきたいと、そういうふうに思っています。

保田先生は御飯、お米の御飯ですね、これの大切さをいろいろおっしゃっていました。緑の野菜を食べなさい。オイルは余りとらないように。緑の野菜、緑の田畑で日本を埋め尽くす、埋め尽くそうというところまでは言っておられませんけれども、赤いキツネと緑のタヌキということで、緑の野菜をどんどん食べていただきたいと。

私、以前太っておりますときに、ピンクの豚と言われておりましたけれども、そんなことでぜひ、日本の食生活を見直そうじゃないかと。このデータの中にあります、その朝食内容による、歯と唾液量の状態というのがあったんですけども、大変、興味深く。これ、私、歯医者なんで、これに大変関心を持ったんですけども、御飯食を食べる人は唾液の分泌量が多くて虫歯が少ない。あのおっちゃん口臭いという、その口臭の問題にもかかわるんですけれども、朝御飯、朝、お米の御飯を食べる。日本の伝統的な食事をすることによって口臭も減ります。これは客観的な事実でありまして、パン食の人よりは御飯食の人の方が口臭が少ない。皆様方、エステとか関心が高いと思うんですけれども、お口のにおいが気になる人はぜひ御飯を食べていただきたい。そんなふうに思います。

今井先生のお話にも、私は講評などと、おこがましいことは申し上げるわけにはいきませんけれども、ロータリーの発生はこうだったんだよ。社会の中でこんな役割があります。そしてこんなふうに、ロータリアン、ロータリークラブの会員たちは働いています。そんなことのお話をいただきまして、世界の中の日本として、その他国の文化を受け入れましょう。仲よくできる日本人になりましょうというふうなお話をされました。

それから、このＲＹＬＡセミナーを通して私たちが考えておりますことは、こういったすばらしい講師の先生方のお話を直接聞かせていただく。60名の受講生の皆さん方に、ここで直接に語りかけていただけるという講義があります。そして皆さん方が、既に10年来の友人になったかのごとく、すばらしい友情が築かれたこのキャビンタイム。そして自由と自律ですね。自律というのは自分を律する心。決まった時間には集まりましょう。あるいは、これはしてはいけない、これはした方がいいというようなことを自分自身で決めましょうというふうなことも学んでいただけたかと思います。

ちょっとお天気が、昨日、今日と余りすぐれなかったもんですから、大変申しわけないんですけれども、この余島のすばらしい自然にも触れていただけたと思います。これは、いろんな木や草花や動物や鳥や、いるんですけれども、皆さん方の余り目に触れないところで整備されております。すばらしい環境を大切にしているところでございます。

そして、このＲＹＬＡセミナーの一番大事な核と申しますか、皆さん方、それぞれの班にロータリアンとロータリアンの奥様の、二人のカウンセラーがついてくださいました。皆様方がこの４日間、安全に、ちょっとけがなさった方もおられて大変申しわけないんですけれども、安全に、そしてこのＲＹＬＡセミナーを十分に堪能していただけるために、陰になりひなたになり、皆様方のお世話をしていただきました。この二人から、皆さん方がロータリーの精神を少しずつでもいいから学びとっていただきたかった。これは一生のおつき合いでありますので、ぜひ、このつながりを大切にしていただきたいと思います。

今井先生がしゃべり過ぎでしたね。

バズセッションとかフォーラムという、皆さん方、恐らく初めての経験じゃなかったかと思うんですけれども、非人間化時代における人間化。これだけ読むと、どういうテーマやと。僕自身も戸

惑ったんですけれども。サブテーマとして、人々とどのように手をつなぐか。こういうことが書かれておりましたので、少しわかりやすくなったかと思うんですけれども。どのグループも、この初めての経験を十分に理解されて、そして恐らく、けんけんごうごうの議論をされたと思います。それを見事にまとめられました。例年、箇条書きにして、いろいろな意見がだらだら、だらだらと言ったらあれなんですけれども、いっぱい書かれるんですけれども、カウンセラーの皆さん方のアドバイスだったと思うんですけれども、上手にまとめていただきました。見事にそれをやり遂げられました。バズセッションでは、時間が足りないぐらい真剣に討論されておりましたし、その姿を遠くからかいま見ておりまして、大変感動いたしました。

それをフォーラムで見事にまとめて発表された。またフォーラムでも、皆さん方、議論の時間が足りないくらい、いろんな意見が出ました。欲を言うなら、もう少し突っ込んだ話をして、もう少し、多くのいろんな方々からの御意見も聞けたらよかったかなと思うんですけれども、その意見というのは、バズで既に皆さん方がお話しになってきたことでありますから、それはそれでいいのかなというふうに思っております。

次年度、この7月から、私は兵庫県のガバナーとして仕事を、役割を果たさなければならないんですけども、ウィルキンソンさんという、国際ロータリーの会長エレクトが、次年度のテーマとして、ロータリーシェアーズ、「ロータリーは分かち合いの心」というテーマを掲げられました。その中で、テーマを解説する中で、ウィルキンソンさんがおっしゃることなんですけれども、青少年活動を通じて愛を分かち合うのは、青少年はロータリーだけではなく、すべての人々にとっても未来であるのです。今日、ここにいる、私たち、ロータリアンですけども、やがて席を譲る日がやってきたとき、強い責任感と倫理観を持つボランティア思考の新世代の若者が、ここを埋め尽くしてくれるでしょう。若い人々は私たちのはるか先に広がるロータリーの未来へのかけ橋なんです。そんなふうにおっしゃっております。ロータリーが皆さん方、若い世代の皆さん方に期待することを、この4日間で少し、かいま見ていただいて、私たちが皆さん方にお願いすることも、言葉とか態度といいますか、私たちの姿を見ていただいて、御理解いただければ大変ありがたいと思います。

先ほど、今井先生がおっしゃっていました、深川先生と佐藤千壽先生の往復書簡なんですけれども、双鯉雁信帖（そうりがんしんちょう）というのがあります。これは、今井先生は非常に無責任に、どうぞとおっしゃっていましたけれども2,500部しかありませんで、大部分が外に、外にというか、ロータリアンの手元に届いております。残りがほとんどありませんので、もし深川先生にお許しいただけるならば、1冊をコピー用にさせていただいて、コピーで差し上げることはできるかと思いますけれども、この本そのものを皆さん方、御希望の方に提供できるということは、ちょっと苦しゅうございますので、御理解いただきたいと思います。深川先生担当の事務局員がおりますので、彼女がやってくれると思います。

この余島で皆さん方の心の中にともった、その、今ともっている小さな火を皆さん方の地域に持って帰っていただいて、皆さん方の家庭であるとか、地域社会であるとか、あるいは地域の子供さんたちであるとか、そういうふうな方々に伝えていただきたい。そして皆さん方の今、心の中にある小さなともしびを皆さん方の地域にシェアしていただきたい。そういうふうに思っております。ここで生まれた友情を一生のものとして、はぐくんでいただきたい。

私たちのロータリアンの究極の目的であります世界平和を達成するために力を貸していただきたい。そして、それをあなた方自身が達成していただきたいというふうに思います。

4日間どうもお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

閉講のあいさつ

飯　忠悟

国際ロータリー第2670地区ガバナー　（今治RC）

皆さん、言うべきことはみんな三木さんが言ってくださいました。文字どおり作戦大成功でございます。しゃべらなくてもいいように、どちらが先にしゃべりますか。三木先生に先にしゃべっていただきたいと思いますと申し上げました。

皆さん方に伺います。学びましたか。楽しかったですか。じゃあ、これを持って帰って、あなた方の地域で輪を広げてください。ロータリーというのは輪を広げるということです。あなた方、一人一人が、それぞれの地域で輪を広げて、２年受講できるそうですから、できたら来年もお会いしましょう。来年の担当の三木さんと同じエレクトは、実は、初日に、２日目に帰られました。ガバナーより偉い地区代表幹事が来ておりまして、この人が大体鵜匠みたいなもんですね。ガバナーは鵜飼いの鵜みたいなものです。私は鵜です。御紹介します。ちょっと来てください。次年度30周年の担当のプログラミングをする次期四国の代表幹事です。一言だけ。短く。

○東條総一郎　徳島プリンスロータリークラブの東條総一郎と申します。私の所属する徳島プリンスロータリークラブは今年で創立14周年、ＲＹＬＡの半分しかありません。歴史の。それが縁あって稲山三治という次年度ガバナーを輩出することになりまして、そこの代表幹事ということで、一度ＲＹＬＡを見てこいと言われまして、生まれて初めて、この余島に３日前に足を踏み入れました。本当に今井パストガバナー、あとは深川パストガバナー、三宅パストガバナーの絶大なる力はもとより、2680地区、2670地区のこの運営員の方々、また受講生のカウンセラーの方々の、本当に熱い思いを、身をもって体感いたしました。

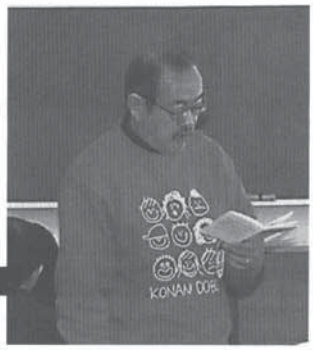
このロータリーを発祥させましたポール・ハリスが晩年、若者たちの教育と育成ということに力を入れた、その思いを、本当に実践的にやっているのがこのＲＹＬＡだなということも感じました。来年は30周年ということでありますので、2680地区の皆様方のお力をかりまして、2670地区のガバナー事務所といたしましても、できるだけの応援をいたしたいと思いますので、ひとつよろしくお願いいたします。

また、このたび受講されました受講生の方々は、この余島における３泊４日のこの経験を、これからの人生で本当に生かしていただきたいということを願いまして、あいさつにかえさせていただきます。

ありがとうございました。

○飯　忠悟　最後に一言だけ、スタッフと今井先生、深川先生を始めとするロータリアンの皆さんに、できたら起立して拍手をしていただきたい。それで終わりましょう。

閉講のあいさつ



山口　徹

ディーン　(神戸RC)

時間が押しておりますけれども、ちょっと皆さん、目をつぶってください。今までそれぞれに生きてきた人生の中で、自分に最もいい影響を与えてくださったと思う方を２名思い浮かべてください。はい、結構です。本来なら30分、40分、１時間かかると思うんですが、時間がありませんので、またこれを、いつか真剣に思ってみてください。

私は、先ほど、ちょっと始まる前に申し上げましたけども、何人かいらっしゃいますけれども、そのお一人は今井さんです。もうお一方は関西学院大学の名誉教授でいらっしゃいます、武田建さんという方です。この方から、私は社会事情の勉強を学びましたし、今井さんにも学んだわけですけども。武田建さんは、関西学院の社会福祉の専門家として、多くの方々をお育てになりましたと同時に、アメリカンフットボールの監督でもありまして、全国で初めての５連覇。その後に、日大は５連覇ありましたけども、された方でもあります。その方については、ちょっと割愛させていただきます。

皆さんも今井さんの人柄を、この３泊４日の中で、いろいろ感じられたと思いますが、私は、今井さんから望まれてＹＭＣＡに就職いたしました。違うか。済みません。私が、最初に今井さんから与えられた仕事は、体育のできない、体育があるばかりに学校に行きたくない子供たちの体育指導をしなさいと言われました。

非常に苦労しましたけれども、それは置いておいて、いわゆる肥満児、肢体不自由児、心身遅滞の子供だけを集めて体育教室というのをやりました。その当時、大変、私が言うのも何ですけれど、先見の目があったというか、１年目は120名の子供でした。幼児教室も始めたんですけども、２年目が360名。３年目500名。４年目700名。どっとふえたんです。その子供たちとキャンプをやったり、また一般の子供も募集して、この余島でディレクター、キャンプ長をしたこともあります。若いときにカウンセラーもしました。どうしても３泊４日、長いのは11泊12日のキャンプがあるんですけれども、適応できない子供がいます。その子供は一生懸命、自分と葛藤しながらキャンプ生活をしておりました。

この子供たちに、秋ぐらいに、……思い出会というのでもう一度会うんですけれども、その翌年まで全然会わない子もいるんです。私はそれでいいのかなと思ったので、地域活動で、地域で子供たちと、日常からできるプログラムできないかというので幾つかやりました中に、神戸は御承知のように坂が多いもんですから、幼稚園から、幼稚園の年長さんから小学校１年、自転車に乗りたいんですよね、みんなね。あこがれがあるんですけれども、なかなか乗れないんです、危なくて。学校なんかでも、私の地域なんかでは小学校１、２年生、自転車乗ったらあかんのです。３年生以上なんです。そんなことの様子もありまして、実は日曜日と祭日、休日の朝６時から８時まで、「早起きサイクリングクラブ」と称して、それぞれの地域の子供た

ちが芦屋浜というところに集まって、一緒に走るんです。

日曜日の朝、私は4時半に起きて、そして家を出て、郵便ポストのところで、何時何分、だれだれちゃん、何時何分、パン屋の前でだれだれちゃん、集めてくるわけです。廃品回収じゃないですよ。集めてきます。そういうコースが5コースぐらいあるんです。60人ほど、リーダー入れて、80人ほどが集まって、サイクリングするんです。日曜日の朝、日本人はゆっくり寝てるでしょう。道、がらがらですよ。排気ガスもない。そういうところで思い切り自転車乗せてやりたいということでサイクリングクラブをつくりました。

あるとき、小学校5年生のナガイ君という子ですけども、お母さんから電話がありまして、うちの子も参加させたい、でもうちの子はちょっと、言えば、心身遅滞児なんですけども、小学校5年生なんだけど、まだ自転車に乗れない。でもいいですか。どうされてるんですか。補助車ついてるとおっしゃった。私は、いいですよと申し上げました。私ちょっと、いい格好したいもんやからね。始まって3回目のとき、今井さんに、そのとき責任者でしたね。今井さん、私サイクリングクラブを始めて、もう60人も集まっていますよ。一遍のぞいてくださいよと言ったんですよ。そしたら、おれ、自転車ないとおっしゃったんですよ。じゃあ、土曜日持ってまいりますと言って、自転車持って行ったんです。走ってくださったんですよ。走ったときに、みんな、さっと行っちゃうんですよ、ナガイ君という子は補助車をつけて、ゆっくりゆっくりしてた。私がそのナガイ君の横について走った。今井さんも走ってくださった。そのときに、今井さんが私に発した言葉が「徹、これがYMCAのプログラムだ」と言ってくださったんです。それは1人の子供に寄り添ってあげるということがYMCAのプログラムだということを教えてもらいました。それから、その言葉を大事にしながら私は、今までやってまいりました。

もう一つの例は、6月になりますと、夏のキャンプの募集をいたします。前の日から並ぶんですよ。前の日から徹夜で並ばんと余島キャンプに来れない人、いっぱいいた。私と何人かは前の日にホテルに泊まって上から見るんです。何人ぐらい並んでるかな。それぐらいの時代だったんですけども。それから時代も変わって、少し、そのような現象はなくなってきたんですけども。

受付に1人の女の子とお母さんが来ました。名前忘れましたけど、小学校2年生か3年生だったと思いますが、「だれだれちゃん、お父さんも仕事し、お母さんも仕事し、働いてるからどこも連れて行ってあげることができないから、キャンプに行きなさい。楽しいよ。キャンプファイヤーがあったり、お友達といろいろな遊びをしたり、ボートに乗ったり、ぜひ行きなさい。」と言いましたが、そこの子供が「行かない。ママ絶対行かない。」と言ってるんです。それがしばらく続いたんです。私は奥の方からそれを見て、前に出て行きました。「お母さん、お嬢さんの気持ちはどうなんでしょうか。」と聞いたら、「私も働いてます、主人も働いてますので、なかなかそういう経験をさせることができないので、ぜひ余島キャンプに参加させたいと思っていました。」と。それを聞いた子供は、「行かない。絶対行かない。」と、うわっと言ってたんです。それで私は「お母さん、今の子供の気持ちを大切にすることが大事じゃないでしょうか。」と申しました。「一応、仮予約としておきますから、どうぞ子供さんと相談をして判断をしてください。」と言って帰ってもらいました。YMCAとしたら、1人の子供が来たら1万円か2万円の参加費入るから、本当は来てほしいんですけども、私はそう申しました。結果的にキャンプに来ませんでした。私は、それは今井さんから教えられた、一人一人の子供

の状況、心をどうとらえるかという意味で、私はそういうことをさせていただいた。また、「どうでしたか。」と聞いたら、「山口さんから言われたこと、子供の心をどうとらえてるかということを、もう一度教えられました。だから大変失礼でしたけれども、またの機会にします。」と言われました。

私は何が言いたいかというと、先ほどちょっと出ましたけども、今、安倍首相が美しい国とか言ってますでしょう。後でね、「美しい国」を平仮名で書いて、それ反対に読んでください。そしたら私の気持ちがよくわかります。今、私は、安部首相は何を言っとんやと思っています１人です。私は教育再生会議とか中央教育審議会とか、文科省のいろいろな動きを気にしてはいるんですけども、先ほど申し上げたＹＭＣＡ、あるいは青少年団体が考えていることは決してあなたを１人にはしない。決してあなたを１人にはしないという思いの中で、私たちはプログラムを展開しています。そういう意味で、皆さん方もこれから地域に帰って、いろんな活動を積極的にやっていただきたい。私１人じゃ何にもできないと思うことがあるかもしれない。しかし、地域の子供たち、日本の子供たち、世界の子供たちのことを見詰めながら、何かできるんではないかという思いになってもらいたい。そのときに、ロータリーが支援します。

これが終わりましたら、後日、修了証というのを皆さんの推薦クラブにお送りします。そこで、そこの会長から修了証を受け取ってください。そして短くスピーチ、感想みたいなことを述べてください。それから皆さんは地域に散って、それぞれ何らかの活動をしていただきたい。そのときに、その推薦クラブ、またほかのクラブでもいいですけども、ロータリーに支援を求めてください。そしたら先ほど三木さんがおっしゃったようないろんな輪が広がっていきます。それがＲＹＬＡの願いであることも覚えておいていただきたいなと思います。

私、実は、幼稚園の園長先生なんですよ。今、お母さんたち、先生方に言ってるのは、昨日からずっとあった話ですけれども、まずその子供の存在を認めてあげること、どんな外見で、どんな子供、ごんた坊主でも、引っ込み思案、何でもいい。すべての子供、まずその存在を認めてやるということ。これは親にも言えると思います。自分の子供を信じて、認めること。存在を認めること。そして、すべてをまず受け入れてやること。これがとっても大事なんです。けんかしても何しようが、すべてを受け入れてやる。

それに対して親は、指導者は少し耐えて、そのことをゆっくり対応していただきたいと思います。そして、子供たちが一生懸命成長することに対して、指導者も保護者も、どう支援することができるかという姿勢を持ち続けてもらいたいと思っています。私はそのつもりで指導もしています。

今の子供たちは、何だかんだいって、管理社会にあります。学校の先生、親の前でいい子を一生懸命演じようとしています。本当に子供らしさはどこにあるのかと思うくらい、一生懸命、先生に気に入られるように、保護者に気に入られるように、演技しているだけだと思います。もっと子供たちを信じて、受け入れて、耐えて、支援していくということを考えてもらいたいなと思います。決して君を、あなたを１人にはしないということ。

すなわちそれは、この３泊４日で学んだように、一人一人を大切にした出会いをどうつくるかということと、愛されてるということを共有できる、そういう毎日の出会いを大切にしていただきたいなと思います。ガバナーエレクト、それからガバナーのお話より長くなって申しわけございません。

ありがとうございました。

お一方紹介したいと思いますが、前に出てください。今現在、神戸ＹＭＣＡの総主事、責任

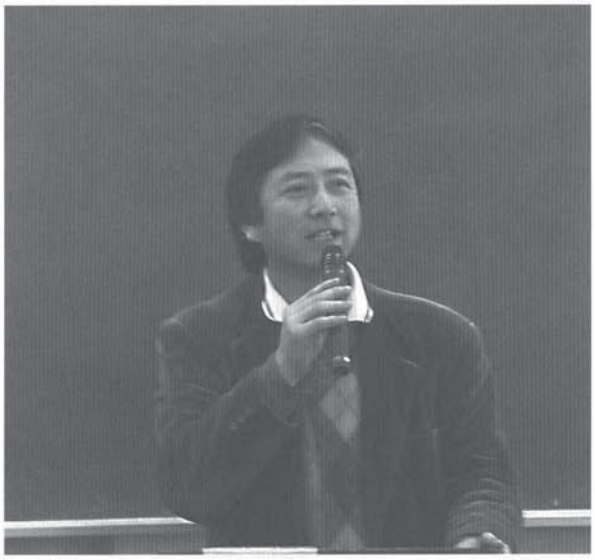
者、今井さんは第６代の総主事です。７代の方は今日来てません。私が８代。この人が９代の総主事。水野雄二さんと申します、どうぞ。

○水野雄二　皆さんおはようございます。御紹介いただきました。神戸ＹＭＣＡの水野と申します。今井さん、山口さん、大先輩でございます。

私はＹＭＣＡに入りまして、今年がちょうど30年になります。神戸ＹＭＣＡに入ってですね、三宮で仕事をさせていただけると思って、喜んで入りましたら、そのときは、今井さんが責任者でございましたけども、君は余島だと言われましてですね、神戸ＹＭＣＡ入って、まず赴任地が余島でございました。したがってＲＹＬＡセミナー第１回目のときに、私はここで働いておりまして、皆さん、余島のスタッフ、若いスタッフが走っているのをごらんになってるかと思いますが、そのような姿で30年前に私も走り回っておりました。第１回目のＲＹＬＡセミナーのお世話をさせていただいたことを覚えております。

そのときは走り回っておりましたので、ＲＹＬＡセミナーを受講しておりません。したがって、大したリーダーに育たなかったんですけど、皆さんは、今回しっかり受講されましたので、恐らく30年後は、この中の半分ぐらいはロータリアンになってらっしゃるのではないかと、期待をしております。３泊４日、御利用いただきまして、ありがとうございました。
後ろに座ってらっしゃるロータリーの皆さん、今後とも、ごひいきによろしくお願いをいたします。

皆さんの、この研修が実り多いものでありましたことをお祈りをしております。ありがとうございました。


神戸ＹＭＣＡ第９代総主事　水野雄二さん

○山口　徹　それでは閉講式は予定より延びましたが、いい話をいただいた。それで、今、余島のＰＲもありましたけども、今井さんの方から、ぜひ、ということで、どうぞ。

○今井鎮雄　50年ほど前、この余島で障害を持つ子どもたちのためのキャンプをしました。日本で初めての試みでした。その後、参加した子どもたちは大人になって、今は障害を持つ子どものための仕事をしている人もいます。そのグループが、５月に初めてチャリティーコンサートを神戸でやることになりました。出演者もボランティアです。ここで育った人を中心に、障害をもつ子どもたちのための働きをするグループを、みんなが支えようとしています。どうぞ近くの人は応援のつもりで聞きに来てください。

○山口　徹　このプログラムを置いておきます。なお、切符は、みんな持っておるんですけど、まず私のところに買いに来てください。何枚か持っておりますので、よろしくお願いします。山口　徹でございます。

ちょっと、ニュースなんですが、今朝午前９時42分ごろ、石川県の能登沖を震源とする地震がありました。震度６強だそうでございまし

て、輪島市とか七尾市、そっちの方でちょっと被害が出ているようです。愛知県の西部で震度３ですから、かなり大きな地震かと思いますが、ちょっと覚えておいていただきたいと思います。

それでは今からすぐ、下におりていただいて、グループごとに食事をいたします。その食事が済んだらここに戻ってきていただいて、感想文を書いていただいて、できた方から食堂に行って、そしてお帰りいただく。

一応これで、第29回ＲＹＬＡセミナーを終わらせていただきます。ありがとうございました。

参加者感想文

A班

● カウンセラー　白石 正明

無事にセミナーが終わり少し寂しい気持ちです。３泊４日という短い時間で１２名の子供達と過ごしたこのキャンプがどれだけ有意義であったかと思うと心打たれます。崇史、サビン、順一、秀和、大助、伸大、奈々、知佳、由紀、佳江、優子、真記と共にこの余島で過ごしたことで私自身の思い出のページが何枚も増えたと思うし、これも子供達から教えられた賜物だろうと言っても過言ではないと思います。私もこのライラに９回参加して子供達に教えられることの方が多くなり、自分自身を磨くことができました。本当にA班の受講生の方々ありがとう！！また会うのを楽しみにしています。

● カウンセラー　吉岡 喜久子

今年はどんな若者たちと出会えるかと不安と期待が交錯する中で余島でのＲＹＬＡセミナーが始まりました。しかし、１２名の若者達が旧知の友であるような感覚をいだくまでにほとんど時間はかかりませんでした。

セミナーでの各講義、お話はどれもすばらしく、受講生たちの力のみで行われたバズセッション、フォーラムも今年のテーマについてそれぞれが深く考え、熱く語りました。

さらに、このセミナーを有意義なものとしたものの中で忘れてならないものは、余島という大きな自然と受講生の中にネパールから参加した若者がいたことでした。

情報化社会が進み、金融経済が社会を大きく支配する現代に於いて、一番大切にしなければならないもの、普遍的なものは、やはり人間の存在そのものであり、その温もりであることを体感し、学んだ４日間でした。

受講生一人一人が持つ人への思いやり、優しさ、そして、それに裏打ちされたしっかりとした人間性が、このセミナーによってさらに大きく磨かれたことを確信しました。

文明が進みすぎ、功罪両面を持つ現代社会を作り上げた私達は、次の世代にバトンタッチをするための準備をすることが責務です。そのためには次代を担うしっかりとしたリーダーを育て、彼らに地球規模で物事を考え、地球人として物心両面とも豊かな２１世紀を作って下さることを切に望みます。そこにＲＹＬＡの本当の意義があると確信し、その一端に触れられたことに大きな喜びを持った４日間でした。

● 川江 大助

ロータリークラブ、ＲＹＬＡについては始めは何も知りませんでした。このようなすばらしい活動・組織があることを多くの人々に伝え、知ってほしいと心から思います。

私は社会人ですが、同じチームには学生、外国人、フリーター等の自分とは価値観の違った人々が集まる中で議論をすること、相手の考えや思い、実際の経験を聞くことがこれほど楽しく勉強になったのは、想像していた以上のものでした。この場で学び、議論したことは、今の若者が考え決断していくべき内容だと思います。それにはこのような自分の考えを客観的に考えていける場所を作ることが今の世の中には非常に大切なことと思います。本当にＲＹＬＡスタッフの方々や、講師のみなさまにはお礼を申し上げたいと思います。これからの若者と子供を育てることで恩を返していきたいと思います。

● 野口 伸大

今回初めてＲＹＬＡセミナーを受講して、改めて人と人との縁は大事だなあと感じました。余島に着くまでの緊張感が、着いて打ち解けた開放感に変わり、そして最後に達成感になりました。こういった気持ちになれたのも、セミナーを受講するチャンスを与えて頂いた方々、一緒に受講した仲間達のお陰です。自分一人の力ではとてもここまでは...。

これからも出会いと縁を大切に、大事に精進していきたいと思います。

このセミナーは忘れていたものを気付かせてくれるセミナーだと思います。

そして、うまくは言えませんが「愛」があるセミナーだと思います。先生方からの愛情、先輩方からの愛情、カウンセラーからの愛情、スタッフからの愛情、仲間からの愛情。たくさんの「愛」を頂きました。自分も「愛情」をもって人と接していきたいと思います。「愛情」をもって伝えていきたいと思います。

良い経験をさせて頂きありがとうございました。

● 小玉 順一

ロータリーの活動というものに初めて参加しました。ボーイスカウトとは違い参加者は２０歳以上の人が対象で、時間に縛られないプログラムが驚きでした。

人というのは時間を決められると動けるものですが、いざ自由となると動けなくなるものでして、自分もその中の一人だと実感しました。講義は興味のあるものが２つあり、大変勉強になりました。

このセミナーをカブの活動に生かしていきたいと思います。

● 仙水 秀知

私がこの研究でいちばん得たものは、人との出会いでした。

参加する前、このＲＹＬＡに行く事が嫌でなりませんでしたが、来たその日から不安は無くなり、楽しい４日間を経験させていただきました。それは、カウンセラーの白石さん、吉岡さんをはじめ、Ａ班の皆さんがすばらしい仲間であったからであります。

今後もこの友情を大切にしていきたいと考えます。

また、このＲＹＬＡのプログラムのすばらしさを体験させていただけた事も人生の収穫であったと思います。

講義の内容ももちろんですが、特にバズセッションは非常にすばらしく、真剣に議論が出来る場が減少している今日において、大変貴重な体験をさせていただいたと思います。

最後に、このＲＹＬＡの開催にご尽力いただいた方々に感謝いたします。ありがとうございました。

● サキヤ・サビン

Participating in RYLA in Japan has simply been one of the best experiences. Staying at Yoshima Island, with our team, sharing our ideas, views, is one of the best parts of this RYLA.

When I met my team members, I had no idea about how I' m gonna communicate, how we gonna spend the next four days. However, we turn out to be very good friends within these 4 days.

From the beginning day of RYLA Seminar, it has been a very friendly experience. The sports day, the discussion that we had will definately be a life time experience.

I am really thankful to our counselors, whom we call お母さん &お父さん who really guided us all the way. And my group member, who were very friendly, gentle that I never realized that I was a foreigner here. I felt like home.

I believe that, Seminars like RYLA, would definitely elevate the future generation to continue, and more forward "Leading the Way".

I would like to thank Rotary District 2670 and 2680 for their wonderful support & organizing this seminar.

I remember a principle of the school said, "The Spark was there before Rotary club got involved, but RYLA has helped fan the flames and set a real fire started".

I believe that the experience that I had from participating RYLA would be very useful when I go back to my country.

● 藤本 崇史

最初は、桜が咲き始めるこの季節に、このプログラムに参加することはあまり気が進みませんでした。また、僕は大学生で、４月から学校が始まるので、春休み最後の週をＲＹＬＡで過ごすことに疑問を感じていたことも事実です。しかし、余島でのプログラムを１日体験した日の夜、見事にその不安は吹っ飛びました。ここには、まるで前から会った事があるように受けいれてくれる参加者のみんながいて、グループのみんなとの関わりでは、本当のお母さんやお父さんのように僕達を包んでくれた余島のお父さんとお母さん、そして、みんなと友達になることができました。この３泊４日のＲＹＬＡキャンプで、普段ＹＭＣＡの西神戸野外活動リーダーとして行うスキーキャンプや夏のキャンプとはまた異なった活動ができ、このＲＹＬＡキャンプに関わった全ての人に感謝しています。ありがとう。

このキャンプで僕の心に灯った、小さいけど確かにある火を、帰ってからもみんなに伝え、ひろがっていくよう、ここで起きた出来事をリーダーのみんなや友達、家族に話そうと思っています。

また、ロータリークラブの大きな目標の一つでもある「世界平和」という点においても、自分が今できることは何なのか、もう一度見直して、行動を起こしていきます。

● 笹谷 奈々

ＲＹＬＡセミナーに参加させて頂き、本当にありがとうございました。

私は小豆島に住んでいるのですが、余島の事も知らず、不安と期待の中、研修に参加しました。

この３泊４日という日が本当にいい機会、そして、大切な出会いとなりました。

特にＡ班のグループのみなさんには、たくさんの笑顔をもらいました。はじめはコミュニケーションをとりたいけど、人見知りのせいか緊張しました。でも、一声かけるとすぐうちとけることができました。

一声かける勇気と話したい気持ちがあること

で、こんなにもたくさんの話ができ、たくさん笑い、たくさんの思いや出来事を聞くという仲間にまでなりました。

この３泊４日という時間でこんなにも人の事を聞いたり、知りたい気持ち、共感したい気持ちが生まれる温かさがみんなにあったからだと思い、本当に感謝しています。

私の事を知ろうとしてくれたり、たくさん話しかけてくれた事、悩みや不安な気持ちを言える雰囲気、場を与えてくれました。

人と接する事、話す事で本当に人の思い、考えも聞け、一人一人のすばらしさを見つける事ができました。

カウンセラーの方、白石さん、吉岡さんの「おとうさん」「おかあさん」的存在は本当に私にとって温かかったです。たくさん学びました。

自然の中で思い切り体を動かしたり、自然の中で講義を受けたり、私自身、自分の考えや仕事など見つめる場となりました。

人の意見を聞く事でいろいろな事を教えてもらったり、たくさんの応援をしてくれた出会ったA班のみんなに“ありがとう”の気持ちをしっかり伝え、これからもこのつながりをなくさないよう、自分でコミュニケーションをとり続けていきたいです。

ＲＹＬＡセミナーのみなさん、このような場を頂き、本当にありがとうございました。

人からもらった思いやり、優しさ、気遣いにもたくさん触れたあたたかさを忘れずに、私も保育士という仕事に誇りを持ち、たくさんの人や子ども達に出会い、受け止め、絆をたくさん築いていきたいと思います。

● 森川 知佳

３月９日（金）私は上司より、「３月２２～２５日、空けておいてくれ、研修があるから」この一声で、私がこの余島へ来ることを知らされた。聞いてみると、「社長のロータリークラブでの青少年育成の為のセミナー」という概要だけで、それ以上は決して教えてはくれなかった。それから、３月は商戦時期でもあり、研修前日まで、さほど気にせず、業務を遂行する事だけに奮闘していた。そして、研修当日、高知よりこの余島へ来るまで、「①どんな研修なのだろう？②どれくらいの規模の研修なのか？③研修に馴染む事はできるのか？④なぜ私がこの研修に参加しなければならないのか？」と、不安と後ろ向きな気持ちでやってきた。

しかし、この３泊４日の研修を終えた今は、人生で最も充実し、前向きな気持ちになっている。

それは、同じ班で過ごした、私を含め１４名の存在を無くしては語れないだろう。

初日の自己紹介にはじまり、一緒に酒を飲みかわし、一緒にスポーツをし、一緒におふろに入り、一つのテーマについてとことん話し合う。

一日中べったりと３泊４日。

これは、私の今までの友人関係で、一番急速に仲良くなった日数だと思う。

特に、バズセッションの、「非人間化時代における人間化」では、自分が、今まで、いかに非人間的だったのだろうと思い、それを恥じる事もなく、皆の前で、意見を言うことができた。

それは、自分にとっては革命的な事で、「自分の意見を言う事のすばらしさ、気持ち良さ」を久々に感じる事ができた。仕事では、「効率よく言わなければ…、私の意見もある。でも、言ってしまうと、会社の意見となってしまう」という強迫観念が働いてしまい、うまく自分を出せない自分がいた。

しかし、今回、年齢も出身地も違い、利害関係の垣根がないと思うと、不思議と、すんなり、自分の思いを口にする事ができていた。そこで、「誰も私を否定せず、受け入れてくれるんだ！！」という感情が働き、初めて自分を解放する事ができたと思う。

会社の中で働いていただけでは決してできない経験だと思う。

願わくは、会社の人達も、垣根をなくして、一人一人受け入れてくれる体制をつくっていけば、必ず、風通しの良い、発展的な会社になると思う。

一人一人が満足する事。それは、すばらしい事なんだと身をもって感じ、このＲＹＬＡの研修の内容を決して教えてくれなかった事で、多少、憎んでいましたが、教えてくれなかった事に、今や感謝しています。私をここへ連れてきてくれた方々、指導いただいた先生、スタッフご一同様、どうもありがとうございました。

● 岡崎 由紀

今回のＲＹＬＡセミナーでは、今までの仕事や日常では学べない多くの事を学べた気がします。

職場の上司に言われて参加し、最初は不安も多く、周りの人達と仲良くなれるかどうか、４日間のセミナーの中で、自分が変わる事ができるか、考えることも多かったです。

実際にＲＹＬＡセミナーに参加すると、来る前の不安はすぐになくなり、余島で経験することは、日常生活では学べない事が多かった分、今まで受けた研修で一番印象に残る研修でした。

特に、バズセッション、フォーラムといったことは、今まで経験したことなく、一つの題について話し合い、多くの人の意見を聞き、人それぞれ考え方の違い、一つの題でも、何人かが集まって話し合えば、それぞれ違った意見や思いがあるということを理解し、自分の意見を出し、話し合う事が大切な事だと学ぶことができました。

他にも、３日間の講義では、現在の日本の問題についての話が聞け、今までよくあるニュースとして見ていた事でも、深く考え、知ることで、興味があるだけではなく、どう変えていくか、どうすればよいか、と改めて考える事ができ、無関心でいるだけではいけないと思いました。

今回のＲＹＬＡセミナーで学んだ事が生かせるよう、今後も地域、社会に積極的に参加していきたいと思っています。

４日間ありがとうございました。

● 原谷 佳江

この３泊４日のＲＹＬＡセミナーでは、色々な方と出会うことができて、日常あまり考えることのない課題について改めて自分自身で考え直す機会となったと思います。

初日は、初対面の方となかなか上手く話せず戸惑いもありました。しかし、２日目のレクリエーションを行ってからは、なぜか自然な自分を出せるようになっていたように感じると共に、同じグループの方とも話せるようになってきました。

今、私は専門学校を卒業して、これから社会人として働くことになっています。そんな中、グループの方は、ほとんど年上の方ばかりでした。その為、社会人の先輩達に色々と今の自分の不安や、どのような意気込みで働けば良いか等、アドバイスして頂き、本当に嬉しかったです。ありがとうございました。

講義やバズセッションでは、日本（世界）の現状や、今後の私達への課題や、私達がどのようにして将来を支えていけば良いのか等、自分の意見や考え方だけでなく、様々な方の意見や考えを聞くことで、大変勉強になったと感じました。

今回の学びを今後の私の人生において、糧にもし、成長していきたいです。

今回、同じＡ班だった仙水さん・小玉さん・野口さん・藤本さん・川江さん・サキヤさん・知佳ちゃん・真記ちゃん・奈々ちゃん・由紀ちゃん・優子ちゃん、そしてカウンセラーとして支えて下さった白石さん・吉岡さん、どうもありがとうございました。Ａ班で良かった！！！！！！！！

最後になりましたが、ガバナーの方をはじめ、ロータリアンの方、このセミナーの為に支えて

くれた方々、お世話になりました。
本当にどうもありがとうございました。

● 上見 優子

まず、このＲＹＬＡセミナーに参加させていただけたことに感謝しています。参加する前は、正直行きたくなく、知り合いも誰もいない所で３泊４日を過ごすと考えただけで苦痛でした。ロータリークラブの事も知らず、送られてきたパンフレットには聞いた事のないカタカナばかりのプログラム。何をするのかもきちんと理解する間もなく、参加しました。

この４日間、本当に有意義に過ごせたというのが正直な感想です。たった４日間でしたが、大学生活３年間で築いた友情よりも深い友情を築けたと感じました。何も知らない者同士にもかかわらず、お互いに素直な意見をぶつけ合う事ができる環境が作られているＲＹＬＡセミナーのプログラムに感心させられました。友達とは絶対にしない、絶対にできない真剣な話し合いの機会が多くあったのが新鮮で、とても楽しい時間でした。年齢も職業も立場も全く違う人と交流できる機会を与えてもらえ、大変勉強になりました。

また、大学教授の話など、自分の将来に影響を与えるであろうお話が聞けた事も、本当によかったと思います。

まず自分で考えるという事を大切にし、次にそれを相手に伝えたり、相手の意見を聞いたり、班内でのディスカッションの楽しさを初めて感じられたように思います。

少しではありますが、このセミナーに参加して自分を変えられた気がします。自分に自信がもてる環境でした。本当に参加してよかったです。ありがとうございました。

最後になりましたが、カウンセラーのお父さん、お母さん、温かく迎えてくださり、また、私達の事を一番に考えてくださり嬉しかったです。

Ａ班のカウンセラーがお父さんとお母さんでよかったです。
ありがとうございました。

● 日下部 真記

小豆島から初めて見た余島の第一印象は、とても小さく、あの島に電気もガスも通っているのかと心配もしました。

しかし、自然豊かな所で、４日間テレビのない生活もいいものだなと感じました。

オリエンテーション後、各班に分かれて自己紹介をしましたが、ほとんど会話は続かず、カウンセラーのお父さん、お母さんの助けが必要でした。しかし、部屋にはテレビもなく、話をしてコミュニケーションをとらなければならない状態だったので、必然的にいつの間にか話していました。またレクリエーションによって班の団結力が生まれ、初日とは違った“深まった関係”になっていました。

このような“関係”が生まれたからこそ、３日目のバズセッションではそれぞれが自分の意見を出し、本音で話し合うことができました。“深いようで浅い仲間”だからこそ言えたんだと思います。一人でも以前から知っている人がいれば、気を使ってしまうからです。

そして、時間・ルールを守るなど常識的なことですが、今一度考えさせられました。

また、野々山先生の「家族関係」、保田先生の「食生活」、今井先生の「ロータリーとは」、これからの生活で大切なことを学ばせていただきました。

とても充実した３泊４日でした。この期間だからこそよかったです。この余島での経験は、将来の夢への“鍵”となりました。

この経験を通して頑張っていきたいと思います。

白石お父さん、吉岡お母さんをはじめ、ロータリアンの方々、神戸ＹＭＣＡの職員のみなさん、本当にありがとうございました。また機会があれば是非参加したいです。

B班

● カウンセラー　濱田 吉隆

皆様　ありがとうございました。

すばらしい講義やプログラム、３泊４日のカリキュラムはあっという間に終了してしまいました。特に、B班の受講生の皆様が、カリキュラムに対してまじめに、一生懸命に受講されている姿は、担当カウンセラーとして誇らしいものでした。

為定君、平間君、有住君、荻野君、郷間君、繁畑君、炭山さん、中川さん、篠原さん、船越さん、板東さん、秋山さん、本当にありがとうございました。

永田さん　お世話になりました。

● カウンセラー　永田 恵子

こんなに豊かな日本の社会の中に暮らしているにもかかわらず、なにか不足を感じるのは私だけではないと思います。

電化製品の進歩で家事の負担は激減され、時間のゆとりを手にして、今まで、大家族の中で、家族の為に人生の大半を捧げていた女性も、男性と同等の人間と認められ、社会の中にも活動の場を見いだす事ができるようになりました。多くの人々が自己実現の為の時間と場所を手にしたのです。

精神的にも、物質的にも大いに豊かになり、幸福感に満ちた社会になるはずでした。しかし、何か大きな代償を支払っているように思えてなりません。あまりにも個人主義、自由主義に傾倒しすぎて、家族や地域社会が病んでしまいました。

私達は決して個としてのみ存在し得ません。もう一度、家族の中にある自分、社会の中にある自分を思い起こし、まわりの人々と共に幸せな人生を送れるよう、どうすればよいか考えてみる必要があると思います。今回のセミナーでは「絆」をテーマに、いよいよ非人間的になりつつある状況をどのように受け止め、どう世の中を構築し直すか、共に考えて参りました。

昼夜を徹して議論した事、また、盛り沢山の講話を、帰った後も、それぞれの活動の場で生かしていって欲しいと思います。２１世紀を生きる受講生の皆様が社会の中で良きリーダーとして大成され、私達の世代よりもよい社会を作って行かれます事を心から祈っております。

このような素晴らしいセミナーに参加する機会を与えてくださった事、４日間のセミナーを支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

● 為定 英章

今回のセミナーに参加して、一番良かったと思うことは、年齢・職種と異なるメンバーと交流を持つことができたことです。会社に入って６年が過ぎますが、もちろん会社ではこういった研修はなく、ましてや学生と交流を持つことなど全くありませんでした。

しかし、学生といってもさすがにＲＹＬＡセミナーに参加するだけのことはあり、年上の自分から見ても「しっかりした意見･考え」をもっている人ばかりで、逆にこちらが勉強になることが多々ありました。

参加する前は、４日間というカリキュラムは長すぎるのかなと思っていましたが､いざ講義･レク・ディスカッションを進めていくと、本当にあっという間に過ぎてしまいました。

また、今回のセミナーでは、単に同じ班のメンバーと交流が図れたということだけでなく、友情としてお互いのメンバーの中に“絆”が生まれたと思います。初日からのキャビンタイムや２日目のレク、そして３日目のバズセッションとカリキュラムの内容・時間共に友情を深めるのにはとてもマッチした内容でした。

セミナーが終了した今日からメンバーは各地元に戻り、個々の仕事や行事に戻りますが、今後、同窓会というカタチでも集まりたいし、相談等にも乗ってもらったり、また自分がアドバイスできる時は力になってあげたいと思います。それほど今回のセミナーで出会ったメンバーは素晴らしい上、かつ尊敬できるメンバーばかりでした。

最後になりましたが、ＲＹＬＡセミナーを企画・運営していただいたスタッフの皆様、そしてＢ班のお父さん・お母さんである濱田様・永田様、本当にありがとうございました！

Ｂ班　最高！！

● 平間 真道

素晴らしい４日間でした。

メンバーやカウンセラーにも恵まれ､楽しく、よく考え、友情を深められました。

講義の内容も身近で分かりやすく、しかも、今後の生活スタイルに大きな影響を与えられました。先生の小芝居、ネタもすごく勉強になりました。

この島を離れ、現実の世界に戻ることを寂しく思います。できればもう暫く居たいのですが... ダメですか？

明日からの現場では、「全ての人に愛を」をモットーにして頑張りたいと思います。このプログラムに参加させて頂いたことに大変感謝いたします。ありがとうございました。

● 有住　翔

今回のＲＹＬＡ、本来ならば僕ではなく、他の人間が参加するはずだったのですが、「予定入ったから代わりに行ってくれ。どうせひまやろ？」と半ば断れない感じで頼まれ、参加することとなりました。

セミナーが終わってみて、正直な感想は、本当に来てよかったなと心から思いました。僕はＹＭＣＡでキャンプリーダーをやっているのですが、ＹＭＣＡの先輩方の講義やディスカッション、普段あまりふれあうことのないＹＭＣＡ以外の様々な職業に就いている方たちとの話からも、それぞれの職場や地域でのボランティアとの関わり方、人と人との交わりなどを聞けて、今まで本当に狭いところでしか活動してなかったんだなと、実感しました。

この貴重な３泊４日の体験を、自分の活動に生かしていきたいと思います。最後になりましたが､キャンプの運営･進行をして下さったロータリアンの方々やスタッフのみなさん、ずっと見守って下さってたカウンセラーのお二方、そして何よりＢ班の素晴らしいメンバー達とともに､このキャンプができて本当によかったです。

３泊４日、本当にありがとうございました。

● 荻野 雅文

セミナーに参加して、何の因果か、時と場所を同じくした方々と、年代や性別といった垣根を越えて分かり合うことができました。

大学を出て以来、めっきり少なくなった新しい学問的刺激や、日々の生活に追われていることのせいにして、自分を見つめ直す時間が失われていました。それが、今セミナーに参加することで、自分自身がどうあるべきか、自分が行動することで皆になにができるのか、ということを考える機会となりました。

またバズセッションとフォーラムを通じて、まさに散らばる小石のように散在したそれぞれの意見を、分かち合って、一つの方向を見つめ歩めるように収束していく作業を共にできたことは、今まで自身で作っていた壁のようなものを取り払うことのように感じられました。

この濃い時間は、セミナーによってもたらされたものではありますが、自然に“夜”が長くなり、睡眠時間を削ることで生まれたものでもあります。そういう時間を皆で共有しよう、また共有したいと感じ合えたことは、同時代を生きる一人の人間として、何ものにも替えがたい珠玉の時間でした。これぞ、人生の楽しみであると実感できました。

● 郷間　環

３泊４日のＲＹＬＡセミナーが今終わろうとしています。

今、素直に感じていることは、本当に参加することができてよかった、そしてもう終わってしまうのか... ということです。

本当に色んなことがありすぎて、今ここに全てを書くことはできませんが、今は自分の周りの全てに感謝の気持ちでいっぱいです。

２日目のキャンプファイアー、３日目のバズセッション、多くの人の話を聞き、また意見をぶつけ合いました。

今たしかに自分の心には新しい炎がともっていると思います。これからも青少年指導者として一生未来を作っていく子供、青少年と関わっていこうと思います。

ロータリークラブのみなさんをはじめ、ＲＹＬＡに関わる全ての方、ありがとうございました。

そしてＢ班のみんな、お父さん、お母さん、ありがとう！！

● 炭山　遥

今回、このセミナーに参加し、私は仲間と助け合いながらひとつのものに取り組む大切さ、仲間のすばらしさというものを改めて感じることができたと思います。バズセッションでは、一人ひとりのいろいろな意見を聞くことで、ディスカッションの楽しさを知ることができました。その反面、ディスカッションの難しさも改めて感じました。このセミナーに参加し、たくさんの仲間に出会い、充実した４日間を過ごすことができて良かったです。これから、ここで学んだことを活かせるように自分で考え、行動していこうと思います。

● 中川 美穂

このセミナーに参加するまでは、長いだろうなと思っていた４日間が、あっという間に過ぎていきました。

ロータリークラブ、ＲＹＬＡセミナーのことはほとんど知らず、不安ばかりが大きかった私ですが、４日間という短い時間の中で、いろいろな人と出会い、熱く語り、騒ぎあえる仲間ができたことをとてもうれしく思います。

バズセッションでは、立場や環境の全く違うメンバーがそれぞれの考えを言い合い、活発な話し合いができたと思います。個性にあふれ、本気でぶつかり合える仲間だったからこそ、最後には、心に響くものができあがったのだと思います。

今回、セミナーに参加し、メンバーと４日間

過ごすことによって、自分自身、メンバーに刺激され、成長できたように思います。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった皆様に、心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

● 篠原 真奈美

かけがえのない仲間と過ごした、そして新しい自分を発見できた貴重な４日間でした。

特に、３日目のバズセッションで、私は、他者の考えを受け止め、理解し、決して否定や排除をしないという、とても大切なことを学びました。最初に意見を言い合った時に、一人一人の案はかけ離れていて異質なもののように感じましたが、何度も何度も議論を重ねていくうちに、Ｂ班として最終的に出した「答え」は、誰もが納得でき、一人一人が考えていたちぐはぐな意見よりも説得力があり、力強いものでした。

こうした過程は、そっくりそのまま、実社会にも活かされるのではないかと思います。福祉・平和・環境・教育・経済等、一見ばらばらで交わり合えないように思えるものも、議論し、互いに分かり合い、そして、つながり合おうとすれば、やはり向いている方向は、みな一緒なのではないかと気づけるのではないかと思うのです。

またこのＲＹＬＡセミナーでは、「仲間は大切だということ」、「勉強は楽しい」ということと、「自分が感じたものであれば必ず伝わる」という当たり前で大切なことを認識できたように思います。

貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

● 船越　恵

“余島”の大自然に囲まれた、３泊４日という短い期間の中で、たくさんのことを学ぶことができました。仲間と共に思い切り走りまわり、熱く語り、たくさん笑って、今までにはない４日間を過ごすことができました。人見知りをするため他のＢ班の子より仲良くなるのには時間がかかりましたが、Ｂ班のみんなだからこんなに仲良くなれたんだと思います。日々生活していて無理に笑顔をつくっていることもありましたが、この４日間は心から素直に無邪気に笑うことができました。そして、今までに経験がないほど熱く語り、一人一人いろいろな考えをもっていることを学ぶことができました。

たった４日間で仲良くなれるのか正直不安でしたが、初日からＢ班は仲が良く、本当の家族のように思い、一緒にいると落ち着き、とても楽しく、ずっと以前から知っているような気持ちになりました。朝から夜まで生活を共にすることで、たった４日間ではありましたが、“絆”ってこういうことなのかな、って思いました。偶然であったのか必然なのかはわからないけど、みんなに出会えて、一緒の時間を過ごせてよかったです。この４日間で学んだことを活かして、もっとこういう機会を増やし、参加していければと思います。

４日間、笑って笑って笑って、本当に、一生のうちかけがえのない時間になりました。Ｂ班でよかった。

これからの出会いを大切にしよう、そう思いました。

● 板東 留以

今回このセミナーに参加させて頂いた事で、自分を見つめ直し、より自分を知ることで、これから歩むべき道が明確に見えてきました。と同時に、同じような考えを持った人々の中で熱く語り合い、刺激し合うことで成長することができました。

初めは、セミナーということで、もっとかたい勉強会というイメージを持っていたのですが、島に足を踏み入れてみると、みんなが平等で、自己責任のもと、自由に行動し、考える場であると知り、驚きました。でも、そのような

雰囲気だったからこそ、本気で意見をぶつけ合うことができたし、内容の濃い時間を過ごすことができました。

今、このような仲間や先輩方に出会えたこと、そして貴重な３泊４日をこの島で過ごせたことを幸せに感じています。私の心に灯った火を、必ず地域の方々にも分けていこうと思っています。きっとこのセミナーは一生の宝になることでしょう。関係者の皆様、本当にありがとうございました。

● 秋山 涼子

約10年以上も前から、毎年ＲＹＬＡセミナーに参加する機会がありましたが、仕事の予定がつかずに、今まで一度も参加できたことがありませんでした。

しかし、この2007年、とても自然な流れで参加することになりました。（親孝行も込めて！）出発前から、特に不安等もありませんでしたが、自身の性格上、あまり初対面の人に出会うということを得意としていない為、正直、その点だけが少し“どうなるだろう？”と感じていました。

そんな思いを抱きながらも余島に足をつけた時 ― その美しい自然に心を奪われました。そして、その数時間に起こった新しい人々との出会い ― 本当に今日初めて会ったばかりなのか？と反対に戸惑ってしまうほど自然に心を通わす事ができました。

そこからは本当に‘miracle★’の連続でした。同じグループのみんなで共に行動する全ての行為、学ぶ講義、何もかもが最高の時で、最高の思い出でした。

共に学び、笑い、励ましあったこの友との出会いは決して偶然ではなく、必然だったと思っています。そして、たくさんのRotarianの方達に支えられ、教えて頂いた貴重な全ての経験を、これからの自分自身に反映させ、しっかり歩んでいきたいと思います！

C班

● カウンセラー　黒田 建一

1．人的側面

傷病者（２名）が出るなど問題となる面もありましたが、班総体としては、男子、女子とも相互に支え合うなど好ましい環境にあったと思われます。

2．組織的側面

傷病者の存在は、却って班としての結びつきを強めたと思われます。様々の個性を持つ男女が３泊４日の共同生活を送る中で、時には個性がぶつかることもあったが、一方で互いの存在をどのように認めて、班としての一致を図るかを工夫することとなり、それなりの成果を得たと思われます。

3．バズセッション・フォーラム

テーマが難解であり、真摯に考えるとすれば必ず壁にぶち当たると思われましたので、各小班のセッションを聞きながら１回数分のアドバイスをしました。その結果、見事にアドバイスを消化して、自分達の意見をまとめることとなり、感動的でさえあったと思います。

4．カウンセラーとして

初回であるとはいえ、能力不足であり、明らかに適格性を欠くと判断せざるをえないと反省しております。

● カウンセラー　西松 玲子

思いがけないことで再びカウンセラーをするチャンスを頂きありがとうございました。

また、テーマが「絆」ということで、改めて、今、自分の置かれている立場の中で、側にいる大切なものを近すぎて見えなくなっているものが、ペアのカウンセラーの黒田さんをはじめ、Ｃ班のこどもたちとの出会いの中で、一人一人に我が息子や娘を重ねてみたり、主人との夫婦としての絆も見つめ直してみたりできたことが、個人的にはとても貴重な時間となりました。

「21世紀の夫婦関係と親子関係」の講義においては、改めて家庭という制度、コミュニケーションの大切さを見つめ返させて頂き「日本人の貧しい選択」の講義においては、家族の食の命の鍵を握っているのは「私」。母、妻である私だったと今頃改めて反省しました。

学ばせて頂いたことは書ききれませんが、新しい出会いを通して３泊４日の全カリキュラムをすすめていく中で「一人一人の存在を大切に認めること」の難しさと、そう努力しようとし続けることのすばらしさをロータリーの皆さん

から、そして受講生の皆さんからたくさん教えて頂きました。

私も相手の目を見て、しっかりコミュニケーションを重ねて一人一人を大切にしていく生き方をしていきたいと思います。

ありがとうございました。

● 大田 圭吾

ライラセミナーに参加したのは、自分の意志ではなく職場の上司からの命令でした。

実際に参加するまでイヤでしょうがなかったし、人と話をすることが上手ではない自分にとって、フォーラムやバズセッションというのは不安でした。ただ、セミナーを終了する今、思うことは話をするのが得意ではない、また人の前に立つことになれていない人こそ、このセミナーに参加し、そのことによって得るものというのは、他の人より多いという事です。この４日間で自分が感じた事や、気づいた事を大事にし、人に伝えていきたいと思います。あと、この４日間で築けた人間関係を大事にします。

● 和田 雄介

絆というテーマの下、参加する前はいったいどんなことをするのだろうと、初めて余島に来た時は、不安と期待が入り混じった気持ちでいっぱいでしたが、オリエンテーション、オープニングパーティーと、同じ班の人達とうちとけて、あっという間の４日間となりました。

このセミナーがいつも学校や会社で受ける研修と異なる点は、同じ組織とか同世代とか共通項のない、いろいろな人達が、青少年指導者育成という目的のもと、講義を受けたり、一緒にスポーツをしたり、討論したりする点だと思います。普通、交流する機会がない人と語り合ったりすることができてとても刺激になりました。

「絆」ということで関連する講義を受けたり、バズセッションをしたり、キャビンタイムで語り合ったりしてとても勉強になりましたが、一番よかったのはＲＹＬＡセミナーの役員のみなさん、世話をしていただいたカウンセラーの方、Ｃ班及び受講者のみなさんと交流し、絆をつなぎ、深めることができたことです。また、地域に帰ってこのセミナーで学んだことをできるだけ活かしていきたいと思います。

● 井上 尚久

本当に楽しく充実したセミナーになりました。

余島の自然の中で、普段聞くことのできないすばらしい講義を聞き、とても勉強になりました。また、レクリエーション活動やキャンプファイヤーなど、様々な活動もあり、プログラム・日程的にもとても満足させていただきました。初めてお会いする人と、キャビンタイムなどを通していろいろな話をし、２泊３日でしたが、とても濃い関係を築くことができ、これからもその仲間を大切にしていきたいです。

参加する前はロータリークラブのことも詳しく分からなかったのですが、とてもすばらししセミナーを開いていただき感謝しています。それと、今後も続いて欲しいと思います。

今回のセミナーで学んだことを、これからの人生に何らかの形で生かせるよう、しっかり考え、行動に移していきたいと思います。

本当にありがとうございました。

● 松崎 宏紀

４日前まで“他人”だった人達と生活を共にすることによって“絆”が生まれました。人はみな仲間であるということを実感できた素晴らしい４日間でした。

生活の中では個人個人が、この中での自分の役割をしっかり考え、行動することによってお互いを認め合い、尊重することができました。特に、班の中ではそういうことを大切にできたと思います。

日頃の暮らしからかけ離れた“余島”。私にとっては“夢の島”でした。正直、もっともっとここで仲間と時間を共にしたいですが、この４日間を心にしっかりと刻んで、日頃の暮らし、そして仕事に戻ります。

ロータリークラブの方々へ

このような場を設けていただき、また、私を参加させてくださいまして、本当にありがとうございました。

Ｃ班のメンバーへ

一生忘れられない４日間をありがとうございました。

“keep in touch”これからもよろしくお願いします。

● 吉田 典生

社会人になってこの年齢になるとこんなに年も違う、住んでいるところも違う、仕事も違った人と出会うことはないのに、そういった人達と３泊４日も一緒にいてどうなるか心配でしたが、初日の晩にはもうみんなうち解けていました。今回、同じグループの中で私が一番年上でしたが、みんなしっかりした考えをもっていて話をしていても飽きることなく、４日間を過ごすことができました。講師の先生の話もいろいろとおもしろかったけれども、バズセッションで答えの出ない話し合いをすることもとてもおもしろかったです。サッカーやテニスなど、もう何年もやっていないことをして体中が痛くなりましたが、それもまた一つの経験としてとてもよかったです。このセミナーで残念なことはみんながなじんできたころにもう終わってしまうことです。確かにみんな社会人なのであまり休みはとれませんが、１週間ほど続くものだったらもっといろんな経験ができたと思います。この４日間テレビも新聞もない生活を送ってきましたが、それもまた大切なことだったと思います。途中で雨が降ってきたのがちょっと残念だったです。

● 亀田 君王

今回、ＲＹＬＡセミナーに参加して一番大きな思い出となったのは、やはりケガのことになると思います。私の不注意から左足をくじいてしまい、診断の結果「ねんざによる靭帯損傷」全治３週間という、思っていたよりも大きなケガになってしまいました。

日野先生をはじめ、佐伯先生、黒田先生、西松先生、受講生、その他多くの方々に心配をかけ、また助けていただき申し訳ない気持ちです。それと同時に感謝しています。

ありがとうございました。

● 岡部 菜穂子

私はＲＹＬＡセミナーに参加する前は不安でいっぱいでした。理由は２つあります。

１つは、普段会社においても、交友関係においてもリーダーシップを発揮できない私にとって意味があるセミナーなのかということ。２つは、内気で人見知りな私がたった３泊４日で出会ったことのない人達とうちとけあい、グループワークができるのかということです。実際、セミナーが始まって２日間は体調が悪かったこともあり、緊張も解けずになかなか打ち解けられませんでした。ただ、３日目からバズセッションで意見を言わざるを得ない環境におかれると少しずつですが、自分の考えを言えるようになりグループにうちとけた気がしました。そして、最後のフォーラムでは緊張の中、大勢の前で意見を述べ、少し自信がつきました。３泊４日を通して特に自分自身の中で大きな変化はありませんでしたが、私にもやればできるという自信、また知らない仲間と何か１つのものに取り組む楽しさが少し分かった様な気がしました。小さな成長だったかもしれませんが、この時の緊張、また仲間との思い出を胸にこれからもいろんな面でがんばっていきたいと思いました。

● 吉村 安希子

社会人として、成人としてこのセミナーに参加して、自分がどのような役割を担うべきなのか、不安に思いながら初日を迎えました。年齢も職業も学んでいる学問も異なる人たちとの交流は初めてだったためです。しかし、初日から同じ班の人のみならず他の班との交流が持て、一人一人が自分の意見を自分の言葉で話すのを見て驚きました。そして自分も自分の考えている事を率直に話す事ができました。

１つのテーマについて深く自分で考え、また仲間との意見交換をし、班の考えとして１つのものを作り上げた事はとても印象深いです。

このセミナーで私がどのような役割を担えたかは分かりませんが、多くの仲間と出会えた事、意見交換をした事は自分の糧となると思います。

● 有藤 葉子

ＲＹＬＡ、国際ロータリー、あまり聞き慣れない言葉も多く、また具体的な内容が全く掴めてない中での参加はとにかく「不安」という一言に満ちていました。全然知らない人達とのコミュニケーションが成り立つのか、自分らしさを持って参加できるのだろうか、プログラムの内容云々ではなく、人とのかかわりに対する不安が大半でした。

私は、学校の先生の声かけで参加することになったので、年代も自分と近い人達が来ると思っていました。しかし、実際割り振りされた班員は皆、職業、世代ともにバラバラで余計に圧倒されてしまいました。はじめはコミュニケーションのひとつひとつが慎重になってしまい、今ひとつ自分というものが出せないまま、最初の２日間を過ごして、みんな自分の役割だとか、今何をすべきかということを素早く判断できていて、自分がすごく無力に感じました。その中で３日目のBuzzセッションにおける意見交換や、班内での討論、発表とその過程の中で、次第に打ち解けることができ、自分の心内に思っていることだけでは相手に伝わらないこと、伝えることが間違っていても伝えなければ分かってもらえないし、話の展開が出来ないことが班員に対して失礼だと思いました。

深川先生がおっしゃっていたように、意見や思ったことをきちんと言うということに意義があり、結果はどうであれ全員が後悔しないように進めていくことが大切なのだと思いました。また、夜は必ず一部屋に集合、そして遅くまで語り明かしたことも絆が深まるきっかけになったように思います。堅い話題から恋愛の話題まで色んなことを、一人一人違った視点から意見が出るのに対して、いつの間にか話を振るごとに楽しみになっている自分がいました。もっと話したい、時間が足りん、日が過ぎていく中で皮肉にもそのような思いがつのってきました。ここで出会えた仲間は私の人生の中で何らかの影響を与えてくれました。そのような貴重な経験が出来たライラセミナーに感謝の気持ちでいっぱいです。

● 田隅 千智

私は極度の面倒臭がりで、特に内気というわけではありませんが、初対面の人と一から話すのはあまり好きではありません。なので、このＲＹＬＡキャンプに参加するのは乗り気ではありませんでした。

初日はやはり憂うつでそこまでオープンな関係にはなれないだろうと思っていました。しかし酒の力は偉大だなと思い知らされました。元々普段は飲みませんし、好きではないのですが、飲まなきゃやってられんという勢いで飲んでいたら打ち解けていました。二日酔いも伴いましたが...　こりごりです...

それ以降はスポーツも討論会も本当にスムーズで会ったばかりとは思えないほどのチームワークでした。私は学生ですが単科大学なので様々な職業の人と出会えて意見を交わせたこと

が貴重な経験となりました。学校でもよく討論会はありましたが、年齢、職種が違うことにより、難しい議題であったにもかかわらず満足のいく話し合いとなりました。夜はまたキャビンで飲み会でしたが（笑）普段学生とする飲み会とはまた違った雰囲気で真剣トークが繰り広げられて驚きでした。

今後、飲み会隊長が招集をかけるらしいので、ここで得た友情は一生続きそうです。（笑）

● 佐野 真弓

私は今回、父の勧めでライラセミナーに参加させていただきました。３泊４日、知らない人達の中で生活することに不安はありましたが、逆に楽しみにしている自分もいました。学生の方が多いと思っていたのですが、社会人の方も多く就職活動をしている私にとっては、社会人としての本音の部分も聞くことができ、自分自身が進むべき道、進みたい道が見えてきたような気がしました。講義やプログラムの内容もおもしろかったですが、それを通して他の方と意見交換できたことが私の一番の財産になったと思います。

短い４日間でしたが、私にとっては密度の濃い、これからも忘れることのできない４日間になりました。この出会い、この経験を大切に、これからの人生を歩んでいきたいと思います。

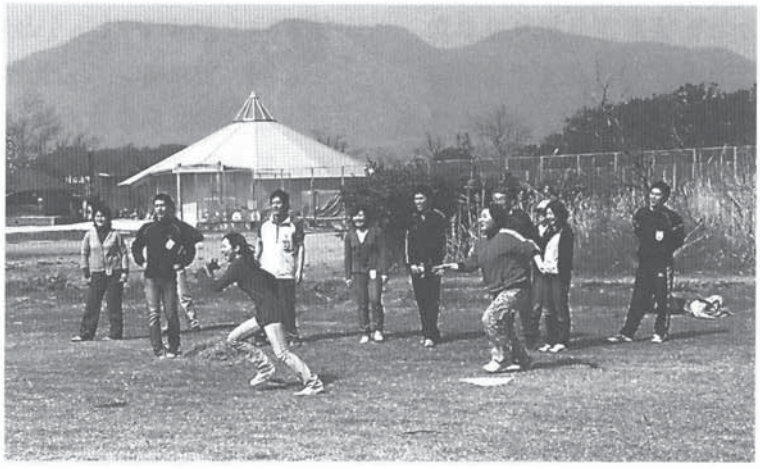
ライラセミナーに関わってお手伝いしてくださったみなさん、ありがとうございました。私たちのような経験を１人でも多くの人に体験していただけるようにこれからもこのセミナーを続けていっていただきたいと思います。

● 山際 弥生

今回、ＲＹＬＡに参加させていただくにあたり、楽しみより不安だけが大きくなりすぎていました。そのためこのような多くの人と交流できる良い機会を有効に利用できなかったのを残念に思っています。しかし、このような体験ができたことにより、普段とは逆の生徒の立場をより深く知り、理解することができたと思います。自分の良い経験だけではなく全ての経験をこれから活かしていけるように、今回の４日間を大切にしていきたいと思います。

また、講義では日頃かたよった情報での知識しかない私にとっては刺激があり、興味をかきたてられ、今後の生活が少し明るくなったように思います。ありがとうございました。

班での交流は自分の足らない部分も知ることができ、そして人とのつながりの大事さを改めて教えてもらいました。この「人間らしさ」を自分自身も大切にしながら生徒たちにも伝えていきたいと思いました。全てが100点満点ではなかったですが、４日間で出会った方々に感謝しています。ありがとうございました。



D班

● カウンセラー　徳梅 明彦

12名の受講生と２名のカウンセラー　計14名の３泊４日のセミナーは受講生の皆さんにとってどうだったでしょうか？

今回、私はテーマ「絆」という言葉を一度も口にしないままセミナーは終了してしまいました。でも受講生の皆さんの心の中にはきっと素晴らしい「絆」が生まれていることと確信しています。お互いの立場、自分のその場の状況を的確に把握し、このD班の素晴らしい「絆」を築きあげた12名の諸君に心から「君たちは素晴らしい」という言葉を贈りたいと思います。

わがまま気ままなB型のパパリンコを温かく見守ってくれた受講生の諸君と沖ママに心から「感謝」！

● カウンセラー　沖 伸歩子

個性豊かな12人の子供達とパパリンコ、沖ママという俄（にわか）ファミリーでしたが、本当に楽しい３泊４日でした。

・初めてのカウンセラー役の私を温かく見守ってくださった徳梅さん
・体調が悪くてもいつも明るかった桃ちゃん
・勉強中のマッサージ、気持ち良かったよ。嵯峨ちゃん
・お話楽しかったね。絵莉ちゃん
・ゴールキーパーおもしろかったね。真衣ちゃん
・小さな体に秘めたるパワー。驚いたよ。カミッチ
・とても貴重な癒し系キャラの奈っちゃん
・何事にもいつも一生懸命だったアッキー
・たくさんいろんな事話したね。馬場ちゃん
・語学堪能で声の素敵なヤギラ君
・笑顔の優しい徹ちゃん
・ユニークキャラで場を和ませてくれた一平ちゃん
・同郷「先輩」の存在　安心出来たよ

みんな本当にありがとう。

この想い出と心のこもったハートの手紙、大切にします。

● 片岡 寿文

お恥ずかしい話、私はロータリーの活動、そしてこのＲＹＬＡセミナーについて100％な認識を持って参加したわけではありませんでした。しかし、この３泊４日の長期にわたるセミナーを通し、日々忙しく過ぎ去っていく毎日では到底味わえない体験をする事ができました。

見ず知らずの人達との集団生活や語らい、自分自身の中での心の葛藤。何もかも新鮮で、ある意味、子供の頃のまっすぐな感情を再び思い出す事ができました。それだけでも私には大きな財産を得るセミナーになった事は事実です。

また、この3泊4日のセミナーが終わってしまえば日々の忙しい毎日に戻りますが、確実にセミナーに参加する以前の自分とは違う自分になっている事を感じています。

● 藤岡 一平

まず最初に、本当にこのセミナーに参加出来て良かった。自分で選んだ選択ではなかったけれど、とても素晴らしい仲間と出会えたと思う。楽しかった。こういう機会を与えて頂いて感謝します。個人的に一人で旅をすることが多く、ある程度「出会う」ことに慣れた人、「出会う」ことに積極的な人に会うことが多かったように思う。出会いの中で様々な影響を受けて今の僕がいる。

今回のセミナーには既に働いている人も多く、今まで出会うチャンスがなかったタイプの人達と話ができた。とても感心させられることが多かった。年下の子がこんな風に考えているんだ、とか、ロータリーの方々がこんな考えで動いているんだ、とか、やはり面と向かって話をすることで得られることはとても多い。そしてそれが好きだ。

講義もとてもよかった。一般的に知られていないこと、常識だと思われていることと異なること、また、そのような情報はもっともっと多くの、僕たちより小さい世代からゆっくり教えていくべきなんだと思う。

このセミナーは“リーダーを育てる”為のものだと言われたが、むしろリーダーになるような人は自ら出会いを求めて動ける。だからそういうチャンスのなかった人達にこそ、こういう場所に来て欲しいと思う。

また、全体を通して気付いたのは、僕たちが普通だと思っている事は必ず何かが裏で操作してきていたんだなということ。自分で判断しろというメッセージはとても印象深かったです。

最後に、このライラセミナーがもっとずっといいものになり、続いていきますように。

● 前田 彬宏

今回私はＲＹＬＡに参加することでとても大切なものを得られたように思います。それは、現代社会の捉え方、その社会に対する自分なりの決意、そしてかけがえのない友人です。

講義やバズセッション、フォーラムにおいては私は「世の中をどう捉えるべきか」を学んだように思います。急速に変化していく複雑な現代社会では、若者は往々にして道を見失いがちであると思います。軸となる価値観が崩壊してしまい、何を基準に世の中と向き合えば良いのかわからないという不安は多くの人々が持っているのではないかと思います。しかし、ＲＹＬＡではそういった漠然とした不安を直視し、取り組む機会を提供してくれたように思います。

野々山先生の家族の問題、保田先生の食育の問題など、社会には我々一人一人では手に負えない数の問題が存在します。そのため、全てを把握することは不可能だと思いますが、私はＲＹＬＡを通して「リーダーとは世界全体を広く見渡し、幅広い関心を持ち、様々な人々と意見交換をすることができる者のことである」と強く実感いたしました。

キャンプファイヤーや思索の時間では、講義で学んだことなどを参考に、自分は現在ある問題に対してどう考え、何ができ、どう行動すべきかを考えることができました。この余島という日常とは離れた環境の中で、自分と真剣に向き合い、自分の弱さと未熟さを自覚し、必ずやいつか社会に対して貢献できる人物になってやる！と決意したことは、これから先、数々の困難にぶつかり、諦めそうになる自分を正しい道に戻してくれるだろうと思います。

夕食やレクリエーション、夜のパーティーなど、D班の皆と一緒に過ごした時間もまた私が得られたかけがえのないものの一つです。真面目な話から恋愛に関する話まで色々な話を班の皆としたことは自分にとって新しい生き方を知る大変良い機会となりました。今回の出会いを大切にして、これからもずっとこの「絆」を続けていきたいと思います。

このようにＲＹＬＡセミナーは本当に様々な側面から私に良い刺激を与えてくださいました。今井先生を始めとして、今回のＲＹＬＡセミナーを企画、運営して下さったロータリアン、スタッフの皆さんには本当に感謝しております。今後はＲＹＬＡにて得られたものを糧に、地域や世界に対して貢献できるよう、より一層努力していきたいと思います。

本当に３泊４日の間、ありがとうございました。

● 馬場 祐輔

最初に結論から言わせてもらうと、まず自分はローターアクトでも仲間はできるが、でもこの島へ来て土庄港から降りてきた四国ＲＹＬＡ受講生を見て本当に仲間ができるかが不安でした。でも、オリエンテーションのあとに班分けで言われたときに話かけられたことがよかったです。オープニングパーティーでは緊張はしたけど、いろんな人と会話ができ、それで班に入ったときは自分で話や質問を班の方々にして、分かり合えたと思った。キャビンタイムではみんなの話を聞いたりして、雰囲気がよかったです。講義は役立つ話で非常に上手な話で興味をもてました。スポーツではD班のみんなとアーチェリーをやって、うまくいかなかったけど教えてくれた班の仲間の協力でアーチェリーがうまくなりました。あと、どこかに矢がとんでいったときにみんなが探してくれたことが非常によかったです。キャンプファイヤーは暗いところを歩いてファイヤーのところにたどりつき他の班と見つめあって、みんながどういうような願いを書いたかを考えながらファイヤーをみつめていました。あとファイヤーを見てやる気がでたことがもっともです。思索の時間のときは、みんなとどうやったらうまくいくかを考えていました。バズセッションはみんなの意見を聞いているのがおもしろくて本当は自分も発言してよりよくわかりあえました。フォーラムは各班の感想を聞いて非常にわかりやすく、なぜこんなにしゃべることができるのだろうと考えました。聞いているだけでもいいようになれました。最後にＲＹＬＡは仲間と出会って忘れなくするように受講された小豆島の余島の活動だと思った。この４日間非常にすばらしくすごせました。

● 青野 徹也

ＲＹＬＡセミナー３泊４日に参加させていただき、大変貴重な経験ができました。都会での仕事のことは一切忘れ、初めてであった仲間と同じ時間を共に過ごす。そんな楽しい時間の中で様々な学びもできました。

今までの人生においてＹＭＣＡはもちろん、青少年にかかわったことがありませんでしたので、セミナーでどのような経験ができるのか見当もついていませんでした。

一人の人間として余島という大自然の中でゆっくりと時間をかけて教育していただき、心にゆとりを持ち、誰に対してもやさしさを持って接していこうと決意しました。仕事のことなど何かにつまずいて悩んだときには、今回のセミナーのことを思い出し、立ち止まってじっくり考える時間を持つことで今後も成長し続けることができると思います。

まずは自分で自分を好きになり、周りからも好かれる人間になりたいです。今はまだ指導される立場ですが“笑顔で前向きなリーダー”として活躍していきます。

４日間ありがとうございました。

● 旭　友貴

今回、この余島でのＲＹＬＡへの参加が決まってからというもの、期待と不安でというよりも、不安ばかりが頭の中にありました。一体どのような人が集まるのか、その人達と一体、何をさせられるのか、余島とはどのような島なのか、そもそもロータリークラブは名前こそよく聞くけれど一体何をする組織なのか。

初日にやっと余島に降り立ち、開講式があり、キャビンで班で揃ってお互いに自己紹介をするあたりでやっとその不安が向こう４日間への期待へと変わっていったと記憶しています。

このＲＹＬＡは主に講義とバズセッション、フォーラムでの討論、キャビンタイムなどの親交を深める時間の３つから成り立っていました。まず講義は大学の教養部レベルとうたうだけのことはあるし、しっかりとした講義でした。なかなか自分の専門外の分野についてのこれだけの講義を聴く機会はないので、非常に有意義な時間を過ごせました。次に討論は、こういったフォーラムのようなことは何度か参加したことはありましたが、うまいこと考えをまとめて発表することは容易ではありませんでした。ところが、このＲＹＬＡでは一人で考える思索の時間、班の仲間たちと考えをぶつけ合うバズセッションがあったことでフォーラムの席に着いた時には、頭の中がすっきりとしていて。よい発表ができたと思っています。

もっとも、今回のＲＹＬＡに参加して一番良かったと思う最大の理由はキャビンタイム等の時間を存分に楽しめたことです。同年代の仲間達とこうして話したり、体を動かしたりという機会は最近なかったので、筋肉痛になったり、二日酔いになったりと多少ハメを外した面もありましたが、それも含めて充実した時間を過ごせました。

これからの活動の中で、今回のＲＹＬＡで学んだことを生かせるように努力したいと思います。最後に共に４日間を過ごした仲間達をはじめ、カウンセラーのお二人、講義をしてくださった先生方、このＲＹＬＡの開催に関わった全てのロータリアンの皆さんと、ＹＭＣＡの方々に心から感謝したいと思います。

● 横田 絵莉

年齢も職業も住んでいるところも違うけれど、モチベーションの高い、熱い人達と一緒に毎日たくさん語り、笑い、本当に有意義な時間を過ごすことができました。人とコミュニケーションを取る上で、お互い違いを認め、相手を尊敬すること、相手のことをわかりたいという気持ちを持って話を聴くこと、相手にわかってもらおうという気持ちを持って話すこと、この３つのことがいかに重要かということを強く実感しました。また、人とのつながり、絆の強さは時間ではなく、濃さ、密度であると改めて感じることができました。

４日間、驚き、学びの繰り返しの毎日でしたが、中でも一番衝撃を受けたことは、人をひきつける話し方が上手な人が多いことです。お話してくださった講師の方はもちろんですが、同年代の受講生の方達の会話、プレゼンテーション能力は学びたいと思うポイントがたくさんありました。聴く側の立場に立って、聴きやすいようにうまく順序立てて話すことができるように、また、人をひきつける話し方ができるようになりたいと思いました。また、英語でも自分の意見をきちんと述べることができるようになりたいと思いました。

この他にも感じたことは数えきれない程あり、自分はまだまだスケールの小さい人間で学ぶべきこと、経験すべきことがまだまだたくさん残されていると感じることができました。しかし、それは決してマイナスなことではなく、今の自分の良い部分を再発見した上で、さらにこれからこうなりたいという目標となりました。私にこのような機会を与えてくれた、このセミナーに関わってくださったすべての人に感

謝しています。

この経験をこれからの生活や、キャンプリーダーの活動の中で充分活かしていこうと思います。

● 増田 真衣

私は、このＲＹＬＡセミナーに参加するにあたり、１つの目標を持ちました。それは「いろいろな人に会っていろんな話をして、少しでも自分とは違った意見を聞きたい」ということでした。セミナーの説明を聞く時に「３泊４日しかないけれど、すぐ仲良くなれて、親身になって相談し合える」と教わったので、最近悩みの多かった私は、とてもセミナーを楽しみにしていました。

実際、セミナーに参加すると、すぐにみんなと仲良くなり、２日目にして私はキャビンタイムの時、今まで相談できなかったことも相談することができました。相談にのってくれた友達、またカウンセラーの人は、本当に親身に話を聞いてくれ、今まで私の心の中でからまっていた悩みの糸を少しずつほどいてくれました。また、自分とは違った意見もたくさんあり、とてもいい刺激となりました。そんな仲良くなった友達とのバズセッションは、本当に思ったことを素直に言い合うことができ、時には激しく言いあう時もありましたが、とても貴重な体験となりました。バズセッションの時に他の友達が「３日目なのに本当に内容の濃い話ができてるよね？」と言いましたが、本当にそのとおりだと思いました。

この３泊４日を通し、カウンセラー、講義の先生、ロータリアンの方々、そして多くの友達の意見を聞き、考え、そして伝えることで私自身の考えも少しかわり、成長できたと思います。なにより、最初の目標であった「違う意見を聞く」ということができたことを本当にうれしく思います。このような機会は本当に少なく、とても貴重な時間になりました。ここで成長できた自分をこれからの生活で少しでも役に立てていけたら、そして、またゆっくり考えることで更なる成長ができたらと思います。

● 宮城 奈津季

ＲＹＬＡやロータリークラブ、このセミナーがどんなものなのかもよく知らずに参加して、一緒に参加した友人とも班が違ったので、最初は不安でいっぱいでした。でも講義をしてくれた先生方のお話も、ロータリークラブの方々のお話もとても深いもので、さらに同じ班の人とも一つのテーマで時間をかけて話し合う場、それを発表し全体で意見を発表する時間などがあり、とても充実した４日間を過ごすことができました。

同じ班のみんなをまとめてくれたカウンセラーのパパとママにもいろいろな面でお世話になり、安心できる場所を提供してくれたこともとても感謝しています。班のみんなも個性あふれる人ばかりで、いろんなコトを知ったり感じたり感心したり... 笑顔もたくさんもらいました。知らない人同士だという不安もすぐになくなり、本当に楽しくて濃い４日間を過ごせたこと、この時間ここにいられてみんなと出逢えたことを嬉しく思います。

この出逢いをこれからも大切にして、人と人との絆をこれからも築いていきたいです。

ありがとうございました。

● 高橋 桃子

ＲＹＬＡセミナーへの参加が決まった時、正直不安でいっぱいでした。初めて出会う人達と３泊４日もの間生活を共にし、意見を交わす･･･ということに対しプレッシャーを感じました。

最終日の今は充実した４日間を過ごすことが出来たと振り返ることができます。それは参加理由は各自別のものだとしてもＲＹＬＡセミナーでの各自の目的が一緒であり、同じ方向を向いていたことにあると思います。出発地も余

島へ来る際の道のりも年齢も学校も職種も違う一人一人と意見を交換し、時にはぶつけあい熱く語ることが出来たことは自身の価値観や思考をくつがえし、そして『思索の時間』で改めて考えさせられ・・・。私は今まで何をしてたんだろうと落ちこんだりもしましたが、とても貴重な時間だったと思います。講師の先生方のお話もとても勉強になりました。これから先、いろいろな人と関わっていくうえで何が必要なのか、人と人との対話のあり方等を見つめ直すことができたと思います。少人数からのバズセッション、そしてグループ内討論、フォーラムと初めて体験することばかりで、戸惑うことがたくさんでしたが、難しいテーマを一人一人の意見をまとめて交換し、まとめていけたことは大きな自信となりました。

自然多き余島で友人とはまた違う、それ以上の仲間と実り多き時間をすごせたことを感謝し、職場へ戻っても何らかの形でこの４日間を無駄にしないよう、日々成長していきたいと思います。このようなセミナーに参加させて頂き、本当にどうもありがとうございました。

● 嵯峨山 綾子

今回のＲＹＬＡセミナーに参加させていただいて一番良かったのは、こうして色々なテーマについて熱く語れる仲間ができた事です。皆、それぞれの仕事や環境にいる中、普通に日常生活を送っていたら出会う事がなかったような人々と３泊４日、生活を共にできた事は本当に素晴らしい経験になりました。“出会い”により自分自身の考えや視野が広がる事の素晴らしさを学べたのも貴重な財産となっています。たった４日間なのに、もう何年も友達だったような感覚があります。

人間関係というものはどれだけ長くか、だけではなく、どれだけ深く、濃いものであるか･･･という部分もあるのだと、この余島で体験として学ぶ事ができました。

内容の濃い講義など、様々な事に対して真剣に挑む仲間の姿を見て、私ももっと積極的にあらたな目標や目的に向かって前進していこう！と自身を奮い立たす事もできたように思います。

このＲＹＬＡで得た素晴らしい仲間、経験、時間、すべてのものを自分なりの形で誰かに供給できるよう頑張りたいと思います！

最後になりましたが今回このＲＹＬＡセミナー開催にあたり、ご尽力下さったロータリアンの方々はじめ、全ての方に深く感謝したいと思います。

本当に本当に、ありがとうございました！！

● 上村 雅子

今回セミナーに参加することが決まった時、自分の意見を持ち、相手に伝えることができるのだろうか、自分の中での考えがまとまるのだろうかと、とても不安でした。また、一人で参加したので受講者のみなさんと３泊４日過ごせるのだろうかと心配でした。初日、２日目と班が仲良くできるようなプログラムがあり、そこで班員やカウンセラーさんとの対話の中で少しずつ、意思疎通ができたように思います。そこで班の中での蟠(わだかま)りもなくなり、３日目のバズセッションでは思いっきり本音で討論することができました。少人数での話し合いはとても意見が言い易いし、相手の言うことも目と目を合わせて聞くことができました。

私自身、今まで話し合いの場であまり発言することができなかったのですが、自分の言うことに対して周りが真剣に受けとめてくれ、そのことに対して意見を述べてくれたことがとても嬉しかったです。私は普段、兵庫県子ども会でボランティアリーダーをしていますが、リーダーの会議ではなかなか意見が出ません。私も今までは聞く側でしたが、このセミナーをきっかけに自分が思ったことは積極的に発言し、意見を出すことに戸惑っている人にはうまく引き出して、少しずつ意見が言えるようにサポート

できたらと思います。このセミナーでの出会いを大切にこれからの生活も頑張ろうと思います。とても充実した3泊4日でした。

第29回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー　飯　忠悟（第2670地区 今治ＲＣ）
　　加藤 隆久（第2680地区 神戸ＲＣ）

顧　　問　三宅 洋三（第2670地区ＰＧ 高松ＲＣ）
　　日野 博夫（第2670地区 高松ＲＣ）
　　今井 鎮雄（第2680地区ＰＧ 神戸西ＲＣ）
　　深川 純一（第2680地区ＰＧ 伊丹ＲＣ）

アドバイザー　桑原 信義（第2670地区ＰＧ 阿波徳島ＲＣ）
　　本山 新三（第2680地区ＰＧ 篠山ＲＣ）

●新世代活動委員会（第2670地区）
　委員長　田中 雅仁（今治ＲＣ）

●新 世 代 委 員 会（第2680地区）
　委員長　秋山 紀史（神崎ＲＣ）

●RYLA委員会
（第2670地区）
　委員長　別役 重具（高知東ＲＣ）
　委　員　堤　邦一（徳島東ＲＣ）
　　松崎 和博（高松グリーンＲＣ）
　　白石 正明（高松グリーンＲＣ）
　　佐伯 直治（小豆島ＲＣ）
　　猪野 恵一郎（松山南ＲＣ）
　　西松 繁夫（松山南ＲＣ）
　　篠原 成行（北条ＲＣ）

（第2680地区）
　委員長　山口　徹（神戸ＲＣ）
　委　員　安平 和彦（ＰＧ・姫路ＲＣ）
　　徳梅 明彦（あわじ中央ＲＣ）
　　大森 英夫（伊丹ＲＣ）
　　滝澤 功治（神戸須磨ＲＣ）
　　黒田 建一（西宮夙川ＲＣ）
　　英　和夫（姫路ＲＣ）

国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所
〒794-0042
今治市旭町2丁目3-20 今治商工会議所 3F
TEL 0898-34-3990　FAX 0898-34-3391

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所
〒650-0046
神戸市中央区港島中町6-10-1
神戸ポートピアホテル 722号室
TEL 078-304-2680　FAX 078-304-2681